緋弾の虚刀語

闇丸.EXE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾の虚刀語

【Ｎコード】
Ｎ９４２３Ｓ

【作者名】
闇丸．ＥＸＥ

【あらすじ】
尾張時代半ば頃・・・一つの物語が終焉を迎えた。
人と刀にまつわる歴史揺るがす物語。
それに大きく関わった・・・虚刀流七代目当主・鑢七花と、家鳴将軍家直轄内部監察所総監督・否定姫。
全てが終わり、２人の男女が旅に出てから数百年後。新たな物語が

動き出す。

現在過去未来に広がった大いなる波紋。改竄は防がれても、歪められ、改変された世界。その行き着く先はどこなのか。

現代を舞台に、出会うべくして出会った『双剣双銃』と『無刀』。

『緋弾の虚刀語（ヒダンノキョトウガタリ）』。始まり始まり♪

第０話

時は、『家鳴将軍家』が支配する時代・・・『尾張時代』。

ここは、家鳴将軍家のお膝元・・・・尾張の都の中心に位置する『尾張城』である。

将軍の居城たる故、その全容は言うまでもなく巨大かつ荘厳。構造も複雑怪奇で、正に守りに長けた要塞の如き建造物である。

だが、今現在・・・・尾張城は奇妙な程に静まり返っていた。

現在の時刻が、深夜に当たる時間帯だからではない。

昼夜問わず城内を警備しているハズの家臣達。ある者は失神し、またある者は血の海に沈み、またまたある者は剣士の魂たる刀を投げ捨て逃亡。戦闘員、非戦闘員問わず、ほぼ全員が城からいなくなっていたからである。

あくまで、『ほぼ』である。

尾張城・・・天守閣最上階。

将軍の間には、尾張城に残った最後の三人が居た。

一人は当然・・・この国、この城、この部屋の主であり、支配者たる存在。尾張幕府八代将軍・・・・家鳴匡綱（ヤナリマサツナ）。

（こんな・・・・こんな事が・・・・・・）

普段・・・将軍として堂々としているべき立場にある彼は・・・短刀を両手に握り、顔面蒼白となって震え上がっていた。

目の前・・・正確に言えば、御廉の向こうに居る二人に対して。

一人は・・・背の高い血まみれの男。

筋肉質で、引きしまった身体。

ボサボサの黒髪に、下半身は袴。上半身には・・・豪華絢爛な女物の着物を羽織っていた。

武器は何一つ・・・短刀一本すら持っていない。

それなのに・・・この男は、将軍の腹心たる『家鳴将軍家御側人十一人衆』をたった一人で全滅させた。

それも素手で。

「それじゃ、サッサと終わりにしましょうか。七花(シチカ)君、約束通り・・・私を殺してもいいわよ？」

この将軍の間に居る最後の一人。金髪碧眼が人目を惹く・・・この時代のこの国においては異端の美貌を醸し出す和装の美女が、目の前の男に対してあり得ない許可を出す。

「残念ながら・・・あと一人ぐらいしか相手に出来そうにない」

七花と呼ばれた男・・・虚刀流七代目当主・鑢七花(ヤスリ・シチカ)は、首を横に振る。女を殺す事を拒否し、畳を血で汚しながら、一歩ずつ・・・・匡綱へと進む。

（我が腹心がこの短時間に全滅とは・・・。これが・・・虚刀流の力・・・）

虚刀流（キョトウリュウ）。

剣士を名乗りながら剣を捨てた、異色の流派。

その虚刀流の恐ろしさは匡綱自身知っていた。いや、知らない方がおかしかった。

何故なら、七花の先代に当たる・・・・虚刀流六代目当主・鑢六枝（ヤスリ・ムツエ）は・・・２０年前に起きた全国規模の大乱時、精鋭部隊を率いて敵城へと乗り込み、首謀者の首を取って大乱を終結へと導いた。言うなれば、匡綱の恩人とも言える存在だったのだから。

わかっていたハズなのに、こうして敵対するまでその恐ろしさを真の意味ではわかっていなかったと・・・今更ながら気づかされる。

匡綱は立とうとするが、次の瞬間にはどたどたと崩れ去る。

逃げようとしたのに・・・恐怖で腰を抜かし、転んでしまったのだ。

「な・・・なっ・・・ひ・・・否定姫！何をしておる。余を・・・・・余を助けんか！！」

「いやぁ・・・無茶言わないで下さいよ、大御所様」

否定姫と呼ばれた金髪碧眼の美女は、背中を向けて両手を広げる。

「私には戦闘能力はありませんし・・・・貴方が殺されなきゃ、話しが終わらないじゃないですか」

「な・・・なんだと!?」

「今日お話しした計画・・・『家鳴将軍家千年の繁栄のため』というのは嘘です。そのための『手土産』をワザワザ集めた事も含めて・・・将軍である貴方に人払いさせるための方便でした。と言うか、千年も繁栄されちゃ困るんですよ。この私・・・・つまり私の一族の真の目的は、尾張幕府・・・『家鳴将軍家の崩壊』だったのですから。せっかく『某幕府』の『某将軍家』の成立は阻止できたのに、似たような貴方が天下泰平を築いちゃったんじゃ・・・同じ事ですから」

「な、何を言って・・・・」

匡綱は訳がわからなかった。

金髪碧眼の美女・・・通称・否定姫は、家鳴将軍家直轄内部監察所総監督という役職を与えられた存在。つまり・・・言うまでもなく、自らの部下に当たる存在だからだ。

その彼女が『ある手土産』とともに持ちかけてきた『とある計画』。それを今更嘘だと言われても、そう簡単には受け入れられない。元々の計画自体が相当キナ臭い物であったとしてもだ。

否定姫と、彼女が七花と呼んだ男。どのような繋がり、どのような因縁、どのような約束があったかも、匡綱には知る由もない。

だが、わかっている・・・・確かな事実が一つだけある。

どちらにしても、将軍たる自分を・・・・殺すつもりである。

この場を切り抜けるにはどうするか。匡綱はそれだけを考える。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

目の前の侵入者・・・七花は、否定姫に振り向きながら何やら言葉を交わしている。

匡綱は、腰を抜かした身体に鞭を打ち、何とか畳を這って逃亡を企むが・・・・

「アンタ、・・・・・のこと、好きだったんじゃねーの？」

七花が否定姫に質問すると・・・

「嫌いじゃなく・・・・なくも・・・・・なかったわ」

それに対して否定姫は三重否定し・・・

「・・・・そっか」

七花は満足気に静かに頷いた。
そして・・・・匡綱に対して、ある種の格闘技のような構えを取る。

「ひっ・・・・・！？」

二人の会話を聴いてはいても・・・・・己の保身しか考えられない匡綱にとっては訳がわからないやり取りだった。
だが、これだけは理解した。目の前の男は最後の・・・・・最高の技を放つための構えを取っている。

「・・・・・・」

狙いを誤らないよう・・・間違っても外さないように・・・・七花は念入りに身体をねじる。

「ま、待て！落ち着け！余の話しを聞け！命・・・命だけは助けてくれ！」

匡綱は・・・・取り乱して叫ぶ。

「そ、そうじゃ、そのほうに天下をやろう！そのほう、天下が欲しくは無いか？」

精一杯の・・・苦肉の策。天下で七花を買収しようと企む。
だが、それは最も愚かなる選択だった。

「いるかぁーーーー！！そんなもんっ！！」

七花は・・・金でも、名誉でも動かない。ただ一人の・・・惚れた女のためだけに動く。少なくとも・・・彼が過ごしたこの一年間はそうだった。
その女も殺され・・・・彼女が課した『命令』からも解放された今の七花は・・・・誰にも、何にも、止める事は出来ない。

七花は匡綱へと突っ込み、必殺奥義を発動させた。
あらん限りに血を撒き散らしながら・・・豪華絢爛な羽織を翻しながら・・・七花は力の限り雄叫びを上げる。
今は亡き・・・最愛の女性の決め台詞たる言葉を。

「ちぇりおーーーーーーーーーー!!」

叫びと同時に放たれた止めの一撃が・・・壁を貫き、行き場を失くした衝撃は周囲の物体を伝い、尾張城を地割れの如く半壊させる。
それをまともに喰らった匡綱の肉体は・・・原型を留めず、粉微塵に粉砕された事は・・・想像に難くない。

こうして・・・・一つの物語は終焉を迎えた。

本来、この時代は・・・家鳴幕府が支配する『尾張時代』ではなく、徳川幕府が支配する『江戸時代』として歴史の１ページに記録されるハズだった。

そうならなかったのには、深く、深く、入り組んだ事情が関係していた。

一人の占術師・・・もといい、頭のおかしな刀鍛冶と、その一族による歴史の改竄計画によって歪められた結果がこれである。

しかし・・・改竄に成功したとは言えなかった。歴史の修正力が作用した事によって、似たような将軍が似たような体制を築き上げてしまったため、結局・・・元鞘に収まったも同然の状態となった。

彼の子孫たる否定姫の企みによって、八代将軍・・・家鳴匡綱が暗殺されても、歴史の改竄には至らなかった。

直系の息子が九代目を襲名しただけで、丸く収まる話しだった。

尾張城に侵入し、将軍を暗殺した一人の賊・・・鑢七花。それを手引きしたとされる内部監察所総監督・・・否定姫。二人の事は、もろもろの事情も含めて完全に隠蔽された。

時の将軍が、事実上たった二人の人間によって暗殺されたなど・・・決して表に出してはならない負の事実。

逃亡した七花と否定姫には『歴史に残らぬ大逆人』として秘密裏に追っ手をかけられたが、結果は言うまでもない。否定姫だけならまだしも・・・たった一人で『家鳴将軍家御側人十一人衆』を全滅させ、将軍の首を取った七花を・・・抹殺も捕縛も出来る道理はない。

その後、七花と否定姫がどうなったかは・・・知る者は誰もいない。

この事件から少しだけ経ってから・・・二人が立ち寄った茶屋の主人の目撃証言を最後に、彼らの足取りは一切記録されていないからだ。

証言によれば、『地図』のような物を描きながら『能登』から『加賀』へと向かったらしいが・・・真偽のほどは定かではない。

旅の途中でのたれ死んだか・・・地図を完成させ、海外へと行き先を定めたか。確かめる術はどこにもない。

それでも、彼と彼女が、歴史的な企みが失敗に終わった後も生きてはいた。少なくとも数十年。生まれた子供に流派を受け継がせ・・・『決して表に出る事が無い歴史の一部』を伝えるまでの間は、確実に生きていたのである。

改竄は防がれても、改変はされた歴史。あったハズの未来・・・・『本来』とは異なった未知なる未来。

あったハズの物が無くなり、無いハズの物が存在する世界。

歴史と言う大いなる激流にとっては・・・微々たる違い、微々たる変化でしかない。しかし・・・それは、それらは、その後の歴史に確かに存在したのである。

この物語が終焉を迎えてから、約三百年後・・・新たなる物語が動き出す。

鑢七花と否定姫の子孫・・・・鑢刻桃（ヤスリ・コクトー）によって。

第1話

戦国時代。それは、幾多の大名・武将が戦に明け暮れた戦乱の時代。

ある所に・・・一人の天才的な刀鍛冶がおりました。

その名を・・・四季崎記紀（シキザキ・キキ）。戦国時代を代表する有名な刀工として、後世の教科書にも名を刻んだ人物である。

しかし、その実態は・・・頭のおかしな否定的な変人故、業界から爪弾きにされた異端者であった。だが・・・彼の造った刀だけは一流だった。

彼が造り、日本全国にバラ撒いた刀・・・後に『変体刀』と呼ばれる事になる刀を求め、世の武将達はこぞって争奪戦を繰り広げた。最終的に千本に達した変体刀。変体刀を持つ数が多い国ほど戦闘を優位に進めたと言う事実もあり、その刀を所有する数が、大名としての格と戦力を示す基準となったのである。

たかが刀が？格と国力の基準となっていた？

戦闘を優位に進められるほどの国力を持った大きな国だからこそ・・・変体刀を多く集める事が出来たのではないのか？

現実的に考えればそう見るのが打倒であり、多くの歴史学者の見解でもある。

一時とはいえ、刀が時代を動かしたなど・・・キナ臭いにも限度がある話。ただの偶然。ただの幻想。そう言って笑い飛ばすのは簡単だった。
だが・・・そのような幻想が生じる程、変体刀は他の刀とは一線を画していたのは紛れもない事実であった。

やがて・・・戦国時代にも終焉が訪れる。
後の世で『旧将軍』と呼ばれることになる人物が、四季崎の造りし変体刀の半数以上を集め、天下統一を成し遂げたからである。

しかし・・・天下を取ったその後も・・・・彼は刀を蒐集する事に執着した。

その最たる例が、当時から・・・後の世にも悪法として名高く知られることになった『刀狩令』である。

表向きは・・・大仏建立のための材料として、一切の例外なく全国の民に刀剣を差し出すよう強要するというとんでもない法律。

だが・・・裏の目的は、剣客の撲滅にあった。

旧将軍は雑兵出身。刀一本から始まって天下を取った人物だった故、剣士の恐ろしさを誰よりも知っていたからである。

極端な話・・・『この世に存在する剣士は、自分一人で十分』とでも考えたのだろう。

悪法とはいえ、将軍の命令。最終的に・・・・十万本というとんでもない数の刀が集まった。

それにより、四国の土佐・・・『清涼院護剣寺』には蒐集された刀で造られた大仏・・・通称『刀大仏』が建立され、立派な観光名所として後の世にもその名を全国に轟かす事となる。

だが・・・旧将軍は『将軍』にはなれても『将軍家』にはなれなかった。

悪法の数々が命取りになったという説もあるが・・・旧将軍は天下統一を成し遂げた頃にはかなりの高齢だった上、後継者もいなかった。

故に、天下統一した所でそれを支配する制度を構築できず、旧将軍の天下は一代で終わってしまったのである。

その後、将軍の座を引き継いだのは・・・政治的手腕に長けた家鳴家だった。

実際は旧将軍の功績をそのまま引き継いだだけとは言っても、それ

でも将軍家は将軍家。家鳴幕府の尾張時代は・・・『天下太平』の四文字を標語に、数百年に渡って日本を支配した。

平和ボケしていた尾張時代の半ば頃・・・幕府の信頼も厚かった奥州の大名『飛騨鷹比等（ヒダ・タカヒト）』によって全国規模の大乱を起こされ、一歩間違えば幕府転覆というとこまで追い込まれはしたが・・・幕府が派遣した少数精鋭部隊の働きにより、結果的に幕府側の勝利で終わられる事ができた。

その後は・・・些細な小競り合いや争いはあれど、黒船来航によって鎖国政策を強制的に解除させられるまでの間、家鳴将軍家の天下は続いた。

尾張時代は終わり、明治・・・大正・・・昭和・・・平成と、時は流れ・・・時代は移り変わる。

西暦２０ＸＸ年。

とある小学校・・・４年生の教室。

「・・・・・とまぁ、これが家鳴将軍家の成り立ちだ。ついでに『大乱』についても軽く触れといたが・・・成り立ちの方はテストに出すから、よーっく覚えておけよ！」

このクラスの担任を務める男性教師は、黒板を読み上げながら教科書片手に説明する。

彼の目の前の生徒達・・・熱心に聞きながら教科書やノートに授業内容を書き込む者もいれば、机に突っ伏して眠りの世界に旅立つ者、前後左右の席の者とヒソヒソ話に興じる者もいたが、授業妨害されているわけではないので、男性教師は授業を続けるべく教科書のページを次へとめくる。

四季崎記紀、旧将軍、家鳴将軍家、飛騨鷹比等・・・等々。尾張時代、大なり小なり歴史に関わった人物達が、学校の教科書に名を連ねるようになった時代。

これらの内容は、義務教育終了までの段階で誰もが習う『表向き』の史実。

軽く例を挙げると・・・八代将軍・家鳴匡綱の死は、表向きには『高齢による病死』として伝えられていた。
将軍が暗殺されたなど・・・とても表には出せない話。幕府の役人はその事実を完全に隠蔽し、生涯誰にも漏らさずに墓場へと持って行ったからである。

歴史年表とは勝者の日記。

その日にあった嫌な事を書く必要はない。

全国規模の『大乱』のような隠しきれない大事件はともかく・・・隠し通せるものは全力を持って隠蔽するに限る。天下太平のためにも残す必要はない事実なのだから。

最も・・・それが漏れる漏れないにかかわらず、その約百年後に海の向こうからやってきた黒船によって、家鳴幕府は終焉を迎えるのだが。

放課後。

授業が終わったことで、小学生の少年少女達はランドセルを背負って帰路につく時間帯。

多くの少年少女が校門を出て家へと向かう中・・・一人の少年は校門の前で棒立ちし、学び舎たる校舎を無言で見つめていた。１分や２分ではない。すでに１０分は経過している。

体格は年相応。所々逆立った銀髪が特徴的な少年。
好奇の視線が注がれまくっていたが、彼は・・・その目に焼き付けるかのように校舎を見つめ続ける。

「おーーーい、刻桃（コクトー）！」

「・・・・・・」

「おーーい・・・」

「・・・・・・」

「おい、無視するな！」

「！？」

刻桃と呼ばれた少年は、背後から誰かに軽く叩かれる。

彼の背後には・・・同じクラスのクラスメイトであり、数少ない友達と呼べる存在・・・遠山キンジがランドセルを背負って立っていた。

「・・・なんだ、キンジか」

「なんだは無いだろ。せっかく一緒に帰ろうと思って探してたのに」

「・・・そっか。そうだな。帰ろうか」

もう・・・最後だし。

誰に聞こえるまでもなく、刻桃はポツリと呟く。

道中・・・二人は他愛もない話をしながら通学路を肩を並べて歩いた。

好きなマンガやアニメ、嫌いな先生、家族の仕事がどうのこうのなど、話は尽きる事はなく弾む。

やがて・・・分かれ道に差し掛かる。

「じゃあ・・・ここで。また明日な！」

キンジは刻桃に背を向け、自宅へと向かおうとする。

すると・・・・

「キンジ！」

刻桃が声を張り上げる。キンジはびっくりしながらも振り向いた。

いつもと変わらぬ級友。その姿が当り前のようにあると思っていたが・・・

「あのさ・・・・・・・・・・キンジ」

あったのは・・・力無きの声を発する刻桃の姿。

「・・・・！？」

キンジは意表をつかれたような感覚に襲われる。

ついさっきまで笑い合ってたハズの友が・・・肩を震わせ、顔を俯かせていたからである。

何処か痛いところでもあるのか。知らず知らずに自分が何か傷つけるような事を言ってしまったのだろうか。

子供ながらも計り知れない不安に襲われる。
しかし、刻桃は次の瞬間には顔を上げ、眩しいばかりの笑顔を浮かべ・・・

「またなっ!!」

大声で別れの言葉を口にした。
さっきまでとは打って変わって・・・あまりに清々しい姿を見て、キンジも全力で応える。

「ああ、また明日!!」

それを聞き届けると、刻桃は自宅に向かって駆ける。
だが、キンジは・・・友の不可解な行動に一瞬違和感を覚える。

「あいつ、どうしたんだ?」

一人で居る事が多く、一見しただけでは何を考えているかわからない変わり者。それが周囲の・・・刻桃に対する見解。
彼の母が、彼に奇妙な格闘技を教え込んでるとか・・・カツアゲ目的に彼に絡んだ不良中学生が返り討ちにされてボコられたなど・・・・奇妙な噂もついて回っていた。

だが、キンジにとってはそんなの些細な事だった。
家同士・・・友達としても付き合いが長く、鑢家の事情をある程度知るキンジにとって・・・刻桃は、かけがえのない友の一人だった。

「・・・・まぁ、いいか」

一晩経てば元の刻桃に戻っている・・・と、キンジは自己完結。夕日をバックに帰って行った。

だが・・・次の日、この決断を後悔することになった。

この日、刻桃が力強く発した言葉。それは精一杯の、不器用なりの、最大限の別れの言葉だった事に気付いてしまったのだから。

鑢家。

「刻桃」

「・・・・・・」

刻桃が家まで帰ると・・・門の所で女性に出迎えられる。

流れるような黒髪ロングヘアをうなじの所で束ねた女性。

刻桃の母・・・鑢家家長・鑢風花（ヤスリ・カザハナ）である。

小学生の子供がいるとは思えないほど若々しく、『年が離れた姉弟』

と紹介されれば、誰もがそれを信じてしまうだろう。

風花は、『ただいま』の一言も言わずに家に入ろうとする刻桃を、無理矢理抱き寄せる。

「お友達にお別れ・・・ちゃんと言えた?」

「・・・・・・」

刻桃は無言だった。だが・・・無言で抱きかえし、啜り泣く彼の姿を見て、風花は難なく察する事が出来た。

「まったく・・・泣くぐらい悲しいなら、お別れぐらいちゃんと言いなさい。キンちゃんやコウちゃんにも笑われるわよ?」

「キンジはともかく・・・紅龍(コウリュウ)の事なんか・・・関係ないだろ。そもそも、母上のせいじゃん・・・・グスッ」

「それを言われたら返す言葉もないわ。でも・・・・・」

「・・・わかってる。母上に言われたから・・・じゃない。自分で選んだんだ。だけど・・・」

風花は無言で・・・優しく・・・包み込むように刻桃の頭を撫でる。

「・・・今のうちに思いっきり泣いておきなさい。十九代目の名に恥じないように・・・これからは今まで以上に厳しい修練が待っているんだから」

刻桃は無言で頷く。

今日この日をもって・・・鑢母子は家を引き払い、この町・・・この国から出て行くことになったいた。

名目は、風花という一人の『武偵』に、長丁場になることが予想される仕事の依頼が入った事と・・・『刻桃の更なる修練』のためである。

鑢一族に脈々と受け継がれてきた・・・剣士を名乗りながら刀を使わない無刀の流派・虚刀流。

虚刀流十八代目当主・鑢風花は、刻桃が5歳の頃から実に5年間・・・日常生活を送る傍ら、それを厳しく叩きこんできた。

学校に行きながらではあったものの・・・彼もまた見る見るうちに上達し、奥義こそまだ使えなくとも・・・その辺の三下不良を倒せるぐらいの実力を持っていた。

しかし・・・これまではそれでよくても、これからはそうもいかなくなった。

１０歳を過ぎ、ある程度身体が出来上がってきた刻桃の修練を次の段階へと進ませるためにも・・・風花自身の仕事も行うついでに、

日本を離れ、刻桃も実戦に身を投じさせながら鍛える事にしたのである。
刻桃もそれを了承。母とともに生まれ育った町から、国からも旅立つ決心をした。
それでも・・・まだ幼い子供。未開の土地への旅立ちや、故郷や友との別れは不安でしかない。

（だから、今だけでも・・・・）

今のうちに思いっきり泣いておこう。

幼馴染の紅龍に笑われてもいい。

十九代目を継ぐ身である以上、これからは泣き言は一切許されないのだから。

「・・・グスッ」

泣き続ける刻桃。
それを黙って抱きとめる風花。

物語は・・・それからさらに7年後、動き出す事となる。

・・・・・

時は流れ・・・7年後。

アメリカ・ニューヨーク。

世界最大級の大都会・・・・その一画に存在する裏路地。

そこでは、少年が1人・・・いかにもガラの悪そうな7人組に囲まれていた。

7人組全員がナイフや金属バットで武装しているのに対し、少年は・・・手ぶらだった。

年齢は１０代後半。身長は１６５ｃｍ～１７０ｃｍぐらい。

前髪は若干逆立ち、腰の所まである長い銀髪をうなじの所で束ねており、前髪から覗く漆黒の瞳からは強い意志を感じさせる。

服装は・・・無造作に着こなした若草色の着流し一枚。両手には金属製手甲付きのオープンフィンガーグローブ、両足には着流しには不釣り合いなブーツ。所々露出した肌は浅黒く、彼が持つ独特のワイルドさを醸し出している。

「・・・・・・」

「どうかしたの？なにか気になる？」

少し離れた位置から・・・長い黒髪をうなじの所で束ねた女性が声をかけてきた。

年齢は２０代後半ぐらい。少年を見守るかのような優しい笑顔を浮かべている。

「なにが気になるって言われたら・・・・母上の存在しかないだろ」

「え?なんで!?」

「この程度の連中・・・・銃もない格下貧乏マフィアの討伐なんて、俺一人で十分すぎる仕事だろ。なんでワザワザついてきたんだ?」

少年の質問を受けて・・・母上と呼ばれた女は、少しだけ微笑む。

「だって、アンタ・・・・明日にはもう日本でしょ?もう最後かもしれないし、アンタの成長をしっかり見てあげるから・・・とっとと決めちゃいなさい!」

「縁起でもない事言うな。ついでに・・・・いいかげん子離れしとけ。子持ちじゃ再婚にも支障出るぞ?」

「つれないわねぇ。そりゃ、再婚願望が無い事もないけど・・・相手がね~」

「さいですか・・・」

じり・・・と。

7人の男達が少年への包囲網を小さくした。

それはそうだろう。喧嘩を売られたにもかかわらず、自分達の存在を無視してコントのような会話を繰り広げる女と少年を見れば、マフィアでなくとも怒り狂うのは当然だ。

「じゃあここは・・・・・成長を見せる意味でも、七代目が考案した最終奥義で決めてやる。それでいいな?母上!」

「いいけど・・・殺しちゃダメよ。武偵法9条は覚えてるでしょ?武偵は・・・」

「武偵活動中に人を殺害してはいけない・・・だろ?極めて了解!」

少年が女から向き直った直後。

7人の男達はそれぞれの獲物を振りかぶって突撃してくる。

「さて・・・アメリカでの最後の仕事だ。しっかり見とけよ!」

少年は慌てた様子など微塵も見せない。

それどころか・・・・不敵に笑い、ぐっと低く・・・・身を沈める。

「虚刀流最終奥義・・・・・」

瞬間・・・・

「七花八裂・応用編!!」

少年は『奥義』と呼ばれる七つの技を目にも止まらぬ速さで放った。

一の奥義、高速で打ち込む掌底・・・・・・・・・・・・・・・・『鏡花水月』。

二の奥義、敵を突き刺す貫手・・・・・・・・・・・・・・・・・・『花鳥風月』。

三の奥義、下から打ち上げる膝蹴り・・・・・・・・・・・・・・・『百花繚乱』。

四の奥義、防御を無効化する鎧通しの拳・・・・・・・『柳緑花紅』。

五の奥義、表面に衝撃を伝える鎧崩しの張り手・・・・『飛花落葉』。

六の奥義、上方から繰り出す両手による手刀・・・・・『錦上添花』。

七の奥義、斧の如き前方三回転踵落し・・・・・・・『落花狼藉』。

つまり、『虚刀流最終奥義・七花八裂』とは、一撃で敵を一刀両断する威力を持った奥義を一気に七つ喰らわせる・・・虚刀流最強の混成接続技なのである。

しかし今回。本来の用途とは異なり、少年は応用編を行使。迫りくる7人に対して一撃ずつ、計七発の奥義を放った。

威力が1／7に分散されているとは言っても、奥義は奥義。男達は一瞬で撃退され、壁に、地面に、容赦なく叩きつけられた。

その様子を最後まで見届けた女は・・・・満面の笑顔でこう言った。

「ごーかっく♪」

・・・・・・・・・・・・・・

夜・ニューヨーク空港。

格下マフィアの身柄を現地警察に引き渡した後・・・女と少年はニューヨーク空港へとやってきた。
日本行きのチケットを購入した後・・・少年は女に見送られながら出国ゲートをくぐり、そこで足を止めた。

「んじゃ、行ってくる。『刀』の情報は・・・こっちでも出来る限り集めとく。何かわかったら連絡するから」

「アンタはそんな事気にしないで、しっかり勉強してくればいいの。これは私が受けた仕事・・・っていうより、虚刀流当主の仕事でもあるんだし」

「だったら・・・俺も時期に十九代目だ。無関係とは言えないだろ」

少年の切り返しに・・・女は黙ってしまう。
それでも・・・そのままクスリと笑うと、少年の姿を・・・最愛の息子の姿をじっくり見据える。

「いってらっしゃい。刻桃♪」

母親たる女性・・・鑢風花の言葉を受けて。

「ああ。元気でな、母上！」

少年・・・鑢刻桃は拳を突き上げ、飛行機へと乗り込んだ。

第1話（後書き）

前々から考えていた新連載。ついにやってしまいました。仮面ライダー系以外の執筆は初めてなんですよね。そういえば・・・・

改竄は防がれても、改編はされてしまった歴史。行き着く先はどこなのか・・・それをコンセプトに始まったこの作品。

尾張時代当時ならいざ知らず・・・この数百年で、虚刀流は対銃戦闘法も考案された上で受け継がれているので、銃火器装備の敵とも戦える設定。

例の・・・『呪い』も健在ですけど、代を重ねるごとに薄くなってはいるため、武器も全く使えないわけではありません。あくまで・・・七花よりはマシ程度ですけど。

キャラ紹介は、オリキャラが出揃った頃・・・一巻分終了したら掲載予定。

次回はいよいよ本編突入。

七花と否定姫の子孫・・・虚刀流十九代目当主（予定）・鑢刻桃の活躍。これからもどうぞお楽しみください！

第2話

武偵。

『武装探偵』の四文字を語源とする、凶悪化する犯罪に対抗して作られた国際資格である。

武偵免許を持つ者は、銃火器・刀剣などの武装を許可され、逮捕権を有する等、警察に準ずる活動が出来る。

警察と異なるのは、報酬・・・つまり金で動き、金さえもらえれば『武偵法』の許す範囲において、あらゆる仕事を請け負う点。簡単に言ってしまえば『便利屋』と言う事になる。

そんな彼らを育成する機関が、東京湾岸部・・・東西５００ｍの長方形をした人工浮島の上に存在する。

その名を・・・東京武偵高校。

通称、学園島。

元々は東京湾岸の再開発に失敗して叩き売りに出された土地であり、レインボーブリッジを挟んで北にある同型の人工浮島は未だに空き地で・・・見たまんま『空き地島』と呼ばれている。

「学園島か。前に来た時も思ったけど・・・ちょっとした学園都市って感じだな」

４月。桜の花が咲き始める頃・・・一人の少年が、これからの生活拠点となる学園島を訪れた。

「場所は・・・ここからじゃ結構あるな。時間もギリギリだけど、なるようになるか！」

少年・・・鑢刻桃は、学園島の地図を懐に仕舞って必要最低限の荷物が入ったリュックを背負い、設置された時計塔で時刻を確認すると一気に歩道を駆ける。
その速度は常人のそれを越え・・・少なくとも、その辺の自転車以上の速度を出していた。それにもかかわらず少年は息を殆んど切らす事なく目的地を目指す。

新学期開始と同時に『転入』する事となった『東京武偵高校』の校

舎を。

校舎の場所は念のため地図でも確認したし、転入試験で一度訪れた事があるため、ある程度は記憶の片隅に残っていた。このまま何もアクシデントが無ければ、余裕・・・とはいかなくとも遅刻は避けられるだろう。

そう。あくまで、何もなければ・・・・だ。

ドガアアアアアアアンッ！！！

「！？」

轟音がどこからか響いた。

それに伴って、黒煙混じりの爆風が大通りを突き抜ける。

刻桃は、立ち止まって辺りを見回し、手近な数階建てのビルに突進。僅かな足場や配管を伝い、驚くほどの速さで屋上へと到達。そして、

遠目から目視する。

轟音の発生源・・・つまり、爆弾が起爆したと思われる場所を。

「武偵高は、生徒同士の撃ち合いが日常茶飯事のトチ狂った学校。
紅龍のヤローはそう言ってたけど・・・爆弾はやり過ぎだろ」

学園島に来る前に・・・幼馴染から仕入れていた情報。
ここ、東京武偵高校では・・・生徒全員が銃器・刀剣での武装と防弾制服の着用が義務付けられている。だからなのか、多少のドンパチ・・・殺人未遂程度の事は流されてしまうのが現実・・・と聞いている。

生徒同士のドンパチか。何処かのアホがテロったか。どちらにしても警察・・・もしくは武偵高関係者がすぐにでも駆けつけ、真相を突き止めるために現場検証を始めるだろう。
自分は少し離れた位置から爆煙を目撃しただけで、有益な情報は何も持っていない。面倒事は彼らに任せ、校舎に向かうという選択肢もあったが・・・

「・・・仕方ないか」

見つけてしまった以上は無視できない。変に中途半端だと、気になってモヤモヤしてしまう。
自らの疑問を解消するためにも・・・刻桃はビルからビルへと飛び

移りながら現場へと向かう。

そうして辿り着いたのは、倉庫らしき場所の・・・・・手前のビルの屋上。

鞄から双眼鏡を取り出して状況を把握しようとする。

そこでは、ハンドル上に機関銃が装備されたタイヤ付のカカシのような乗り物・・・『セグウェイ』7台が、銃声を響かせながら体育倉庫に向かって突撃しようとしていた。

倉庫の壁は半壊。その壁から覗く、散乱した跳び箱から察するに・・・恐らく体育倉庫だろう。突入しつつあるセグウェイを目で追っていると、体育倉庫の中から一人の少年が姿を現した。

武偵高の防弾制服を着た黒髪の少年だ。

少年は銃弾の雨を無駄のない動きで避け、次の瞬間には右手に持った銃のトリガーを引く。

銃声は・・・7発。

放たれた弾丸は機関銃の銃口へと飛び込み、粉々に爆散。機関銃を破壊されたセグウェイは、折り重なるように倒れて機能停止した。

1台だけならまだしも・・・7台同時に仕留めたのである。

まさに神業。

黒髪の少年は余裕な足取りで体育倉庫へと戻っていく。

「凄いな、アイツ。もっと・・・・近づいてみるか」

刻桃が思い立ったその時・・・・倉庫から2人の男女が飛び出してきた。

1人は・・・さっき神業を披露した、武偵高のブレザーを着た黒髪の少年。もう1人は、武偵高のセーラー服を着た・・・一見小中学生にも見える桃色ツインテールの少女。

だが、様子がおかしい。どういうわけか、本気の殺気を撒き散らした交戦状態となっている。

最も・・・『交戦』と言うよりは、少女の方が一方的に殺気を放って銃や刀剣を振りまわし、それを・・・黒髪の少年がそれを軽くあしらっているようにも見える。
双方共に常識外れの戦闘能力を持っている事は、遠目から見ても明らか。刻桃は・・・その攻防についつい見入ってしまう。

そして・・・そんな戦いにも決着の時が訪れる。

桃色ツインテールの少女が何かに躓き、真後ろにぶっ倒れた。起き上がろうとするも、再び躓いて勢いよく転ぶ。黒髪の少年はそんな少女を一瞥すると、面倒事から避けるように逃走。

「この卑怯者！強猥男！でっかい風穴・・・あけてやるんだからぁ！！！」

少女は捨て台詞とも取れる絶叫を響かせるのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・

「くうっ・・・アイツ！絶対許さない！膝まづいて謝っても、泣いて謝っても、絶対許さない！」

東京武偵高2年、強襲科所属の少女・・・神崎・H・アリアは、桃色のツインテールを振りみだしながら恨み節を吐き、体育倉庫近くの茂みを這いつくばる。

ついさっき交戦した黒髪の少年に奪われ、茂みに投げ捨てられた予備弾倉。それを目を皿のようにして探していたのである。

思い返せば・・・爆弾付きの自転車に乗せられた少年を助けようと思ったのが間違いだった。

「名前は、たしか・・・遠山キンジ。名札にはそう書いてあったっけ」

武偵高では、４月には全員が名札を付けるルールがある。故にアリアは、ついさっき交戦した少年・・・キンジの名を知る事が出来た。

「せっかく助けてやったのに・・・・」

爆風喰らって気絶している隙に服を脱がされかけ、あろうことか中学生・・・小学生とまで言われてバカにされ、完全に恩を仇で返される始末。

「でも・・・あれは凄かった・・・」

思い出すは、追ってきた機関銃装備のセグウェイ7台を・・・精密射撃で一瞬にして破壊したキンジの姿。
自分が苦戦していた戦況を瞬く間に覆した戦闘能力。

「言動がおかしくなったかと思ったら、助けてやった時とは比べ物にならない程戦闘能力が上がって・・・・なんなのアイツ・・・」

脱がされたことと・・・バカにされた事はともかく、アイツは間違い無くＳランクの武偵。

少なくとも・・・自分だけでは出来ない事を、難なくやってのけるだけの実力がある。

もしかしたら・・・・アイツを味方につければ・・・

「アイツをあたしのパートナーにすれば、『武偵殺し』の件だけでも・・・ママの無罪を証明できるかも・・・」

アリアは何かを決意したかのように唇を固く結ぶ。

しかし、今最も優先させなければならないのは、予備弾倉探し。とっとと探し出すべく、再び茂みをかぎわける。

「探し物はこいつか？」

「！？」

アリアはハッとなって声がした方向に振り向く。

そこには、自分と同年代と思われる・・・浅黒い肌に若草色の着流しを纏った銀髪の少年が、自らの探し物たる予備弾倉を持って立っていた。

「あんた・・・誰?」

アリアが聞く。

「通りすがりの剣士だ」

ここは武偵高。少年が剣士を名乗る事自体は驚かない。だが・・・それにしては刀剣を装備しているようには見えない。剣士を名乗るような輩は、自然と目に見える場所・・・腰や背中に帯刀している物なのにだ。それとも・・・自分のように服の中にでも隠しているのだろうか。

そんな事を考えていると・・・

「ほらよ!」

少年は予備弾倉を投げ、アリアは無言でそれをキャッチ。スカートの内側のホルスターに収納した。

「しっかし・・・何があったんだ?爆発やら、機関銃付きのセグウェイやら。絶対ただの喧嘩じゃないだろ。それに・・・セグウェイ破壊したあの男。さっきも・・・お前の素早い銃撃や斬撃を軽く

あしらってたし、Sランクは確実にあるんじゃないか？」

「あんた・・・あれ、見てたの！？いつから？他に何か変な物見なかった！！」

少年が何気なく発した言葉に・・・アリアが噛みつく。

「いつからって・・・・その前に、ここで何があったか聞かせろ。それが知りたくて、遅刻覚悟でワザワザここまで来たんだからな」

「先に聞いたのはあたし！だからあんたが先に答えなさい！！」

「それが人に物を頼む態度か？それに、状況がわかんなきゃ話しようってもんがないだろ。少しはこっちの都合や段取りってものを・・・」

「アンタの都合なんて、どうせ大した事ないに決まってる！私が教えろって言ってるんだから教えなさい！！どれが必要な情報かは、あたしが判断するわ！！」

「・・・・・・・・」

アリアの独善的な態度に・・・少年は心底呆れるしかなかった。

軽く溜息をつくと、アリアに背を向けて歩き出す。

「ちょっと・・・・どこに行くのよ！」

「・・・付き合い切れるか。じゃあな、高慢ちきなおチビさん！」

「・・・・・・・！？」

おチビさん。元々冷静さを失っていたアリアは、その一言で一気にブチ切れる。
そしてセーラー服の背中に手を突っ込み・・・そこに隠していた刀を・・・二刀流で抜いた。

「こうなったら・・・力ずくで聞き出す！」

アリアは人間離れした瞬発力で、少年へと飛び掛かる。
そして、右手に持った刀を振り下ろす。

「・・・ったく。刀ってのは・・・・力任せに振ればいいってもんじゃないだろ」

少年がそう言ったのは・・・アリアの刀を両手で挟んだ状態で受け止めた後の事である。

「え！？この・・・くっ・・・きゃあ！？」

アリアが力いっぱい刀を引っ張ろうとしたタイミングを見計らい、少年は両手で挟んだ刀をワザと離した。
勢い余ってアリアは仰向けに・・・可愛らしい悲鳴を上げて倒れる。
右手に持っていた刀はアリアの手から離れ、数m離れた位置にガチャンと音を立てて落っこちた。

「今の技は一般的に言えば『真剣白刃取り』だけど・・・虚刀流としては『名前が無い技』だ。つまり・・・それほど当たり前の技術で、冷静さを失ったお前の斬撃なんて、取るに足らない物だった・・・って事だな」

「こここここ・・・・このーーーーー!!」

挑発されたアリアは、左手に持っていた刀を両手で構え直し、鋭い突きを繰り出す。
冷静さを失っているとはいえ、全体重を乗せて初撃よりも威力を込めた刺突技。
だが、その刀身は少年を捉えはしなかった。

「虚刀流・・・菊!」

少年は身体を９０度捻り、背中越しに寸での所で突きを避ける。

刀はそのまま少年の背中を着流し一枚分外して通過。そして両腕の二の腕で刀の根元を引っ掛け、背骨を支点に挟み撃ちの如くがっちりと固定する。

「嘘!?こんな・・・こんなっ!!」

アリアが、それ以上突こうとしても引こうとしても、刀はピクリとも動かない。
少年は素早い足運びで身体を思いっきり・・・刀を固定したまま回転。タイミングを見計らって刀の固定を解き、遠心力を利用して刀ごとアリアを吹っ飛ばした。

「良い刀だな。よく手入れもされてる。だから・・・手加減はしておいた」

少年が刀の感触を思い出しながら言った。

そして・・・今度は受け身を取って見事に着地したアリアは、技をかけられた時の感触から・・・理解せざるを得なかった。
あの技は刀を『固定』する技なんかじゃない。本来は・・・刀を『圧し折る』技だったんだ・・・と。

「あんた・・・・一体、何者なの?」

眉間に皺を寄せながら尋ねる。

「人に名前を尋ねる場合は、まず自分から名乗るのが礼儀・・・だろ？」

少年は質問を質問で返す。

「・・・神崎・H・アリア。高2よ」

ここで反発しては、堂々巡りの無限ループにしかならない。そう判断したアリアは、顔をしかめながらも素直に・・・ついでに学年も忘れずに名乗る。

「・・・俺とタメだったのか。悪い事言っちまったな」

「・・・もういいわ。それより、あたしは名乗ったんだから、約束通りあんたも名乗りなさい」

「そうだな。俺は・・・・」

一呼吸置くと、少年は自らの名を・・・この学園島に来てから初めて名乗る。

「俺の名前は・・・鑢刻桃。今日からこの武偵高校・・・探偵科の2年だ。つーわけで・・・」

そう言うと、少年・・・刻桃は袖口から球のような物を取り出し、地面に思いっきり投げつけた。

「じゃあな！」

次の瞬間には球は破裂し、大量の煙が発生。辺りは真っ白な世界に覆われる。

「ゴホッ・・ゴホッ・・・・・・・！？」

煙が晴れた頃には・・・・刻桃の姿はどこにもなく、その場にはアリア一人だけになっていた。

そして・・・その顔は一気に不機嫌モードになる。

強猥男に続き、またしても正体不明の男にコケにされた。出し抜かれた。逃げられた。

ロンドン武偵局に居た時、犯罪者を９９回連続・・・・たった一度の強襲で捕まえてきたＳランク武偵のあたしが！！

「絶対・・・絶対絶対絶対・・・絶対風穴あけてやるーーーーーー！！！」

アリアの叫び声は大気を震わせ、天高く響いた。どこまでも・・・どこまでも・・・・

第2話（後書き）

今回ついに原作突入。

前回とは打って変わって地味な技しか使いませんでしたが、どちらも虚刀流としてはなくてはならない技だと考えます。

特に『菊』・・・武器破壊は、敵の戦力を削る意味でも必須ですから。

次回は再会。お楽しみに！

第3話

武偵高校2年A組。

時間は昼前。新学期最初のホームルームの真っ最中であった。

「はぁ・・・・」

東京武偵高2年、探偵科所属・遠山キンジは・・・盛大に、深い深い溜息をつく。力なく机に突っ伏し、生ける屍と化しつつあった。

事の発端は・・・朝7時58分のバスに乗り遅れ、自転車で登校する事を選んだあの時まで遡る。

バスに乗り遅れたのは痛かったものの、遅刻は回避できそうだ・・・と、安心したのも束の間。その自転車には減速すると爆発するタイプのプラスチック爆弾が仕掛けられており、さらには機関銃装備で脅迫音声を発するセグウェイに追い回される始末。

そう・・・世にも珍しい『チャリジャック』に遭ったのである。

絶体絶命の大ピンチに陥ったその時・・・キンジは出会った。

「・・・・・・じろり」

「・・・・・！？」

今現在・・・右隣の席に座りつつ、睨みを利かせる少女・・・神崎・H・アリアに。

あの時、自転車を降りる事も・・・止める事もできずセグウェイに追い回されていた所に、この時はまだ名前すら知らなかった少女・・・アリアは現れた。

アリアはパラグライダーを装備した状態でビルから飛び降り、二丁拳銃の水平撃ちでセグウェイを銃撃。

不安定なパラグライダーから・・・それも、拳銃交戦距離の倍以上の・・・１５ｍは離れた位置からである。

セグウェイを破壊すると、アリアは逆さ釣りの姿勢でパラグライダーで気流をとらえ、自転車をこぐキンジに真正面から接近。

二人は上下互い違いの姿勢で抱き合う形で突っ込み・・・サーカスの空中ブランコの如く、キンジは空へと攫われた。

主を失った自転車は・・・迷走しながら減速し、閃光と轟音を上げて大爆発。

パラグライダーで宙に浮いたキンジとアリアは熱風に吹き飛ばされ・・・ここで二人の意識は一度途切れる。

（ここまでなら・・・まだ良かったんだよな）

次にキンジが目覚めたのは・・・吹き飛ばされた先である体育倉庫。その跳び箱の中に突っ込んだ状態となっていた。
命があった事に歓喜するも束の間。自分の身体の上に・・・アリアが、それも制服がめくり上がり、下着が露出した状態で折り重なっていたのである。

何も知らない者からすれば、ラッキースケベ・・・なのだろうが、『そういうの』を禁止しているキンジにとっては目の毒その物の最悪な展開。

それだけではない。最悪はまだ続いた。

目を覚ましたアリアからは『強猥男』と罵られ、『不可抗力』と弁解しても聞く耳持たずで叩かれまくり、さらに最悪だったのは・・・・機関銃装備のセグウェイがさらに7台現れ、否応なく銃撃戦に巻き込まれた事。チャリジャックから解放されて安心したのも束の間。再び命の危険にさらされたのである。

（今思えば・・・そんなのもまだマシな方だった）

キンジは再び溜息をつく。

この後・・・キンジは『ある事』を引き金に・・・・なってしまったのだ。

自身が最も忌むべき・・・・『ヒステリア・サヴァン・シンドローム』に。

当のキンジ自身は『ヒステリアモード』と呼んでいる・・・遠山家の人間が持つ特異体質の通称であり、『ある事』引き金に思考力・判断力・反射神経などが通常の３０倍にまで向上し、一時的に人が変わったようなスーパーモードになれるのである。

それによって追っ手のセグウェイ7台・・・・・機関銃部分のみをピンポイントで破壊することに成功。無傷で命を拾う事ができた。だが、アリアからは相変わらず『強猥の現行犯』と言い張られて難癖つけられ、『ある勘違い』でさらに怒らせてしまい、交戦状態に陥ってしまった。

結果から言えば・・・ヒステリアモードのキンジは、大幅に上昇した戦闘能力の恩恵によってアリアを難なくあしらい、そのまま逃走に成功した。永久に・・・とはいかないまでも、当分の間は会う事もないと思っていた。

だが・・・そうは問屋がおろさなかった。

今日から・・・言うまでもなく新学期が始まる。クラス替えが行われるのも言うまでもない。結果キンジは・・・事もあろうかアリアと同じクラスとなってしまい、甘い目論見は早くも崩れ去った。

しかも、自己紹介の際アリアは・・・

ーーーーー先生、あたしはアイツの隣に座りたいーーーーー

とまで言い出した。

普通ならこんな我儘がまかり通る道理はないのだが、元々隣に座ってた車輌科所属でツンツン頭の大男・・・武藤剛気（ムトウ・ゴウキ）がいらぬ気を回して『席を代わる』と言い出し、担任教師がそれを認めた事でまかり通ってしまい、今・・・

「・・・・・・」

無言のアリアに・・・

（・・・・・くっ）

プレッシャーを掛けられるキンジ。・・・という状況が出来上がってしまっている。
それでもまだマシな方だと思う事にする。思い込むことにする。この最悪の状況下で・・・『ヒステリアモード』の存在と、『発動条件』に気づかれていないのが、せめてもの救いだったのだから。

今回、中学時代の二の舞になるような最悪の展開は回避したとは言え・・・授業中は相変わらずアリアから睨まれ続け、休み時間になるとクラスの連中に『アリアとの関係』について質問攻めに遭う始末。まだ新学期初日だと言うのに・・・まだ昼にもなってないと言うのに・・・キンジの精神は疲弊しきっていた。

「高天原先生ーーー！」

2年A組の担任教師・・・笑顔を絶やさない穏やかな空気を発する眼鏡の女性・高天原（たかまがはら）ゆとりは、廊下から同僚に呼ばれる。
HRを一時中断して廊下に出ると・・・その数分後に再び教壇へと立つ。

「はーい、みなさーん。もうお昼前ですが、今日からこの学校に転入してきた新しいお友達をしょうかいしまーす」

高天原が穏やかな声で言うと、クラス全体にざわめきが起こる。
そこで・・・武藤が勢いよく挙手をする。

「先生！転入生は女の子ですか？」

「いいえー、男の子ですよ」

「チッ・・・・野郎か」

一気に興味を失った武藤は・・・不貞腐れるように頬杖をつく。
他の男子達も同様に興味を失うが、それに反比例するかのように女子が騒ぎ出す。

イケメン？

どこの科？

武偵ランクは？

・・・等々。

「はいはい、静かにしてくだーさい。それでは・・・入って来てもらいましょう。どうぞ～♪」

高天原の合図を待っていたかの如く・・・教室の引き戸がガラリと開かれた。

そこから入って来たのは・・・若草色の着流しを着た銀髪の少年。

身長は１６５ｃｍ～１７０ｃｍ。前髪が若干逆立った長い銀髪をうなじの所で束ねており、身に纏う若草色の着流しから覗く肌の色は浅黒く、比較的細身だが筋肉質のたくましい身体である事も窺える。ヒソヒソヒソ・・・と、生徒達が少年を品定めする中・・・

「それじゃ、自己紹介お願いね」

「はいよ、先生」

高天原に促され、少年はチョークを片手に黒板へと自らの名前を書き込む。

「んじゃ、とりあえず・・・俺の名前は、やすｒ『鑢刻桃！なんでアンタがここにいるのよ！！』・・・！？」

アリアが立ち上がって叫んだのは、少年・・・鑢刻桃が黒板に自分の名前を書き終え、自己紹介しようとした矢先であった。

「・・・・御挨拶だな、神崎・H・アリア。あの時も言ったハズだぜ?俺は今日からこの学校の2年だって。まぁ・・・まさか同じクラスだとは思わなかったけど」

「それはこっちだって同じよ!!」

クラスの生徒達・・・・教師である高天原も含めて全員絶句。険悪モードの刻桃とアリアを交互に見やる。

アリア・・・または、刻桃の次の言葉を待っているようだった。

だが、先に口を開いたのは・・・二人のうち、どちらでもなかった。

「やすり・・・こくとーって・・・お前、刻桃なのか!?」

キンジである。

悩み、疲弊しきっていた事も忘れ、勢いよく立ち上がった。

「そうだけど・・・お前、誰・・・!?」

刻桃は・・・キンジの制服に付けられた名札を見て、絶句する。

「遠山・・・キンジか?お前・・・・」

恐る恐る、刻桃が聞く。

「久しぶりだな！小学校の時、お前がイキナリ転校して以来だ！！」

肯定し、嬉しそうに刻桃に駆け寄るキンジ。

「・・・7年振りだな、キンジ。まさか・・・こんな所でまた会えるとは思わなかった」

「それはこっちのセリフだ。一体・・・今までどこで何やってたんだ？」

「武偵やりながら・・・母上や仲間と一緒にいろんな場所旅してたんだ。アメリカを拠点にな」

刻桃は、ククク・・・と微笑。次の瞬間には軽く拳を握り、前に出す。

「とりあえず・・・これからよろしくな」

「ああ！」

キンジは刻桃の拳を軽く小突く。

挨拶を終えた瞬間・・・

わあああああああ！！パチパチパチパチパチ！！

教室は拍手喝采に包まれた。生徒はもちろんの事・・・高天原までもが穏やかな笑顔を浮かべて拍手している。
キンジは今更になって恥ずかしくなったのか、『じゃあ、後でな』とだけ言って席に戻る。

それでもキンジにはまだ数人の視線が注がれていたが、視線の大部分は刻桃へと集まる。

武偵高は専門科目でクラスや学年を越えて学ぶ機会が多く、生徒同士の顔見知り率も高い。故に、新学期であっても転校生は珍しい存在。刻桃自身が日本人離れした目立つ風貌をしていた事もそれに拍車をかけた。
さらに、名乗る前にアリアから名指しで呼ばれた事と、キンジとの再会劇。つい数時間前に2年A組で最も注目を集めた2人の行動もあってか、刻桃は完全に注目の的となっていた。

誰も彼もが手を挙げ、刻桃を質問攻めにする。
事態を収拾すべく、ここで高天原が『まぁまぁまぁ』と言いながら生徒達をなだめる。

「みんな、落ち着いて。鑢君が困っちゃうでしょう。質問があるな

ら、一人ずつしないとね。鑢君も・・・それでいいかしら?」

「・・・言いたくない事と、聞かれたくない事以外でいいなら」

「鑢君の許可も取れましたから・・・・質問がある人は、手を挙げて一人一つずつお願いしまーす」

高天原の号令の元『ハイ!ハイ!ハイ!』と、次々手が挙がる。その中から高天原がランダムに選び、質問を許可する。主に女子から。質問内容は・・・『どこから来たの?』、『どこの科』、『なんで着物なの?』、『彼女いる?』といった定番中の定番その物。

刻桃は・・・『ここに来る前はアメリカに居た』、『一応探偵科』、『こいつは普段着。今朝日本に着いたばっかだったから、制服まだないんだ』、『今はいない』と・・・言葉は少なくとも、的確に答えた。

そして・・・最後に、ある女生徒が挙手した。

「はいはいはーーーい♪」

長い金髪をツーサイドアップに結った、ゆるい天然パーマが特徴の童顔の少女である。

最も特徴的なのは・・・その制服である。彼女は武偵高の制服の所々にフリルを施し、ヒラヒラのゴシックロリータ仕様に魔改造していたのである。

「はい、それじゃ・・・峰さん」

「はーーーい♪」

高天原に指され、峰と呼ばれた少女・・・探偵科所属・峰理子(ミネ・リコ)が？
ご機嫌な笑顔で片手をぶんぶん振る。

「それじゃ、理子の質問！アリアとは知り合いみたいだけど・・・
どんな関係なの？もしかして・・・フラグばっきばきに立てちゃったりした？」

「・・・・・フラグ？」

刻桃は首を傾げる。言葉の意味がよくわかっていないようだった。

だが・・・クラスの面々は違った。
フラグ云々は別にして・・・転入生とアリアに何らかの関係がある。
自己紹介時のアリアの反応からも、誰もが察していた事だ。
気になりつつも、訳あって触れなかった話題。否、触れる事が出来なかった話題。それなのに・・・それでも理子は、興味津々意気揚々に好奇心丸出し状態のままである。

「キー君とも知り合いだったみたいだし・・・ハッ！？そっか・・・
そうなんだ！たぶん答え聞くまでもないよ。だって理子、推理できた。できちゃった♪」

次の瞬間・・・理子はとんでもないおバカ推理をぶちまける。因みに・・・『キー君』とは、理子がキンジに対して勝手に付けた珍妙なあだ名である。

「鑢君とキー君、それからアリア。これって絶対三角関係成立でしょ！転入生とか友達同士で女の子取り合うなんて、ギャルゲーじゃ定番だもんね。鑢君とキー君がアリアを・・・それか、アリアと鑢君がキー君を取り合うってのも・・・萌える展開だよね♪」

天然パーマの髪を振るわせながら、理子は頬を赤く染めて身悶える。恐らく・・・いや、間違い無く人には言えないようなよからぬ妄想をしている。それは誰もが察する所だった。

新参者である刻桃はポカンとした表情で理子を見つめ、成り行きでよからぬ妄想に巻き込まれたキンジは・・・

「あのなぁ・・・」

頭を抱えて机に突っ伏していた。

昔の友に再会できた喜びも一気に吹き飛び、キンジの精神は疲弊モードに逆戻り。

空気を読まない理子は、踊るようなステップで刻桃に近づき・・・

「どう？合ってる？間違いないよね？」

問い詰めた瞬間。

ズドドン！！

２発の銃声が響いた。

第3話（後書き）

原作キャラもチラホラ登場。武藤や理子は、どう転んでもあんなイメージしかない。

次回はバトルモード・パート?。

第4話

イキナリ響いた2発の銃声。

何故か真っ赤になったアリアが・・・拳銃を構え、真正面に2連射したのである。

そう・・・正面の理子と刻桃をかすめるように。

いくらここが生徒全員が武装している武偵高であっても、色んな意味で盛り上がっていた理子・・・そしてクラスの面々を凍りつかせるには十分な事態。

「れ、恋愛なんて・・・くっだらない!!さっきも言ったじゃない!!」

色恋沙汰には奥手な上、免疫もないアリアが・・・・両手に愛銃・ガバメントを構えたまま叫ぶ。

教室内は一気に沈黙。理子は、出来そこないのロボットのようなカクカクした動作で席へと戻り、真っ青になって着席。

それを最後まで見届けると、アリアは教壇の傍に居るハズの刻桃へと向き直る。

「朝もこのクラスの連中に言ったけど・・・刻桃、アンタも覚えて

おきな・・・！？」

しかし、そこにはもう刻桃の姿が無かった。
何故なら刻桃は・・・とんでもない瞬発力でアリアの目に前に迫っていたからである。

「こ、こいつっ！！」

焦りつつもアリアは刻桃の右肩を狙い、ガバメントを発砲。

対する刻桃は・・・

「喰らうかよ！」

左手の一振りで弾丸を天井へと弾き、右手を下方から上方に向かって切り上げる。

「・・・・・っ！？」

「虚刀流・・・・雛罌粟！！」

アリアのガバメントと刻桃の手刀が交差。
互いに寸止めしながらも・・・手刀はアリアの首筋を。ガバメント

の銃口は刻桃の眉間を。両者の得物は完全に相手の急所を捉えた。
皆があっけに取られる。
イキナリ発砲したアリアは元より。刻桃の・・・弾丸を弾いた驚異的な反射神経と、一気にアリアへと接近した瞬発力にもだ。

「「・・・・・・・・」」

二人は、そのままの体勢でしばらく睨み合うと、互いに得物を退いて殺気も解く。
緊迫した空気から解放されたクラスの面々も、冷や汗を流しながらホッと溜息をついた。

「おい、刻桃！お前・・・手！弾丸が・・・大丈夫か！？」

キンジは、再会したばかりの友の技と動きに驚きながらも、弾丸を弾いたであろう左手を気に掛ける。
刻桃は軽く両手を挙げ、両手に着けた・・・オープンフィンガーグローブを見せる。

「このグローブの手甲は、玉鋼製の特注品だ。大抵の弾丸ならこい

つでどうにでもなる」

甲の部分に取り付けられている鉄板は・・・・・・玉鋼製と言うだけあって損傷は全く見られない。

「だが、少しやり過ぎじゃ・・・・・」

「先に撃ったのはアリアだ。一応寸止めはしたし、手加減もした。お前が何と言おうと・・・俺から謝る気はない」

「うっ・・・それは・・・お前の言う事ももっともだが・・・」

キンジは言葉に詰まる。
今朝方・・・アリアに殴られ、銃斬撃に襲われたこともあってか、強く言い返す事も出来なかった。

「何が手加減よ！本気の本気でやれば、アンタなんか接近もさせずに倒せるんだから。これは本当よ。本当の本当！！」

ここでアリアが会話に割り込む。

「それに、剣士名乗ってたクセに体術しか使わないなんて・・・あたしをバカにする気！！」

「刀なら使った」

「どこが！どこにも持ってなかったじゃない！使ったって言うなら、今すぐ見せなさい！」

「それなら俺が・・・・俺自身が一本の日本刀。つまり、もうお前に目の前にあるって事だ」

「・・・・っ！レキみたいなこと言って誤魔化すなーーーー！！」

眉間にしわ寄せ、しつこく食い下がるアリアを・・・刻桃は、『レキって誰だ？』と思いながら涼しい顔であしらいまくる。
刻桃の言い分は・・・傍から聞いていたクラスメイトの殆んどが理解できない荒唐無稽な物だったが・・・

（・・・・刻桃の奴）

ただ一人、キンジだけは理解出来た。というより、『知っていた』と言う方が正しい。
鑢家と遠山家。双方歴史だけはある家であり・・・それこそ尾張時代末期頃から親交がある。刻桃の母たる鑢風花と、キンジの兄である遠山金一（トオヤマ・キンイチ）も、あまり表に出ていない事情まで話し合えるほど親しい間柄だった。

（虚しい刀の流れ・・・と書いて虚刀流。己を一本の日本刀に見立て、武器を用いずに戦う流派・・・か）

7年前・・・鑢家が突然海外へ旅立った理由。
それは『風花の仕事の都合だけでなく、刻桃の鍛錬を本格化するためだった』と、当時兄である金一からも聞いた話しだ。

刻桃は当時から中学生の不良を倒せるぐらいは強かったが・・・この7年でさらに成長した上で帰ってきたと・・・思い知らされた気分だ。

（武偵なんて今すぐ辞めたいと思ってる俺とは・・・大違いだ）

自嘲気味に笑うキンジ。
ふと、隣の席を見ると・・・

「・・・次は絶対風穴あけるわよ！！」

アリアと。

「やってみろ。・・・そうなる前に、俺がお前を八つ裂きにしてやる」

刻桃が。

挑発とも・・・牽制とも取れる、毒舌を吐き合っていた。

今日初めて知り合った隣席の少女と・・・今日7年振りに再会した友。2人のやり取りに、キンジは・・・今日はもう何度目かわからない程の溜息をついた。

・・・・・・・・・・

「アイツ・・・よくもよくもよっくも！！」

昼休み・・・・アリアは中庭でイライラしながら桃饅をかじっていた。

怒りの原因は・・・手刀を首筋に突きつけてきた銀髪の少年・・・・鑢刻桃に他ならない。

まるで自棄食いのように7つの桃饅を全てたいらげると、改めて考える。

パートナーの必要性を。

「あたしの事を理解して、信頼してくれて・・・力を何倍にも引き延ばしてくれる・・・あたしと世間を繋ぐ橋渡しになってくれるようなパートナー・・・か」

故郷で・・・親族から耳にタコが出来るぐらい聞かされた話。

いつまでもパートナーが作れないから『欠陥品』と言われ、『一族

最大の特徴』も遺伝しなかった事により、落ちこぼれの烙印を押された。

それだけならまだいい。言いたい奴には言わせておけばいい。

だけど・・・

「あたしには時間が無い。パートナーは絶対必要だわ。そうなるとやっぱり・・・」

思い出すのは一人の少年の姿。この際、強猥容疑に目を瞑ってやってもいいかもしれない。よくはないけど、この際いい事にする。些細な事にこだわって、手遅れになったりしたら目も当てられない。一刻も早くママを助けるために・・・ついでに、あのニセ剣士に一泡吹かせるためにも絶対アイツを引き込まないと。

「まずは聞き込み・・・それからアイツのランクや実績も調べなきゃだから、教務科にも行かなきゃ」

桃饅の包み紙をゴミ箱に投げ捨てると、アリアはパートナー候補と当たりをつけた少年の詳細を調べるべく、行動を起こした。

・・・・・・・・・・

屋上。

「・・・・そういうことか」

刻桃は昼食のおにぎりを片手に、自分の携帯電話に送信されてきた『周知メール』を読む。

周知メールとは、教務科から武偵高関係者に送信されるメールニュースのようなもので、転入したての刻桃も既に登録済みだった。
メールに書かれた内容は・・・2年生の男子が自転車に爆弾しかけられた上、機関銃付きのセグウェイに追い回されたと言うもの。犯人は、最近捕まったとされる『武偵殺し』・・・その『模倣犯』とされ、爆弾事件の調査結果も合わせて簡潔に書かれていた。

「武偵殺し。確か・・・武偵の車だかバイクだかに爆弾しかけて自由を奪った挙句、機関銃付きのラジコンヘリで追い回し、最後には海に突き落とす。そんな奴だったっけ」

更には、報告のついでと言わんばかりに、防犯カメラが撮影したと思われる画像も添付されていた。

「・・・これ、どう見てもキンジだよな」

?機関銃装備のセグウェイから逃れるべく、必死の形相で自転車をこぐキンジらしき少年”の添付画像を見ながら、刻桃は頭の中で情報を組み立てる。

「被害に遭ったのがキンジって事は・・・あの時、セグウェイ7台を瞬殺した男もキンジって事になる。そんでもって・・・キンジに向かって『強猥男!』とか言って、捨て台詞をはいてたアリア」

周知メールから得た情報と、自らが現場で見聞きした情報を組み合わせた結果、ある推論が成り立った。

キンジがどのように爆弾付きの自転車に乗せられたか。どこがどうなってアリアが関わってきたか。刻桃が知る情報だけでは、そこまで推理することは出来ない。

だが、確実に言える事があった。

鑢家と遠山家は１００年以上親交がある。その関係上、刻桃も・・・・遠山家が代々受け継いで来た特異体質にも多少の知識があった故・・・ある可能性に辿り着く。

「確か・・・『ヒステリア・サヴァン・シンドローム』だっけ。あんな貧相な女が対象でも、発動条件としては十分だった・・・って事か」

一時的に全ての能力が大幅に上昇する特異体質・・・ヒステリア・サヴァン・シンドローム。

発動条件は・・・・性的興奮。

男には、女性を守るためなら大なり小なりパワーアップする本能・・・『子孫を残すための本能』がある。ヒステリア・サヴァン・シンドロームとは、それが異常に発達した状態の事・・・だと聞いている。

恐らく・・・キンジは何らかの拍子にアリアと接触し、それが引き金となって発動したのだろう。キンジの常人離れした戦闘能力と・・・アリアが叫んだ『強猥男！』の台詞からも容易に察しがつく。

キンジがワザと迫った可能性も否定は出来ないが・・・・直情短絡独善的なアリアの事だ。もしも事故・・・不可抗力であったとしても、そう騒ぎたてる可能性が高い。

どちらにしても、肝心の証拠が存在しない仮説。

だが、刻桃は・・・2度までもアリアに武器を向けられた経験上、間違いなく後者だと判断していた。

「あとは本人に確かめればいいか。どうせ、今日からは話す時間がたくさん取れるんだ」

・・・・・・・・・・・・・

放課後、東京武偵高校第三男子寮。遠山キンジの部屋。

この部屋は本来４人部屋なのだが、先日まではキンジ一人の部屋だった。
キンジが強襲科から探偵科に転科する際・・・たまたま相部屋になる探偵科男子がいなかったことで、今まではルームメイトがいなかったからだ。

あくまで今までは・・・だ。

「学生寮にしては・・・・・・結構広くていい部屋だな」

「元々４人部屋だからな。お前を入れてもまだ2人分のスペースが余るくらいだ。遠慮はいらないから、適当に座っててくれ。コーヒーでいいか？」

「ああ。ブラックで頼む」

探偵科の転入生であり、昔馴染みである刻桃が、新たにルームメイトとなったからである。
誰にも邪魔されない気ままで平穏な空間。それを手放すのは若干惜しく感じつつも・・・この変化はキンジにとっても嬉しい変化。

最悪のサプライズ続きだった今日1日。そんな中で、7年のブランクはあっても気心の知れた友との再会は・・・今日唯一と言ってもいい嬉しいサプライズだったのだから。

「んじゃ、早速聞きたい事があるんだけど・・・」

キンジが2人分のコーヒーを持ってくると、刻桃はそれを飲みながら話しを切り出した。

今朝の・・・体育倉庫での一件を。

・・・・・・・

・・・・・

・・・

「・・・・・とまぁ、これが俺の仮説。一応、答え聞かせてくれると有難いんだけど・・・どうだ？」

今現在・・・刻桃はソファーに腰掛け、向かいに座るキンジに自分の推論を話していた。
キンジは、体育倉庫での一件を殆んど見られていた事と、特異体質の存在や発動条件を知られていた事に驚きながらも、気持ちを落ち着けるように自分のコーヒーを一気飲みする。

「・・・見られていたのか。まぁ・・・それはともかく、ヒステリアモードの事は風花さんも全部知っていたハズだし・・・俺もお前の家の事情や、虚刀流の『呪い』についても知っている。だから・・・お前が遠山家の事情もある程度知っていても・・・おかしくはないのか」

「ヒステリアモード？」

聞き慣れない単語が出てきたことで、刻桃が尋ねる。

「ヒステリア・サヴァン・シンドロームじゃ長いだろ。だから俺は勝手にそう呼んでいる」

「・・・確かに長いな。なら、俺もこれからはそう呼称させてもらう。それで・・・俺の仮説は合ってたか？」

刻桃は話しを元に戻す。

「・・・まず、訂正を入れさせてもらうとだ。俺はアリアに迫ったりはしていない！アレは完全に事故だ！不可抗力だ！」

キンジが全力で否定すると・・・

「ま、そうだろうな」

刻桃はあっさり信じる。
変に疑われたり勘ぐられる事を予想していたキンジにとって、いい意味で信じ難い一言だった。

「疑わないのか？強制猥褻の言い逃れしてるんじゃないかとか・・・」

「なんだ。嘘なのか？」

「い、いや、嘘じゃないが・・・だけど、こういう時は疑われておかしくないと考えていたから、拍子抜けと言うか・・・」

「信じる理由は簡単。お前がアリアあしらって、体育倉庫からいなくなった後なんだけど・・・・・なんであんなことになってたか知りたくて、弾倉探してたアリアに話しかけたんだ。それで・・・・・」

刻桃はアリアとのファーストコンタクトを事細かに話した。

「・・・とまぁ、こんな感じだ。あんな滅茶苦茶短絡的な奴が言ってる事なんて、簡単に鵜呑みにできないだろ。言いがかり同然で喧嘩も吹っ掛けられたし・・・尚更だな」

「あの後でそんな事が。だからアリアの奴、お前にも突っかかったのか・・・」

驚きながらも、キンジは納得したような表情で頷く。
刻桃は自分のコーヒーを一滴残らず飲み干すと、改めてキンジを見据える。

「ま、あの女の事はもういいとして。キンジ、改めて・・・よろしくな。部屋だけじゃなくて、クラスや学科も同じなわけだし」

「・・・だが、先に言っておきたい事があるんだ」

「・・・なんだ?」

「俺は・・・来年、一般の高校に転校する。武偵そのものを辞めるつもりなんだ」

キンジが発した一言は、刻桃にとって衝撃だった。それこそ、思わずソファーから立ち上がってしまう程に。
だが、次の瞬間には『・・・悪い』と言ってバツが悪そうに座りなおした。

「・・・もしかして、金一さんの事件が原因か？」

「・・・・・・・・」

刻桃が聞くと・・・キンジは無言で頷いた。

「兄さんの事・・・・・知っていたのか」

「日本のニュースサイト見てた時に・・・な。母上も知ってる」

「そうか。悪いな、刻桃。せっかく再会できて・・・同じ部屋にもなれたって言うのにこんな話しをして」

「いいさ。人生は人それぞれ。武偵辞める事にしたのだって、キンジが悩みまくって出した答えなんだろ？だったら・・・俺は何も聞かないし、何も否定しない。それより・・・腹、減らないか？」

時間はもう午後6時をまわった頃。つまり・・・もう夕食時である。

刻桃は立ち上がると、冷蔵庫を開けて中身を物色する。

「今日は俺が晩飯用意する。こういう時は、引っ越し蕎麦が定番だけど・・・それはないから勘弁してくれ」

「お前、料理できるのか?下にコンビニがあるから無理しなくてもいいんだが・・・」

「いや、やらせてくれ。手土産代わりと、さっきいらんこと聞いたお詫びってことで」

「そんな・・・気にしなくてもいいんだぞ?」

「俺が気にするんだ。まぁ安心しろ。作るからにはコンビニ弁当よりはマシなもん用意してやる」

とは言ったものの、冷蔵庫の中にはロクな食材が無かった。キンジ曰く。普段の食事は、コンビニ弁当や友人の差し入れで済ませているらしい。

しかし・・・これでは何も作れない。刻桃は、財布や携帯電話などの最低限の荷物を持って外出。数日分の食材を仕入れるべく、近くのスーパーへと向かった。

第４話（後書き）

刻桃ＶＳアリア。今回はお互いの得物が急所を捉えたことで、引き分けと言う結果に。

遠山家と鑢家は尾張時代末期からの付き合い。故に、流石に全て・・・ではありませんが、両家の事情はある程度知り合う中です。

次回は・・・・まだ一日目だと言うのに、三回戦突入かも。お楽しみに！

第5話

虚刀流。

それは・・・剣士を名乗りながら刀を使う事を放棄し、自らの身体を一本の日本刀に見立てて戦う異色の流派。

その発祥は戦国時代まで遡る。

開祖は『鑢一根（ヤスリ・カズネ）』という名の1人の剣士。そう・・・鑢風花と鑢刻桃にとっては遠い先祖に当たる存在である。

彼が生きた戦国時代当時。日本刀とは・・・1人の人間を強化する上で最も優れた凶器だった。

長いから斬りやすく、重いから斬りやすい。日本刀の利点を挙げるとすれば、この2つだろう。

だが・・・それは同時に弱点でもあった。

長いから振り回しづらく、重いから振り回しづらい。

長所と短所・・・利点と欠点は表裏一体。

常人なら普通に飲み込むハズの絶対矛盾だが・・・一根はその考えを一歩先まで推し進めた。

もしも・・・長くも重くもない刀があれば。それを使える剣士こそが、最強なのではないか。

だから鑢一根は刀を捨てた。

以来１０年間・・・山にこもって決死の覚悟で血を吐きながら創り上げた流派こそが・・・刀を使わない剣術流派『虚刀流』であった。

戦国時代当時。後に尾張幕府設立に大きく寄与した大名一家・・・『徹尾家』の下、鑢一根の名と技は戦国の世を大きく震わした。

その後も・・・その技術は子孫へと受け継がれ、『１人の人間を強

化する上で最も優れた凶器』の座が『刀』から『拳銃』へと移り変わった今もまた、虚刀流の技は代々の当主達によって研鑽されていき、拳銃が相手であっても後手に回る事は決してなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・

虚刀流十九代目当主予定・鑢刻桃は、スーパーの買物袋を両手に歩く。タイムサービスや詰め放題の恩恵によって多種多様な食材を安く仕入れられたこともあり、その顔には自然と笑みがこぼれる。

「さて、ここは日本だけに和食か・・・それとも洋食で行くか。ま、作りながら考えるか」

良く言えば臨機応変。悪く言えば適当な事を考えつつ・・・刻桃は歩く。
その際・・・どこにどんな店、どんな施設があるのか等・・・周辺地理を覚える事も忘れない。

そして、寮の下にあるコンビニを通ると、外からでも見える・・・レジの傍のある物に目が止まる。

「美味そうだな・・・・」

松本屋の桃饅。実際には桃の形をしてるだけの、ただのアンマンなのだが・・・空腹だったせいか、不思議と興味を惹かれた。
あくまで空腹だったから。間違っても・・・自分の名前が鑢刻？桃”だからではない。どんなに間違っても・・・だ。大事な事なので2回言う。

刻桃は桃饅を4個買うと改めて寮へと入る。階段を上り・・・今日から暮らす事になった部屋の前に着き、中に入るべくドアノブに手をかける。

「ただいまー」

その際、家に帰った時の挨拶である『ただいま』の一言も忘れない。

だが・・・

「行くわよ、キンジ。早く桃饅買い・・・・に？」

「おい、待てアリ・・・ア？」

「・・・・・・・」

刻桃はあっけにとられたような顔になる。
何故なら、今日の午前中だけで2回も喧嘩を吹っ掛けてきた少女・・・神崎・H・アリアが我が物顔で立ち、その後ろでは・・・キンジが気苦労を抱えるかのように自らの額を押さえていたからだ。

「・・・すいません。間違えました」

目の前に光景を受け入れる事ができず、刻桃はドアをバタンと閉める。

あり得ない光景。

何があり得ないか？

ワザワザ言うまでもない。神崎・H・アリアが部屋の中に居たことだ。

「・・・・ふぅ」

刻桃は息をつくと、再びドアを開ける。
さっき見たのは幻覚。聴こえた声は幻聴。そう思い込んで・・・そう望むようにゆっくりと開ける。

「・・・・・何でアンタがこの部屋に『ただいま』なんて言って入ってくるのよ」

現実は残酷だった。家主たるキンジよりも堂々とした態度のアリアが、殺気を含んだ声で刻桃に問いかける。

「お前がここに居る事よりはずっと自然だと思わないか？ここは男子寮で・・・」

「あたしはキンジに用があってここまで来たの。アンタにも違う意味で用はあるけど・・・今はいいわ。そこ、どきなさい」

「俺は今日からこの部屋の住人なんだ。どくならお前がどけ！」

「あたしはお腹空いたの！これから桃饅買いに行くんだから、アンタがそこ・・・どきなさい！！」

まるで焦れたかのように、アリアは背中から二刀を抜く。

「・・・・銃は使わなくていいのか？」

「アンタが剣士って言い張るなら、こっちの方がいいでしょ。今度は・・・・絶対風穴あけるわよ！！」

「・・・・刀で風穴もクソもないだろ」

「ううう、うるさいうるさいうるさーーい！！」

「それは違う小説のネタだ。だったら・・・力ずくでやってみろ！！」

刻桃は、両手の買物袋をおろして構えをとる。

足を大きく開いて腰を深く落とし・・・左足を前に出して爪先を正面に向けて。

右足は後ろに引いて爪先は右に開き。

右手を上に、左手を下に、それぞれ平手で・・・アリアに対して壁を作るような構え。

「虚刀流一の構え・・・鈴蘭！」

虚刀流において、最も基本的な構え・・・『鈴蘭』。
べた足で構えているせいで自由度こそ低いが・・・むしろそれを逆手に取り、『どこからでも打ち込んで来い！』と誘うような、カウンター狙いの構えである。

「・・・・・・」

若干熱くなっているとはいえ・・・それがアリアの警戒心を煽り、睨みつけるように刻桃の構えを見据える。
敵対する相手の誘い。それがどんなものであれ、何の策も無しに飛び込めばロクな事にならない。後ろに回り込もうにも、この部屋の廊下にそこまでの広さはない。

「おい、やめろ！この部屋でそんな物騒な事するな！やるなら外で・・・」

キンジは止めに入ろうとする。

しかし・・・

「「・・・ぁあん！！」」

「うっ・・・・・！？」

２人の殺気を一身に受け、思わず腰が引けてしまった。

家主なのに。

室内は２人の殺気から発生した緊迫の空気に支配される。構えたままお互い牽制し合っていたが、アリアの二刀と、刻桃の手刀足刀が飛び交う交戦状態になるのも時間の問題。

キンジは・・・アリアの説得を放棄し、刻桃優先で説得を試みる。少なくとも・・・人の話しを聞こうとしないアリアよりは、聞く耳を持っているからである。

廊下の壁に身体を寄せ、玄関側に居る刻桃へと接近する。

その時だ。

キンジの足が買物袋に接触。袋の中で食材が荷崩れを起こし、一番上に入れておいた桃饅が・・・包み紙に入ったまま転がるようにこぼれ落ちた。

「わ、悪い・・・って、桃饅？」

「美味そうだったから下のコンビニで買って来た。４つあるから・・・俺とお前で２つずつだ」

刻桃の言葉を受けて、キンジは桃饅を買物袋に戻すと・・・

「ねぇ・・・・それ、松本屋の桃饅？」

アリアが遠慮がちに声を出す。

「ああ。ついさっき買ったばっかだから、まだ食べ頃だ」

「・・・・ごくり」

刻桃が答えると、アリアは喉を鳴らす。
今まで・・・刀両手に殺気を振りまいていたというのに、アリアの視線は桃饅入りの買物袋を捉えて離さない。
刀身そのものは相変わらず刻桃に向けられてはいても、お世辞にも素早く振れる状態とは言えなかった。

刻桃はなんだか戦うのがバカらしくなり、アリアに対して・・・恐らく初めての譲歩と言える行動に出る。

「・・・・・食べるか？」

「・・・・・・」

アリアは無言で・・・コクリと頷いた。

・・・・・・・・

アリアがソファーに腰掛け、テレビを見ながら我物顔で桃饅をかじっている頃・・・台所では、刻桃が早速夕食の準備に入っていた。メニューは・・・白いご飯と味噌汁。それからジャーマンポテトと野菜炒めといった、国籍バラバラな組み合わせである。

「さて・・・キンジ。なんでアリアがこの部屋に居るんだ？」

刻桃は、台所で手伝ってもらっているキンジに直接尋ねる。アリア本人に聞くのが一番手っ取り早いとも考えたが、会話が恐ろしい程噛み合わなかったことから、それは即刻断念した。

「目的は・・・・・・やっぱ仕返しか？」

ここが男子寮である事もそうだが、キンジにしろ・・・刻桃にしろ・・・大なり小なりアリアと一悶着起こしている。

住所は・・・教務科で調べるか、クラスの連中から聞き出すかで簡単にわかる事。

敵対した男達を一網打尽にすべく乗り込んできた。その可能性が一番高いと考えていたが・・・

「いや、どうも違うらしい」

キンジは否定。

「・・・・というと？」

「俺も最初は文句でも言いに来たと思ったんだが・・・アリアの奴、部屋に入ってくるなりイキナリ・・・」

キンジは話し始める。

刻桃が買い出しに出てからしばらく経った頃、アリアが来襲してきて強引に部屋へと上がり込まれてから起こった事を。

そして・・・・

「・・・・『奴隷になれ』って言われた？」

「そうだ。部屋に来るなりイキナリだ。簡単に帰ってはくれそうになかったから、仕方なくコーヒー出してやったんだか・・・」

「お人好し」

「ぐっ・・・・」

ジト目の刻桃の一言が、キンジに突き刺さる。

「それで、どうなったんだ？」

「困っていたとしか言えない。会話は全然噛み合わないし・・・ここで夕食を食ってく気も満々だった。それで・・・この部屋に食料が無い事を知ったアリアは、俺を無理矢理引っ張って買物に行こうとして・・・」

「そこに俺が帰ってきたってわけか。俺が言うのもなんだけど・・・アイツ、かなり危ない女だな。絶対・・・・間違いなくドSだ」

鞭を持ったアリアが、キンジを踏み豚にしながら暴れまくる姿。悪いと思いつつも、ついつい無駄な想像をしてしまう（因みにアリアへの罪悪感は皆無）。

「とにかく・・・・そこで話しは止まったままだ」

「・・・そっか。アイツがどういうつもりでお前に目を付けたかは知らないけど、あとは食いながら話すか」

刻桃は出来上がったばかりの夕食を人数分テーブルに運んでいく。ここでキンジは・・・ある事に気づく。

「・・・3人分?アリアの分も用意したのか?お前、アリアの事・・・あまり良く思ってないんだろ?」

「食事の時間ってのは、なによりも神聖な物。そこには些細な争いを持ち込まない事にしてるんだ。最も・・・食った後でどうなるかまでは、わかんないけどな」

最後に・・・刻桃が包丁を軽く洗いながら口にした物騒な一言。
底知れぬ恐ろしさを感じ取ってしまい、キンジはドン引き状態だった。

第6話

「で、アリア。『奴隷』ってなんなんだよ。どういう意味だ？」

キンジは、刻桃が用意した夕食を・・・コンビニ弁当では味わえない素朴な味に舌鼓を打ちながら本題に入る。
アリアも・・・『質素すぎ』とか『まぁまぁ』と難癖つけつつも綺麗にたいらげており、デザートのために残しておいたのであろう桃饅をうっとりとした表情で食べていた。それも胃袋に収めると、食事中とは打って変わって真面目な表情に早変わりする。

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動するの。アンタの・・・Sランクの実力があればできるハズよ」

最後にお茶をすすると、湯呑みを置いてキンジの質問に答える。
それを聞いたキンジの表情は歪み、食べる事も忘れて声を荒げる。

「何言ってんだ。俺は強襲科が嫌で、武偵高で一番マトモな探偵科に転科したんだぞ！大体、今の俺の武偵ランクは『E』だ。お前が考えているような実力は、俺にはない！」

「学期末の試験をボイコットしたせいで降格されたってのは、もう調べはついてるわ」

「キンジって・・・・前は強襲科だったのか？」

刻桃が味噌汁を啜りながら聞く。

「一般校に転出するまでの繋ぎのために転科したんだ。時期が時期・・・だったからな」

「・・・ああ、そういやそうか」

武偵高校から一般高校への転出には、時期的な制約が存在する。
生徒の銃火器・刀剣を一括して公安委員会に登録する都合上、更新期の４月でないと辞められない規則となっているのだ。
さらに言えば・・・転出の１年前～６ヶ月前までの間に、転出申請書類も教務科に提出しなければならないのである。

（確か・・・金一さん事件は、去年の暮れだったな。転出申請には間に合わなかったから、探偵科に転科したってわけか）

つい数時間前とは言え・・・刻桃はキンジが武偵の世界から足を洗いたがっている事を知った。その切っ掛けがなんなのかも。
アリアがいる以上、聞きかえせる空気でもなかった事で確認は保留にするが・・・まぁ、確認するまでもないだろう。
そんな事を考えている刻桃のすぐ隣では・・・

「とにかく、俺は来年一般の高校に転校する。武偵そのものを辞めるつもりなんだよ。それを・・・よりにもよってあんなトチ狂った所に戻るなんて・・・無理だ！」

「あたしには嫌いな言葉が三つあるわ。『無理』、『疲れた』、『面倒くさい』。この３つは人間の持つ可能性を自ら押し留めるよくない言葉。あたしの前では二度と言わない事。いいわね？」

「聞けよ！人の話！」

「ポジションは・・・そうね、あたしと一緒にフロントがいいわ」

キンジが正面に座るアリアに向かって再び反論を開始する。しかし・・・了承されてもいないのにアリアの話は飛び、ポジションの相談まで始める始末。二人の会話は全くと言っていい程・・・傍から聞いていて恐ろしくなるほど噛み合っていない。

（付き合い切れるか・・・・）

これ以上は聞くだけ無駄。そう判断した刻桃は、空っぽになった食器をさり気なくお盆に乗せ、台所の流しへと運んで洗い始めた。交渉もクソもないアリアの横柄な要求が通るはずもないだろうと考え、キンジがアリアを追い出すのを待つ事にしたのである。いくら『ＮＯ！とは言えない日本人』という日本人にとっては不名誉な言葉があっても、ここまで一方的で無理矢理な勧誘は流石に拒否するだろう。

「とにかく・・・メシ食い終わったなら今すぐ帰れ！」

このままでは埒が明かないと考えたキンジは、横柄な態度に切り替える。

しかし・・・アリアは席を立ち上がると、部屋の隅に置かれていたトランクを軽くポンポン叩く。

「アンタがうんと言うまで帰らない。あたしには時間が無いの！それでも首を縦に振らないなら・・・ここに泊まって行くから。長期戦になる事も想定済みよ！」

「なっ！？何言ってんだ。ここは男子寮だぞ！絶対ダメだ。帰れっ！！今すぐでｔ『出てけっ！！』・・・！？」

本来キンジが言うべき台詞を・・・何故かアリアが大声で叫んだ。あまりに滅茶苦茶な展開に、皿洗いの真っ最中だった刻桃も思わず手を止めてしまう。

「わからず屋にはお仕置きよ！外で頭冷やしてきなさい！しばらく戻ってくるな！！」

アリアは拳銃を素早く抜き、室内だと言うのに何のためらいもなく発砲。
あまりの剣幕に押され、キンジは哀れにも・・・突然の侵略者によって国を乗っ取られた王様の如く、部屋から追い出されてしまった。

「・・・なんなのよ。なにが『ＮＯ』とは言わない日本人よ！」

逆ギレ同然にキンジを追い出したと言うのに、アリアはイライラを隠さずに地団駄を踏む。

「あんな態度でスカウトすれは、反発されるのは当然だ。そもそも・・・日本人は元々『ＮＯ』なんて言わないだろ」

皿洗いを終えた刻桃が、手を拭きながら交渉の穴を指摘する。
それが勘にさわったのか・・・アリアは鋭い視線で刻桃を睨みつける。

「・・・キンジを調べる時、ついでにアンタの事も調べたわよ。虚刀流の事も含めてね」

「へぇ・・・どこまで調べたんだ？」

刻桃が聞くと・・・

「虚刀流。己を一本の刀に見立てて戦う・・・刀を使うことを放棄した無刀の流派。開祖は、尾張幕府設立に大きく寄与した大名・・・『徹尾家』お抱えの剣士『鑢一根』。現当主は、アメリカを拠点に活動するフリーの武偵・・・鑢風花。アンタの母親ね？」

アリアは、調べたばかりの情報をスラスラと音読する。

「やっと信じる気になったか。俺が・・・剣士だって事を」

「刀を使わないで『剣士』って言うのもどうかと思ったけど・・・手刀や足刀を駆使すれば、確かに『剣士』ではあるわね。でも、なんで刀を捨ててまで剣士名乗るのよ。普通に『拳士』でもいいんじゃないの？」

ある意味当然の疑問。

刻桃は軽く息をつくとソファーに腰掛け、アリアもそれに釣られるように座る。

「結論から言えば、俺の先祖にして虚刀流開祖・・・鑢一根が最強の剣士を目指した末に辿り着いた答えが、『無刀』だったからだ」

「・・・・・？」

「刀の利点ってのは・・・長くて、重い事にある。だけどそれは・・・長いから振りづらいし、重いから振りづらい・・・って意味でもある。最強の剣士を名乗るには、弱点があってはならない。だから、長くも重くもない刀があれば最強・・・って事らしい」

「それで利点を捨てる方が馬鹿げてると思うけど・・・」

「そういう極論の元『虚刀流』が創り上げられたのは間違いないらしい。実際問題、剣士の実力は刀に左右される所があるし、刀がなくなれば戦闘能力は大幅にダウンする。けど、虚刀流にはその心配がない。それが利点だ」

極論にも程がある虚刀流の逸話。

だが、アリアにも思う所があった。刀を使う者として・・・刀の利点と弱点は身に沁みて知っていたからだ。

さっきの・・・廊下での戦いもそうだ。刻桃の構えを警戒した事もそうだが、そもそも狭い廊下では刀が振りづらかったからこそ、迂闊に攻撃できなかったのである。

ただし、これは『虚刀流』を調べようと思えば誰でも辿り着けるような『表』の逸話でしかない。

武偵としてそれなりに名前が知られている・・・虚刀流十八代目当主・鑢風花も、公の場ではそのように公言してもいた。

だが・・・虚刀流の発祥には、鑢家と一部の者達しか知らない・・・場合によっては『呪い』と比喩されるようなとんでもない落ちがついていたのである。

アリアがそれ知るのは・・・・まだ少し先の話だ。

「さて、ここまで聞かせてやったんだ。今度は・・・俺の質問にも答えてもらうぞ。ギブ・アンド・テイクって奴だ」

「・・・・なによ」

「お前、どういうつもりでキンジをスカウトしたんだ?」

刻桃の質問。

「アンタも朝のアレ見てたんでしょ?だったらアレ以外に答えなんかないわ」

「・・・・朝か?」

アリアの言葉を受けて、刻桃は朝の出来事を思い出す。
遠目から見てもわかるほど見事な・・・一瞬で機関銃を破壊したキンジの戦闘能力。

「アレだけの事ができる奴は・・・・そうそういないからか」

「ええ、そうよ。あたしの直感に狂いはないわ。アイツくらいの実

力があれば、あたしの奴隷に出来るかもしれないの！武偵殺しだって・・・必ず捕まえられる！」

自信満々のアリア。
刻桃はここで引っ掛かりを覚える。

「・・・武偵殺し？今暗躍してるのは模倣犯で・・・本物はとっくに捕まったハズだぜ？」

一般には、そう報道されている。

「それは真犯人じゃないわ。今いる・・・模倣犯の方が真犯人よ」

「・・・・根拠は？」

「ワザワザ背景の説明をするつもりはないし・・・アンタが知る必要は何一つないわ。あたしの邪魔をしなければそれでいいのよ」

息巻くアリア。しかし、傍から聞けば完全に身勝手極まりない理屈にしか聞こえず、刻桃は顔をしかめる。

「・・・・アリア。一ついいか？」

「・・・・なに？」

「アイツは・・・キンジは武偵を辞めたがってる。それを知った上で無理矢理・・・アイツの都合なんかお構いなしにスカウトを続ける気か？」

「そうよ。あたしには奴隷が必要なの。だからアイツがうんと言うまで、私は絶対諦めない。何日だって粘ってやる」

「それはあくまでお前の都合。それに、生死を共にするハズの相棒に対して『奴隷』なんて言葉は使うべきじゃない。本気で引き込む気があるなら、少しは周りや相手の事も・・・」

考えたらどうだ。・・・と、刻桃はそう言おうとした。

だが、最後まで言えなかった。

「うるさいうるさいっ！！」

「・・・・・・・！？」

アリアが・・・怒りと悲しみが複雑に入り混じったような顔で、ガバメントを向けてきたからだ。

刻桃は・・・動じた様子は全く見せず、向けられた銃口とトリガーに意識を集中する。いつ発砲されても・・・避けられるように。

「・・・なんのマネだ？」

「あたしには時間が無いの！勝手にもなるわよ！！」

「・・・・だからなんだ」

「！？」

アリアは、今もまだ銃口を向けたままだった。なのに・・・今度はアリアの方が気圧されていた。

対する刻桃は、何の構えも取っていない。ただ・・・その両目でアリアを睨むだけ。それだけの行動でアリアの心に揺さぶりを与えていた。

刻桃は荷物が入ったリュックを背負うと、玄関へと向かう。

「ど・・・どこ行く気よっ！」

アリアが一発だけ発砲。刻桃はピタリと足を止めると、どうでもよさそうに振り向いた。

「いくら俺でも、眠ってる所を撃たれたらひとたまりもないからな。キンジが帰ってきたら伝えといてくれ。今日は帰らない・・・って」

それだけ言うと、刻桃はドアをバタンと閉じた。
直後、何者かが室内で銃を乱射する音が聴こえたような気もしたが・・・刻桃は無視を決め込み、階段を降りて寮の外へと出た。

「・・・ったく」

当てもなく夜道を歩く刻桃。

――――あたしには時間が無いの！勝手にもなるわよ！！――――

ふとアリアの言葉を思い出す。

（俺はあの言葉を否定した。だけどホントなら、俺も偉そうなこと言えたもんじゃないんだけど・・・・な）

しかし、刻桃にも思う所があった。

目的のためなら利用できるものは何でも利用する。アリアにどんな目的があろうと・・・たとえキンジを利用しようと、それは否定しない。

刻桃も、目的を果たすためなら・・・躊躇わない覚悟は既に決めていた。

それでもアリアに対して否定的になってしまったのは・・・ただ単純に、『奴隷』と言う言葉が無性に腹立たしく、気に入らなかったからである。

同時に、ある記憶が掘り起こされたからだ。7年の旅路の中で・・・最も忌まわしい記憶が。

「・・・・・チッ」

舌打ちし、不愉快な記憶をかき消す。
それと同時に・・・苛立ちをぶつけるように壁を殴った。

ダン!という音が響いたのと同時に・・・

「キャッ!?」

なんともお淑やかで・・・慎ましい悲鳴が聴こえた。
刻桃が声のした方向を見ると、そこには巫女装束の少女が重箱らしき物を抱えて立っていた。

前髪を切りそろえた黒髪ロングヘアーに、暗がりでもわかるぐらいの白い肌。頭頂部には、白くて長い飾り気のないリボン。いわゆる・・・大和撫子を具現化したような少女。

「・・・・驚かせて悪い」

刻桃は少女に謝る。

「いえ、そんな。こちらこそごめんなさい。変な声出しちゃって。あの、何処か具合でも・・・・」

驚かしてしまったと言うのに、律儀にも気に掛けてくれる少女。
刻桃は・・・無性に申し訳ないような気持ちに駆られ、少女に背を向ける。

「気にするな。じゃあな！」

それだけ言うと、刻桃は当てもなく走り出した。
少女は・・・刻桃の姿が暗闇に消えるまで、その目を離さなかった。

次の日・・・武偵高校2年A組。

朝のHR前。刻桃は朝一番で机に座り、昨日買ったばかりの教科書を読んでいた。

昨夜・・・アリアに付き合い切れずにキンジの部屋を出た後、武偵高校2年A組の教室に向かった。
警備システムが仕掛けられてはいたが、幸いにも忍びこめないほどではなく、難なく侵入に成功。そのまま一夜を明かし、朝一番に登校してきたと見せかけ、今に至る。

因みに・・・今日の服装も、まだ若草色の着流しのままである。

「モモ君、おっはよ～♪」

そんな刻桃に、声を掛けてくる女子が一人いた。
１５０ｃｍ未満と思われる低い身長。長い金髪をツーサイドアップに結った童顔少女。

「お～い、モモ君ってば～♪」

そう。峰理子が、珍妙なアダ名で刻桃の事を呼んでいたのである。

「・・・ももくん？」

刻桃が首を傾げる。
すると、理子はニパっと笑いながら種明かしする。

「刻『桃』君だから、モモ君だよっ！」

「・・・聞く前からそんな気はしてた。お前以外にも・・・似たような呼び方するヤローがいるからな」

「え？誰？誰？」

「俺の幼馴染。『紅龍』って名前なんだけど・・・何度言ってもそう呼んでくるんだ」

刻桃は・・・最も付き合いが長い幼馴染の姿を思い浮かべる。

性格面に難ありだが・・・友として、武偵として、パートナーとして、最も信頼するに値する存在。だからこそ、聞きようによっては女の子とも取れる珍妙なこのアダ名も、渋々ながらも受け入れてたりする。

「モモ君？」

「・・・・いや、なんでもない。それより・・・何の用だ？」

「うん。モモ君ってさー、キー君と同室なんでしょ？」

「よく知ってるな・・・」

昨日の今日だと言うのに。

「だってだって、情報収集は理子のオハコだもん。おかげで理子の武偵ランクは『A』なんだよっ！」

「Aか・・・凄いな。俺のランクは・・・」

刻桃が自分の武偵ランクを口にしようとすると・・・

「言わなくてもいいよ？理子はちゃ～んとわかってるから。転入試験事も、リサーチ済みだよ♪」

「！？」

理子は人差し指で刻桃の口を塞ぎ、意味ありげに・・・邪悪さを彷彿させる笑みを浮かべながら顔を近づける。

傍から見れば可愛らしい笑顔にも見えなくはない。事実、いつの間にか集まりつつあったクラスメイト達・・・特に男子による嫉妬からくる視線が注がれまくっていた。

だが、刻桃はそんな事は全く気にならず、目の前の理子の・・・その瞳の奥底に潜むなにかに・・・奇妙な感覚を感じた。

それがなんなのかはわからない。

説明のしようがない。

だが、刻桃は確かに感じてしまったのだ。

あえて例えるなら・・・そう、まるで・・・・生き別れの血族に再会したような、懐かしい感覚を。

（・・・なんなんだ？）

感覚の正体がわからずに首を傾げる刻桃。

そこに・・・・

「おっす、転入生！転入早々女子とお喋りなんて、いい度胸してるじゃねぇか！」

突如、男の声が割って入った。黒い短髪で、身長１９０ｃｍはありそうなガタイのいい男。刻桃は、その男の顔に見覚えがあった。

「お前、確か・・・・転入生が男だとわかった途端、ガッカリして舌打ちしてた奴だろ。名前は確か・・・武藤」

そう、車輌科所属の武藤剛気である。

「うっ・・・・聞こえてたのか」

刻桃に鋭い切り返しに、武藤はバツが悪そうに後ずさる。

「一本取られたね、武藤君」

今度は・・・爽やかスマイルが良く似合うイケメン男がやってきた。

「おはよう、鑢君。昨日はあまり話す機会はなかったし、一応初めまして・・・って言っておこうかな。僕の名前は不知火亮（シラヌイ・リョウ）。強襲科に所属してる。よろしくね」

爽やかな不知火が差し出す右手。

「・・・ああ、こちらこそ」

刻桃は不知火の手を掴んだ。

「あ、いいな。理子も理子も！」

「おいっ、俺を仲間外れにするな！」

理子と・・・それから武藤までもが加わる。刻桃は戸惑いながらも、彼らの気遣いに奇妙な温かさ・・・嬉しさを感じた。

これは、そう・・・昨日、キンジに再会した時とよく似た感覚。

心の中にあった不安や孤独感が消えて行くような・・・安心感とも言うべき感覚に、心が満たされるようにも感じた。

「あ、もうすぐ時間だ。じゃね、モモ君♪」

「今度メシでも食おうぜ！」

「もちろん遠山君も誘って・・・・一緒にね」

もうじきＨＲが始まりそうだった事もあり、理子、武藤、不知火の三人は、席へと戻っていった。

刻桃は『またな』と言って軽く会釈すると、買ったばかりの教科書に再び目を通す。

「待ちなさい、キンジ！逃がさないわよ！！」

「うるさい！そもそも・・・・同じクラスで隣の席じゃ、逃げようがないだろ！！」

「奴隷のクセに口答えするな！！」

仏頂面のアリアと・・・何故か顔の一部に痣を作ったキンジが怒鳴り合いながら教室へ入ってきたのは、ホームルーム開始1分前の事だった。

理子、武藤、不知火といった新しい友達が出来たこの日。

アリアは・・・・相変わらずキンジに付き纏い、強引なスカウトを続けていた。

刻桃は、そんな彼女と顔を合わせるのを鬱陶しく感じ、この日の晩も部屋には帰らず教室で夜を明かすことにしたとか。

第6話（後書き）

とりあえず刻桃にはお友達ができました。

白雪も・・・名前は出してないですけど、やっと登場。タイミング的に、『前門の虎、後門の狼』の少し前。

あのヤンデレ巫女が本格的に関わってくるのは、展開の都合上もっと先になります。期待してた人、済まんです。

外見はヤマトナデナデなのに、その危険でなヤンデレで危ないバーサーカーな性格が、なんか彼女を台無しにしつつも魅力的だったり・・・これもまた、ある種の表裏一体という物なのでしょう。

第7話

次の日・・・昼休み。

刻桃は、武藤と不知火に誘われて学食へと行くハズだったのだが・・・それを次の日に延期してもらい、人けのない茂みにやってきた。

因みに・・・転入3日目という事もあり、今日の刻桃の服装は着流しではなく・・・黒いタンクトップの上にワイシャツとブレザーを適当に羽織るという形で、武偵高の防弾制服を身に纏っていた。

「刻桃、こっちだ！」

注意深く聞かなければ聞きとれないような小さな声で、誰かに呼ばれる。

茂みからは手首が僅かに飛び出し、『早く来い！』と言いたげに刻桃を手招きする。

刻桃は渋々茂みへと飛び込んで、声の主と顔を合わせた。

「待たせたな、キンジ」

「遅いぞ、刻桃！」

「・・・もっと早く来てほしかったら、もう少しわかりやすい場所を待ち合わせ場所に指定したらどうだ？」

「仕方ないだろ。俺はトイレに行くフリして、小窓からベルトのワイヤーでここまで降りて・・・それでアリアの追跡を撒いてきたんだ。バレて捕捉されるのも時間の問題だ。時間は無駄にできん」

キンジは、注意深く辺りをキョロキョロ見回す。

その姿はまるで武偵に追われる犯罪者そのもの。もっとも・・・キンジは犯罪者でこそないものの、追っ手であるアリアは武偵であるため、あながち間違いではない。

「だいたい・・・鬱陶しいなら、とっとと倒しちまえ。それこそ、もう二度と付き纏って来なくなるぐらい徹底的に」

「・・・・簡単に言ってくれる。お前ならまだどうにかなるだろうが・・・今の俺にそれが出来るわけないだろ」

「なら、俺が秘策を伝授してやらない事もないけど？」

「本当か！？」

刻桃の言葉を聞くや否や・・・キンジは、渡りに船と言わんばかり

に食い付いた。
逃げ切る事も・・・断りきる事もできず・・・無条件降伏も時間の問題だった以上、この際どんなことをしてでもアリアの手を振り切るつもりだった。

だが・・・刻桃の提案はとんでもない物だった。

「まず・・・キンジがアリアに迫る」

「は！？」

「痴漢猥褻何でも可。いっそ脱がしちまえ」

「おいっ！？」

「それでキンジはヒステリア・サヴァ・・・じゃない。ヒステリアモードになれる。そうすれば、アリアを叩きのめす事も出来なくないだろ？力で来る奴には、力ずくでやり返せ！」

「・・・・・・・・」

キンジは顔を引き攣らせる。
つまり・・・刻桃の提案を要約すると、『ワザとヒステリアモードになって、アリアをぶちのめせ！』という武闘派丸出しのとんでもない物だったのだから。

「・・・やっぱダメか？」

刻桃が聞くと・・・

「ダメに決まってるだろ！だいたい・・・俺はもう、あんなモードにはなりたくないんだ・・・」

キンジは頭を抱えてしゃがみ込む。
そんなキンジの姿を見て、刻桃はある事に思い当たる。

「・・・たしか、ヒステリアモード時って、性格も若干変わるんだったな。俺はお前の性格が豹変した所は見た事ないけど・・・もしかして、お前も金一さんみたいに・・・」

「違う！俺は兄さんみたいな事にはならない！ただ・・・」

「・・・ただ？」

「・・・・まぁ、刻桃になら話してもいいか。ただし、この事は他言無用で頼む。もしも、これが誰かに・・・特に女子に知られたりすれば、俺は終わりなんだ。いいか？」

刻桃は・・・

「・・・約束する」

短く言った。
それを聞いたキンジは、念入りに周りの人影に気を配る。そして・・・自身の最大の武器であり、最大の悩みの種でもある『ヒステリアモード』の欠点を話し始めようとした時・・・

ガサガサガサと茂みが派手に揺れる。

そこから・・・・

「きゃあああ!どいてくださ・・・・ひゃうん!?」

「「!?」」

女生徒が1人・・・しゃがみ込んでいたキンジと刻桃に突っ込んできた。
刻桃はごろりと転がってやり過ごしたが、キンジは・・・・

「痛たた・・・・すみません・・・・」

「むぐ・・・・っ!?」

女生徒に派手に押し倒されていた。女生徒本人は大して気にしてい

ないようだったが・・・・その胸で見事にキンジの顔を潰しており、当のキンジはピクピク震えて動けないでいる。
刻桃は、目の前の『ラッキースケベ現象』に気を取られながらも・・・・事態を収拾すべく、倒れた2人のどちらかに手を貸そうとした。

その時・・・

「おおう！やっと見付けたぜぇ！！」

「逃がさねえぞ、このアマ！！」

「観念しぃや！！」

茂みから・・・・今度はガラの悪い男子生徒が3人現れる。
女生徒は『ひぃっ！？』と小さく悲鳴を上げ、押し倒したままのキンジの頭を抱きしめる。

「・・・・アンタら、こいつに何の用だ？」

刻桃は3人組の前に立ち、事情を尋ねた。
すると、女生徒がキンジを押し倒したまま事情を簡潔に話し始めた。
聞く所によれば・・・・・女生徒が廊下を歩いていると3人組がぶつかってきて、その事に因縁つけられて追いかけ回されていたとかなんとか。

「・・・・完全に逆恨みだな」

呆れたように刻桃が言う。

「うるせぇコラァ！！」

「テメェから血祭りに上げたろか！！」

「覚悟しぃや！！」

3人組は目の前の邪魔者・・・・・刻桃に向かって飛びかかる。

刻桃は、やれやれと呆れながらも・・・・3人組を返り討ちにすべく、『鈴蘭』の構えを取ろうとするが・・・

「女性に手を上げようとするとは・・・・・感心しないな」

刻桃と3人組の間に・・・・何故かクール口調になったキンジが素早く割り込んだ。

先程までとは比べ物にならないほどの眼光を放ち、キンジは全く無駄のない動作で3人組の腹・・・・急所に、ピンポイントで拳を炸裂させる。

「「「ぎゃあああああああ！？」」」

名も無きモブキャラたる3人組は・・・断末魔の悲鳴を上げながら出番を終えた。

白目を剥き、ピクピク痙攣する3人組を一瞥すると、キンジは倒れた女生徒を抱き上げる。それもいわゆる・・・お姫様抱っこで。

「大丈夫かい？怖いのによく頑張ったね」

「え！？あの・・・その・・・」

「ご褒美に・・・しばらくお姫様にしてあげよう」

「はうん／／／／／／！？」

キンジの・・・不知火を上回る爽やか笑顔を前に、女生徒は胸キュン。頬を赤く染めながらキンジを熱っぽい視線で見つめる。

その視線に気づいたキンジは・・・何のためらいもなく白い歯をキラリと輝かせ、再び笑い掛ける。

「念のために、医務室に送って行こう。立てるかい？」

「は、はいっ！」

「それじゃ・・・・・むぐっ！？」

キンジが女生徒を優しく立たせてやったのを見計らい・・・・刻桃は後ろから腕を回し、キンジの口を塞ぎつつ首を締め上げた。

「悪いな、俺とこいつ・・・これから大事な用があるんだ。目立った怪我も無いみたいだし、医務室には1人で言ってくれ」

「え！？あ・・・あの・・・」

「むぐ・・・むぐーーーー！？」

キンジは全力でもがく。だが、刻桃の常人離れした腕力で完全に極められているせいで、なかなか外す事ができない。

「じゃあな！」

刻桃は、そのままの体勢でキンジを連行。あとにはあっけに取られた表情の女生徒が残された。

・・・・・・・・・・

２０分後。

「すまない、刻桃。よく俺を止めてくれたな・・・・」

「気にするな。早く止めなきゃマズいって・・・・本能的に感じちまったからな」

あれから・・・別の人けのない茂みへと移動したキンジと刻桃は、人目を避けながらヒソヒソと話す。

「・・・・アレがお前のヒステリアモードか。初めてみた時は遠目からだったからよくわかんなかったけど・・・・・ホントに性格変わるんだな。それに・・・・・」

「言うな。言わないでくれ。あんなの・・・・思い出しただけで死にたくなる。あんなキザで・・・・歯の浮くような・・・・絶対誰にも言うなよ!!」

「さっきも言ったけど・・・・・それは約束する。だから、ヒステリアモードの欠点って奴をさっさと話せ。このままじゃ気になってしょうがない」

「わかった。ヒステリアモードって言うのは・・・・・」

キンジは今度こそ話し始める。

ヒステリア・サヴァン・シンドローム。縮めてヒステリアモード。性的興奮を引き金に発動し、発動中はあらゆる能力が大幅にパワーアップする特異体質の名称。

一見いいことづくめに見えるヒステリアモード。しかし、どんでもない欠点が存在していた。

ヒステリアモードの根源である『子孫を残すための本能』が大きく働くせいか・・・個人差はあれど、性格もそれに則った物に変化してしまう傾向があった。

キンジの場合、ヒステリアモードになると無意識に『女にとって魅

力的な男』を演じてしまい、女性に対してキザな言動を取り、困っている女性を助けるためなら求められるままに戦ってしまうなどの反作用があった。

曰く。後から思い出す度に死にたくなるような・・・恐ろしいまでのジゴロへと変貌するらしい。

特に酷かったのが中学時代。キンジの体質と、その『発動条件』を知った一部の女子は、彼を都合のいいように利用する事を覚えた。当時のキンジはあの手この手で悪戯にヒステリアモードにされてこき使われまくり、いじめの復讐に・・・セクハラ教師への制裁に利用され、いわゆる・・・連中にとっての、独善的な『正義の味方』にさせられたという・・・とんでもない黒歴史を刻まれる羽目になった。

「・・・つまり、その理屈や法則で言えば、ヒステリアモードになっちまったら事態がさらに悪くなりかねない・・・ってことか？」

全てを聞き終えた刻桃が、改めて尋ねる。

「・・・そうだ。さっきも見ただろ。ヒステリアモードの時の俺は・・・困っている女は脇目も振らずに助け、頼みは何でも聞いてしまいかねないんだ。多少無茶な要求であっても・・・キザったらしく・・・な。わかってくれたなら、手短に用件を話すぞ。まず、これを」

キンジは、刻桃に一枚の紙切れを手渡した。学園島の一部が描かれた地図である。

「これは・・・？」

「放課後・・・『ある物』を購入した上で、この場所に行って峰理子と落ち合ってもらいたい。同じクラスだし・・・見覚えぐらいはあるだろ？」

刻桃は一人の少女を思い浮かべる。
魔改造が施されたフリフリ制服を身に纏い、いつもクラスの中心に居る少女の姿を。

「ああ・・・アイツか。何の用だ？」

「理子に・・・アリアについての調査依頼をしてあるんだ。刻桃には、俺の代わりにそれを聞いといてもらいたい」

「調査？そういや・・・前に言ってたな。理子は情報収集が得意だとかなんとか」

「知ってるなら話しが早い。理子はネット中毒な上、ノゾキ、盗聴盗撮、ハッキング、その他もろもろ武偵向きの趣味を多く持っているせいか・・・情報収集が並外れて上手いんだ。普段の言動はアレだが・・・期待度は高い。やってくれるか？俺はアリアを振りきれそうにないし・・・こんなこと頼める奴、お前しかいないんだ！」

キンジの頼みを・・・

「極めて了解。それぐらいならやってもいい。俺も・・・アリアの情報には興味あるからな」

刻桃は快諾した。

キンジは『お礼に今度昼飯奢る！』と約束し、茂みから飛び出し走り去って行った。

・・・・・・・・・・

放課後。

刻桃は地図に記された待ち合わせ場所・・・女子寮の前の巨大な温室へとやってきた。
キンジ情報によれば、ここはいつも人けが無く、秘密の打ち合わせにはもってこいの場所だそうだ。

「おーい、モモくーん！」

ビニールハウスの一画・・・バラが咲き乱れるエリアで、理子がブンブン手を振る。

「よう、待たせたな」

刻桃も軽く手を挙げて応える。
そのまま・・・鞄の中に手を突っ込み、ある紙袋を取り出し・・・

「ほらよ、情報料の前渡しだ。チョイスは超適当だけどな」

理子へと投げ渡した。
それを掴んだ途端、理子は紙袋を滅茶苦茶に破き、中身を取り出した。

「やったやったーー！！これ、欲しかったんだよぉ～♪モモ君、ありがとーーー！！」

ピョンピョン飛び跳ねながら理子が振り回しているのは・・・Ｒ－１５指定のギャルゲーだった。

服装からも想像できるように・・・理子は紛れもなくオタクである。

本来なら理子は１５歳以上であるため、ギャルゲーをプレイする事も購入する事も問題はない。だが・・・アリアに次いで低い身長のせいで中学生だと思われてしまい、店の人には売ってもらえず、毎回『情報料』という名目で依頼人に買ってきてもらうという手段を取っていた。

「うんうん♪モモ君、理子の好み分かってるね。もしかして、オタク知識豊富だったりする？キー君よりいい物選んできてくれたし♪」

「否定しつつ・・・・一部肯定・・・って所か。俺の幼馴染も似たようなゲームプレイしてるから・・・部分的な知識は自然と頭に入っちまうんだ」

「それって・・・・前に言ってた『紅龍』って人？」

「・・・・今はそれほど重要じゃないから、奴の名前は置いとけ。そんな事より、アリアのついての情報をとっとと聞かせてくれ。しっかり手に入れてあるんだろ？」

「あいっ！」

理子はビシッと敬礼すると、刻桃と一緒に手近な柵をベンチ代りにして腰掛けた。
鞄から資料の束を取り出し、刻桃の前で広げて見せながら説明を始める。

「んと、まずランクだけど・・・『S』だったね。モモ君は転入してきたばっかだから知らないかもだけど、2年でSって片手で数えるぐらいしかいないんだよ」

「まぁ・・・それは想定内だ。最低でもAはあると思ってたし」

「それからそれから、理子よりチビッコなのに体術も凄くってね。流派は・・・バーリ・トゥードだったかな」

「つまりは・・・バリツか。総合格闘技の一種だよな？」

「そうそう。それに、拳銃と剣術は天才の領域。どっちも二刀流なの。ロンドン武偵局に居た頃は、一度も犯罪者逃がした事が無いんだって。９９回連続・・・たった一度の強襲で捕まえたらしいよ」

「それは真面目に凄いな・・・・」

刻桃は、アリアと相対した時の事を思い出す。
体育倉庫、教室、キンジの部屋。刀か銃かの違いはあれど、アリアは常に二刀流で・・・常人離れした身体能力で攻撃してきた。
今の所・・・命懸けのガチバトルにこそ発展してはいなくとも、無傷で勝てる保証が無いのは刻桃自身も知らないわけがなかった。

「それで付いた二つ名は、『双剣双銃（カドラ）のアリア』。笑っちゃうよね」

「・・・笑い所がよくわかんね。あとは・・・そうだな、体質や家系とかは？」

「うーん、外見からもわかると思うけど、外国・・・イギリスの血が入ってるクォーターだね。ミドルネームの『Ｈ』だけど・・・すっごい高名な一族らしいよ。おばあちゃんは『Ｄａｍｅ（デイム）』の称号を持ってるんだって」

それを聞いた刻桃の顔色が変わる。
Ｄａｍｅとは、イギリス王家が授与する称号の一つ。つまりアリアは・・・

「あの女・・・貴族かよ。どうりで、無駄に偉そうで・・・傲慢ちきでいけ好かないわけだ。むしろ納得した」

「モモ君・・・もしかして貴族嫌いだった？」

「どっちかと言えば・・・そうなる。ただの偶然かもだけど・・・今まで旅先で会ってきた貴族が、ロクな奴じゃ無かったからな」

「ふぅ～ん。まぁ、たしかにねー。貴族って、人格者と親の七光で真っ二つなパターン多いし。それで、他には？何か聞きたい事ない？」

「・・・いや、ここまででいい。あとは自分で調べる事にする。ありがとな」

刻桃がお礼を言うと・・・

「なんのなんの、キー君にもよろしくね。あ、そうだ！」

理子は何かを思い出したかのように、自らの胸元にズボッと手を入れた。

ガサゴソと胸がうごめく中で取り出されたのは・・・・金属製の腕時計だった。
それと合わせ、調査資料も一緒にして刻桃の目の前に差し出す。

「これもキー君に渡しといて。こないだベルトの所を理子がうっかり壊しちゃったから、直させてもらったの。依頼人の持ち物を壊したなんて言ったら、理子の信頼に関わっちゃうからさ」

「・・・・・・・・・」

調査資料と一緒に渡された腕時計。
冷徹な鉄の塊であるにも関わらず、今まで肌身離さず胸元に仕舞いこまれていたせいか・・・・妙に温かい。

「ん？モモ君？どうしたの？」

目敏く気づいた理子は、ニヤニヤ笑いながら刻桃に詰め寄る。

「もしかして・・・・理子のおっぱいに見惚れてたりした？」

刻桃の意識が・・・胸元や腕時計の温かさへと行っていた事に目敏く気づいたようで、それをネタにからかう気満々だった。
否定された場合はさらに詰めより、逃げられた場合はどんな手を使

ってでも話しの流れを元に戻させる。クラスの面々の前で話しを蒸し返してからかうのも面白そうだと考えていた。

しかし・・・理子の目論見は早くも崩れ去る事になった。

「・・・・・・バレたか。だったら否定はしない」

「へ!?」

「それにしても・・・・『黒』とか『スケスケ』は割とありがちだけど・・・『金色』の下着なんてあるんだな」

特に表情を変えずに・・・どうでもよさそうにあっさり認める刻桃。

「え?う、うん。知らなかったの?最近の女の子の下着は派手なんだよ?」

理子は、完全に意表をつかれたような形となってしまい、刻桃の予想外な反応に困惑してしまう。

当の刻桃はというと・・・・

「そうか。まぁ・・・覚えとく。情報、ありがとな」

特に気にもせず、ついさっき得たアリアの情報を脳内で反芻・・・
まとめながら、温室を後にした。
その時の理子は、刻桃を笑顔で見送ったが・・・彼の姿が見えな
くなるや否や、ふくれっ面となってブーたれる姿が目撃されたとか
されなかったとか。

第8話

温室で理子と別れた後・・・刻桃はキンジの携帯に、『情報入手。時間が出来たら電話くれ』・・・と、本文無し、タイトルのみのメールを送信。数十分後には、キンジから折り返しで電話がかかってきた。

聞く所によれば、現在は民間から受けた有償の依頼・・・『猫探し』を終えた所だとか。

武偵高の生徒は民間から有償で依頼を受ける事ができ、キンジはそれを利用してアリアから離れて対抗策を練るつもりだったようだが・・・そのアリアに待ち伏せされた揚句、結局最後まで付き纏われたようである。それでも・・・今、アリアは強襲科の私用で別行動となり、目を盗むまでもなく電話をかけることができたらしい。

それらを聞いた刻桃は・・・呆れ半分でありながらも、理子から得た情報を簡潔に伝えた。

「・・・と、理子から聞いた情報はこんなところだ」

《・・・そうか。あの身体能力と、日本人離れした外見、むしろ納得な素性だが・・・俺はそんなバケモノみたいな奴に追われていたのか。９９回連続強襲に成功って・・・》

キンジの声が沈む。

間違いなく気が滅入っているのだろう。

「他に何か聞きたい事は？」

《そうだな・・・じゃあ、ミドルネームの『H』って何なんだ？高名な貴族って事はさっき聞いたが・・・具体的には、どういうふうに高名なんだ？》

「・・・あ」

刻桃は間が抜けたような声を出す。

貴族についてはあまりいい印象を持ってなかったせいか、そこは適当に流してしまった事を今更思い出したのである。

手元にある調査資料をパラパラめくるが、『H家の人間とは折り合い悪し』としか書かれておらず、肝心の『H家』の情報は皆無だった。

「悪い・・・そこは聞いてなかった。高名な貴族なら、イギリスのサイト探せば何か出てくるかもだけど・・・」

《俺、英語ダメなんだよ。お前は？》

「こないだまでアメリカに居たから、生活に支障が無い程度は。まぁ・・・『H家』情報はこっちで何とかする。俺の手落ちだし」

《悪いな、刻桃》

「いいさ。それより、お前はどうする気だ？」

《なにがだ?》

「事情までは知らないけど・・・・アイツには何か目的があって、それを成し遂げるために手駒を欲しがってる。自分の能力に見合った・・・優秀な手駒を」

キンジは無言になる。
刻桃の問いに・・・なにか思う所があるようだ。

《それはもう・・・わかってる。アリアにヒステリアモードを見られてる以上、このまま逃げ続けても事態は好転しない。だから・・・今日中に何とかするつもりだ》

「・・・・というと?」

《それは後で報告するから・・・今日は帰って来い。お前、一応はルームメイトなんだし、このまま教室に寝泊まりしてちゃマズいだろ》

「・・・わかった。お前の策も聞きたいから・・・そこは約束してやる。じゃあ・・・また」

それだけ言うと、刻桃は電話を切って懐へと仕舞った。
キンジにどんな策があり、どう実行に移すのか。アリアと顔を合わせるのは気が進まなかったが・・・刻桃は手土産代わりに数日分の食材を買って、数日ぶりに寮へと帰る事にした。

「・・・・と、その前に」

刻桃は再び携帯電話を取り出し、メールを打った。

宛先・・・・・『真庭紅龍』。

件名・・・・・『調査依頼』。

本文・・・・『暇になったら、メールでも電話でもいいから折り返し連絡くれ。依頼したい仕事がある』。

・・・とだけ。

・・・・・・・・・・・・・・

キンジの部屋。

数日ぶりに寮に帰った刻桃は・・・・買って来た食材を冷蔵庫に突っ込んだ後で、キンジに理子から預かった報告書と腕時計を渡した。

「そういえば・・・アリアは？」

その時・・・今日までキンジに付き纏っていたハズのアリアが何故かおらず、刻桃は気になって彼女の行方を尋ねてみた。

「アイツなら・・・俺が強襲科に戻る事を約束したら、出て行ってくれた」

キンジは溜息をつきながらも答える。

「・・・・ついに降伏か？」

「言っておくが・・・無条件降伏じゃない。あくまで条件付き降伏だ。勘違いするなよ！」

「大して変わんないだろ。それ・・・」

「大違いだ。戻るって言っても、実際は『自由履修』として強襲科の授業を取るのであって、転科じゃない。それに・・・アリアと組むのは1回だけ。強襲科に戻ってから最初に起きた事件を1件だけ一緒に解決する。そう約束させた」

条件付き降伏とはいえ・・・現時点でのキンジにとっては、一見最良の選択にも見える。

だが、刻桃はある事に気づく。この条件の・・・ある意味致命的になりかねない穴に。

「もしも・・・その最初の1件ってのが、とんでもない大事件だったらどうする気だ？」

刻桃の指摘。

キンジは『うっ・・・』と苦虫潰したような声を出しながらも、平静を装い取り繕う。

「そんな事はわかっている。だが、逆に考えれば・・・どんな小さい事件も『1件』に数える事が出来るってことだ。それに・・・どんな事件でも手を抜くつもりはない。全力でやってやるつもりだ」

あくまで、通常モードの俺の全力で。と、キンジは最後に付け加えた。

「それはそれでいいとして・・・アリアが簡単に引き下がるか？」

「幸い・・・ヒステリアモードはまだバレてないんだ。その詳しい事がバレる前に、通常モードの平凡な俺を見せつけてやれば・・・アリアは大した事のない俺に失望して、勝手に離れていってくれるだろう」

アリアがキンジに目を付けた切っ掛け。それは間違いなく、チャリジャック時にヒステリアモードのキンジが披露した戦闘能力だろう。つまり、逆に考えてしまえば・・・あの時ヒステリアモードにならなければ、今日までしつこくアリアに付き纏われるような事態は避けられた・・・という事だ。

刻桃は少しだけ考えるそぶりを見せると、なにか思い付いたかのように鞄から資料を取り出した。

東京武偵高の学科案内関連の資料と、授業の履修要項関連の資料だ。

しばらく目を通すと、資料をバタンと閉じて鞄へと戻した。

「キンジ！」

「な・・・・なんだ？」

「強襲科の自由履修・・・・俺も付き合う事にする」

・・・・・・・・・・・・・・・

次の日。

武偵高では自分が在籍しない学科の授業も自発的に受ける事ができる。

これは『自由履修』と呼ばれ、単位にこそ反映されないが、多種多様な技術が求められる『武偵』という仕事に就くため、生徒達は割と色んな科の授業に顔を出していたりする。

本来探偵科所属である刻桃とキンジもまた、簡単な自由履修申請をすれば強襲科の授業を受ける事が出来る。

強襲科の校舎に入ってからというもの・・・キンジの表情は沈みまくっていた。気になった刻桃が強襲科の概要について尋ねたところ・・・キンジはさらに暗くさせながらも、強襲科に対する一般的な知識を語り始めた。

強襲科・・・通称、『明日無き学科』。

この学科の卒業時生存率は、９７．１％。生徒が任務の遂行中・・・もしくは、訓練中に死亡している所から、自然とそういう通称が付いたのである。

「・・・武偵の仕事の暗部。それが強襲科だ。刻桃・・・お前、なんでワザワザついてきたんだ？」

「興味本位・・・ってとこだ。実際、この学校の編入試験を受ける時、探偵科と強襲科で最後まで迷ったからな。それに・・・そこまで悲観するまでもないさ。１００人中９７人生きてるなら、まだマシな方だ」

刻桃の反応は・・・キンジの予想に反し、やけにあっさりした物だった。

「どこがだ！四六時中『死ね死ね』言い合うような、火薬臭いトチ狂った連中の巣窟だぞ！」

確かに、刻桃が武偵・・・はたまた剣士として実戦に身を投じてきた事は、キンジとしても知らないわけじゃない。
それでも、もう少し驚くなり引くなりの反応をして欲しかったと思っていたが・・・

「俺は１２歳の頃、母上に・・・アマゾンのジャングルに１ヵ月間ぶち込まれた事がある。水と食料はそれなりに豊富だったけど・・・

・何度猛獣に食べられかけた事か。それに比べたら、生存率９７．１％なんて天国だろ」

「・・・・・・・・」

逆にキンジが驚かされ、引いてしまう結果となった。

自由履修申請を済ませ、装備を確認し終えた後・・・２人は銃声や剣戟音が絶える事のない強襲科の専用施設の前までやってきた。キンジが鉄製の扉を開けると・・・生徒同士が銃や刀剣を振りまわし、激しい訓練に精を出している姿が飛び込んでくる。

一歩間違えば殺し合いとも取れなくない光景にキンジの表情はさらに沈むが、刻桃は『ほー・・・』と軽く感心しながら訓練を眺める。

すると・・・

「おい、あれ・・・キンジじゃないか？」

扉が開く音に気付いた生徒の一人が言った。

それに呼応するかのように、ついさっきまで訓練に明け暮れていた生徒達の注目は、一気に扉に・・・キンジへと集まった。

「おい、あれ・・・」

「もしかして・・・もしかしなくても・・・」

「キンジだ！」

「キンジー！！」

次の瞬間、強襲科の生徒達は訓練を中断し、キンジと・・・・ついでに刻桃の周囲３６０℃をあっと言う間に完全包囲した。

「おーう、キンジィ！お前は絶対帰ってくると信じてたぞ！」

「さぁ・・・ここで一秒でも早く死んでくれ！」

「まだ生きてやがったか。さぁ、俺よりコンマ一秒でも早く死ね！」

「やっと死にに帰って来てくれたか、キンジ！お前みたいな間抜けはすぐ死ぬぞ」

「武偵ってのは、間抜けから死んで行くもんだからな！ヒャハハハ！！」

前情報の通り・・・キンジへの挨拶代りに『死ね死ね死ね』と連呼する強襲科の生徒達。

キンジは・・・若干引きつつも、律儀に一人ずつ『死ね死ね死ね』と言いながら挨拶を交わしていく。律儀なのか・・・お人好しなのか・・・『郷に入っては郷に従え』とはよく言ったものである。

「お、噂の転入生も一緒か？」

強襲科男子生徒の一人が刻桃に話しかける。

「噂？・・・どんな？」

刻桃が聞き返すと、今度は女子生徒が前に出て答える。

「だってだって、鑢君って超噂になってるよ。転入試験の時に教官倒したとか・・・初日にアリアと一悶着起こして引き分けたとか・・・武偵ランク、間違いなく『S』行ってるっしょ！」

Sランクと聞いて・・・周りを取り囲む強襲科の生徒達がざわめき始める。

武偵高校の生徒には・・・入試から定期試験の成績に基づいて、A～Eのランクが付けられる。

通常は『A』が一番高いランクなのだが・・・さらにその上には『S』という特別なランクが存在する。

ロンドンの武偵局にいた時、狙った獲物を９９回連続で捕まえてきたアリアはもちろんの事・・・入試時、たまたまヒステリアモードで試験を受けたキンジも、前年度最後の期末試験をボイコットするまではSランクに格付けされていた。

転入試験時の実績と、ここ数日間に流れた噂から・・・周りは刻桃もSランクだと思い込んでいたが・・・

「いや、期待してくれてるとこ悪いんだけど・・・俺のランクは『B』だ」

刻桃の否定に・・・その場の空気が固まる。

「えっと・・・なんで!?教官倒したんでしょ!?」

「それは否定しない。けど、それ以外のとこで減点されて、結果的に『B』に格付けされた。それだけの話だ」

「「「・・・・・・・・・・」」」

強襲科の生徒は黙ってしまう。

教官倒すだけの実力を持っていれば、最低でもAランクは行けると言うのに・・・・・一体何がダメでBランクにまで下がってしまったのか教えてほしいものである。

《～♪～♪～♪～♪～♪》

刻桃のポケットで鳴り出した着うた。
液晶画面に表示された掛けてきた相手の名前を確認すると、キンジと強襲科の生徒達に断りを入れて、専用施設の外に出て電話に出た。

「・・・・もしもし」

《やぁ、モモちゃん。久しぶりだね》

「・・・・・モモちゃん言うな、紅龍」

刻桃は、電話の向こうに居る幼馴染・・・真庭紅龍の第一声に顔をしかめる。

《それを言ったら、キミも僕の事は『紅龍』ではなく『コウ』と呼びたまえ。本名は嫌いなんだ》

「紅龍は紅龍。今更呼び方を変えるつもりはない」

《そうかい。それなら、僕はキミの事を未来永劫『モモちゃん』と呼び続けるだけさ。まぁ、それは置いといて・・・僕への依頼ってなんだい？》

紅龍が聞く。
刻桃も、紅龍と話す時の・・・もはや定番とも言える挨拶はここまでにし、本題に入った。

「ある人間の素性を調査してほしい。そいつの名前は・・・神崎・H・アリア。イギリス貴族に関係あるらしいけど・・・その辺を詳しく調べてもらいたい。ついでに、そいつが武偵として現在進行形で関わってそうな事件についても頼む」

《貴族嫌いのキミが貴族に興味を持つなんて・・・今夜は銃弾と血の雨でも降りそうだね》

「うるさい。一応・・・そいつに関しての別の調査資料もあるから、スキャナーでデータ化してから今日中にそっちのパソコンに送っとく。参考にしてくれ」

《了解した。それじゃ・・・いい報告を期待してくれたまえ。ああ、それから・・・もう1つ伝えたい事があるんだ。『刀』・・・『完成形変体刀』の件だ》

紅龍の言葉を受けて・・・刻桃は目を見開く。

「見つけたのか!?」

《・・・いい報告と、悪い報告。どちらから聞きたい?》

嫌な予感しかしなかったが・・・・

「じゃあ・・・・・いい報告から頼む」

刻桃はとりあえず、いい報告を話すように言った。

《そうかい。端的に言えば・・・・・『刀』は、もしかしたら持っているかもしれないと当たりを付けていた骨董品コレクターが所持していたんだ》

「・・・持って・・・いた？」

紅龍の言い回しが・・・過去形だった事に気づく。

《そう。ついこの間までは持っていたんだ。１週間前・・・・何者かの手で盗まれるまではね》

「盗まれた！？」

《・・・・それが悪い報告さ。だが、この事件が起こったおかげで『刀』の足取りがつかめたのだから、皮肉なものさ。すまないね、当たりを付けた時点でキミか風花さんに報告を入れておけば・・・・》

「そこは気にするな。俺や母上だけじゃ出来ない事も・・・・お前なら出来てるんだ。感謝はすれど、謝られる理由なんか無いだろ」

刻桃が言うと・・・紅龍は電話の向こうで軽く息をつく。

《ありがとう、モモちゃん。この件は引き続き・・・責任持って調査させてもらう。忍者がコソドロに出し抜かれたとあっては・・・真庭忍軍の先人達に申し訳が立たない。それじゃ・・・また電話する》

それだけ言うと・・・紅龍は電話を切った。

刻桃は、久々に聴いた幼馴染の声に、懐かしさと嬉しさの余韻を感じつつも・・・紅龍との会話を反芻する。

「刀を盗んだ奴・・・・・・一体どこのどいつだ?紅龍が後れを取るなんて・・・・・相当出来る奴だぞ」

尾張時代・・・裏世界にその名を轟かした忍の一団『真庭忍軍』。その子孫である真庭紅龍は・・・通常1人につき1つ使うのがやっとであるハズの『真庭忍法』を、若くして複数使える天才忍者。その忍法は戦闘向きでこそないものの、たがコソドロに後れを取るハズが無い。紅龍が油断していたとも思えない。となれば・・・そのコソドロが相当なやり手だったという事になる。

「とにかく・・・・今は向こうの行動と、紅龍の情報待ちか」

不安を感じながらも・・・刻桃は携帯電話をポケットに仕舞い、キンジ達が待つ訓練施設へと戻って行った。

第8話（後書き）

ついにお待ちかね。真庭紅龍の登場です。・・・・・声だけですけど。口調は、『仮面ライダーW』のフィリップがモデルです。
紅龍が使う真庭忍法については・・・刻桃のランクがBにまで下がってしまった理由も含めておいおい明かして行きたいと思います。

第9話

あれから数時間後。

強襲科での授業と訓練を終えた後、キンジはぐったりしながら・・・

刻桃は欠伸をしながら訓練施設を出た。

「・・・キツかった」

「そうか？・・・中々結構充実した時間だったと思うけど？」

「よく言う・・・こっちは転科してから体力落ちてて・・・ついて行くだけでもやっとだったって言うのに・・・」

「武偵云々は置いといても・・・身体だけは鍛えとけ。何やって生きて行くにしても・・・まずは身体が資本なんだからな」

刻桃の言葉に・・・キンジは言葉をつまらせる。

「・・・善処する。それより刻桃、これからゲーセン行かないか？」

「・・・ゲーセンか。そういや、日本に帰って来てからまだ一回も行ってないな。今、どんなのが流行ってるんだ？」

「まぁ・・・一口にどれが一番人気かとかは言えないが、これから

行くゲーセンにはある程度の定番は揃っているぞ」

刻桃は少しだけ考える。
アメリカにもゲーセンが無いわけではなかったが、基本的に大人気に位置付けられるゲームは日本製の物が多い。

ここが日本なら、向こうじゃプレイできない最新ゲームもあるかもしれない。

そう考えた刻桃は、キンジに同行する事にした。

そんなわけで強襲科を出ると・・・

「・・・・・あ」

夕焼けの中、門の所に背中をついて、キンジを待っていたであろう桃色ツインテールのチビッコが1人いた。
言うまでもない。そう・・・アリアである。

アリアはキンジの姿を見つけると、小走りでやってくる。その際、傍に居た刻桃に睨みを利かせる事も忘れない。

刻桃も軽く睨みかえしてやり、キンジは・・・・そんな2人の行動に溜息をつく。

「「「・・・・・・・・・」」」

しばらく無言となってしまう3人。

キンジは、条件付き降伏を強いられ強襲科に戻るハメになった事に対して。

刻桃は、アリアに待ち伏せされた事に対して。

アリアは、キンジを待っていたつもりが刻桃の顔を見るハメになった事に対して。

それぞれ三者三様に様々な不本意感が渦巻きながらも・・・成り行きに従い、渋々一緒に歩き始める。

「キンジ。アンタ・・・人気者なんだね。ちょっとびっくりしたよ」

アリアが・・・意外そうに言った。

「確かに・・・アレには軽く驚いたな。強襲科に戻るの嫌がってたから、てっきりハブられてるのだとばかり思ってた」

刻桃も同意する。

強襲科に入った瞬間に包囲されたキンジは・・・強襲科の生徒達に『死ね死ね』連呼はされてても、一時的とはいえ彼が帰ってきた事をみんな心底喜んでいたのは・・・しっかり伝わってきた。

「・・・あんな奴等に好かれたくない」

キンジにとっては心の底からの本音。

アリアと関わる事が無ければ、自由履修だろうと・・・もう二度と戻らないと決めていた武偵高の暗部。否が応でも気が滅入る。

「キンジって人付き合い悪そうだし、ちょっとネクラ?って感じもするんだけどさ。ここのみんなは、アンタには何て言うのかな・・・その・・・」

「むしろその逆・・・周りに認められてて、一目置かれてる。俺にはそう見えた」

アリアの見解と・・・刻桃の結論。

「・・・・珍しく意見が合ったわね、刻桃」

「・・・・珍しいどころじゃない。多分初めてだ」

本人同士は不本意でありつつも、アリアと刻桃が感じた印象は的を射たものだった。
そして、キンジ本人にも・・・心当たりがないわけではなかった。

（・・・・あの時の事か）

事の発端は、東京武偵高入学試験の時。
強襲科志願者に課せられた試験内容は、１４階建ての廃屋に散らばり、武装した上で受験生同士が潰し合う実戦形式の物だった。

そのとき・・・たまたまヒステリアモードになっていたキンジは、廃屋に居た全員・・・抜き打ちで潜んでいた教官５人も含めて倒してしまったのだ。

当然・・・その時の衝撃がそう簡単に忘れ去られるハズもなく、１年以上経過した今でも強襲科を中心に語り草となっていた。

（・・・くそっ！）

キンジが不機嫌になったのを察してか・・・アリアは視線を地面に落とす。

「あのさ、キンジ」

「・・・なんだよ」

「ありがとね」

小声ながらも・・・心底嬉しそうなアリア。

「何を今更。俺は仕方なく強襲科に戻っただけだ。事件を1件解決したら、すぐにでも探偵科に戻る」

キンジは苛立ちを隠さずに返す。

「わかってるよ。でもさ・・・」

「なんだよ」

「強襲科の中を歩いているキンジ・・・みんなに囲まれててカッコよかったよ」

「・・・・・・!?」

キンジが目に見えて動揺・・・赤面する。
アリア本人は深い意味を込めて言ったわけでないにしても、見た目だけは可愛らしい女の子に褒められて・・・・・言葉に詰まってしまったのだろう。

「あたしになんか、強襲科では誰も近寄ってこなかったから。実力差があり過ぎて、誰も・・・合わせられないのよ。どこの国でも。どこの武偵高でも。ロンドンでも・・・ローマでもそうだった」

「・・・・・・・」

「・・・何か言いたそうね。刻桃」

刻桃の意味ありげな視線に気づいたアリアは、ムッとしながらも尋ねる。

「いや。名前の通り、『Ａｒｉａ』みたいな奴なんだと思ってな」

「・・・アンタの言う通りよ。あたしは『Ａｒｉａ』。だからそれでもいいんだけど」

「・・・・・『Ａｒｉａ』？」

普段とは違う音調でアリアの名を呼んだ刻桃に、キンジが首を傾げ

た。

「・・・『Ａｒｉａ』って、オペラの一人で歌うパート・・・・』独唱曲』って意味でもあるんだよ。今まで、あたしのパートナーになってくれる人なんて、誰もいなかったから」

「で、ここで俺を奴隷にして『デュエット』にでもなるつもりか？」

キンジが・・・アリアを見ずにそう言うと、アリアはクスクスと笑いだした。

「アンタも面白いこと言えるんじゃない」

「面白くないだろ。お前のツボは、よくわからん」

「面白いよ。やっぱりキンジ、強襲科に戻った途端、ちょっと活き活きし出した。昨日までの・・・・自分に嘘ついてるみたいなアンタより、今の方がずっと魅力的よ」

アリアがまた恥ずかしい事を言い出す。その言葉を受けて、キンジが複雑そうな表情で俯く。

「そういうわけだから・・・・刻桃、アンタにキンジは渡さないわよ」

得意げな表情で・・・アリアは言った。

「・・・何でそういう話しになってんだ?」

それに対して刻桃は軽く呆れ顔である。

「アンタだってパートナーいないんでしょ?だったら・・・アンタもキンジの事、狙ってたんじゃないの?」

「・・・・気持ち悪いこと言うな。それに、俺のパートナーというか・・・・仕事仲間ならもう間に合ってる。かなりクセが強い奴だけど・・・まぁ、頼りにはなる」

「ふーん。どんな奴なの?なにが得意?」

「こっから先は企業秘密だ。知りたきゃ自分で調べるか・・・・等価交換だ」

「・・・なによそれ。交換条件ってこと?」

「お前の目的を教えてくれたら、教えてやらない事もないけど?時間が無い事も含めて・・・・・な」

好機と判断した刻桃が、軽く探りを入れるが・・・

「・・・武偵なら自分で調べれば？あたしから言える事は何もないわ」

取り付く島もなかった。
口振りから察するに、調べられる事自体は別に構わないらしいが・・・自分の口から目的を話す気はサラサラないらしい。
刻桃も・・・その件に関しては紅龍に調査依頼を出してあることもあって、それ以上は特に触れようとはしなかった。

そして、3人がマンション行きのバス停に差し掛かった時・・・キンジと刻桃は足を止めず、素通りする。

「あれ？帰らないの？」

「俺と刻桃はゲーセンに寄って行くから・・・アリア、お前はもう帰れ。そもそも・・・今日から女子寮だろ。一緒に帰る意味がない」

「それでも向こうのバス停までは一緒ですよーだ」

アリアは憎まれ口を叩くが、キンジを強襲科に連れ戻せた事が嬉しいようで・・・それは表情にもしっかりと現れている。
相性が悪かったハズの刻桃と普通に話せている所からも、それは確実である。

「・・・ねぇ、キンジ、刻桃。『げーせん』って・・・なに?」

アリアがこんな事を言い出した。

「ゲームセンターの略だ。そんな事も知らないのか?」

呆れつつも・・・キンジが答える。

「帰国子女なんだからしょうがないじゃない。じゃあ、あたしも一緒に行く!今日は特別に一緒に遊んであげるわ。ついでに・・・・・刻桃もね」

「・・・・罰ゲームの間違いだろ」

「刻桃うるさい!って・・・・あ!?」

刻桃の突っ込みにアリアが切り返していると・・・キンジは走り出しだ。

「来い、刻桃!」

キンジの思惑を察し、刻桃も走り出す。
そう・・・追跡者たるアリアを引き離しにかかったのである。
するとアリアはニヤリと笑い、２人と同じ速度で真横についてくる。

「ついてくるな、アリア！お前の顔なんか見たくない！」

それに腹が立ったキンジはさらに加速。

「・・・だそうだ。とっとと帰れ」

刻桃はそれに速度を合わせ・・・

「あたしもアンタ達のバカ面なんて見たくもない！！」

「「じゃあ尚更ついてくるな！！」」

「やだっ！」

さらにアリアも同じ速度で追跡を続ける。

結局・・・・3人は真横に並んで突っ走りながらゲームセンターに到着した。
その直後・・・・キンジはしばらくの間肩でゼェゼェと息をし、呼吸を整えていたが・・・・同じペースで走っていたハズの刻桃とアリアは息一つ乱しておらず、汗も殆んどかいていなかった。

（どういう体力してるんだ・・・・こいつら）

探偵科に転科してから体力が落ちたとはいえ、同居人と期間限定パートナーの驚異的身体能力を・・・・地味に再確認させられたキンジだった。

第9話（後書き）

アリアと刻桃がここまでケンカせずに話せたのは多分初めてかもしれないです。いつも・・・最後は交戦状態になりかねない状態になってましたし。

次回は、いよいよ刀語を語る上では欠かせないキーアイテムが０．５個登場。この０．５という数字・・・実はヒントと言うより、場合によってはそれだけでもう回答になってしまいそうですけど。

次回もお楽しみに！

第１０話

ゲームセンター。

到着後、刻桃は・・・物珍しそうに辺りを見回すアリアと、その相手をするキンジを放置。格闘ゲームを中心に適当に物色し始めた。

アメリカに居た時も、現地のゲームセンターに全く出入りしてなかったわけではなかったが、日本にはアメリカよりも最新と呼べるゲームが多数揃っていた。

流石はメイド・イン・ジャパン。日本のゲームメーカーが世界一と言う触れ込みは伊達ではない。

格闘ゲーム以外にも、『太鼓の達人』などの音ゲー、一昔前に流行った『甲虫王者ムシキング』の派生形であるデータカードダスゲームの筐体等々。

その中でも・・・ある筐体に目が止まる。

小学生ぐらいの男の子2人が、バーコード付きのカードと動物の絵が描かれたメダルを筐体にセットしながらプレイするゲーム。

「これが噂のガンバライド・・・・」

仮面ライダーバトル・ガンバライド。その筐体の画面に、アメリカに居た頃に観ていた特撮番組の主人公が姿を現した。

「・・・ドラゴンナイト。いや、日本じゃ『龍騎』・・・か」

赤を基調とするボディに銀色の鎧、頭部の騎士の如き鉄仮面から真紅の複眼を覗かせた戦士。
ドラゴンナイト・・・もといい龍騎は、その名の通り赤い龍を従え、炎を纏った派手な飛び蹴りを放つ。その姿に・・・ついつい見とれてしまう。

「カードもメダルもないし、今回はお預けか。さて、他には・・・」

ガンバライドの他にもあらかた見て回った後・・・刻桃は、入口付近に戻る。

そこでは・・・

「キーーーー!!今度こそ本気!次こそ取れる!コツがわかった!!」

キーキー呻きまくりながらＵＦＯキャッチャーをプレイするアリアと・・・

「分かってない奴の台詞だぞ。それ・・・」

保護者の如くアリアのプレイを見守るキンジの姿があった。
アリアは１００円硬貨を投入し、クレーンを操作。ケース内に無造作に所狭しと突っ込まれているネコ科動物のヌイグルミに狙いを定める。
大きさはポケットサイズ。難易度が高いわけではないが、アリアの狙いが悪い。ヌイグルミはクレーンで多少は動いても、持ち上げるには至らなかった。

「次！次こそ！！」

アリアは再び１００円硬貨を投入。
しかし、クレーンはヌイグルミを掠めるばかりで、持ち上がりすらしない。

「キーーーーーーーー！！」

「・・・・５００円硬貨を入れれば６回できるぞ」

あまりの醜態に見かねた刻桃が言うと・・・

「うるさーーーい！！次で絶対取れるんだから必要ないっ！！」

アリアは余計に意地になってしまい、あくまで１００円硬貨のみでプレイを続ける。
しばらくすると１００円硬貨が底をつき、再びプレイするために両替機で１０００円札を崩す。
そしてまた・・・１００円硬貨を投入し、ヌイグルミを掠めまくる。
何度も何度も何度も。

「今度こそ本気の本気！本気本気本気ほーーーんーーーきぃーーー！！」

（（・・・ダメだこいつ。早く何とかしないと））

使用金額が３０００円を超えた頃。身を持ち崩しかけたギャンブラーも同然のアリアに、これまで必要以上に口を挟まなかったキンジと・・・刻桃までもが、流石に見ていられなくなる。
キンジは、涙目になってボタンから手を離そうとしないアリアを押しのけ、筐体に１００円硬貨を投入。ケース全体をじっくり観察して狙い目を探す。

（・・・・これは厳しいかもしれない）

こういう時は、景品ダクトの近くにあるヌイグルミを狙うのが常套手段。

しかし、アリアがケース内を３０００円分引っ掻き回したせいか・・・その辺りのヌイグルミは捕りづらい形に折り重なってしまっている。
景品ダクトから離れた位置のヌイグルミなら狙えない事もないが・・・可能性は五分五分。
どう出るべきか悩んでいると・・・

「任せろ」

刻桃が・・・キンジにしか聞こえないぐらいの小声で短く言った。
そして、少しだけ胴を右側にねじり、右拳を脇に引っ込める。その際、左手は開いて右拳を包み込むように構える。
しばらくその体勢を保ったまま・・・

（虚刀流四の奥義・・・・）

途端、刻桃が動く。

（柳緑花紅・簡易編・・・・・っと）

筐体に釘付けのアリアに感づかれないよう、静かに・・・それでい

て素早く右拳を開放。筐体に軽く・・・ただ触れただけのように軽く当てた。

瞬間・・・

ボコッ！

ケース内の・・・景品ダクトの傍のヌイグルミが軽く弾け飛んだ。派手に・・・と言うわけではないが、ヌイグルミの配置は若干変化を見せる。

虚刀流四の奥義・柳緑花紅。本来ならば外側を破壊せずに内側を破壊する・・・鎧や盾の上からでも有効な、鎧通しの拳撃。しかし今回は・・・簡易編を使用。技の原理でもある振動の伝達を利用し、ケース内の一部に衝撃を伝えて内部のヌイグルミを軽く弾いた。

もっと派手に衝撃を伝えて、弾いたヌイグルミを景品ダクトに落とす事も可能だったが・・・周りに感づかれるわけにはいかなかった事もあり、それだけは踏みとどまった。最後の良心・・・とも言える。

「よし、あれだ！」

キンジは、景品ダクトの傍のヌイグルミに当たりを付ける。
手慣れた手付きでクレーンを操作し、一頭のヌイグルミの胴をがっしり掴む事に成功する。
掴んだ場所、重心も完璧。クレーンが上がるのと同時に、ヌイグルミも難なく持ち上がる。

「「・・・・・っ！！」」

「・・・・・・・・・・」

キンジが・・・アリアが息を飲み、刻桃も黙ってクレーンの動きを見守る。

「あ！？」

アリアが驚いたような声を出す。
見れば、クレーンが持ち上げたヌイグルミのしっぽに・・・さらにその下にいたもう2頭のタグだかヒモらしき物が絡まり、計3匹が釣り上げられた状態となっていた。

「キンジ、刻桃、見て！3匹釣れてる！あ、入る、入る、行け！！」

大ハシャギのアリア。
まさかの3匹同時釣りに、キンジと刻桃も食い入るようにクレーン

を見る。

そして・・・クレーンは景品ダクトの上に到達。ゆっくりと、ヌイグルミを離した。

掴まれていた1匹と、芋蔓式に釣り上げられた2匹も景品ダクトの中に落っこちた。

「やった！」

「っしゃ！」

「おお！」

滅多にお目にかかれない奇跡的な結果。

3人は無意識に・・・円になってパシッ！！とハイタッチしてしまった。

「「「・・・・・・・・あ」」」

しかし・・・一瞬でも気が合ってしまった事が気恥かしくなり、すぐに『フンッ！』と息巻いてそっぽを向く。

アリアは、そのまま景品取り出し口に両手を突っ込み、捕獲に成功したヌイグルミ3匹を取り出して思いっきり抱きしめる。

そのヌイグルミのタグには『レオポン』と書かれており、それを見

たキンジは『なんだそりゃ？』と疑問符を浮かべる。
刻桃が『ヒョウとライオンの間に生まれた雑種だ』と説明しても、現物はもう剥製しか現存しないため、あまりピンとこなかったようである。

「キンジ！」

アリアが・・・捕獲した3匹のレオポンのうちの1匹をキンジに渡す。

「1匹あげる。アンタの手柄だからご褒美よ」

「・・・・・あ、ああ」

実際問題・・・捕ったのも金を出したのもキンジである以上、本来所有権は彼にあるハズなのだが・・・・ニッコリ笑うアリアを前に、そんなことは忘れてしまったかのように受け取ってしまう。

「刻桃。アンタにも・・・・その・・・・あげる」

今度は・・・・複雑そうな表情で、最後の1匹を刻桃に押しつける。

「・・・・いいのか？俺は何もやってないぞ？」

これは嘘だ。しかし、『柳緑花紅・簡易編』を使った事はアリアに気づかれていないため、やはり何もやっていないのと同じである。
それでもアリアは、グイグイとレオポンを押し付けてくる。

「こないだの桃饅のお礼よ。貴族は受けた施しの借りは必ず返すのっ！」

初めて会った日の夜に、買って来た桃饅を全部あげた事を思い出す。
刻桃は口元を少しだけツリ上げると・・・・

「そういう事なら、ありがたく貰っとく」

と言って受け取り、レオポンを見回す。
よく見ると尻のあたりから細い丈夫なヒモのような物が出ており、レオポンが携帯ストラップだった事に今更気づかされた。

「・・・せっかくだ。付けてみるか」

刻桃は自分の携帯電話を取り出し、元々付いていた・・・塗装がハゲまくったボロボロの『仮面ライダードラゴンナイト』のストラップを取り外し、レオポンのストラップを付け始める。
それを見たキンジとアリアも自分の携帯電話を取り出し、ストラッ

プのヒモを携帯の穴にねじこむ。この2人は刻桃とは異なり、元々ストラップは付けてなかったらしい。

しかし、ヒモが中途半端に太く、なかなか上手く入らない。

「2人とも、先に付けた方が勝ちよ！」

アリアの号令の元・・・

「ガキか！？だけど、お前には負けねぇ！」

キンジは何故かムキになって参戦。

「・・・・入らない。何考えてんだ、設計者」

競争云々はともかくとして、刻桃はヒモを太くした設計者に対して恨み節を吐く。

こうして・・・3人はしばらくの間、その場で唸りながらレオポンくっつけ合戦を繰り広げる事となった。

・・・・・・・・・・・・・・・

それから３０分後。

ゲームセンターを出た後。３人は一緒に・・・正確に言えばアリアが先頭を歩き、その少し離れた位置をキンジと刻桃が並んで歩く。アリアは今日から女子寮だが、それでも帰り道は途中まで一緒である。

「かぁーわぁーいぃーー♪」

アリアは、ご機嫌な笑顔で無事携帯電話に付ける事が出来たレオポンを抱きしめる。
その様子からは、普段の・・・拳銃と一緒に殺気を振り撒く我儘大王の姿は想像できない。

「アリアの奴、あんな顔も出来るんだな」

刻桃は両手を頭の後ろで組み、空を見上げる。
初めて会った日のやり取りから、刻桃の中のアリアは・・・『怒るとすぐに発砲する戦闘狂の危ない女』という印象しかなく、それだけに意外な事この上ない。

「本当は・・・もしかしたら、アレがアリアの本当の姿なのかもしれないな」

キンジが、アリアの後ろ姿を見ながら言う。

「・・・と言うと？」

刻桃が聞く。

「別に深い意味はない。ただ、さっきアリアが言った事の逆で・・・アイツこそ、普段から自分に嘘ついて無理をしてるんじゃないか

って思ったんだ。何かが、本当のアイツを歪めてるんじゃないか・・・って」

「ふーん。あの女の事・・・嫌がってたわりには、よく見てたんだな」

「そ、そんなんじゃない！ただ・・・なんとなく気になっただけだ！」

キンジが慌てて否定する。
その時・・・

ヒュウウウウウウウ・・・・

季節外れの・・・春一番の如き突風が吹き抜ける。

「キャッ！？」

突風でアリアの制服のスカートがめくり上がる。慌てて押さえたものの、レオポンを抱きしめていたせいで数秒だけ・・・スカートの中身が露出する。
その事を自覚したからなのか・・・アリアは壊れたブリキのロボットの如く、ギギギギ・・・と後ろを振り向く。

「・・・・・・・・・見た？」

さっきまでのご機嫌笑顔が嘘のように・・・・アリアの目は猛禽類のようにツリ上がり、キンジと刻桃を睨みつける。
レオポン付きの携帯電話を仕舞い、両太ももに装備したガバメントを素早く抜けるよう構えている。

キンジは・・・

「いや、見てなんかない！絶対だ！！」

本当はバッチリ見ていたのだが・・・風穴地獄を回避するためにも全力否定。
しかし、刻桃は違った。

「しっかり見せてもらった。トランプ柄か・・・・」

あっさり認めたどころか・・・・顔色一つ変えずに柄まで暴露する始末。
アリアは顔を真っ赤にし、ガバメントを抜いて空に向けて威嚇射撃する。

「アンタ・・・なに見てんのよ！やらしいわねっ！」

「これはいわゆる不可抗力。文句なら風に言え」

「風に言えないからアンタに言ってんじゃない！」

「・・・滅茶苦茶だ」

「うるさいうるさーーーい！！」

アリアの言い分に・・・呆れかえる刻桃。
そして、懐に右手を突っ込み・・・ある物を取り出した。武偵高生徒が装備を義務付けられている物の一つを。

「・・・ったく。あんまりうるさいと・・・今度は俺の『銃』が火を吹くぜ？」

そう。取り出したのは・・・回転式（リボルバー）連発拳銃である。

全体的に黒いが・・・銃身とグリップには派手な金色の装飾が施され、グリップの先端には水晶付きの吊り紐が取り付けられている。傍から見たところ・・・装弾数は少なく、サイレンサーも付けられそうもない。武偵が扱うタイプの拳銃としては突っ込みどころ満載な外観をしているが、それ以前に・・・突っ込まなければならない部分があった。

「刻桃・・・・」

「アンタ、それ・・・」

キンジとアリアが・・・・刻桃の銃の持ち方を見て驚愕する。

「・・・なんだ？ハッキリ言ったらどうだ？」

それに対して・・・刻桃は、自分の銃の持ち方のどこがおかしいのか。まるでわかっていないようだった。
見かねたアリアは・・・・恐る恐る指をさし、間違いを指摘する。

「アンタ・・・・なんでグリップじゃなくて、銃身なんか握ってるの？」

「・・・・・は？」

刻桃は・・・改めて自分の右手を見る。
グリップを握ってたつもりが・・・・何故か銃身を握っていた事に今更気がついたのである。これでは投げる事はできても発砲はできない。

「・・・・・・・ああ、うん」

おぼつかない手付きで握り直そうとする。

しかし・・・

「おわっと!?」

手が滑り、『銃』を落としてしまう。

すぐに拾おうとするも、上半身を屈めた時に足で蹴り飛ばしてしまい、それを3度も繰り返す物だからなかなか拾えない。

まるで・・・『銃』が刻桃を。または、刻桃の身体が『銃』を拒絶するかの様な光景。

ようやく銃を拾い上げ、今度は間違いなくグリップを握った頃には・・・

「・・・・・・・・・」

アリアはクールダウン。無言で二丁拳銃を太もものホルスターに収納。

「・・・・・・・・・」

刻桃もシラけてしまい、懐に『銃』を仕舞った。

第１０話（後書き）

と・・・いうわけで、刻桃が取り出したのは、皆さんも予想していた通り、完成形変体刀十二本が一本・・・・『炎刀・銃』です。とはいっても片割れはまだ出てませんし、『炎刀』という名前もまだ出てませんけど。

次回は、刻桃の醜態の真相と・・・・七花によって破壊されたはずの『炎刀・銃』が、なんで現代に出現しているかが明かされます。

仮面ライダードラゴンナイト。４月頃に、ＴＳＵＴＡＹＡの宅配ＤＶＤレンタルでようやく全話視聴完了。その感動が忘れられず、今回・・・・ガンバライドと言う形で思わず登場させてしまいました。それでも、もう一つの小説の都合で、俺はガンバライドをプレイする時は大抵『仮面ライダーキバ』を使うんですけどね。あとは・・・・メダルを活かすために、オーズ・・・って所です。

第11話

寮・・・キンジの部屋。

あれから・・・パンチラ云々についてはなあなあになってしまい、その場は解散となった。アリアは女子寮へと帰り、刻桃とキンジも自室へと戻ってきた。

「なぁ、刻桃。さっきの事なんだが・・・お前の武偵ランクがBって事と関係あるんじゃないのか？」

帰って来た後でキンジが話題にしたのは、さっきの・・・刻桃のおかしな銃の持ち方だった。

幸か不幸か、あまりにもあからさま過ぎて・・・アリアは『変な冗談』と言う事で勝手に脳内処理を施したようだが、キンジは違った。

「・・・なんでそう思うんだ？」

「お前が・・・風花さんからヒステリアモードの事を聞いているように、俺も・・・鏖家の得意体質については、兄さんから少しだけ聞いている」

尾張時代の末期から・・・実に１００年以上付き合いがある鑢家と遠山家。鑢家の人間が、遠山家の特異体質・・・・『ヒステリア・サヴァン・シンドローム』の情報をある程度知っているように、遠山家の人間もまた、鑢家の特異体質を知らないわけがなかった。

「お前と風花さんは・・・・」

キンジが確信を突こうとする。
しかし・・・刻桃は手の平をキンジの顔面に向け、言葉を遮った。

「俺は、あの時の・・・・ワザワザ銃を抜いた俺自身の選択を否定する」

そして、銃を抜いたことを心底後悔するかのように溜息をつき・・・

「まぁ、お察しの通りだ。転入試験の時も、ナイフ投げたら何故か真後ろに飛んで教官殺しかけたし、銃を撃ったら変な方向に跳弾して・・・・またまた教官殺しかけて結果的に『Ｂ』になった」

転入試験での出来事を端的に話した。
因みに、このＢランクという評価には、試験を担当した教官の個人的な意趣返しが含まれている事も・・・・想像に難くない。

「それとだ。この体質は・・・あまり言わないでほしい。特に・・・アリアには絶対言うなよ。俺を含む鑢家の一族は、武器を使う才能が皆無どころか・・・マイナスにまで達しているって事は」

「言えるわけないだろ。一族に武器を扱う才能が無かったからこそ、鑢家の初代・・・・鑢一根は必要にかられて『虚刀流』を編み出したなんて。アリアだって・・・さっきのアレは、ワザとだって思ったハズだ。・・・・銃を扱うお前の姿は、それぐらいワザとらしく見えた」

虚刀流は・・・・表向きには『鑢一根が極論の末に編み出した流派』として伝えられていた。

だが、それには裏があった。鑢一根・・・・いや、鑢一族には代々武器を扱う才能が全くないどころか・・・マイナスにまで達しており、『武器を持っただけで弱くなる』という・・・ある種の『呪い』を代々受け継いできた。

だからこそ・・・鑢一根は必要にかられて刀を捨て、虚刀流を編み出したのである。

刀を使う才がなかったからこそ、自らが一本の日本刀となる事を選んだ。

戦国時代から続く・・・闇に包まれた異色の流派・虚刀流。

なんとも相応しくない落ちがついていたのである。

「しかし、改めて考えると・・・・いくらなんでも武偵としては致

命的な体質だぞ」

「それはそれでわかってる。けど、虚刀流は拳銃相手でも後れは取らないし、包丁なんかの調理器具や、手甲や煙玉なんかの補助装備は使えてる。だから大した問題にはならない」

刻桃は・・・懐から『銃』を取り出して軽く構える。今度は銃身ではなく・・・グリップをしっかりと握っている。

「その銃・・・そいつについても聞きたかったんだ」

キンジは・・・『銃』をじっくりと見る。

「小学生の頃・・・お前の家の神棚に飾ってあった『壊れた二丁拳銃』のうちの一丁だろ。あんなにボロボロだったのに・・・ここまで修復できるものなのか？」

7年前・・・鑢家がまだ日本に住んでいた頃。キンジが鑢家を訪れた時に目にした、『かつて二丁拳銃と呼ばれていたであろう鉄の塊』を思い出しながら言った。

かつて鑢家の神棚に存在した、『自動式連発拳銃』と『回転式連発拳銃』のなれの果て。当時のそれは・・・両方とも銃身が無残に折れ曲がり、パーツも所々欠損。どう修理しても使い物になりそうもない。ただの変わったオブジェとしてしか価値のない鉄の塊だった。

しかし今・・・そのうちの一丁が、完全に修復された状態で目の前に存在している。
奇抜で派手な装飾もあってか、キンジは妙に興味を惹かれる。

「時代が追い着いた。そう判断したから・・・・母上は修復に踏み切ったんだ。それともう一丁・・・自動式連発拳銃（オートマチック）も一応修復されて、今は別の奴が持ってる」

「時代？一応？」

キンジは刻桃の言葉に引っかかりを覚える。

「見た所完璧に修理されてるようにも見えるが・・・どこか不具合でもあるのか？」

「普通に使う分には不具合はないけど・・・・強いて言うなら、誰もこの『銃』の本当の姿を・・・壊れる前の姿を見た事がないんだ。銃身の形状や装飾だって、俺の先祖が遺したヘタクソな絵を参考にして再現された物だし・・・実際はもっと別物だった可能性もある」

「先祖って・・・・そいつが造られたのって、一体何十年前なんだ？」

キンジが何気なく聞いた。

仮に骨董品だと仮定して、目の前の銃が造られたのは５０年ぐらい前だと考えていたが・・・・刻桃の口ぶりから、さらに昔である可能性を想像する。

回転式拳銃の歴史は長い。特に名銃と名高い『コルト・シングル・アクション・アーミー』・・・通称『ピースメーカー』は、アメリカ西部開拓時代から使用され、現在でも生産が続いてるほどである。

その関係上、もしかしたら百数十年前の骨董品かもしれないと考えたが・・・・

「まぁ、そこは置いとけ。それより・・・・一つ聞きたい事がある」

「・・・・置いとくなよ。で、なんだ？」

突っ込みどころ満載の『銃』への疑問は一先ず置いといて・・・・キンジは頭を切り替える。『銃』を所有する刻桃本人も知らないか・・・・知っていても話すつもりがないのかもしれない以上、考えても無駄だと判断したからだ。

刻桃はノートパソコンの電源を入れ、鞄から武偵高の各種資料を取り出しながらキンジに尋ねる。

「・・・・・・武偵高の依頼って、どうやって受けるんだ？」

・・・・・・・・・・

武偵高生徒は一定の訓練期間の後、民間から有償で依頼を受ける事ができ、報酬として依頼難易度に見合った金銭と単位が与えられる。

キンジもつい最近『猫探し』の依頼を受け、報酬として現金１万円と０．１単位を手に入れたばかりであった。

刻桃は既にアメリカで武偵として活動していた事もあって、訓練期間免除で依頼を受ける事も可能だった。

しかし・・・刻桃は武偵高に転入してきてからまだ日も浅く、勝手を把握しているとは言い難い。

そこでキンジ支援の元・・・ネットを利用して武偵高が斡旋する

依頼の中から、短時間で金や単位になりそうな仕事を探した。

それから約1時間後。

「期間半日の素行調査。報酬は2万円と・・・それから0．2単位か。最初だし、時間もないから・・・これでいいんじゃないか？」

キンジが、パソコンを操作しながら聞く。

「いかにも探偵っぽい仕事だな。他に良さげな仕事もないし、これでいいか。このあとはどうするんだ？」

「お前が武偵高で依頼を受けるのは初めてだから・・・探偵科に行って必要書類を提出後、依頼を受理してくれればいい。今からじゃ・・・ギリギリだな。どうする？」

時刻は午後8時を過ぎた所。もうギリギリの時間である。

「サッサと書類書いて、とっとと行ってくる！」

刻桃はキンジに教わりながら書類に必要事項を記入。誰かに先を越されないうちに依頼を受理すべく、大急ぎで探偵科へと向かった。

翌日。

朝５時に起きた刻桃は、依頼に向かうべく、寝息を立てるキンジを起こさないよう部屋を出た。

因みに・・・依頼ということであれば、授業は堂々と休む事ができる。流石は武偵高だ。

調査対象は・・・とある喫茶店のウエイター。依頼人はその恋人。いわゆる・・・浮気調査である。

依頼人が言うには・・・・彼は最近店に来るようになった知らない女性と親しくしており、その現場を押さえるか・・・出来れば関係を探ってほしいという物だった。

刻桃は、そのウエイターの業務時間である朝７時～昼１２時まで、『受験勉強する学生』装って喫茶店に入り浸って監視。

隙をついてウエイターに盗聴器も取りつけ、教科書を読みながら彼の行動から目を・・・・言動から耳を離さなかった。

５時間に及ぶ調査の結果・・・・ウエイターは白だった。

依頼人が知らない女性というのは・・・・ウエイターの自身の妹で

あり、最近田舎から上京してきたからいろいろ世話を焼いていたのだと言う。
ウエイターとその妹が親しそうにしていた時の写真。それから、その時の会話内容もしっかり録音。本当に家族かどうか、念のため裏付け調査も行った。これなら依頼人は何の文句も言わないだろう。

依頼を無事に完了した刻桃は・・・ついでに報告書も仕上げ、学園島へと帰る事にした。

夕方、学園島。

刻桃が帰りついた時・・・学園島は大騒ぎとなっていた。『武偵殺し』の模倣犯がまた現れ、今度は・・・・武偵高生徒が乗ったバスが乗っ取られたというのだ。

手口はキンジが遭ったチャリジャックとほぼ同じ。バスに減速すると爆発するタイプの爆弾を仕掛けられ、機関銃装備のオープンカーが追走してくると言う物だった。

一歩間違えば大惨事という危機的状況だったが、不幸中の幸いと言

うべきか・・・・事件を誰よりも早く察知した武偵高生徒数名によって、犠牲者は一人も出さずに解決された。

しかし、バスの乗員乗客と、事件解決に貢献した武偵の一人が負傷。武偵病院に運び込まれたという。

その中には・・・・刻桃が知る名前もいくつかあった。

武偵病院。

「刻桃、今までどこ行ってたんだよ！また例の事件の模倣犯が現れて、俺達・・・・キンジもアリアも大変だったんだぞ！！」

武偵病院に着いた途端、刻桃は武藤に両肩を掴まれてガクガク揺さぶられる。

「武藤君、落ち着きなよ。鑢君に当たっても何にもならないじゃないか」

「うっ・・・・すまん」

不知火が武藤を諌める。

しかし、その顔はいつもの爽やかさが半減しており、否が応でも事態の深刻さを感じさせる。

「詳しい事は周知メールに書かれてたと思うけど・・・読まなかったのかい？」

「悪い。依頼遂行中だったから・・・電源切りっぱなしだった」

刻桃は携帯電話の電源を入れる。

同時にメールが何通か着信される。その中には、バスジャックの最新情報が書かれた周知メールもあった。

「それで・・・・キンジとアリアは？今回の事件、アイツらのパーティーが動いたって聞いたけど・・・・」

「遠山君なら無事だよ。ただ・・・神崎さんが負傷して、念のため1日だけ入院する事になったんだ。今、遠山君が行ってるハズだから、鑢君も行ってみるといいよ」

「わかった。ありがとな、武藤！不知火！」

「おう、さっきは・・・悪かったな！」

「遠山君にもよろしくね」

武藤、不知火と別れた後・・・刻桃は武偵病院の受付でアリアの病室を聞き、周知メールを読みながらそこに向かった。
リアル貴族だからなのか・・・アリアはＶＩＰ用の個室を取っており、同じような病室がひしめき合う中でも迷うことなく辿り着けた。

病室には小さなロビーがあり、お見舞いと思われるカード付きの白百合が飾られていた。

「・・・『レキより』？」

白百合を持ち上げながら、カードに書かれた字を読む。多分、白百合の贈り主の名前だろう。

ベッドルームのドアの向こうからは、何やら話し声が聴こえる。

考えるまでもなく、個室の主であるアリアと・・・見舞いに訪れたキンジだろう。

2人っきりにしとくべきか。堂々と入るべきか。

そんな事を考えていると・・・

「あたしに比べれば・・・・・アンタが武偵辞める事情なんて、大した事じゃないに決まってるんだから!!」

ドアの向こうから聴こえた・・・・一際大きなアリアの叫び声。

刻桃は・・・・白百合を元の位置に戻し、ドアを開けた。

室内には・・・・

「何よ・・・・何なのよっ」

頭に包帯を巻き、ベッドの上で上半身を起こすアリアと。

「・・・・・・っ！！」

ベッドに片手をつき、今にもアリアに掴みかかりそうなキンジの姿があった。

どう見ても異常な事態。

「・・・・・ったく、何やってんだ！」

「「刻桃！？」」

「いいから離れろ！ここは病院だぞ！」

刻桃は２人の間に割り込み、強引に引き離した。

誰が何を言ったか。何を言われたか。ついさっき来たばかりの刻桃は、それを知らない。

聞きたい事が色々あったハズなのに、険悪な空気に気圧されてなかなか切り出す事も出来ない。

どっちでもいいから何か話してくれないか。そんな事を考えていると・・・

「とにかく、俺はもう武偵なんか辞めるんだ。学校も来年からは一般の高校に移る。聞いてるのか？」

深刻な表情で・・・キンジは言い切った。

「わかった・・・わかったわよ。あたしが探してた人は・・・アンタじゃ、なかったんだわ」

今にも泣き出しそうな顔で・・・アリアはその言葉を聞きいれる。つい先日。成り行きとはいえ、ゲームセンターでハイタッチした時の姿はどこにもなく、お互いに・・・決して交わる事のない、ドス黒い感情をぶつけ合っているようにも見えた。

夜道。

・・・・・・・・・・・・・

あれから・・・刻桃はキンジに連れ出され、寮へと向かって歩いていた。
刻桃としても、あの状況で・・・アリアに何と言って言葉を掛けるべきか皆目見当がつかなかった事もあり・・・ある意味渡りに船となった。

そして・・・・刻桃が聞くまでもなく、キンジは事件の詳細を話し始めた。

数日前・・・キンジがアリアに条件付き降伏をした当初の甘い目論見は崩れ去り、バスジャックというとんでもない大事件が『強襲科に戻ってから最初に起きた事件』となってしまった。
それでも最初の1件は1件に違いない。アリア指揮の元、キンジと・・・それから狙撃科から引っ張ってきた女生徒を加えた3人パーティーで事件に挑んだ。

「結果から言えば、レキ・・・その狙撃科の女生徒が機関銃装備のオープンカーを狙撃で停止させ、バスの車体の下の仕掛けられた爆弾も狙撃で剥がしてくれたんだが・・・」

元々暗かったキンジの表情がさらに暗くなる。

「アリアが・・・アイツが怪我したのは、俺を庇ったせいなんだ。銃弾は額を掠めただけだったが、あの傷は・・・どうしても痕が残ってしまうらしい」

「・・・そんな事が。それで・・・・・病室で喧嘩してたのか」

「いや、違う。アリアは・・・・今回の事件で何も出来なかった俺に失望して、さっき聞いた通り奴隷からも開放もしてくれた。これは俺が望んだ結末でもあるんだが・・・・アイツが相手だと冷静になれなかった。アイツの身勝手な態度や言い分が我慢できなかった。『時間が無い』とか言われても意味わかんねぇよ」

キンジは・・・刻桃から顔を逸らす。

刻桃も、アリアにどんな都合があるかは知らず、言葉を返す事ができない。一応紅龍に調査依頼を出してはいるが、まだ報告を貰っていないからである。

――――アンタが武偵辞める事情なんて、大した事じゃないに決まってるんだから!!――――

しかし、キンジが心乱された理由は・・・あの時のアリアの大声から、容易に察する事が出来た。

それは・・・

第１１話（後書き）

鑢家の呪い。汽口慚愧が指摘したように、武道の達人は多少慣れない条件を強要されても、『戦え』と言われればある程度の戦いは出来る物。
なのに、武器を持っただけで極端すぎるほど弱くなったり奇妙な行動をしてしまったり・・・・当初は慚愧も全く信じられないほどでしたし。

緋弾のアリア・・・アニメと言う映像がある状態で見て、改めて思いました。白雪・・・黒い上、怖い。あれじゃ下着の色と合わせて『黒雪』じゃん。既成事実ってなんだよ。この小説での彼女の立ち位置、どうしよう。俺程度の執筆能力で、彼女の危ない魅力を引き出せるのだろうか。

この小説にはあんま関係ない事ですけど・・・さよなら伊達さん。
また会う日まで。

今週の仮面ライダーオーズは、伊達から後藤へとバースが受け継がれた劇的ストーリー。
伊達さんの安否もかなり不安でしたけど、終わりよければすべてよ

し。どうにか助かった上、鴻上ファウンデーションでのこれまでの稼ぎや、ドクター真木から手に入れた前金によって、ちゃっかり目標金額を稼ぐことにも成功。抜け目ないな・・・・。

後藤も・・・滅茶苦茶に荒々しい派手な初陣を披露。これからどうなる？

バースの主題歌、絶対ＤＶＤ付き買います。

第１２話

貴方にとって、最も憧れる武偵とは誰ですか？

もしも刻桃が・・・誰かにそう聞かれた場合、すぐに名前を出せる人物が２人いる。

一人は、自らの母親にして師匠・・・虚刀流十八代目当主・鑢風花。

自分以上に鋭く研ぎ澄まされた一本の日本刀・・・・虚刀流の使い手。この７年、彼女が武偵として戦う所を最も間近で見てきた事もあり・・・・知る限りでは『最強の武偵』と言い切ってしまっても過言ではなかった。

そしてもう１人名前を挙げるとしたら・・・・・今度は、キンジの兄である『遠山金一』の名前が浮かぶ。

数年前・・・旅先で彼と再会した時に目にした戦闘能力は、今でもしっかりと目に焼き付いている。色々と・・・・ヘタすれば存在そのものが紛らわしい男ではあったが、母である風花も『本気の金一君とだけは戦り合いたくない』とまで言い切る程であった。

刻桃にとって・・・風花と同等に目標と言える存在。風花を越えるためにも・・・・いつかは彼と戦いたいとも考えていた。

だが・・・それは叶わぬ願いとなってしまった。

去年の暮れ頃・・・日本船籍の客船が沈没し、乗客1名が行方不明となり・・・死体も発見されないまま捜索は打ち切られた。

この時死んだとされたのが・・・船に乗り合わせていた武偵、遠山金一だった。

警察の発表によれば、乗員乗客を避難させるのに手間取ったせいで、自分が逃げ遅れてしまったのだそうだ。

当時アメリカにいた風花と・・・刻桃も・・・彼の死を悼んだ。命懸けで一般人全員の命を救った英雄として、彼の名前をその胸に刻み込んだ。

しかし・・・それから約1カ月後。たまたま日本のサイトを見ていた時、風花と・・・刻桃は知ってしまった。日本で・・・金一の死がどのように扱われたかを。

訴訟を恐れた客船のイベント会社と、それに焚きつけられた一部の乗客が金一を激しく非難、中傷していたのだ。『船に乗り合わせていながら事故を未然に防げなかった無能な武偵』・・・と。

冷静に考えれば、無責任な八つ当たりもいい所である。

そもそも・・・事件が未然に防げれば警察や武偵の必要性は大幅に減る。

それが出来ないからこそ、この世には警察だけでなく武偵まで存在しているのだから、恨まれるのは明らかに筋違い。誰も死んでいないのだから尚更である。

しかし世間はそうは見なかった。テレビで・・・ネットで・・・週刊誌で・・・ありとあらゆるメディアで金一を中傷した。

――俺は・・・来年、一般の高校に転校する。武偵そのものを辞めるつもりなんだ――――

再会したあの日。キンジの言葉を・・・刻桃は否定しなかった。愛する家族が死んだと言うのに、武偵だったというだけでその家族の全てを否定されれば・・・武偵と言う仕事にも嫌気が差すだろう。そう考えたからだ。

――――あたしに比べれば・・・アンタが武偵辞める事情なんて、大した事じゃないに決まってるんだから！――――

アリアがキンジにぶつけた言葉。

元々僅かに存在していたと思われる亀裂を広げるには十分な一言だったろう。

そして・・・これだけは理解した。

キンジはもちろんの事・・・アリアもまた、他人には理解できない何かを背負っている。そして、背負いながらも・・・・2人は正反対の方向に突っ走っている。逃げる道と立ち向かう道を・・・・悲壮なほど真逆に。

・・・・・・・・・・・・・・・

今日は休日。

日曜という事もあり・・・キンジと刻桃は、朝食を食べながら朝の特撮番組を観た後・・・部屋中の掃除に没頭した。

刻桃は、元々アリアが残した銃痕やら刀傷やらを補修するつもりだったのだが・・・キンジの場合は、そうでもしてなければ・・・・アリアの事が気になって仕方ないといった感じだった。

数時間後・・・掃除が一段落した頃。

「ちょっとクリーニング店まで行ってくる。帰りはいつになるかわからないから、昼はいらない」

そう言って・・・キンジは外出。刻桃は冷蔵庫を開けると、あり合わせの材料で昼ご飯を作り始めた。

「・・・・・・・・・・・・」

刻桃には家族を失った経験がない。父親は物心ついた頃から既に存在してなかったため、刻桃の主観で言えば失った内には入らない。しかし・・・親しい誰かが死んで、その人の死を愚弄される辛さは・・・そう、身を持って知っていた。だからこそ、『武偵を辞める』というキンジの答えを否定する気にはなれなかった。

「だけど・・・・アイツ、絶対迷いまくってるな」

武偵云々はともかくとして、アリアとコンビを組み続けるか・・・・否かを。

とは言っても、今回の件・・・・少なくともパートナー云々について、キンジに手を貸すような事をするつもりはなかった。面倒だったことと、アリアの事があまり好きじゃないのもあったが・・・・これはあくまで、チームを組んでいた2人の問題。冷たいようでも結局の所はなるようにしかならない。ヘタに関わって余計拗れでもすれば決まりも悪い。

それでも出来る事があるとしたら・・・・友として悩みを聞いてやるか、迷った時に背中を押してやるかぐらいである。

ピンポーン♪

部屋の呼び鈴が鳴った。

刻桃は調理を中断。玄関へと向かってドアを開ける。

「はろー、モモ君、一昨日振り～♪」

いつもの改造制服を身に纏った峰理子が、ご機嫌な笑顔で立っていた。

「理子・・・何の用だ？」

「モモ君のいけずぅ～。せっかくこんな美少女が来てあげたのに、反応薄いぞ？ここからは理子ルートに突入なのですよ♪」

「・・・ま、入れ。キンジみたく美味しい反応はしてやれないけど、茶ぐらいは出すぜ？」

「はいはーい♪」

刻桃の後に続く形で理子は部屋に入る。
リビングまで案内するとソファーに座らせ、緑茶を出してやる。
刻桃はその向かいに座り、出来上がったばかりのチャーハンを食べながら緑茶を飲む。
全部食べ終わり、緑茶のおかわりを用意した後・・・・改めて本題に入る。

「で、結局何の用なんだ？」

「釣れないなー。そう言えば・・・モモ君って、普段はいつも着流しなの？」

理子は刻桃の格好を見定めながら聞く。

「ん？ああ。一応防弾仕様だから、武偵活動には支障ない。それに今日は休日なんだし、どんな服着てようと俺の自由だ」

「あははっ。それには同感。もっとも～、理子はいっつもお気に入りの格好しかしないけどね～♪」

その場で立ち上がり、自慢の改造制服を自慢するかのように、理子はくるりと一回転。

「で、用件は？」

刻桃は顔色を一切変えずに聞く。

「ぶー・・・モモ君のいけずぅ」

理子はソファーに座り直す。

「ホントはキー君にも話したかったから、居てくれた方が手間かからなくてよかったんだけど・・・特別にモモ君に先に教えてあげる。実はね、理子・・・チャリジャックからバスジャックまでの関連情報を引き続き集めてるの」

「・・・なにか面白い事でもわかったのか？」

「警視庁のデータをハッキングした時に面白い資料見つけたんだけど・・・過去に『武偵殺し』に遭った人って、バイクジャックとカージャックの2人だけじゃないかもしれないんだって」

「・・・どういうことだ？」

刻桃は聞きかえす。

「うーん・・・ここから先はまだ調査中。まだそこまで潜りこめて

ないし・・・ガセネタの可能性もあるから裏が取れたら教えてあげる。それより・・・モモ君が使う流派って、何て言うんだっけ？」

しかし理子は、自分が始めた話しだと言うのに話題を逸らす。

「・・・・虚刀流の事か？」

「そうそう、それそれ♪変わってるよねー、刀を使わないのに剣士って。試しに色々調べてみたんだけど、戦国時代から続く流派なんでしょ？」

「まぁな。俺は・・・その十九代目って事になる。今は母上、鑢風花が十八代目当主をやってるけどな」

風花の名前が出た時、理子の口元が僅かに・・・本当に僅かにツリ上がった。

「風花さんかぁ～。凄腕の武偵って聞いてるよ。彼女が今関わってる事件って、確か・・・・・」

次の瞬間、理子は・・・・

「四季崎記紀が造りし１０００本の変体刀の中でも、異端中の異端・・・『完成形変体刀』の蒐集。もしくは破壊・・・だよね？」

刻桃にとって驚愕の一言を発した。

「お前・・・・なんで・・・・・それ・・・・」

動揺を隠せなかった。風花が追っている事件は・・・・表向きは誰も知らないハズの事。鑓家と真庭家・・・・その一部関係者しか知りえない話。それこそ、日本警察のコンピューターをハッキングした程度じゃ出てこない情報のハズ。

そもそも・・・・『完成形変体刀』の存在事体、都市伝説どころか・・・歴史の表舞台には殆んど出ていない。なのに・・・・何故理子はこの場面でそんな話を出した？

聞きたい事がたくさんあるハズなのに、なかなか言葉が出てこない。

「あはは♪モモ君が驚いた顔・・・・初めて見ちゃった。アリアに発砲されても平然と反撃してたのに、これはもう・・・・レアだね、レア♪」

理子は・・・・刻桃の正面から隣に移動し、その腕にしがみついた。突然の事に成す術もなく、刻桃はソファーに押し倒される。

「お前・・・・・どういうつもりだ。刀の事といい・・・・・」

「ふぅーん。こんな美味しい状況なのに、第一声が『変体刀』のこと？モモ君って、キー君よりはラブには敏感そうなのに・・・・・これってもうイベントシーンなんだよ？」

ツーサイドに結った理子の髪が、刻桃の身体を覆うように包み込む。

「ねぇ、刻桃ぉ・・・」

ここで理子は・・・刻桃の事を初めて名前で呼んだ。
そのまま・・・熱く、切ない囁きと共に、全身をすりよせる。

「せっかく2人っきりになったんだし・・・ゲームみたいな事・・・
・してもいいんだよ?」

「・・・あいにく、俺は格闘アクション系やＲＰＧしかプレイしない」

「もう・・・わかってるクセに。男の子なんだし、こんな状況になって・・・何も感じないわけないよね?ねぇ、刻桃・・・・」

熱い吐息と一緒に・・・

「理子に惚れても・・・・・いいんだよ？」

耳元に息を吹きかける。

そしてその言葉は・・・奇しくも数百年前、刻桃の先祖にして虚刀流歴代当主最強と呼ばれた剣士・・・鑢七花が、白髪の奇策士に誑かされた時と同じ台詞だった事は・・・・誰も知る由がない事実である。

「・・・・っ！？」

刻桃はピクリと身体を強張らせると、鼻先数?先にある・・・・理子の顔を見据える。

「・・・実を言うとだ。お前の事は・・・・初めて声を掛けられた時から気にはなっていた」

「・・・・・・・そうだったの?」

「だから・・・・・・一つ聞かせろ」

今度は・・・・

「お前は・・・・・」

刻桃の言葉に・・・・

「そのアホみたいな笑顔に下に、どんな闇を秘めている?」

「・・・・・え!?」

理子が驚く番だった。

ついさっきまで妖艶な笑みを浮かべていた理子は・・・隠していたハズの心の底を覗かれた事に心を乱され、笑顔の仮面を被る事も忘れて目を見開く。

「な、なんのことかな~?理子hむぐっ・・・・!?」

理子は何かを言おうとする。しかし、最後まで言えなかった。

「・・・んぅ・・・う・・・」

刻桃が・・・理子の頭を両手で固定し、その唇を自らの唇で容赦なく塞いだからだ。

「むぐ・・・うぅん・・・・」

口を塞がれた理子は・・・色っぽい声を出しながら困惑する。

いくら誘ったとはいえ・・・比較的落ち着いた雰囲気の刻桃が・・・

まさかここまで誘いに乗ってくるとは思わなかったからだ。

「・・・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・！？」

刻桃の瞳に悪寒を覚える。

まるで獣のように貪欲なその目に、身の危険を感じてしまう。

「・・・・・・・んっ」

理子の目尻に涙が浮かぶ。

このままだと・・・・このままでは・・・・このままじゃ力ずくで・・・

・

「・・・・ここまでだ」

「ぷはっ！はぁっ・・・・はぁっ・・・・・え？」

理子の予想に反し・・・あっさり唇を離す。

そして刻桃は、身体に覆い被さっていた理子の身体を力ずくで押しのけた。

理子はゴロリと転がり、ソファーから落下。『きゃうん！？』と悲鳴を漏らした後、戸惑った様子で体勢を立て直す。

「・・・・後悔したか？」

「モモ・・・・君？・・・・その・・・・しないの？」

理子は、拍子抜けとも・・・安堵とも取れる表情で尋ねる。

「お前の事は嫌いじゃないけど・・・・愛してもいない女を抱くほど、俺は暇でも悪趣味でもねぇよ」

刻桃は・・・理子の顔を見ずに冷たく言った。

「お前にどんな企みがあって、なんであんなこと言ったかは知らないけど・・・・火遊びは程々にしとけ。何の覚悟もなく迫ったりしたら、それこそ痛い目見る事になるぜ?今の・・・お前みたいに」

「・・・・・・うぅ」

「唇は授業料代わりだ。訴えたいなら勝手にしろ。だから今日は・・・・とっとと帰れ」

「え!?でも・・・・・刀h『帰れ!』・・・ひゃ、ひゃいっ!?」

瞳をツリ上げ、怒鳴る刻桃。

理子はビクリと震えながら敬礼。脱兎のごとく玄関へと向かい、部屋の外に出て行った。

・・・・・・・・・・・・・・

「はぁ・・・・はぁ・・・・」

刻桃の部屋を出た後・・・・理子は全力疾走で寮の外へと飛び出した。
そして・・・唇に軽く振れる。ついさっき、『授業料代わり』に容赦なく・・・・力ずくで・・・あっさりと奪われた唇に。

「・・・・・・刻桃ってクールそうなのに、意外と情熱的で大胆だったんだね」

キスの感触を思い出す。
その度に顔が綻び、熱くなってしまうが・・・・いくら普段『おバカな理子』を演じているとは言っても、こんな顔は周りに見せられ

ない。冷静沈着に・・・・クールダウンするよう努める。

「ちょっぴり予想外な事もあったけど・・・・多少なりとも『種』は植え付けられたし、結果は上々かな。次はキンジに・・・」

――――お前の事は嫌いじゃないけど・・・・愛してもいない女を抱くほど、俺は暇でも悪趣味でもねぇよ――――

ふと、刻桃の言葉が思い出された。

「んー・・・気分が乗らないから、明日でもいいかな。決行当日でも余裕で間に合うんだし。今日はもう・・・やめよっ！」

気を取り直した理子は・・・・『近々決行予定の計画』を頭の中で反芻しながら、女子寮へと帰って行った。

第１２話（後書き）

今回のストーリーは、アリアとキンジが神崎かなえと面会していたのとほぼ同じタイミングの出来事。

何やってんだ刻桃。何やらせてんだ俺。と、自分のキャラに自分で突っ込みたくなった今回。一応はフラグ立った・・・んでしょうけど、この後の展開を考えればそれはあやふやで危ない物。戦いにおいても、アリア、キンジ、刻桃と・・・個々の実力はともかく、現時点ではチームワークは絶対バラバラの空中分解すれすれ状態。そこをどうするのか。そして、完成形変体刀も絡んでくるので刻一刻と迫る戦いもお楽しみに。

先日、『ゴーカイジャー　ゴセイジャー　スーパー戦隊１９９ヒーロー大決戦』観てきました。

スーパー戦隊達は元より、シグナルマンや大剣人ズバーン、特にリオ、メレなど・・・微妙に違うんじゃないか?と突っ込みたくなるような人達も助っ人として参戦。かつての戦士達も一部出演、そして、集結した巨大ロボ達の必殺技の乱れ打ち。

特に・・・『ＲＶロボ』の『激走斬り』は待ってましたって感じで。それにしても・・・ＴＶ版にデカレンジャーのジャスミンが出た時も思いましたけど・・・ウメコさんも殆んど変わってねぇ。放送終了から何年も経過してるのにすげぇ・・・とか思いました。

かつて、放送前のゴーカイジャーに対し、ディケイドのパクリ・・・という負の印象を抱いていたあの日の俺を否定します。

第１３話

――――これで私達、友達・・・・だね♪――――

これは・・・・刻桃にとって大切な記憶。

――――ねぇ、刻桃。奴隷は・・・・どこまで行ってもずっと奴隷のままなのかな。嫌だよ・・・・そんなの――――

同時に・・・・

――――あはは、もう誰も私には逆らえない。この力が・・・・私を変えてくれた!!私を拒絶するものは全部破壊してやる!全部・・・・全部・・・・全部!!――――

最も忌まわしく、辛い記憶。

――――どうしたの？刻桃。いいかげん本気でやらないと・・・・・
うっかり殺しちゃうぞ？――――

完成形変体刀所有者との・・・生死と刀を賭けた戦いの記憶。

そして・・・

――――ありが・・・・・と、私を止めて・・・・・くれ・・・・・て。
これで・・・・・・・やっと・・・・・・・――――

生涯忘れられない・・・・運命的な出会いと、悲しい別れの記憶。

刻桃が一生背負うと決めた・・・・・罪。

・・・・・・・・・・

「・・・・・チッ」

理子が出て行った直後。
刻桃は再びソファーに寝転び、不愉快そうに舌打ちする。

そして、ついさっきの・・・・理子の身体の・・・唇の感触を思い出す。

普段はクラスのムードメーカとして、ご機嫌そうにヘラヘラ笑う理子。

そんな彼女から感覚的に感じ取った響鳴感覚。そして・・・・・・とんでもない腹黒さと・・・・・瞳の奥底に潜む暗闇。

得体の知れない何かに惹かれ・・・・・思わず必要以上に誘いに乗ってしまう形となってしまった。

本当なら適当にあしらいつつ、刀の情報だけを根掘り葉掘り絞り取れるだけ絞り取るのがベストだったというのに。

そして同時に・・・・昔の事を少しだけ思い出してしまう。

旅先で出会った、１人の少女の姿を。

理子とあの人は・・・・全然似てないのに、何処か重なってしまう。

彼女はいつも・・・・笑顔を忘れなかった。誰からも好かれ、常にみんなの中心にいた。

だが、刻桃は感づいていた。その笑顔の下には・・・・とんでもない闇が、とんでもない憎しみが蠢いていた事を。

その事にはあえて気づかない振りをした。気のせい、勘違い、そう思い込む事にした。

あとから考えたら・・・・それが間違いだった事にも気づかずに。

「・・・・・もしもあの時、気づかない振りなんかしてなければ・・・・俺はあの人を・・・・・あの人を殺さずに止める事ができたかもしれないのに・・・・・な」

もう何度目かもわからない・・・後悔と懺悔からくる、深い、深い、深い溜息。

胸がギュッと締め付けられ、目頭が熱くなる。

あの人の時と同じ・・・奇妙な感覚を理子から感じてしまい、妙に放っておけなくなったというか何と言うか・・・・

《～♪～♪～♪～♪～♪》

充電中の携帯電話が鳴り出した。

朝観た特撮番組に影響されてダウンロードしたばかりの曲が流れる中、刻桃はダルそうに身体を起こし、乱暴な手付きで・・・

「誰だ。大した用事じゃないなら、すぐ切るぞ！」

不機嫌さ丸出しで電話に出た。

《・・・やぁ。ご機嫌斜めだね、モモちゃん。女の子にでも振られたかい？》

電話の向こうにいる真庭紅龍は・・・戸惑いつつも、しっかりからかいの一言も入れる。

こう言っとけば、いつもの調子で否定でもしてくるだろう。そう思ったが・・・

「お前の推測を否定・・・したいけど、今日ばかりは当たらずとも遠からずだ」

《な・・・まさか・・・本当なのかい？》

あっさり肯定された事に、紅龍は驚く。

《相手は・・・この前言ってた『神崎・H・アリア』って子かい？》

「・・・・無駄口ばっか叩いてると、ホントに斬るぞ」

《字が違うよ！？》

「・・・・ああ。ワザとだ」

刻桃は携帯電話を・・・今にも潰さんばかりの握力で握る。
ミシミシミシ・・・と、携帯電話が軋む音が電話の向こうにも伝わり、紅龍は冷や汗を流す。

《ま、まぁ・・・今回電話したのは、前にキミが依頼してくれた・・・『神崎・H・アリアの素性調査』についての報告さ》

「・・・ああ、そういやそうだったな」

《報告の前に聞いておきたい事があるんだが、キミのその携帯電話は・・・大丈夫かい？》

紅龍の意味深な言葉。

「・・・傍受の心配してるなら大丈夫だ。そっちのセキュリティーが破られてなければ、この会話が漏れる事はない。なんかマズイのか？」

《まぁ・・・念のため聞いてみただけさ。気にしないでくれたまえ。『刀』の情報は流石にまだ掴めていないが、結論から言えば・・・神崎・H・アリアを調べているうちに、その素性と目的は明らかになった》

「・・・・流石」

刻桃は・・・紅龍の言葉を受けて、呟く。
真庭紅龍は、幼馴染として・・・仕事仲間として・・・・最も付き合いが長い存在。長所の一つである情報収集能力において、少なくとも刻桃の知り合いの中では紅龍の右に出る者は1人としていなかった。

《彼女、とんでもない事に首を突っ込んでいるよ。いや、この場合は巻き込まれたと言うべきか・・・・》

「・・・・どういうことだ?」

《彼女の母親・・・『神崎かなえ』はいくつもの殺人事件の罪に問われ、現在は日本警察に捕らえられているんだ。最近、キミが居る学園島でも『武偵殺し』の模倣犯が現れているだろう?そもそも・・・元々の『武偵殺し』も、彼女の仕業とされているんだ。そして、早くも二審まで有罪判決を受けている》

しかし・・・と言って、紅龍は言葉を続ける。

《僕は・・・何者かによってスケープゴートにされたものと考えている》

「随分突飛な話しだな。・・・・根拠は?」

《あからさま過ぎるぐらいに証拠が揃い過ぎているのさ。それに、彼女が問われている罪の中には・・・あの、完成形変体刀の所有者、『ヨロイ』の罪も含まれている。つまり・・・》

「この事件・・・大なり小なり『イ・ウー』が絡んでいる可能性が高いってことか。あの野郎・・・・！」

ヨロイの名と、『イ・ウー』という組織名を聞いた途端、元々機嫌がいいとは言えなかった刻桃は・・・さらに表情を歪める。

《そうさ。だが、それにもかかわらず、国家権力の狗共はロクに調べもしないで裁判を進めている。どこからか圧力が掛かってる可能性も否定できないが・・・最高裁も近いし、今のままでは無罪を勝ち取る望みは薄いだろう》

「罪状はいくつもの殺人って言ってたけど・・・もしも有罪判決受けた場合、刑期はどれぐらいになるんだ？」

何気なく聞く。

《高裁での量刑は・・・・９６４年といったところかな。その中のざっと１００年分がヨロイの罪さ》

紅龍はそっけなく言ったが・・・刻桃はゾクリと背筋が凍った。９６４年。つまりは・・・事実上の終身刑。一生自由の無い檻の中

なんて、もしも自分だったら・・・耐えきる自信が無い。

刻桃にとって『自由』こそが最高のお宝とするならば・・・最悪の罰は、『束縛』の二文字なのだから。

《けど、突破口が無いわけじゃない。もしも・・・もしも『模倣犯』とされている人物を、『本物の武偵殺し』だと証明できれば、神崎かなえの罪は一気に８４２年に減刑される上、最高裁も年単位で延期できる。この意味が・・・わかるかい？》

「アリアは・・・自分の母親のために戦っている。時間が無いって言ってたのは・・・・最高裁が近いからか。我儘な女だけど・・・・１００％利己的な考えで戦ってたわけじゃなかったんだな」

《強引なやり方ではあるが・・・時間が無い以上は、真犯人を引っ張ってくる方が最も手っ取り早く、合理的な手段でもある。武偵らしい実に荒っぽい行動だ》

「・・・・・・・・」

少しだけ気分が滅入る。

望み通り、アリアの目的は知ることができた。

時間が無い。その言葉の意味も・・・今なら頷ける。

だからこそ、形振り構わず強引な態度でキンジをスカウトした。目

的を手早く達成するために必要な手駒・・・・・奴隷として。

ーーーーアイツこそ、普段から自分に嘘ついて無理をしてるんじゃないかって思ったんだ。何かが、本当のアイツを歪めてるんじゃないか・・・って一一一一一

前にキンジが言っていた言葉を思い出す。

アリアを歪めているなにか。

もしも本当にそんな物が存在するのなら・・・・・『神崎かなえ』の件である可能性が高い。

家族が・・・大切な人が言われ無き罪に問われていれば、誰だって冷静じゃいられなくなる。既に捕縛され、事実上の終身刑を言い渡される直前であれば尚更である。

これまでの言動と行動だけで、『神崎・H・アリア』という人間の本質を理解した気になっていた、自分自身の浅はかさを否定したく

なる。

考えすぎかもしれないが・・・もしかしたら『奴隷』という言葉も、相手に求める能力や期待のハードルを心理的な部分だけでも下げるために、気を遣って言い換えたのかもしれない。

「・・・・これは流石に考え過ぎか？」

《何に対して1人乗り突っ込みしているのかは知らないが・・・次の報告に行きたいと思う。そう・・・彼女の家系についてだ》

「？・・・・・あ、ああ」

さっきまでに話が刺激的だったから・・・・・すっかり忘れてた。とは、口には出さない。

刻桃は、『そっちの方は、どうだったんだ？』と、忘れていた事がバレないように聞き返す。

《まぁ、こっちの調査結果も驚かされたよ。僕は直接アリアと会った事はないが・・・調べた限りの人格・性格からは想像がつかない物だったよ。これこそ・・・事実は小説より奇なり。小説は現実より粋なり・・・・と言ったところかな》

「・・・もったいぶるな。とっとと教えてくれ」

《ああ、彼女は・・・・・・》

・・・・・・

・・・・

「・・・・・・マジか？」

刻桃は・・・声を震わせながら恐る恐る聞き返す。

《大マジさ。それにしても・・・キミがここまで驚くなんて、本当に情報通りの性格をしているんだね。神崎・H・アリアは》

「情報通りじゃない・・・情報以上だ。武偵としての腕は確かでも、性格は自己中で協調性も皆無。送った資料にも書いておいたハズだぜ」

紅龍に調査依頼を出した時・・・刻桃は理子から入手した調査資料も、紅龍のパソコンに送っておいた。それと合わせ、刻桃自身の見解もある程度書いて送っておいたのだ。

殆んどが悪口ではあったが。

《一言一句閲覧済みさ。ただ、協調性が無いせいなのか・・・アリアの手柄は、書類上はロンドン武偵局の業績とされている》

「・・・マヌケだな」

《だからこそ信じられない。彼女が・・・・・『武偵の始祖』と呼ばれる『彼』の曾孫なんて・・・・・》

「俺だって同じだ。お前の情報を心底否定したくなったのは・・・・多分今日が初めてだ」

《気持ちは察するよ。まぁ、これで報告は終了だ。役に立ったかい？》

「・・・ああ、ありがとな。金はいつものとこに振り込んでおく」

依頼に対しては正当な報酬をしっかり払う。仲間とはいえ、それが刻桃と紅龍の暗黙のルールである。

しかし、紅龍はしばらく考え込むと・・・・

《いや、今回はいらない》

予想に反して報酬を拒否する。

《それより・・・近いうちに日本に帰るから、その時に何か美味しい物でも奢ってくれたまえ》

「そんなんでいいのか？」

《十分さ。ただし、美味しい店をしっかり調べておくこと。それが条件さ。期待しているよ？》

「極めて了解。そんじゃ・・・・またな」

《ああ。会える日を楽しみにしているよ。ブツッ・・・・ツー・・・ツー・・・ツー・・・》

「ふぅ・・・・」

通話を終え、刻桃は憂いを帯びた溜め息をついた。

「さて・・・キンジにはどこまで話すか」

流石にアリアの母親・・・『神崎かなえ』の情報を話すわけにはいかないだろう。
いくらアリアが、自分自身を調べられる事を拒否しなかったとはいえ・・・これはアリア本人が自分の言葉で話すべき事。他人が口をはさむ問題じゃない。

「無難な所で・・・・アイツの家系を話すだけに留めとくべきか」

そこだけは話す約束をしてしまったし、明らかになっても特に問題はないだろう。
キンジの驚く顔が・・・ハッキリと目に浮かぶが。

だが、刻桃は・・・その日のうちに『アリアの家系』の情報をキンジに伝える事は出来なかった。

その日、クリーニング店に行ったハズのキンジは・・・夕食時になった頃、妙に思いつめた顔をしてずぶ濡れになって帰宅。
濡れた服を脱いで風呂場でシャワーを浴びると、夕食も食べずにベッドへと入ってしまったので、せっかく得た情報を話すどころじゃ

なかったからだ。

・・・・・・・・・・・・

翌日。

台風が近づいているせいで、天候が不安定な週明けの月曜日。

この日・・・アリアは欠席し、キンジはずっと上の空のぼんやり状態だった。

刻桃を始めとして・・・武藤や不知火も声を掛けるが、生返事を返すだけでどう考えても話しを聞いている状態とは言えなかった。

そして午後・・・探偵科での授業を終えた頃。

「刻桃、先に帰っててくれ。俺はちょっと寄る所がある」

携帯電話をいじりながら、キンジはお台場方面へと向かった。

刻桃はそれを見送ると、たまたま帰りが一緒になった不知火と一緒に寮への帰路につく。

「神崎さんは言うまでもないけど・・・・・遠山君も心配だね。大丈夫かな。絶対悩んでるよ?彼・・・」

他人を心配していても、全く爽やかさを損なわない不知火に・・・

「まぁ・・・・そうだろうな。だけど、なるようにしかならないだろ」

刻桃は素っ気なく返した。

「鑢君は手を貸さないのかい？」

「メンドイからパス。他人が首突っ込んでもロクな事にならないからな。それより・・・・俺にはもっと重要な事がある」

「・・・『武偵殺し』についてかい？」

「・・・・・なんでそう思う？」

刻桃がジト目で尋ねる。

「だって鑢君、今日は休み時間の度に情報科に行って『武偵殺し』の事ばかり調べていたじゃないか。何か有益な事でもわかったのかい？」

不知火は真っ白い歯を輝かせながら聞く。

「有益・・・・・ね」

刻桃は・・・情報科での行動を知られていたこと、見られていたことは特に驚かなかった。

前日、紅龍によってもたらされた情報が気になり、刻桃は独自に『武偵殺し』について調べていた。

この事件に『ヨロイ』が・・・もしかしたら『イ・ウー』が絡んでいる可能性が高いことからも、彼の行方と・・・・刀の手掛かりを探る絶好のチャンスだと考えたからだ。

情報科の生徒にいろいろ尋ねて回ったし、パソコンのモニターには関連情報をいくつも表示させていた。たまたま知り合いにその様子を見られていても、何の不思議はない。

「いいや、なんにも。前の武偵殺しのバイクジャックとカージャック。今回の模倣犯によるチャリジャックとバスジャック。前の事件と照らし合わせれば模倣犯の次の動きも予想できるかも・・・・とか思ったけど、なんにも閃かなかった」

「それは仕方ないよ。もしも武偵殺しが『3件目』の事件を起こしていれば別かもだけど・・・・捕まった以上、それもないハズだからね。模倣犯も既に2件目を起こしてしまったし、予測は難しいかもしれないよ?」

「・・・・・・・・3件目?」

刻桃の頭の中で・・・・何かが引っ掛かる。
つい最近・・・・どこかで・・・・

――――過去に『武偵殺し』に遭った人って、バイクジャックとカージャックの2人だけじゃないかもしれないんだって――――

ふと、昨日の理子の言葉を思い出した。
まだ裏が取れてないと言ってたけど・・・妙に自信満々だったのが気にかかる。

（武偵殺しと模倣犯。この2つの事件を起こした奴が同一犯だと仮定して、なんで一度乗り物が小さくなってんだ?この手の事件は、徐々に派手になってくものなのに。もしも3人目の被害者がいるとしたら・・・そいつは何を乗っ取られた?何に爆弾しかけられた?）

少なくとも車より大きい乗り物が奪われ、武偵が痛い目見たか・・・
・死んだ事件。

（それに・・・神崎かなえに罪を被せ、有罪判決もほぼ確定だってのに・・・なんでこのタイミングで再び動き出した？警察や武偵、アリアが血眼になって捜査することぐらい想像つくだろうし。どう考えたってリスクが大きい）

普通ならほとぼりが冷めるのを待つか・・・・少なくとも、神崎かなえの有罪判決が出るのを待つハズだ。
なのにこのタイミングでの再犯。『武偵殺し』と『模倣犯』が別人だからだと考えてしまえばそれまでだが・・・・

「あ、そういえば・・・鑢君は知っているかな？神崎さん・・・近々ロンドンに帰るらしいよ？」

考え事していたにもかかわらず・・・不知火の言葉は、刻桃にもしっかり届いた。

「・・・そうなのか。つーか、なんでお前が知ってんだ？」

「あくまで噂だから。それも、今の所強襲科限定のね。遅くとも数日中に日本を出発するって聞いたけど・・・」

「・・・・そっか」

アリアとはいろいろあったけど、いろいろ濃い日々を過ごしたせいか・・・・別れの言葉も交わさずにお別れというのは味気なく、それでいて僅かに寂しい。

ちょっと寄って行く所がある。と言って不知火と別れた後、刻桃は携帯電話を取り出した。帰るというなら一言くらい別れの言葉を言ってやろう。そんな事を気まぐれに思い付いたのだが・・・・

「・・・・アイツの番号、聞いてない」

早くも出端を挫かれた。

「・・・・キンジは知ってるかな」

アリアの家系の情報もまだ話してない事だし、一応電話してみよう。そう思い立った時・・・・

《～♪～♪～♪～♪～♪》

刻桃の携帯電話が鳴りだした。

液晶画面に表示されている名前は・・・・『峰理子』。

「・・・・結局、今日は一言も話さなかったんだよな」

前日・・・無理矢理キスした事を思い出す。
謝る気はサラサラなくとも・・・妙な気まずさを覚えつつ、恐る恐る電話に出る。

「・・・・もしもし」

《あ、モモ君?キー君が大変なんだよ。『武偵殺し』の情報調べてたら・・・・お兄さんで・・・シージャックが・・・・焦って飛び出して・・・・》

電話の向こうの理子は、物凄く慌てているようで・・・・何が何だか分からない。
刻桃は『落ち着け』と言って一先ず黙らせ、理子が落ち着いたのを見計らって改めて尋ねる。

「で、キンジの何が大変なんだ?」

《理子ね、わかっちゃったんだよ。武偵殺しは・・・・やっぱり3件目の犯行を起こしてたの》

「・・・・ってことは、裏が取れたってことか」

《うん。表向きは事故で処理されてて、隠蔽工作とかで分かりにくかったんだけど・・・・去年、ある海難事故で武偵が1人死んでるの。多分、名前だけならモモ君も知ってる人！》

理子の情報に・・・・思い当たる事があった。

「おい、まさか・・・それって・・・」

刻桃の頭の中で、これまで得た様々な情報が一本の線に繋がっていく。

転入初日に・・・・キンジとの会話にも二言三言出た話題。1人の武偵が死んだ海難事故。

そして、情報科で調べたバイクジャックとカージャックの時期とも・・・・タイミングが一致していた事も思い出す。

《そう、遠山金一・・・・キー君のお兄さん。多分あれ、シージャックだったんだよ》

肯定する理子。

「・・・・キンジにこの事は？」

《さっき言っちゃった。そしたら・・・・血相変えて出てって・・・・多分、羽田に行ったんだと思う！》

「・・・・羽田？」

《アリア、今日でイギリスに帰っちゃうからだと思うけど・・・・もしかしたら、武偵殺しの次のターゲットはアリアかもしれない。だって、アリアも武偵で・・・今は飛行機に乗り込んでて・・・これ、偶然じゃないかもだよね？だって、乗り物はどんどん大きくなってるんだし》

前の『武偵殺し』は・・・バイク、車、最後に客船を襲撃。

そして今回は・・・自転車とバスを襲撃。

前回の最後が客船だったと言う事を考えれば、今回・・・飛行機を襲撃する可能性もなくはない。

だが、刻桃は・・・ここで更にある事に思い当たった。

（『武偵殺し』に罪を被せられた『神崎かなえ』。その『武偵殺し』の今度のターゲットはアリア。偶然にしては出来過ぎてる。まさか、奴の目的は最初から・・・・）

つい最近知ったばかりの情報を繋ぎ合わせただけの、ツギハギだら

けの仮説が浮かぶ。
裏付けも何もない・・・強引な推測。悪く言ってしまえば、都合のいい・・・いや、都合の悪い妄想。

動機はまだわからないが・・・・『武偵の始祖』の末裔たる『H家』の人間なら、犯罪者に恨まれる理由は尽きる事が無いだろう。

しかし、これが本当なら・・・アリアだけでなく、キンジも危ない。

遠山金一を仕留めた程の敵が相手じゃ・・・・・・飛行機ごと返り討ちに遭うのが落ちだ。

「理子！」

《えっ！？なになに？》

「アリアが乗る便・・・今すぐ教えろ！！」

理子から必要事項を聞き出した後・・・刻桃は、車輌科で違法スレスレのカスタマイズが施されたバイクをレンタル。法定速度を無視して全速で羽田空港へと向かった。

バイクに乗って公道を突っ切る中・・・刻桃はある可能性を考え

る。

鑢風花が完成形変体刀を追っているという事は・・・鑢家と真庭家、その一部関係者しか知らないハズの話し。だが、敵対する者・・・つまり、『ヨロイ』とその仲間達に知られていてもおかしくはない事。

そして、最悪の予想が脳内を過ぎる。

知る限り・・・日本に来てから初めて『完成形変体刀』の名を口にした少女と、『ヨロイ』もしくは『イ・ウー』が少なからず繋がっている可能性を。

「まさかな・・・・・」

刻桃はその予感を即座に否定。考える事をやめ、空港へと向かう。そもそも本当に繋がっていたら、ワザワザ電話でアリアとキンジの危機を知らせたりはしないだろう・・・・と、考える。

だが、それこそが間違いだった。何故なら・・・・・『悪い予感』と言う物は、今も昔もこれからも、いい予感よりも遥かに当たりやすい物なのだから。

第１３話（後書き）

刻桃の罪。武偵法九条によって、武偵活動中の殺しはゆるされてませんけど、それが適用されるのは、先進国だけ・・・とだけ言っておきます。

タイミング的に、神崎かなえとの面会&お台場でキンジが理子でヒスった時の裏側での出来事・・・って位置付けです。
経緯は違えど、刻桃も『武偵殺し』の真の目的に気づき、バイクかっとビングで羽田に。次回は決戦・・・・の、序章。お楽しみに！

例によってこの小説とはあんま関係ないですけど、次代の仮面ライダー・・・仮面ライダーフォーゼの画像がちらほら。毎回世代交代のたびに度肝抜かれますけど、今回もまた例年の如く・・・・って感じです。
あのフォルムでどのような戦闘をするのか。宇宙でも活動可能なライダーは・・・・仮面ライダーカブト以来ですね。

第１４話

羽田空港・第２ターミナル。

刻桃は、車輌科でレンタルしたバイクを法定速度を無視して飛ばしたことで・・・想定していた時間よりも早く羽田空港に辿り着く事ができた。
レンタルバイクを適当な駐輪所に押しこむと、すぐさま空港のチェックインへと向かった。
そこで・・・・・

「刻桃!?お前、なんでここに・・・」

キンジが・・・空港のチェックインを通過すべく、武偵手帳についた徽章を空港のスタッフに見せている所に出くわした。

「理子からシージャックの話しを聞いた・・・って言えばわかるか？」

簡潔な説明でしかなかったが、キンジには合点がいった。
刻桃も武偵手帳を取り出して徽章を見せると、キンジと一緒にゲートを通過する。無論、武偵ということで金属探知機は素通りする。

「それじゃ、お前も兄さんの事件が『武偵殺し』の仕業だと知って・・・・」

「そうだ。そもそも・・・あの金一さんが船から逃げ遅れるなんて、おかしいとは思ってたんだ。俺も『自然の脅威』は身を持って知ってたから納得はしたけど・・・不自然だった事には違いないからな」

「じゃあ、アリアを狙って武偵殺しが現れるかもしれない・・・って分かったのはなんでだ?俺だってついさっき気づいたんだぞ」

キンジが聞く。

しかし、時間が無い事と『神崎かなえ』の名前を迂闊に出すわけにはいかなかった事もあり、一部お茶を濁しながら簡単に答える。

「いろんな情報を寄せ集めて、ツギハギだらけの強引な仮説を立てて導き出した結果だ。だけど、俺とキンジ・・・経緯は違えど同じ答えに辿り着いた。つまり・・・・」

「・・・『武偵殺し』が現れる可能性が増したと言う事か。とにかく今は離陸を中止させることが先決だ!このままじゃ・・・『武偵殺し』が現れたらアリアは・・・」

遠山金一を倒したほどの相手に1人で勝てるわけがない。次は・・・・額の傷じゃ済まない。いくらアリアでも間違いなく殺される。

2人はボーディングブリッジを突っ切り、今まさにハッチを閉じつつあるロンドン行きの飛行機に飛び込んだ。

間一髪・・・駆け込んだ直後にハッチが閉ざされる。
そして2人は辺りを見回し、出入り口に立っていた小柄なフライトアテンダントに目を付けて武偵徽章を突きつける。

「武偵だ！」

キンジと・・・・

「今すぐ離陸を中止しろ！」

刻桃が叫ぶ。

「お客様！？失礼ですがどういう・・・・」

「黙れ！止めろと言ったら今すぐ止めやがれ！」

「ひ・・・・ひゃいっ！？」

刻桃が脅すとアテンダントは血の気が引いたようにビビりまくり、駆け足で操縦室へと向かった。
その後を追って、刻桃も操縦室に向かおうとしたが・・・・

「ハァ・・・・ハァ・・・・・」

キンジは力尽きたかのように、その場で両膝を落としてしまう。

「おい、大丈夫か！」

刻桃は手を貸し、キンジを立たせてやる。

「はぁ・・・はぁ・・・すまない。強襲科から転科して・・・・体力落ちたのが災いした。お前が言ってた通り、何をやるにしても身体が資本だな」

「そういう事だ。まぁ、とりあえずはこれで離陸は止められたし、あとは・・・・」

2人が安心したのも束の間。

「「！？」」

ぐらりと・・・機体が確かに揺れた。

その直後・・・さっきのアテンダントがガクガク震えながら戻って

くる。

「あの・・・やっぱりダメでしたぁ。ごめんなさいっ！」

声を震わせながら謝罪する。
聞く所によれば・・・規則で、この段階では管制官からの命令でしか離陸を止められなかったらしい。

「こうなったら・・・・・機長脅して！」

刻桃は懐にある『銃』を取り出そうとするが・・・

「待て、刻桃。もう手遅れだ。窓の外・・・見てみろ」

「・・・・・・！？」

キンジに促され、刻桃は窓の外を見た。
本当に・・・もう滑走路に入ってしまっている。無理に止めようものなら、最悪の場合、飛行機同士の衝突という惨事に発展してしまいかねない。

「・・・・どうする？」

刻桃は懐から手を出し、キンジに聞く。

「悔しいが・・・・作戦を変えるしかない。後手に回ってしまったなら・・・・後手なりの戦い方をするだけだ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

機体が上空に出て、ベルト着用のサインが消えた後・・・・刻桃とキンジは、アテンダントを脅して聞き出したアリアの席・・・・というより個室に向かう。

この飛行機は通常の旅客機とは異なり、金持ち御用達の全席スイートクラスの超豪華新型旅客機だった。

1階の広いバーを通り、2階の客室が並ぶ廊下を通ると、ある個室の前で足を止めた。

そしてキンジが・・・個室の扉を開いた。

「キ、キンジ・・・・それに刻桃!?」

現時点での個室の主・・・アリアが紅い目を見開く。

刻桃が数日振りに会ったアリアは・・・・前髪の感じが若干変わっていた。恐らく額の傷跡を隠すためだろう。

「流石はリアル貴族様だな。チケット、片道２０万ぐらいするんだろ？」

「断りもなく部屋に押し掛けてくるなんて、失礼よっ！」

キンジが個室中を見回すと、アリアが両目をツリ上げる。
今にも二丁拳銃・・・もしくは二刀を抜きかねないほどに殺気立ってもいる。

「なにが失礼だ。キンジの部屋侵略してたお前が言っても・・・・全く説得力ないぜ？」

「うっ・・・・」

刻桃に痛いところを突かれ、アリアは黙ってしまう。
そして、すぐさまキンジに視線を向ける。

「・・・・なんでついてきたのよ」

「武偵憲章２条。『依頼人との契約は絶対守れ』。俺はこう約束した。強襲科に戻ってから最初に起きた事件を１件だけ一緒に解決する・・・と。『武偵殺し』の一件はまだ解決してないだろ？」

「なによ・・・何の役にも立たなかったクセに。それに・・・なんで刻桃まで」

「ついでだ。俺も・・・・『武偵殺し』には個人的に用事ができたからな。だから、ここからは勝手に手伝わせてもらう」

「用事って・・・・なに？」

「今のお前がそれを知る必要はない。俺の邪魔をしなければ・・・・それでいい」

刻桃は・・・かつてアリアに言われた台詞を一部パクり、ワザとらしく片手をヒラヒラ振る。そして、備え付けの冷蔵庫を開けてコーラを取り出し、断りも入れずに飲み始める。
キンジも適当な座席に腰をおろし、リモコンでテレビをつけてチャンネルを回していく。

「・・・っ！人の個室で勝手な事するなーーーー！！アンタ達、ロンドンに着いたらすぐ引き返しなさい！手切れ金代わりにエコノミーのチケットぐらい買ってあげるから・・・・それでもうあたしたちは他人よっ！！」

怒り狂うアリアに・・・

「元から他人だろ」

素っ気なく返すキンジ。

「うるさい！喋るの禁止！刻桃、アンタも勝手に冷蔵庫開けるな！」

「因果応報だ。それより・・・・氷はどこだ？」

アリアの文句を聞き流し、刻桃は氷を求めて冷蔵庫を漁る。

・・・・・・・・・・・・・・

台風による強風の中・・・・飛行機は僅かに揺れつつ、東京湾上空に出た。
揺れ事態は大したことなかったのだが・・・

ゴロゴロゴロゴロ・・・・・・・ガアァァァァァン！！

雷雲から雷音が聞こえる。
一際大きな雷が響くと・・・・アリアはビクビク震え、ベッドの上に飛び乗って布団を頭からかぶる。

「い、言っとくけど、怖くなんかないんだからね。眠いの。そう・・・・眠いだけ！仮眠するだけよ！！」

「「・・・・・・・・」」

何も聞いてないのに勝手に言い訳するアリア。墓穴掘った挙句の聞き苦しい言い訳である事は明白。

「アリア、替えのパンツ持ってるか？チビったりしたら一大事だぞ？」

「バカキンジ・・・・あとで絶対風穴あけて・・・・」

ガガアアァァァァン！！

雷雲の近くを飛んでいるせいか・・・・雷音が鳴り止む気配は全く感じられない。
アリアは布団から少しだけ顔を出すと・・・

「キンジィ・・・・刻桃ぉ・・・・・」

涙目になってキンジの服を掴み、コーラに舌鼓を打つ刻桃にまで助けを求める始末。『双剣双銃のアリア』のあまりの醜態に・・・・キンジはからかうのをやめ、気が紛れるようにとテレビの音量を上げ、チャンネルを回していく。

すると・・・時代劇チャンネルでキンジは指を止めた。

《この桜吹雪、見覚えがねぇとは言わせねえぜ！！》

名奉行と名高い『遠山の金さん』が主役の時代劇。
刻桃はコーラを一気に飲み干すと、キンジに近づいて小声で話しかける。無論、布団の中で震えるアリアには聴こえないように。

「・・・・遠山金四郎。お前の先祖で、こいつもヒステリアモードの特異体質持ってたんだよな」

「そう聞いてる。兄さんの説によれば・・・・彼には露出狂の気があって、モロ肌を脱ぐと急激に知力体力を高めることができる人だったらしい」

「金一さんと同じように、女なしでヒステリアモードになる手段を持ってたってわけか。にしても・・・・・・難儀な一族だな、お前達」

「・・・・・言うな。自覚はしてる」

そう返すと、キンジは・・・・布団の中で震えるアリアの片手に手を添える。

友達として、クラスメイトとして、アリアの不安を和らげるように。

「・・・・キンジ」

アリアはためらいながらも、握り返そうとしたその時・・・

ハン！パァン！

「「「！？」」」

音が響いた。
今度は雷の轟音ではない。銃声だ。

刻桃とキンジ・・・それから布団を被って震えていたアリアも、個室の外に飛び出した。
狭い通路に出ると、そこは・・・大混乱に陥っていた。乗客や従業員が騒ぐ中、開け放たれた操縦室から1人の人間が現れる。

飛行機に掛け込んだ時・・・刻桃とキンジが脅した小柄なアテンダントだ。

彼女は・・・ピクリとも動かない機長と副操縦士をずるずる引き摺りながら、不敵な笑みを浮かべてゆっくりと歩む。

3人は慌てて拳銃を抜き、アテンダントに向けるが・・・

「刻桃、真面目にやりなさい！」

アリアの指摘。

「・・・・っ!?こっちはこれでも大真面目だ!」

刻桃は、『銃』を・・・グリップではなく、また銃身を握っていたのだ。
急いでグリップを握ると、改めて『銃』を向ける。

アテンダントは不敵に笑うと・・・・

「Ａｔｔｅｎｔｉｏｎ　Ｐｌｅａｓｅ．で、やがります」

胸元から缶を取り出して放り投げてきた。

「みんな部屋に戻れ!ドアを閉めろ!!」

キンジは、刻桃とアリアを部屋に押し込みながら叫んだ。
乗客達も、これが異常事態である事は嫌でも理解するしかなく・・・
バタンバタンと音を立てて個室に引きこもる。

「2人とも、大丈夫か!?」

キンジが聞く。

「少し吸い込んだけど・・・・息は出来るし、目も見える。手足のマヒもない」

「無害なガスだったみたいね。完全にやられた！」

刻桃とアリアは・・・自分達の身体の状態を確認しながら答える。

キンジは一息つくと、銃を握る手に力を込める。

「アリア、刻桃、あのふざけた喋り方・・・・俺のチャリジャックと、皆が巻き込まれたバスジャックの時と同じだ。あいつが・・・・・あいつが『武偵殺し』だ！」

「・・・・やっぱり出やがったな」

「やっぱり？アンタ達・・・『武偵殺し』が出る事がわかってたから、ここまで来たの！？」

アリアが目を丸くする。

キンジは・・・・時が来たと判断し、自分の推理を伝える事にした。

以前の『武偵殺し』は・・・バイクジャックからスタートし、カージャックを経て、最後にシージャックである武偵を仕留めた事を。

そして・・・

「ところが・・・バイク、自動車、船と・・・事件ごとに大きくなってった乗り物がここで一度小さくなる。俺のチャリジャックに、次がバスジャック。アリア、これがどういう事かわかるか？」

「・・・・・わからない」

推理が苦手なアリアは、首を横に振る。
ここで刻桃が・・・一気に核心を突く。

「一連の事件は・・・・・すべて奴からのメッセージ。お前は最初から『武偵殺し』手の平で踊らされてて・・・・奴が『神崎かなえ』に罪を着せたのは、お前への宣戦布告だったんだ」

「アンタ・・・ママの事知って・・・・キンジから聞いたの！？」

母親の事を知られていた事に驚き、アリアはキンジを睨む。

「ち、違う。俺は何も言ってない！言えるわけないだろ！」

キンジは首を横に振り・・・慌てて情報を漏らした事を否定する。
そんな2人を見て、刻桃は・・・・どういう経緯でそうなったかはともかくとして、キンジもキンジで『神崎かなえ』のことは知ってたのだと感づいた。

「落ち着け。俺は俺で・・・お前を勝手に調べて辿り着いただけだ。キンジに非はねぇよ」

それより・・・と言って、刻桃は話の流れを元に戻す。

「そして・・・シージャックで武偵を仕留めたのと同じ『3件目』で、今・・・お前と対決しようとしている。この、ハイジャックでな」

「じゃあ・・・動機は？なんであたしが・・・・」

「武偵はどこかしらで恨みを買うもんだろ。それに、お前が『H家』出身って事を考えれば尚更だ」

「・・・・・・・っ！」

アリアが・・・悔しさのあまり歯を食いしばる。

「H家？それって・・・・なんなんだ？」

キンジは『H家』の意味がわからず、聞きかえそうとするが・・・・

ポポーン！ポポーン！ポポーン！

「「「！？」」」

そこに・・・・ベルトの着用サインが注意音と共に点滅を始める。

これが和文モールス信号である事に気付いた3人は、顔を見合わせると点滅を解読しようと試みる。

オイデ　オイデ　ワタシ　ハ　イッカイ　ノ　バー　ニ　イルヨ

「・・・・誘ってやがる」

「上等よ。風穴あけてやるわ！」

キンジとアリアは・・・・眉をつり上げ、再び銃を抜く。

「その前に・・・・キンジ、アリア、コイツを持ってろ」

「これは・・・・トランシーバー？」

「・・・・イヤホン？」

刻桃は・・・キンジとアリアに、トランシーバーと受信機を渡す。
そして刻桃も・・・2人に渡したのと同じタイプの受信機を自分の耳に入れる。

「装備科で借りてきた。これで、無いよりはマシ程度に情報の共有ができる。さぁて・・・・行くぜ！！」

刻桃が乱暴にドアを開けたのが合図となり・・・・3人は銃を構えながら1階のバーへと向かった。

第１４話（後書き）

次回・・・いよいよ決戦開始。

第15話

飛行機の1階・・・バーカウンター。

刻桃、キンジ、アリアの3人は、銃を構えながら『武偵殺し』があらかじめ用意したであろう誘導灯に従ってバーまでやってきた。
そのバーのシャンデリアの下で・・・1人のアテンダントがカウンターに足を組んで座っていた。

そう・・・刻桃とキンジが最初に遭遇し、脅したアテンダントだ。

しかし、今の彼女は航空会社の制服は着ておらず・・・なぜか武偵高の制服を着ていた。それも、3人にとっては見覚えのある・・・フリルだらけの改造制服をだ。

「今回も綺麗に引っかかってくれやがりましたねぇ・・・」

アテンダントは、自らの顔の皮・・・否、特殊メイクをベリベリ音を立てながら剥いだ。

それによって顕わになったのは・・・・

「「理子!?」」

「Ｂｏｎ　ｓｏｉｒ♪」

驚く刻桃とキンジを尻目に、アテンダント・・・いや、理子はパチリとウインク。手元にあったカクテルを飲み干す。

「頭・・・もしくは身体で戦う才能ってさ、けっこー遺伝するんだよね。武偵高にも、お前達3人みたいな遺伝系の天才が結構いる。でも・・・お前の一族は特別だよ、『オルメス』！！」

理子は・・・今までのぶりっこ口調は演技だったとでも言わんばかりの口調で・・・・アリアをビシッと指差す。

オルメス。それは・・・『Ｈ家』のフランス語発音。

名指しで呼ばれたアリアはというと・・・・雷に打たれたように硬直した。

「アンタ・・・一体何者なの？」

アリアが聞くと・・・理子はニヤリと笑い、名乗る。

「理子・峰・リュパン４世・・・・それが理子の本当の名前」

自らの・・・フルネームを、嘘偽りなく。

それを聞いた3人は驚いたように理子を見据える。それもそうだ。リュパンと言えば、武偵なら誰でも知っている・・・知らない方がおかしい存在。フランスの大怪盗『アルセーヌ・リュパン』の事に他ならない。

「お前・・・あのリュパンの曾孫だって言うのか」

「そうだよ、モモ君。でもね、家の人間はみんな理子を・・・・・お母様が付けてくれた『理子』って可愛い名前で呼んでくれなかった。どいつもこいつも4世！4世！4世様ー！って。どいつもこいつも使用人までも！ひっどいよねぇ！！」

「それがどうしたのよ。『4世』の何が悪いってのよ！」

ハッキリ言い切るアリア。

だが、理子は瞳を猛禽類の如くツリ上げ・・・

「悪いに決まってんだろ！あたしは数字か？あたしはただのＤＮＡかよ！！あたしは理子だ！数字じゃない！どいつもこいつもよぉ！！だからあたしは『イ・ウー』に入ってこの力を得た。この力で・・・あたしはあたしをもぎ取るんだ！！」

突然・・・ブチギレた。

理子とは付き合いが浅い刻桃とアリアは元より・・・それなりに付き合いが長いハズのキンジまでもが絶句する。

いつもクラスの中心にいて、とぼけたようなアホっぽい笑顔でご機嫌に笑う理子。

しかし、今はもう・・・見る影もない。今の理子は・・・心の奥底に元々あったであろう暗闇と狂気を余すとこなく顕わにする。

そんな彼女を見て・・・彼女が発したある一言を聞いて、刻桃は理子を鋭い視線で睨む。

「理子・・・お前、やっぱり『イ・ウー』と繋がってたのか。だから『刀』の事も・・・・」

「ああ、知っていたさ！まさか・・・お前があそこまで大胆な行動に出るとは思わなかったけど、お前を誘いだすための策の一部だった事は確かだ」

「待ってくれ、理子！」

ここでキンジが口をはさむ。

「・・・『武偵殺し』は本当にお前の仕業だったのかよ！だったらなんで俺や刻桃に情報を与えて羽田に向かうように仕向けたんだ！

！」

本当なら『イ・ウー』や『オルメス』など・・・正体不明の単語についても聞きたかったのだが、真っ先にそれが気になった。援軍なんかいない方がいいに決まっている。その方が目的の達成率も大幅に上がる。なのに・・・何故理子は自らリスクを負うような行動を取ったのだろうか。

「簡単な事だ。１００年前、あたし達の曾お爺様同士の戦いは引き分けだったから・・・ここであたしがオルメス４世を倒せば、曾お爺様を越えた事を証明できる。キンジ・・・お前もちゃんと役割果たせよ？初代オルメスと条件を合わせるためにワザワザくっつけてやったんだからよ！！」

「俺とアリアを・・・お前が？」

「そっ。オルメスの一族には代々優秀なパートナーがいたからね」

いつもの口調に戻った理子は・・・事の真相を語り出す。

最初の『武偵殺し』も、『神崎かなえ』に罪を着せた事も、全ては・・・アリアを誘いだすため。

そのアリアを・・・チャリジャックを利用してパートナー候補と当たりを付けるであろうキンジと出会わせ、バスジャックでチームを組ませる。全ては・・・３度目の犯行たるこのハイジャックで、パートナーがいる状態のアリアを倒すためだった事を。

「なにもかも・・・・お前の計画通りだったってわけかよ・・・」

キンジが・・・悔しさのあまり歯を食いしばる。

「んー・・・そうでもないよ。せっかくいろいろお膳立てしてあげたのに、キンジはアリアとくっつききらなかったもん。理子が殺ったお兄さんの話しを出すまで動こうとしなかったのは・・・・・意外だった」

それに・・・と言って、理子は刻桃に視線を移す。

「一番の計算外は・・・・やっぱり刻桃だね。虚刀流の十九代目がイキナリ転入してきて・・・それもキンジと親しかったなんて、色んな意味で予想外だったよ」

「じゃあ・・・・なんで俺まで誘いこんだ？お前の口ぶりだと、この計画はキンジ一人を誘いこめば事足りるだろ」

「うん。でもね・・・・どうせならこの状況を思いっきり利用してやろうって思ったの。理子の曾お爺様は、大怪盗・・・アルセーヌ・リュパン。つまり、オルメスとそのパートナーの目の前で希少価値の高いお宝を盗んでやれば・・・・理子の勝利がより完璧な物になると思わない？」

「お宝・・・・？」

キンジが聞くと・・・理子は愉快そうに高笑いを上げる。

「あははっ。キンジもそこまでは知らなかったんだ。いいよ、教えてあげる。刻桃は・・・・持ってるんだよ。伝説の刀工・・・・『四季崎記紀』が造りし『１０００本の変体刀』の中でも・・・・他に類を見ない異色の最高傑作の中の一本を！！」

「しきざき・・・・きき？へんたい・・・・とう？」

「キンジ・・・アンタ、日本人のクセにそんな事も知らないの？このドベ！小学校からやり直しなさい！！」

アリアが思いっきり詰りながらも、簡潔に説明を始める。

「いい？『四季崎記紀』ってのは・・・・戦国時代に活躍した伝説の刀工で、『１０００本の変体刀』っていうのは、そいつが造った刀の総称。刀を使う武偵なら誰だって知ってるような名前よ！」

「・・・俺はナイフは使っても刀は使わん。刻桃、お前は知っていたのか？」

「当然。それ以前に・・・四季崎は虚刀流の開祖と同世代で、少なからず因縁があるとかないとか・・・・って母上から聞いてる。それに、俺の目的には、そいつと・・・・そいつが造った刀が絡んでもいるからな」

「因縁って・・・それに目的ってなんだよ」

「今は置いとけ。けど、小学校の歴史の教科書にだって載ってる名前だから・・・それなりには有名なハズだぜ?」

刻桃までが知っていたことで・・・キンジは、いくら日本史にそんなに明るくなかったとはいえ流石に落ち込んでしまう。
理子はそんな3人を見ながらクスクス笑い、話の流れを元に戻す。

「そうそう♪でもね、その1000本中の988本は・・・・・最後の十二本を造るための『習作』でしかなかったんだって」

「最後の・・・十二本?」

キンジが聞き返す。

「うん♪四季崎記紀が最後に造りし十二本の刀・・・人呼んで、『完成形変体刀』。世が世なら、国一つ買える価値を持った高度な芸術品だよ?理子が盗むのに・・・オルメスとの戦いを彩るのに相応しいお宝だと思わない?キンジィ・・・お前も本気出せよ?あんまり情けないと、お兄さんが泣いちゃうぞ?」

いやらしく笑いながら、理子はキンジを見る。

「兄さん・・・お前が・・・お前が兄さんを・・・・」

キンジが・・・うわ言のように呟く。
憧れだった兄の仇を前にした事で、冷静さを失いつつあった。

「あはは♪ほらアリア、パートナーが怒ってるよぉ？キンジも・・・
最後にいいこと教えてあげる。あなたのお兄さんは・・・今、理子
のこいびｔ『いいかげんにしろ！！』・・・！？」

理子の挑発で完全に頭に血が上り、右手に力を込めて銃・・・ベレ
ッタを理子へと向ける。
しかし、その瞬間・・・飛行機がまた・・・大きくグラリと揺れた。

ダァン！

その隙を突くかのように銃声が響く。

理子が発砲したのだ。

「あーらら♪ごっめんねぇー」

「！？」

キンジの手から・・・ベレッタが消えていた。
ガシャンと音を立てて・・・・数秒前まで拳銃だった金属は、粉々に砕けて床に散らばった。
それが合図とでも言うように・・・・

「刻桃、キンジをお願い！」

アリアが両手にガバメントを構え、一気に理子へと突っ込んだ。
対する理子も・・・・

「アリア、二丁拳銃が自分だけだと思っちゃダメだよ？」

拳銃を・・・ワルサーＰ９９をもう一丁抜き、迎え撃つ。
アリアと理子。２人は躊躇なく互いを・・・・あえて服の部分だけを狙い、容赦なく撃ち合う。

２人ともその身に何発か銃弾を喰らうが・・・・顔をしかめるだけで、動きは止まらない。

常に防弾服を着用している武偵同士の戦いでは、拳銃は一撃必殺の刺突武器ではなく・・・・打撃武器となる。

防弾服に覆われていない部分・・・例えば頭部を狙えば話は別だが、武偵法９条を守るため、アリアはそれをしない。

理子も・・・何故かアリアに合わせ、頭部を始めとする生身の部分は避けて発砲する。

（なんて戦いだ・・・・アリアだけじゃなく、理子があそこまで動けるなんて・・・・・）

キンジは通常モードであるが故、この激しい攻防には突っ込めず・・・

（・・・ったく、いくら理子が『神崎かなえ』を陥れた相手だからって、普通1人で勝手に突っ込むか？この状況なら、3人で一気に畳み掛けるのがホントだろ）

刻桃はそう考えながらも・・・アリアの気持ちを汲み、ヘタに手を貸して戦術を乱さないためにも、あえて突っ込まない。

だが、2人ともただ見ているだけではなかった。何故なら・・・・突入のタイミングは既に決まっていたからだ。

「はぁっ！！」

弾切れを起こした瞬間・・・アリアは格闘戦に切り替え、理子に組み付いた。
理子の両腕の動きを封じ、可動範囲を制限する。

「キンジ！刻桃！！」

アリアに呼ばれるまでもない。
キンジはバタフライナイフを開き、刻桃もそれに合わせて突撃を企む。理子の動きを・・・3人がかりで完全に封じるために。
だが・・・・

「双剣（カドラ）双銃。奇遇よね・・・・アリア」

この状況下でも・・・まだ理子は余裕だった。

「理子とアリアはいろんな所が似てる。家系、キュートな外見、それと・・・二つ名。実はね、理子も同じ二つ名を持ってるんだよ？」

「「「！？」」」

刻桃と・・・キンジの足が止まる。

組み付いたままのアリアも絶句する。目の前の・・・・不気味な光景に。

「アリアの『双剣双銃』は本物じゃない。お前達は・・・・まだ知らない。この力の事を！！」

得意げに笑う理子の・・・・ツーサイドアップに結ったテールが、不気味に蠢く。
そして・・・・テールの片方が理子の背中に入り込み、隠していたと思われるナイフを取り出してアリアに斬りかかる。

「・・・・っ！？」

一撃目は何とか避ける。
そして・・・アリアは素早く片方のガバメントの弾倉を交換し、至近距離から理子の腹部を狙う。

いくら防弾服を着こんでいても、この距離からだったら十分決定打になる。

「甘いよ・・・・アリア」

理子の・・・もう片方のテールが蠢き、バーカウンターの隅からある物を引っ張り出した。

鞘のない、抜き身の刀である。

反りのない直刀で、全長は約１５０ｃｍくらい。鍔はなく、長い刀身の綾杉肌に二筋樋が彫られている。

理子は刀を・・・自分の腹部と、アリアのガバメントの間に素早く滑り込ませる。

「無駄よっ！！」

アリアは構わず発砲。

いかに玉鋼で精製された日本刀であろうと・・・この至近距離から連射すれば、間違いなく粉々に砕く事が出来る・・・・・・

「ざぁーんねん♪」

・・・・・・・・ハズだった。

刀は折れるどころか・・・傷一つつかず、何事も無かったかのように存在し続けていた。

「嘘・・・・何で・・・・・」

銃弾が効かなかったことで・・・・アリアの心に動揺が走る。

「逃げろアリア！！」

「！？」

キンジの叫びにアリアが反応した時には・・・もう遅かった。
理子は髪で刀を振り、その切っ先でアリアの側頭部を斬りつける。

「うあっ！？」

鮮血が飛び散り・・・・真後ろに仰け反る。

「あはははは！曾お爺様、１００年以上の歳月は、こうも子孫に差を作っちゃうもんなんだね。勝負にならないよ。アリアの奴・・・パートナーどころか、自分の力すら使えてないよ」

狂気に満ちた理子は、高笑いを上げるとその髪で押しのけるようにアリアを突き飛ばした。
あの髪は・・・・理子にとっては身の丈以上もある刀を軽々振り回した事といい、相当な怪力である事を想像させる。アリアは軽々吹っ飛ばされ・・・・床をゴロゴロ転げ回る。

「アリア!?くっ・・・なんなんだその刀は!いくら日本刀が頑丈に造られているとは言っても・・・至近距離での連射を喰らえば、砕けるなり傷つくなりするハズ・・・・・どうなってるんだ」

キンジはアリアを抱き起こすと、理子が持つ刀を見据える。すると理子は・・・髪で握った刀に付着した血を舐めると、自慢のオモチャを見せびらかすように刀を振った。

「あはは♪そりゃ変じゃない方がおかしいよ。この刀こそ・・・四季崎記紀が造りし『完成形変体刀十二本』が一本・・・・『絶刀・鉋』なんだから!!」

「ぜっとう・・・かんな?」

キンジが聞き返す。

「普通は・・・刀もナイフも消耗品。長く使っていれば、そのうち折れるし曲がるし斬れなくなっちゃうもの」

でもね・・・と言って理子は得意げに笑う。

「この・・・『頑丈さ』に主眼を置いて造られた『絶刀・鉋』は違う。本当に折れないし、本当に曲がらないし、本当に錆びつかない。

だからこそ・・・・いつまでもよく斬れるんだよ」

「・・・・そんなバカな」

キンジは・・・・アリアを抱えながら絶句する。

そんな永久機関みたいな刀があるわけがない。

否定するのは簡単だが、少なくとも・・・・目の前の『鉋』は、大型拳銃である『ガバメント』の至近距離からの連射に耐えられるだけの強度を持っている。それは明らかだった。

ただ斬るだけじゃなく・・・強度を活かして盾としても使える刀。

理子の・・・髪を操る奇妙な能力と合わせ、ヘタすれば拳銃以上に厄介な脅威。

「1週間前にアホな骨董品コレクターから盗んで、すぐアイツの所に送っちゃうつもりだったんだけど・・・・早まらなくてよかった。だって・・・ここまで役に立ってくれたし、この刀があったからこそ、刻桃も誘い出せたんだからね♪」

「!?」

それを聞いた・・・刻桃の頭には、つい先日もたらされた紅龍の言葉が過ぎった。

ーーーーそう。ついこの間までは持っていたんだ。1週間前・・・・
何者かの手で盗まれるまではねーーーー

1週間前にとある骨董品コレクターの手から盗まれたとされている
『完成形変体刀』。
理子の自慢という名の自白が本当なら・・・・これはもう、間違い
ない。紅龍を出し抜いたのは・・・間違いなくコイツだ。

「勝てるよ・・・・理子は今日・・・・理子になれる!あは・・・・
あははははは!!」

理子は、ワルサーP99の銃口を・・・アリアの心臓へと向ける。
防弾服に覆われているとはいえ、この至近距離で喰らえばタダでは
済まない。
死んだとしても・・・・おかしくない。

「さようなら♪」

理子が容赦なく発砲した。
だが・・・銃弾は一発たりとも命中しなかった。

「虚刀流・・・・梅！」

刻桃が接近し・・・身体を回転させるようにして足刀を繰り出してきたからだ。
理子の側頭部を狙った一回転しての回し蹴り。これこそが・・・・
虚刀流の足刀技の一つ、『梅』。

「刻桃・・・！！」

理子は足刀こそかわす事ができたものの・・・銃口をアリアから逸らしてしまう。

「キンジ！アリアを連れてとっとと逃げろ！！」

刻桃が叫ぶと・・・

「くっ・・・わかった。アリア！しっかりしろ！」

キンジはぐったりしたアリアをお姫様抱っこで抱きかかえ、理子に背を向けてバーから走り去る。

「きゃはは、逃がさないよ！！」

勝利目前だった理子が簡単に逃がすハズもなく・・・両手にワルサーＰ９９を構えて連射する。

「させるか！虚刀流・・・・飛梅！！」

刻桃はそれを予想していたかのように、素早くバーの椅子を足刀技・・・『梅』で蹴り上げ、更に身体を回転させて理子に向かって再び蹴り飛ばした。

その数・・・・４つ。

つまり虚刀流・飛梅とは、身体の回転を利用した足刀技・・・『梅』で蹴り上げた物体を、さらに回転を利用して敵に向かって蹴り飛ばす・・・・『梅』の応用技なのである。

蹴り飛ばされた椅子によって弾丸が阻まれた上・・・・いくつかの椅子は理子に向かって飛来。避ける事を余儀なくされる。
その隙に・・・アリアを抱えたキンジは、バーから脱出。

あとには・・・・

「やっと・・・2人っきりになれたね、刻桃。理子、ゾクゾクしちゃう♪」

両手にワルサーP99を構え、テールで刀とナイフを構える理子と。

「とりあえず選手交代ってことだ。今度は・・・・俺と楽しもうぜ」

不敵に笑う刻桃が残された。

（・・・・・感じる）

刻桃は理子を・・・・『絶刀・鉋』ごとじっくりと見据える。

転入二日目に声を掛けられた時に感じた響鳴感覚。それが何だったのか・・・今ハッキリとわかった。

（あの時・・・こいつがもう『鉋』の所有者だったから、あの感覚を感じたのか）

刻桃は妙に納得する。

かつて、完成形変体刀の現物と、その所有者と相対した時も感じた・・・・生き別れの血族に再会したかのような、奇妙な感覚。

しかし、あの時は、所有者自らが『完成形変体刀』だと誇らしげに語っていた。

だから特に気にも留めず、奇妙な感覚もただの気のせいだと思い込み、その場は流してしまっていた記憶がある。

だが・・・今回は違う。

所有者である理子からも。そして、『絶刀・鉋』からも感じ取れた感覚。

おぼろげで、不確かで、気のせいだと言われてしまえばそれまで程度の感覚だったが・・・・刻桃は確信した。

（やっぱそうだ。四季崎記紀の変体刀と・・・・その所有者から感じるこの感覚は・・・・気のせいじゃない）

そして懐に手を入れ・・・・『銃』を取り出す。

「アリアを倒した以上、狙いはもう・・・・コイツだけだろ？」

「へぇ、それが・・・・・」

「・・・ああ。四季崎記紀が最後に造った『完成形変体刀』。『連射性・速射性・精密性』に主眼を置き、二丁拳銃を模して造り出された刀・・・・『炎刀・銃』。その片割れだ」

刻桃は・・・手に持った『炎刀・銃』の詳細を語る。

だが、見た目は拳銃以外の何物でもないそれを『刀』と呼ぶのは・・・どう考えても不適切な表現。

しかし、刻桃と理子はそんな事はお互い突っ込まず、むしろそれが当り前であるかのように会話する。

「確かぁー・・・モモ君のご先祖様が全部壊しちゃったんだよね？」

「そこまで知っているのか。確かに・・・・完成形変体刀は、俺の先祖・・・虚刀流七代目当主『鑢七花』が全て破壊した。この『炎刀・銃』は、鑢家に代々受け継がれてきた残骸を現代の技術で復元した物だ」

だけど・・・と言って刻桃は言葉を続ける。

「この『炎刀・銃』とは違って、他の完成形変体刀は粉々に破壊された上、破片も回収されなかったハズなのに・・・何故か今、再び世に出てる。お前はその辺の事情、なにも知らないのか？」

「別に事情なんか興味ないもん。でも、理子を倒せたら・・・教えてあげないこともないよ？『ヨロイ』からの又聞き情報でいいならね♪」

「・・・やっぱ奴もグルか」

理子の口から発せられた『ヨロイ』という名前を聞いた途端、刻桃は『銃』を懐に仕舞い・・・虚刀流一の構え、『鈴蘭』の体勢をとる。

「その『炎刀・銃』。理子・峰・リュパン４世が謹んで貰い受けます♪」

理子はスカートをちょこんとつまんで少しだけ持ち上げ、慇懃無礼にお辞儀。

直後・・・両手に拳銃、両サイドテールで鉋とナイフを持ち上げ、得物を４つ同時に持つ・・・真の双剣双銃の構えで刻桃に相対。そのまま発砲しながら突っ込む。

「虚刀流剣士・・・鑢刻桃。推して参る！！」

刻桃は弾丸を回避、手甲で受け流しながら理子を迎え撃った。

第１５話（後書き）

戦闘開始。

そして、最初の完成形変体刀・・・・絶刀・鉋の登場。

かつては紅龍も目をつけていたアホなコレクターが所持していた刀ですが、現在は理子の手の中に。そして、このままでは『イ・ウー』の手に落ちるのも秒読み状態。

刻桃を巻き込んだのも、時代が追いついたとはいっても完成形変体刀の一角を担う『炎刀・銃』をついでに手に入れるため。飛行機というフィールドを支配している事もあり、完全に舐めきっている状態です。

今回登場した『虚刀流・飛梅』は、『梅』の応用編・・・・この小説オリジナルの技。奥義も当然登場します。最後の最後で度肝抜かれ、出し抜かれるのはどっちなのか。次回をお楽しみに！

余談ではありますが・・・・刻桃はまだ当主ではないため、『虚刀流剣士』を名乗っています。だって、『虚刀流十九代目当主予定』じゃ、締まらないでしょう。

またまた余談。

今日、ついにニンテンドー３ＤＳと、リメイクされたテイルズオブジアビスを購入しました。
３Ｄメガネなしでも見る事が可能な立体映像に、感無量って感じです。今までは店頭でも見た事なかったので・・・・ゲームも恐ろしい領域に突入した物です。
今後は『キングダムハーツ３Ｄ　Ｄｒｅａｍ　Ｄｒｏｐ　Ｄｉｓｔａｎｃｅ』、『ロックマンＤＡＳＨ３』も出るらしいので、期待は尽きる事がないです。

第１６話

完成形変体刀。

戦国時代に活躍し、歴史にも名を残した伝説の刀工・『四季崎記紀』が造りし１０００本の変体刀の中でも最も完成度が高く、異端中の異端であり、歴史の表舞台には記されなかった十二本の刀の総称である。

他の９８８本の変体刀は、たった十二本の完成形変体刀を製作するための習作だった・・・とも言われている。

それぞれの刀が何らかの特殊な機能を持っており、中には・・・『刀』の定義を真っ向から覆すような形状の刀も存在した。

前回登場した二本。『頑丈さ』に主眼を置いて造られた・・・『絶刀・鉋』と、『連射性・速射性・精密性』に主眼を置いて造られた・・・『炎刀・銃』の片割れもまた、完成形変体刀十二本の一角を担う存在である。

四季崎記紀は、時代を数百年分先取りしたような刀をどうやって造ったのか。『変体刀』はともかく、『完成形変体刀』の存在は都市伝説以下の知名度故、今となってはそれを知る物は殆んどいない。

それでも、家鳴将軍家の関連書物にはその存在が僅かに記されており、それを調べた近代の歴史学者達は・・・四季崎記紀が占術師の家系出身であることから推測し、魔術や陰陽道、錬金術にも手を出して製作した・・・という、つまり結局何もわかっていないのと同義の見解を打ち立てていた。

しかし、それはさほど問題にはならない。

問題なのは、尾張時代半ば頃・・・・虚刀流七代目当主・鑢七花によって全て破壊されたはずの完成形変体刀が、何故再びこの世に出ているか・・・・だ。

刻桃が所持する『炎刀・銃』。これだけは残骸が鑢家に代々受け継がれ、風花の代で復元されたもの。

だが、他の刀は・・・・何故か再び世に現れ、その半数近くが一癖も二癖もある犯罪者に手に渡っていた。

今の世の中・・・・たった十二本の刀で世の中がどうこうなるわけがないが、その刀のせいで・・・何人もの罪なき人間が蹂躙され、そして殺された。

鑢風花を始めとする『完成形変体刀』の存在を知る少数の者達は、刀を蒐集・・・・もしくは破壊するために動き出した。

まだ若い刻桃と・・・それから真庭紅龍もまた、自分達の仕事を行う傍ら刀の行方を追ってきた。

二丁拳銃型の刀・『炎刀・銃』の所有者として、他の刀の所有者の暴挙を見過ごせなかった事もそうだが・・・・もっと単純に、人として、武偵として、そんな連中を許せる道理は元々持ち合わせていなかった。

特に刻桃は、『あの人』の狂気を爆発へと導いた事件の黒幕とも言われている『ヨロイ』を倒すためにも・・・・『完成形変体刀』

の行方を追った。

そして現在、飛行機1階・・・バー。

キンジがアリアを抱きかかえて逃げ去った後・・・・・・バーでは
激しい戦いが繰り広げられていた。

「あははは♪さいっこーだよ！刻桃ぉ！！」

理子が二丁拳銃・・・ワルサーP99を発砲。
対する刻桃は銃口とトリガーに意識を集中し、最小限の動きでこれ
をかわし、かわしきれない弾丸は・・・

「喰らうかよ！！」

両手に装備した玉鋼製の手甲で受け流す。
そして・・・距離を詰め、手刀と足刀で容赦なく理子に斬りかかる。

「投降するなら今のうちだ！今なら・・・・唇のお釣り代わりに、

物凄く痛い事だけは勘弁してやるぜ！！」

刻桃の激しいラッシュ。だが、運悪く・・・飛行機が揺れてしまい、ギリギリで決定打を逃してしまう。

「あはは、刻桃こそ大人しく降参しちゃいなよ！そしたら・・・あの時の続き、してあげてもいいよ？」

理子は自らの頭髪を操り、網で絡め取るように威力を殺し、受け流しつつ・・・鉋とナイフで斬撃を繰り出す。

「続き？」

「そう・・・えっちぃ事とかね。理子はまだ穢れ無き乙女だから・・・お買い得だよっ！！」

まだまだ余裕なのか・・・刻桃を誘惑する事も忘れない。

「魅力的な誘いだが・・・・そんな物より、鉋をよこせ！！」

「あっそ。でも・・・どうせだったら、理子と一緒に『イ・ウー』に来ない？１人ぐらいならダンデムできるし、連れてってあげられるよ！それに・・・ヨロイにだって会えるかもだよっ！」

「それもお断りだ！そんなこととしなくったって、お前をとっ捕まえて・・・・情報を根こそぎ引き摺り出せば済む話しだっ！」

刻桃の拒絶。

「そう・・・・残念♪」

理子は・・・・二丁拳銃をホルスターに収納すると、いままで髪で扱っていた『絶刀・鉋』を両手に持つ。
ツーサイドテールも不気味に蠢き、鉋の柄に絡みついて・・・理子の手を支える。

「じゃあ・・・こういうのはどう？『絶刀・鉋』、限定奥義・・・・」

瞬間・・・床を蹴って一気に突進。『鉋』による突きを繰り出す。

「抱腹絶刀！」

全体重を乗せた刺突技が・・・刻桃を襲う。
だが、刻桃は身体を９０度捻り・・・・

「虚刀流・・・・菊！！」

向かってくる刀身を寸での所で避け、鉋を・・・背骨を支点に両二の腕でがっちり固定。梃子の原理を利用し、鉋の破壊を目論む。

だが・・・

「・・・・・っ！？」

刻桃はすぐに固定を解き、理子から距離を取る。

その際・・・机を蹴り倒し、銃弾対策の１つである『盾』を用意する事も忘れない。

「折れず曲がらず・・・・か。どうやら、そいつは本物の『鉋』で間違いないみたいだな」

「・・・・・疑ってたの？」

「いや、身を持って再確認しただけだ。生半可な技じゃ折れないって事は聞いてたけど・・・・・ここまで硬いとはな」

刻桃は・・・『菊』で鉋を固定した時の感触を思い出す。

刀を圧し折る技を手加減なしで掛けたにも関わらず、鉋は折れるど

ころか・・・・曲がりすらしなかった。

（さて、どうするか）

絶刀・鉋を折る方法は・・・『菊』以外にもないわけじゃない。最終奥義である『七花八裂』なら、圧し折れる可能性も高くなるが・・・その場合は理子の身体が持たない。

手加減すれば鉋は折れないし、本気でやれば勢い余って・・・・鉋だけでなく理子まで八つ裂きにしかねない。

短い間とはいえ、友達として接してきた理子。だが、彼女はもう・・・・飛行機とその乗員乗客を盾に強行に及んだ犯罪者。

今更情けを掛ける気はサラサラないのだが・・・・武偵法9条がある以上、倒す事は出来ても殺す事だけは出来ない。

完成形変体刀を所有し、狂気を余すとこなく振り撒く理子の姿が、かつて殺めてしまった『あの人』と重なるから・・・・という、ある種のやりにくさも全くないと言えば嘘になってしまうが、理由はもう1つあった。

今現在、この飛行機は理子の支配下にあるからである。

機長と副機長が負傷した今は、自動操縦システムで飛んでいるのだろうが・・・もしも理子が失神したり死んだ途端に何か不都合が起こるような仕掛けになっていれば、それこそ取り返しがつかない。

かと言って、簡単に・・・無傷で生け捕れるほど甘い相手でもない。

刻桃がどう出るべきか考えていると・・・

「でもさー・・・凄いよねー、刻桃って」

理子がニヤニヤ笑う。

「・・・なにがだ？」

「いくら虚刀流が『剣術』でも、その根源は基本的に『体術』・・・つまり、二本腕と二本脚の人間相手を想定してるんでしょ？普通だったら、理子の『双剣双銃』のような変則的な動きには初見で対応できないと思うんだよねー。ほら、さっきのアリアみたいに」

「確かに、お前のように武器を同時に４つ同時に使ってくる奴と戦うのは初めてだけど・・・変則的な戦法を取ってくる奴との戦闘経験はそれなりにあるつもりだ。忍者とか・・・超偵とか・・・な。それに比べたら大した事はねぇだろ」

「・・・・・・・・ふぅん」

刻桃が答えると・・・理子は顔を険しくさせ、４つの武器を仕切り直しとでも言うように構え直す。
弾数がもう少ないのか・・・・最初のような派手な発砲はせず、鉋とナイフを前面に押し出すような格闘戦主体の体勢。

「理子、お前は確かに強い。だけど・・・戦ってて１つわかった事がある」

刻桃の表情は・・・確信に満ちた物だった。

「俺がお前の誘いに乗ってここまで来たのは、キンジとアリアを助けるためだけじゃない。刀の情報を得るためと・・・金一さんを殺した『武偵殺し』を倒すためだ。あの人は他人じゃないし、俺にとっては目標の一人だったからな」

「じゃあ・・・・理子を倒せば、刻桃がキンジのお兄さんよりも強いって証明できるかもよ？」

「いや、そうは思わない。最初はそういう考えもあることはあったけど・・・今は違う」

即座に否定し・・・刻桃は理子を見据える。

「お前は金一さんに勝ってはいない。少なくとも・・・お前程度の力で、俺が知ってるあの人が殺されるわけがない！！」

「言い切るじゃない。だったら・・・お前を殺して、あたしの実力を証明してやるよ！！」

理子は再び激昂。刻桃に銃を向ける。

その時・・・

《刻桃、聴こえるか！》

（・・・・・・キンジ？）

刻桃の耳に入った受信機から・・・キンジの声が漏れる。

ただ・・・ついさっきまでとは違い、何処かクールで・・・自信に満ちたような力強さを感じさせるような声となっている。

《聴こえたら、何でもいいから大声で叫んでくれ。バーを出る時トランシーバーを置いてきたからこっちにも聴こえる》

キンジの指示。それが、理子に気づかれずに意思の疎通をするために考えた策である事は・・・刻桃も容易に察する事ができた。

「やってみろ！ただし、その時にはお前の方が八つ裂きになってるだろうけどな！！」

刻桃が、理子に向かって・・・・更にはトランシーバーの向こうのキンジにも聴こえるように叫ぶ。

「望むところだ！逆に・・・りっこりこにしてやんよ！！」

理子はその言葉を・・・自分への挑発だと受け取り、この大声を怪しむ様子は微塵もない。弾丸を節約するためなのか・・・鉋とナイフを主体に接近戦を仕掛けてくる。

それは刻桃にとっても好都合だった。
いくら現代の虚刀流に拳銃対策があるとは言っても、やりにくい部分がある以上は使用されないに越した事はない。

なにより・・・

《刻桃、時間が無いから・・・お前がこの話を聞いている事を前提に手短に話す》

受信機から聴こえるキンジの言葉を聴き洩らさないためにも都合が良かった。

《まず、アリアは無事だ。危ない所だったが、一応は戦える状態にある。俺達3人で・・・・今度こそ一気に理子を生け捕る。お前にやってもらいたい事は・・・・》

キンジの立案した作戦。
刻桃は理子の斬撃をかわし、反撃し、作戦内容を感づかれないように互角の戦いを装いながら聴き続ける。

《・・・・と、いうわけだ。OKなら、もう1度叫んでくれ!》

「ああ・・・いいぜ」

「何をブツブツ言ってんだ!あたしを舐めるな!!」

焦れた理子が、拳銃を取り出す。一気に勝負を決める気だ。
だが、刻桃は動じた様子は全く見せず、銃口とトリガーに意識を集中しながら少しずつ後ずさる。

そして・・・・

「極めて・・・・」

「・・・・?」

「極めて了解！！」

叫ぶと同時に一気に後方へと駆け出し、バーの外に飛び出した。
そんな刻桃の後ろ姿に向かって・・・

「きゃはははっ！！ここまで盛り上がっておいて敵前逃亡？ねぇねぇ、狭い飛行機の中、どこに行こうっていうのー♪」

理子は高笑いを上げながら声を掛けつつ・・・後を追った。

・・・・・・・・・・・・・・

バーから脱出した刻桃は・・・

「待たせたな！」

受信機越しにキンジから指示された部屋・・・・アリアの部屋に飛び込んだ。

「刻桃！」

そこには、いつもより鋭い眼光を放ち、自信に満ちた表情のキンジと・・・・

「あんた大丈夫なの？理子と戦ったんでしょ？」

応急手当を終えて、復活したアリアが駆け寄ってくる。

「生け捕るつもりだったんだが・・・・思いの他、手こずっちまった。キンジ、さっき言ってた『二重囮作戦』を詳しく聞かせろ！」

「ああ。今度はアリアだけじゃなく、俺も参戦する。それに可愛らしい子猫ちゃん同士を長々と戦わせるのは趣味じゃない。一瞬で決めさせてもらおう」

「・・・・子猫ちゃん？」

刻桃は違和感を覚える。『子猫ちゃん』なんて台詞は、普段のキンジなら口が裂けても言わない。
いつものキンジとは違った面構えから考えても、これは間違いなく・・・・

「ヒステリアモードか。キンジ・・・・アリアにキスでもしたか？」

刻桃が『ククク・・・・』と笑いながら聞くと・・・

「き、キキキ・・・キンジ・・・責任・・・このままじゃ・・・ここど・・・あかかか・・・・でき・・・できちゃ・・・」

アリアは真っ赤になって錯乱。

「事件が解決した後なら・・・・どんな責任でも取ってあげるさ」

そんな彼女に、キンジはキザっぽい笑顔でニッコリ笑いかける。

「・・・・マジかよ」

適当に言ってみたにも関わらず、それが正解だった事を悟ってしまった刻桃。
アリアが妙に錯乱しているのが気にかかるが・・・・ただ単に奥手だからだという事で自己完結。キンジから『作戦』を聞き出す事を優先することにした。

キンジは・・・

「武偵憲章1条、『仲間を信じ、仲間を助けよ』。俺はアリアと刻桃を信じる。だから・・・お前達も俺を信じて囮にでもなんでも利用してくれ。いいか、3人で協力して・・・・『武偵殺し』を生け捕るぞ!」

2人の耳元で囁き、作戦内容を伝え始める。
時間がないせいで説明は端的だったが、それでも・・・・刻桃とア

リアは作戦内容に肯定的な反応を示す。

「・・・・・・アリア。この作戦を実行する上で、１つだけ言っておきたい事がある」

時間にして数秒だけ考えると、刻桃が聞く。

「・・・・なによ」

「俺はお前の事が好きじゃない」

「知ってるわよ、そんなこと。あたしだって、アンタなんか大っ嫌いよ！」

「わかってる。だけど・・・・それを知った上で言わせてもらう」

刻桃は・・・アリアの目を真っ直ぐ見る。

「それでも俺は、お前を信じる。もしも俺が失敗しても、お前が必ずカバーしてくれる・・・・ってな」

その言葉を受けて、アリアが面喰らう。

「だから、お前も俺を信じろ。絶対にお前をカバーする。プライベートでは別かもだけど・・・この作戦を実行する上では、お前の存在が要なんだ。友達や家族じゃない。お前だけなんだ。お前しかいないんだ」

「・・・・・・・・信じていいの？」

「もしも邪魔だと判断したら・・・容赦なく俺やキンジごと理子を撃て。キンジも、いいな？」

「この作戦を立案した時から、そんな事は覚悟の上だ」

キンジと刻桃の言葉を受けて・・・アリアは少々戸惑いながらも、それを悟られないようあえて強気に言う。

「・・・・・失敗したら承知しないわよ。アンタ達が理子に殺される前に、絶対風穴あけてやるんだから！」

「好きにしろ」

「肝に命じておくよ」

アリアの激励とも脅しともとれる言葉に、刻桃とキンジが軽く返す。そして、廊下の方から・・・・1人分の足音がドンドン接近してくる。3人は無言で頷き合うと、作戦実行のためにそれぞれ持ち場についた。

第１６話（後書き）

ＶＳ理子。まだ若く、当主でもない故・・・鉋を折る事が出来なかった刻桃。
それでも、飛行機とその乗員乗客を人質に取られている上、武偵法９条があるせいで、『七花八裂』を使うわけにはいかない状況。
それでも・・・次回は奥義もしっかり登場。同時に、理子戦決着！

こないだ、劇場版『鋼の錬金術師　嘆きの丘（ミロス）の聖なる星』を観てきました。
以前の劇場版がＴＶ本編の数年後だったのに対し、今回の劇場版は旅の途中に起こった本編では語られなかった幕間の戦いのストーリー。
シリアス中心に引き込まれる展開に、どんでん返しの数々。一見の価値ありです。

今年も夏の映画が熱い。オーズ、ポケモン、ハリーポッター、乱太郎、トランスフォーマー。今年も今年で観たい物目白押しです。

第17話

「くふっ・・・・くふふふ♪」

刻桃を追い、客室がひしめく廊下をゆっくりと歩く理子。その精神状態はこれ以上ない程の高揚状態にあった。
誰もが認める凄腕の武偵にして『オルメス』の子孫であるアリアをいとも簡単に出し抜き、若き虚刀流の剣士・・・・ある意味最も厄介だった刻桃とも互角の戦いを演じる事ができた。

「ふふふ・・・・」

ふと、髪で握った『絶刀・鉋』を見る。

この刀には何処か不思議な力があった。折れず曲がらず錆びつかず・・・という特性だけではない。

あたしがメインで使う武器、戦術は、あくまで拳銃主体。ナイフも使うけど、刻桃のように剣士を名乗っているわけじゃない。

なのに、この『絶刀・鉋』を持っていると、妙に力が湧いてきて・・・・同時に『人を斬ってみたくなる』・・・という欲求まで湧く始末。

ヨロイ・・・アイツは、この感情の正体は『刀の毒』のせいだと言っていた覚えがある。

刀に限らず、この世の全ての武器には『持つと使ってみたくなる』というある種の『毒』が存在すると言われているが、四季崎記紀が造りし１０００本の変体刀はその毒が特に強いらしい。

しかし、今のあたしにとって、それは百薬の長だった。

今なら誰にも負ける気がしない。相手が刻桃とキンジ・・・アリアが復活していようと、血の海に沈められるだけの絶対の自信がある。

そうこう考えているうちに・・・理子は、あるドアの前で立ち止まる。

・・・・・・・・・・・・

「バッドエンドのお時間ですよー♪」

理子は・・・事前に押さえていたであろう鍵を使い、キンジ、アリア、刻桃が逃げ込んだ客室へと入る。
ツーサイドテールで『絶刀・鉋』と、ナイフを構えつつ・・・両手に持ったワルサーP99を部屋の中にある2つの人影・・・・刻桃とキンジに向ける。

「さっき振りだねー、刻桃ぉ。キンジィ・・・お前もやっとやる気出したみたいだな。もしかしたら仲間割れで自滅しちゃうかなー・・・なんて思ってたから、安心した・・・・・・あっ!?」

キンジの顔を見た瞬間・・・理子の表情が変わる。
実に嬉しそうに笑い・・・髪で持ったナイフと鉋を軽く振った。

「あはっ!アリアと何かしたんだ。よくできたねー、こんな状況で。それで、アリアは?死んじゃったりはしてないよねぇー?」

この口振りから察するに・・・どうやら、理子はヒステリアモード化のトリガーを知っているようである。

「・・・・さぁな」

「両手の銃を乱射して試してみたらどうだ？」

キンジと刻桃が言う。
2人は、人1人分膨らんだベッドと・・・シャワールームをそれぞれ見る。
理子はそんな2人の視線を目ざとく追うと、ニヤリと笑う。

「くふふっ♪あぁん・・・アンタ達のそういう顔・・・・見てるだけでどっきどきする。勢い余って本当に殺しちゃうかも」

「そのつもりで来るといい。そうしなきゃ・・・・お前が殺される」

キンジは低く言い・・・

「余裕こいて、俺を戦いに引き摺りこんだ事・・・・・思いっきり後悔させてやる」

刻桃は・・・ゆっくりと構える。

「虚刀流七の構え・・・・杜若！」

足を平行に前後へと配置し、膝を落とし、腰を曲げ、上半身を軽く前傾。
両手は・・・貫手の形で、肘を直角の角度に。体重は前方にかけ、若干前のめりに体勢に。顔は正面に向け・・・じっくりと理子を見据える。

今にも駆け出しそうな・・・・『動』の構え。

（・・・ふぅん。全速力で突っ込んできて、あたしが発砲する前に手刀やら足刀やらを打ち込む気か）

理子は、刻桃の構えから彼の企みを予測する。

「行くぜっ！！」

それを知ってか知らずか・・・刻桃は真正面から一気に突っ込む。
後ろ足から踏み切り・・・その勢いを前足に乗せて・・・一歩、二歩、三歩と。

（速い！？でも、あたしが・・・・それを許すわけないだろ！）

理子は・・・刻桃に銃を向け、トリガーを引こうとするが・・・引けなかった。
何故なら・・・キンジがベッドの脇に隠しておいた非常用の酸素ボンベを、いつでも解放状態に出来るように持っていたからだ。

「・・・・・くっ！？」

撃てば爆発する。この部屋にいる全員が無事じゃ済まない。
それを悟った理子の手が・・・一瞬停止。

キンジは酸素ボンベを投げつつ、手元でバタフライナイフを展開。
刻桃の後に続いて理子へと突進する。２人がかりで・・・一気に理子を生け捕るために。

ぐらっ・・・

「「！？」」

突如・・・飛行機が大きく傾いた。
その時の衝撃で、室内の机が・・・・運悪く刻桃の足元へと転がってくる。

刻桃は、ギリギリの所で真後ろに飛んで回避したものの・・・それは同時に理子から距離を取ってしまった事を意味する。

キンジは更に最悪な状況に陥っていた。足元が大きくブレたせいで・・・姿勢を大きく崩していたのだ。

この隙を、理子は見逃さず・・・・

「さようなら♪」

笑いながらワルサーＰ９９を・・・・キンジの額へと向けて発砲。
ヒステリアモードのキンジは・・・・通常時よりも大幅に跳ね上がった五感により、弾丸の動きをスローモーションのように視ることができた。

それでも・・・いや、だからこそわかってしまう。

この状況で・・・この体勢で・・・この弾丸は絶対避けられないと。

（それなら！）

キンジは・・・・

神速で腕を振り・・・・

バタフライナイフで銃弾を斬った。

理子はもちろんの事・・・斬った本人であるキンジも驚く。
刻桃も手甲を利用して弾丸を受け流してはいたが・・・・キンジの『弾丸斬り』は、それよりも更に上の難易度を誇る技術。

どこか感動を含んだ驚きに理子が目を見開いた瞬間、キンジはアリアから拝借したガバメントを向けた。

「動くな！」

「刻桃とアリアを撃つよ！！」

理子は、右手の銃をアリアが居ると思われるシャワールームに。左手の銃を、ついさっき自分から距離を取った刻桃へと向ける。

しかし・・・そこにはもう刻桃の姿はなかった。

刻桃は・・・・『杜若』の構えから、再び突撃してきたのである。

「・・・・・っ！？」

この一瞬で、銃を向けるにはもう間に合わないが・・・・武器は銃だけではない。
理子はツーサイドテールで『絶刀・鉋』を握り・・・・

「抱腹絶刀！！」

刻桃に向けて、カウンターたる刺突技を放った。
だが・・・刻桃の次の行動は、理子を更に驚かせた。

刻桃は、切っ先が自身に届く寸前に、後ろ向きのまま・・・・真後ろに待機していたキンジに向かって跳んだのだ。

虚刀流七の構え・・・『杜若』は、単純な突撃の構えではない。

前足の踏み切りの間において、突っ込んでいくと相手に思わせつつ・・・初速と終速において緩急をつけた、変幻自在の足運び。いわゆる陽動も兼ね備えた上での構え。

しかし・・・『刀』という間合いが固定された武器を使う剣士相手ならまだしも、拳銃も併用する相手にはあまり有効とは言えない。
離れてしまえば、それだけ発砲の隙を与えてしまいかねないからだ。

（どういうつもり・・・・・・・・！？）

この隙をついて理子は銃を向けるが・・・・再び驚愕する。

真後ろに跳び上がった刻桃は、顔面をガードするキンジの両腕を・・・思いっきり蹴った。

刻桃は・・・・キンジを踏み台にした足をバネのように折りたたみ、理子の真上を目掛けて再び跳ね・・・・

「虚刀流七の奥義・・・・・」

そのまま、足を斧刀に見立て・・・・

「落花・・・狼藉！！」

全体重と全脚力を乗せて加速させた、前方三回転踵落としを放った。

「く・・・・っ！？」

理子は髪を巧みに操り・・・さらに、鉋の刀身を使ってこれを防御。網で絡め取るように威力を殺しにかかる。
しかし、衝撃を完全には殺しきれず、身体全体・・・特に背骨や足腰が悲鳴を上げるのを否応なく感じてしまう。

それでも理子は耐えきり、両手の銃を刻桃へと向ける。

（鉋は封じられたけど・・・これで詰みだ！）

理子はニヤリと笑う。

しかし、そうは問屋がおろさなかった。

「今だ！」

刻桃が叫ぶと・・・天井の荷物入れに潜んでいたアリアが、転げ出ながら理子の左右のワルサーＰ９９を精密射撃で弾き飛ばした。
それだけではない。アリアは背中から日本刀を抜刀。同時に・・・
理子のツーサイドテールの片方を切断。握られていたナイフがガチャンと音を立てて床へと落ちる。

「このっ・・・・よくもあたしの髪を！！」

理子は、残ったもう片方のテールで『絶刀・鉋』を操り、アリアに斬りかかる。

「させるか！！」

体勢を立て直した刻桃の手刀と・・・理子の『絶刀・鉋』が交差。

鉋の切っ先は・・・刻桃の首を僅かに通過、髪止めの紐をかすめ、束ねていた長い銀髪が解き放たれる。

逆に・・・刻桃の手刀は、理子のテールを根元から切断。そのまま・・・リボン付きの髪が絡まったままの『絶刀・鉋』を奪い取った。

「ああっ！？」

理子は・・・両手を自分の側頭部に当て、焦ったような声を上げる。

その隙にアリアは刀を、キンジはナイフを納め・・・

「理子・峰・リュパン４世！」

「殺人未遂の現行犯で逮捕するわ！」

流れるような動作で、それぞれガバメントを向ける。

「残念だったな、理子」

刻桃も・・・解かれた長い銀髪を鬱陶しく感じながらも、『炎刀・銃』を取り出す。今度は銃身ではなく、グリップをしっかりと握って。

「お前の敗因は2つある。1つは・・・・アリアとキンジを舐めすぎた事。もう1つは・・・・調子に乗って、俺までこの戦いに参戦させた事だ。まぁ・・・もしも俺がいなくても、この結果は変わってなかったと思うけどな」

「・・・そっかぁ。ベッドに居ると見せかけて、シャワールームにいると見せかけて・・・本当は、アリアのちっこさを活かして、キャビネットの中に隠してたのかぁ・・・。その上で、チームメイトである3人が囮としてそれぞれを利用し合いつつ、カバーし合う。こうゆうブラフって、よっぽど息が合ってないと出来ない事なんだけどねぇ」

理子は満面の笑みを浮かべる。

「ま、キンジのおかげだな・・・」

と言って、刻桃はキンジをチラリと見る。
キンジが刻桃の囮となり、さらに刻桃がアリアの囮となる。これこそが、キンジ立案の『二重囮作戦』だった。
互いに利用し、利用され、仲間という名の囮を上手く使って理子を捕縛。普通に考えれば、よほど息が合っていなければ・・・・いつ破綻してもおかしくない作戦。

それでもどうにか上手くいったのは、個々の能力が優れていた事と・・・・

「刻桃とも・・・・アリアとも・・・・数日とはいえ一緒に生活していたからな。合わせたくなくとも合ってしまうさ」

キンジという、どちらにでも合わせられる仲介が存在したからである。

「そう・・・・」

理子は・・・・醜悪に笑む。

「3人とも、誇りに思っていいよ。理子、ここまで追い詰められたのは初めてなんだから・・・・・ねぇ♪」

瞬間、自らの金髪を・・・わさわさと全体的に蠢かせた。

これが何を意味するのか・・・・ヒステリアモードのキンジは、瞬時に理解した。

髪の中で・・・・何かを操作していると。

恐らく、この飛行機を遠隔操作するためのコントローラー。

この飛行機が理子にとって都合良く揺れ過ぎている事からも・・・・想像は出来なくなかった。むしろ、気づくのが遅すぎたぐらいだ。

「やめろ！何をする気だ！！」

キンジが理子を捕えようと踏み出した瞬間・・・・

ぐらり・・・・

再び飛行機が大きく傾き・・・・急降下する。

姿勢を崩したアリアは壁にぶつかり、キンジも倒れないようにするので精一杯。

「刻桃ぉ！！」

「・・・・・っ！？」

理子は・・・・右手に『炎刀・銃』、左手に『絶刀・鉋』を持った状態で床に這いつくばっていた刻桃へと突撃。
その手に持っていた『炎刀・銃』を素早く拾い上げるように奪い・・・・

「てめっ！？」

「ばいばいきーん♪」

脱兎のごとく、客室から飛び出していった。

アリアは、理子が遠隔操作しているであろう自動操縦システムを何とかすべく操縦室へと向かい・・・・刻桃とキンジは逃げ去った理子を追った。

・・・・・・・・・・・・・・・

キンジと刻桃は・・・・理子を追って1階のバーに辿り着く。
理子はというと・・・・・バーの片隅で、窓に背中をつけるようにして立っていた。

「狭い飛行機の中・・・・どこに行こうっていうんだい？仔リスちゃん」

「お前は完全に包囲されている。とっとと諦めて・・・俺の『銃』を返せ！」

キンジはガバメントを・・・刻桃は『絶刀・鉋』をおぼつかない手付きで構える。
対する理子も・・・にやりと笑いながら、まだまだ余裕な態度で『炎刀・銃』を向ける。しかし、いくら『銃』があろうと、普通に考えれば・・・この状況の理子は完全に袋のねずみ。

あとは、キンジと刻桃が一気に飛び掛かる事でチェックメイト出来るハズ・・・だった。

だが、迂闊には近寄れなかった。

何故なら、壁際には理子を取り巻くようにして、丸く・・・輪のように爆薬が貼り付けられていたからだ。

「ねぇ・・・刻桃にはさっき断られちゃったけど、キンジはどう？この世の天国・・・イ・ウーに来ない？イ・ウーには・・・お兄さんもいるよ？」

再び金一の事を持ち出された事で・・・キンジの瞳は鋭くツリ上がり、ガバメントを握る手にも力が込められる。それこそ、いつ衝動的に発砲してもおかしくないぐらいに。

「理子・・・これ以上俺を怒らせるな。あと一言でも兄さんの事を言われたら、衝動的に武偵法9条を破ってしまうかもしれないんだ。それはお互い・・・嫌な結末だろう？」

「あ、それはマズいなー。キンジには武偵のままでいてもらわなき

や。それじゃ、2人のスカウトにも失敗しちゃったしー、今度こそサヨナラだね。結構楽しかったよ♪」

理子はウインクしたかと思うと・・・両腕で自分を抱きしめるような姿勢を取る。

「・・・・刻桃、お前の事は嫌いじゃなかったよ。この『炎刀・銃』は・・・記念に貰っていくから。じゃね♪」

ニッコリ笑うと、理子は手元のスイッチを押し、背後に仕掛けていた爆弾を起爆させた。
壁に穴が空き・・・・理子は吸い出されるようにして、そこから飛び出した。

「理子!!」

刻桃が・・・・飛行機の外に吸い出されないよう床に『鉋』を突き刺し、しがみつきながら叫ぶ。

飛び降りた理子はというと・・・・背中のリボンを解き、魔改造制服を不格好なパラシュートに変形させる。そのまま緩やかに降下していった。

消火剤とシリコンによって自動的に穴が塞がるまでの僅かな間に・・

・・下着姿の理子が飛行機に向かって手を振る姿が見て取れた。

その理子と入れ違いに・・・

ドドォォォォオオオン！！

轟音と共に、今までで一番激しい震動が飛行機を襲った。

「な・・・今度はなんだ！？」

刻桃が突き刺したままの『鉋』に再びしがみつく。
すると、窓の傍にしがみついていたキンジが・・・・

「・・・・さっき、冗談のような速度で飛来する2つの光が見えた。
多分・・・・ミサイルだ」

ギリ・・・と、歯を食いしばりながら言った。

「ミサイル！？んなもん・・・・どっから。それより、飛行機の損

傷はどうなってる？」

刻桃は床から『鉋』を抜き、窓から翼の方を見る。キンジも、反対側の翼の状態を確認。

結果から言えば・・・飛行機は左右の翼に2基ずつあるエンジンのうち、内側の2基を破壊されてはいたが、何とか持ちこたえていた。

「くっ・・・耐えたとはいっても、まだ急降下しているみたいだ。先に操縦室に行ったアリアが心配だ。俺達も行くぞ！」

キンジは急降下による急減圧に苦しみながらも、頭を押さえて姿勢を整える。

刻桃も、鉋を引き摺りながらキンジに続こうとする。

その時・・・・

《～♪～♪～♪～♪～♪》

刻桃の携帯電話が鳴り響く。

「キンジ、先に行っててくれ。俺も後から行く」

「・・・・わかった」

キンジは何か言いたそうにはしていたが、あえて詮索せずに操縦室へと向かった。

それを見送ると、刻桃は携帯電話を通話状態にする。

「・・・・・・理子か？」

《あはは♪正解、よくわかったね。いつもとは違う携帯電話使って掛けたのに》

電話の相手は、ついさっき逃亡したハズの理子だった。まだ降下中なのか・・・ただ単に外にいるからなのか。電話の向こうから暴風雨の音が耳障りな程聴こえる。

《どう？理子のプレゼント・・・・気に入ってくれた？》

「やっぱ・・・・お前らの仕業か。おかげでこっちは死にそうだ」

《そう言ってる人ほど、案外ちゃっかり生き残っちゃう物でしょ。刻桃やキンジ、アリアみたいな人は特にね。でも、噂は本当だったみたいだね》

妙に確信めいた理子の声。
刻桃が、『なにがだ？』と聞き返すと・・・

《ヨロイから聞いたよ。虚刀流・・・鑢家の一族は『武器を持つと弱くなる』っていう、武偵としては致命的な体質を受け継いでいるって》

「・・・・・・・」

刻桃は無言になる。
理子はそれを『肯定』と受け取り、さらに続ける。

《本当はあまり信じてなかったんだよ？でも・・・拍子抜けなほど簡単に『銃』を奪えたし、理子を追い詰めた時の・・・・『鉋』を持った構えも酷い物だったし・・・これはもう本当だったんだって確信しちゃった。だって、あの状況で弱くなったフリをしても・・・何の得も無いでしょ？》

「・・・・理子。お前とヨロイはどういう関係なんだ？」

《あえて言うなら、同じ組織にいて・・・お互いにとって有益な情報を交換した仲・・・・かな。でも、出来ないとは思うけど『鉋』は壊さないでね》

「・・・・それはお前次第だ。もしもお前が、俺の『銃』を傷つけたり悪用したりすれば・・・・容赦なく『鉋』を圧し折ってやる。

『菊』では無理だったけど、最終奥義なら圧し折る自信もあるからな」

《あはははは♪それは困っちゃうな。うん、わかったよ。『銃』は・・・・理子が大切に持っててア・ゲ・ル♪刻桃も・・・・理子の『鉋』、絶対手放しちゃダメだよ。アレがあれば・・・・》

次の瞬間、理子の声が険しい物に・・・怒りと憎しみを孕んだ黒い物に変化する。

《アイツを・・・・今度こそアイツを倒せるかもしれないんだ！》

「・・・・アイツ？」

《『鉋』だけじゃない。今回の戦いで・・・・他の『完成形変体刀』を一本でも多く手に出来れば、それだけアイツを倒せる可能性が増える事は分かった。そのためなら、あたしは・・・・あたしは・・・・》

負の感情がこもった声に・・・嗚咽とも取れる声が混じる。

それを聴いた刻桃は・・・

「・・・・いいぜ」

ポツリと呟いた。

「お前にどんな闇があって、どんな目的があるかは・・・今はあえて聞かない。けど、お前がいずれ『鉋』を取り返しに来るってんなら、その時には絶対『銃』を奪い返す。それまでの間、この『絶刀・鉋』は破壊しないでおいてやる。お前を誘き寄せるための・・・・エサとしてな」

《・・・そう。ふふふ♪刻桃、約束破ったら酷いよ?それじゃ、ばいばいきーん♪ブツッ・・・ツー・・・ツー・・・ツー・・・》

理子は・・・最後に『表』の口調に戻り、電話を切った。

「ああ、約束だ。お前が狂気に囚われ続けるなら・・・死なない程度に八つ裂きにしてでも、俺が止めてやる」

刻桃は携帯電話を握りしめ、誰に聴こえるでもないのに、何かを決心したかのように答える。

同時に・・・さっきまで戦い、話していた理子の姿を思い浮かべる。

いつもの、ヘラヘラとおバカみたいに笑っている『表』の理子から

は想像もつかない・・・・負の感情を余すとこなく吐き出し続けた『裏』の理子。

瞳の奥に潜む深い闇と、混沌とした腹黒さ。敗北したというのに転んでもただでは起きず、ちゃっかり『銃』を奪っていく目敏さと、逃げ足の速さ。

本当に八つ裂きにするかはともかくとして、今回の件で・・・理子が油断ならない相手であるのはもう重々承知した。今度姿を現した時は・・・・死なない程度に痛めつけて『銃』を取り返すこともためらわない。どんなに『あの人』と重なろうと関係ない。それが理子の狂気を止める事に繋がると信じて。

そのためにも、『鉋』を手に入れた事は風花には内緒にしておき、時が来るまでは『銃』の代わりに自分で所有しておこう・・・と、考える。

「まぁ・・・・まずはこの状況から生き残る事が先決か」

これからどうするか云々の話しは、今のこの状況・・・・いつ墜落してもおかしくない飛行機を何とかしてからすべき事。

刻桃は・・・・先にアリアとキンジが向かったであろう操縦室へと向かう。無論『絶刀・鉋』も忘れずに持つ。

その時・・・・

「・・・・・・？」

はらりと、『絶刀・鉋』の柄に絡まった・・・・・・ピンク色のリボンがついたままの、理子の髪が解け落ちる。

「・・・・・・・間に合わせにはなるか」

刻桃は、解けた自分の長い銀髪を・・・・理子のリボンを使ってうなじの所で束ねた。

「ま、こんなもんだな」

髪とリボン触れて状態を確認すると、『絶刀・鉋』を引き摺り、改めて操縦室へと向かった。

第17話（後書き）

人がそれぞれ互いを利用し合う『二重囮作戦』の末、どうにか無傷で捕縛と思いきや・・・あっさり逃げられ、『炎刀・銃』も強奪されてしまいました。

でも、逆に『絶刀・鉋』を蒐集したわけですから、カウント的には0．5が1になったので、一応は＋になって入るんですよね。どっちにしても刻桃は武器を使えませんから、大した問題にはならないハズ・・・・です。多分。

決着はついても、ピンチは継続中。

次回は・・・お待たせしました。いよいよ真庭紅龍が満を持して登場です！！

仮面ライダーＷ　ＲＥＴＵＲＮＳ　エターナル編、レンタルスタート。

かつての劇場版で風都を恐怖のどん底へと叩き落とした、大道克己率いるＮＥＶＥＲ。その知られざる過去と、仮面ライダーエターナルの誕生秘話。

人とメモリは惹かれあう。劇場版のストーリーでも言われてた事でしたが、レッドフレアからブルーフレアへの進化の瞬間は、左翔太郎がロストドライバーとジョーカーメモリで『仮面ライダージョーカー』に変身した時と同等の盛り上がり。

そんな中で最も気になったのは、ルナの人・・・・京水の狂気とヤバさがさらにパワーアップしてた事だったり。過去のストーリーなのに。

第１８話

「遅い！！」

刻桃が操縦室に駆け込んだ時の・・・・アリアの第一声。

今、アリアは操縦席でハンドル状の操縦桿を握り、その隣の副操縦席にはキンジが座り、羽田空港の管制塔と通信を繋げながら計器盤を操作していく。

「結構・・・・いや、かなりヤバそうだな。状況はどうなってんだ？」

刻桃は、操縦席に掴まりながらキンジに尋ねる。

「・・・状況は最悪だ。台風による悪天候だけでもやっかいなのに、ミサイルの直撃を喰らったせいで燃料も盛大に漏れている。飛べるのは・・・・あと１５分が限界だそうだ。現在地は浦賀水道上空。今は・・・羽田に向かっているところだ。距離的にはもうそこしかないからな」

「ロンドンに向かってたハズなのに・・・・なんでまた」

「さっき衛星電話を使って武藤から聞いたんだが・・・・この飛行機は離陸してからロンドンには向かわず、相模湾上空をウロウロ飛

んでいたらしい」

キンジは、スピーカーに繋がれた状態で通話状態になっている衛星電話を刻桃に渡した。

「もしもし・・・・」

《刻桃か！？》

衛星電話が繋がれたスピーカーから声が聴こえる。

「その声・・・・武藤？」

《ああ、そうだ。さっきキンジから聞いたぞ、お前も武偵徽章を使って乗り込んでたって》

「まぁな。今度は・・・・『今までどこ行ってたんだよ！』とか言わせないぜ。バスジャックの時とは違って、今回はしっかり当事者だからな」

ククク・・・と笑いながら刻桃が言うと、武藤はバツが悪そうに『うっ・・・・』と声を漏らす。

「で、この事件はもう報道されてるのか？」

《あ、ああ。とっくに大ニュースだぜ。乗客名簿はすぐに武偵高の通信科が周知してな、アリアの名前があったんで・・・今みんなで教室に集まってる所だ。詳しい状況はさっきキンジから聞いたが・・・とにかく、このまま羽田に向かえ。高度もこれ以上上げるんじゃないぞ。燃料は一滴たりとも無駄にするな！》

「・・・その辺の事は俺じゃできないから、とりあえすキンジに代わる」

そう言って、キンジに衛星電話を返すが・・・ここである事が気になる。

「・・・そういやこの飛行機、操縦はどうしてるんだ？自動操縦か？」

刻桃が、操縦席に座るアリアに聞くと・・・・

「そんなのとっくに破壊されてるわ。今はあたしが操縦してる！前にセスナを飛ばした事があるから、上下左右の飛行まではどうにかなっても・・・・着陸は無理！」

「そういうわけだから・・・・武藤、管制塔、今すぐ着陸の仕方を教えてもらいたいんだが。時間が無いから、近接する全ての航空機との通信を同時に開いてほしい。彼らに手分けさせて着陸の方法を一度に言わせるんだ。できるか？」

キンジは、武藤と管制塔に対して無茶な事を言い出す。

パイロットたちに着陸の方法を喋らせること自体は、統率さえ取れればできなくもない。だが、それを全て正確に聴きとるのは・・・・並の人間には不可能。

武藤と管制塔がそれを指摘すると、キンジは・・・・

「できるんだよ、今の俺には！すぐにやってくれ。なにせもう・・・・時間が無くてね」

自信満々に言った。

その剣幕に押された事と・・・・もう時間が無い事もあり、管制塔は言われた通りに通信を繋げ、パイロット達に着陸方法を上手く分担させて喋らせた。

普通なら、一気に喋るパイロット達の言葉を正確に聴きとるだけでも至難の業。それを正確な意味で理解するのは不可能に近い。

だが・・・今のキンジは、ヒステリアモードの恩恵によって通常の３０倍以上感覚が研ぎ澄まされた状態にある。

それによって、キンジは瞬時に着陸方法を理解。計器も正確に読みつつ、操縦桿を握るアリアをサポートする。

（キンジとアリアが・・・・みんなを助けるために必死だってのに・

・・・俺にはもう・・・・できる事はねぇのかよ）

刻桃は、この場で唯一役に立てず、歯痒い思いをしていたが・・・・

「刻桃。お前は・・・・よくやってくれた」

キンジが計器を操作しながら言う。

「お前が居なかったら・・・・俺とアリアは、追い詰められてとっくに負けていたかもしれない。だから今度は・・・俺達がなんとかする番だ。まだまだ揺れるからしっかり掴まっていろ」

「・・・・・あいよ」

刻桃は、キンジの言葉にある種の嬉しさを感じつつ・・・操縦席の背後に設置されている折り畳み式の予備席を展開させ、いつでも座れるように準備する。

だが、そのまま座らず、操縦席に軽く掴まりながら状況を見据える。

例え役に立てない状況であっても・・・・ただ座っているだけなんて、できなかったからだ。

アリアとキンジも、それを咎めはしなかった。今は猫の手も借りたい絶体絶命の状況。必要になれば、出来る出来ないにかかわらず刻桃を扱き使う気満々だった。

・・・・・・・・

飛行機が横須賀上空に差し掛かった辺りで・・・

《こちらは防衛省、航空管制局だ。羽田への着陸は許可できない。空港は現在、自衛隊によって封鎖中だ》

羽田の管制塔職員の声ではなく、野太い男の声が・・・防衛省の役

人が通信に割り込んでくる。
この、ただでさえ危ない状況下で、唯一の着陸場まで奪われては・・・・遠回しに『墜落しろ』と言われているような物。
刻桃はキンジから衛星電話をひったくり・・・・

「ふざけるな!!」

大声で怒鳴った。

《誰だ貴様!!》

「俺は鑢刻桃。剣士で・・・・武偵だ!この飛行機は燃料漏れを起こしてて、時間にして・・・・・」

刻桃はキンジを見る。
すると、キンジは両手を軽く開いて刻桃へと向ける。

その意味を理解した刻桃は・・・・

「あと１０分しか飛べないんだ!他に代替着陸ができない以上、もう羽田しかねぇんだ!!」

《鑢武偵。私に怒鳴った所で無駄だぞ。これは防衛大臣による命令なのだ》

不穏な言い回し。
刻桃は横に振り向き、窓の外を見る。

「・・・・・チッ」

舌打ちに釣られ、キンジと・・・・操縦中のアリアも窓の外を見た。

そして・・・・3人は息を呑む。

飛行機のすぐ脇に・・・・航空自衛隊所属と思われる戦闘機・・・・
F－15が、ピッタリとつけてきていたからだ。

「おい、防衛省。アンタのお友達が見えるんだが」

キンジは、皮肉を込めて尋ねる。

《・・・・それは誘導機だ。誘導に従い、海上に出て千葉方面に向かえ。安全な着陸地まで誘導する》

指示に従い、アリアは操縦桿を海上に向けて傾けようとしたが・・・・

「「待て！！」」

「えっ！？」

刻桃とキンジが・・・・ほぼ同時と言ってもいいタイミングでアリアの手を上から握って止める。

「・・・・海に出るな。アイツは嘘をついている。防衛省は俺達が無事に着陸できるとは思っていない。このまま海に出たら・・・・間違いなく撃墜される」

キンジが言うと、アリアは操縦桿を握る両手を震わせる。

「そんな・・・・！この飛行機には一般市民も乗ってるのよ！？」

「・・・・このまま東京に突っ込まれたら大惨事になりかねないからな。『大』を助けるためなら『小』は容赦なく切り捨てる。国家権力の狗共が考えそうなことだ」

刻桃が舌打ちしながら補足する。

「でも、どうするのよ。羽田がダメじゃ・・・都内に着陸できるような滑走路なんてないじゃない！」

「・・・・そうなんだよな。アメリカの荒野みたく、都合よく広大な空き地あるなんて・・・・そうそうないしな」

「いや、そうでもない！」

「「！？」」

キンジが自信満々に言った。
そして、衛星電話を片手に武藤と再び話す。

二言三言話すと・・・・

「・・・・・ギリギリが」

呟いたキンジに、アリアと刻桃は一瞬黙る。

「2人とも・・・・武藤も・・・・それから羽田の管制塔と防衛省の連中もよく聞いてくれ。この飛行機は、これより東京武偵高の人工浮島の隣に位置する・・・・通称、『空き地島』に緊急着陸する。あの島には名前の通り何もないし、対角線を使えば着陸に必要な距

離はギリギリ取れる」

キンジの奇策。
理論上は可能な策ではあったが・・・・空き地島には誘導装置も誘導灯もない。
しかも、現在は夜である上に・・・・台風による暴風雨で視界も最悪。アリアにしても・・・・キンジにしても・・・・飛行機を実際に着陸させた経験は皆無。
こんな最悪なコンディションでの手動着陸は・・・・どう考えても不可能に近い。

「2人は・・・・どうする?着陸を断念して、俺と心中するか?」

キンジは・・・・ピンチであるにもかかわらず微笑。隣に座るアリアと、真後ろに立つ刻桃に話を振る。

「アンタ達と心中なんか、死んでもお断り!」

矛盾しつつも、アリアはしっかりと拒絶。

「俺だって・・・・少なくとも『炎刀・銃』を取り返すまでは死ねるかよ!」

刻桃は・・・自らの長い銀髪を束ねたリボンに触れながら答える。
仲間たる2人の答えをそれぞれ聞いたキンジは・・・

「はは、嬉しい事が起きた」

といって、笑みを浮かべる。

「この3人の意見が一致するなんて、さっきの囮作戦と合わせてこれで2度目だ。俺も・・・こんな所で心中なんてお断りだからさ。アリアを・・・死なせたくない」

「・・・・!?なななな・・・・なんで・・・・今そういうこと・・・」

真っ赤になるアリア。
それを尻目に、今度は刻桃へと振り向く。

「当然、刻桃もだ」

「・・・取って付けたみたいに言うな。それより、空き地島に向かうなら、燃料を節約するためにも・・・・海上に出た方がいいんじゃないか?直線距離だし」

「俺だってそうしたい。だが、アレを退かせない限りはそれも無理だ。このままギリギリまで地上を飛ぶしかない」

キンジは、窓の外の戦闘機を見ながら言った。
海に出た瞬間に・・・・撃墜するように命令を受けているであろう戦闘機を。

「どうしたって綱渡りか。せめて戦闘機だけでも退かす事ができれば・・・・・」

刻桃も・・・戦闘機を見ながら、命令を出した防衛省に呪詛の念を送る。

その時・・・・

《その望み、僕が叶えてあげよう》

飛行機を始め、羽田管制塔・・・自衛隊の戦闘機・・・防衛省の役人・・・東京武偵高。この事件に関わっている全ての通信チャンネルに、突然謎の声が割り込んできた。

妙に中性的な声だ。

声の主は野外にいるようで・・・通信の向こうからは、暴風雨の音が耳障りな程聴こえる。

《そういうわけだから、キミ達は最短距離を飛ぶためにも海上に出たまえ。国家権力の狗は・・・僕が何とかしよう》

《おい、誰だ貴様。どうやってこの回線に割り込んだ!!》

防衛省の役人が声を張り上げ、突然の乱入者に対して怒りを露わにする。

《キミ達と同じ方法で割り込んだに過ぎない。実に簡単だったよ。そういうわけだから、『どうやって?』なんて聞かれる方がおかしいくらいさ》

《わ・・・我々をバカにしているのか!!》

声の主はそれを無視すると・・・・・

《やぁ、モモちゃん。昨日振りだね》

モモちゃん・・・・つまり、刻桃に声を掛ける。
刻桃の事をそう呼ぶ人物は・・・・1人しかいない。

「お前・・・・紅龍!?なんで俺が・・・・」

こんな状況にいるとわかった?と聞こうとすると、割り込んできた声の主・・・真庭紅龍は鼻で笑いながら返す。

《なに、簡単な事さ。知り合いの飛行機で東京まで送ってもらう途中で、暇潰しに自衛隊の電波拾っていたら・・・・キミが自分の名前を叫んでいたから気になってね。急遽進路を変更してもらったのさ》

――――俺は鑢刻桃。剣士で・・・・武偵だ!――――

防衛省の役人に啖呵きった時の事を思い出す。

「・・・ああ、あれか。で、お前は今どこにいるんだ?」

《ふふ、聞いて驚きたまえ。キミ達の・・・・すぐ傍さ。今から面白い事が起こるよ?試しに・・・・その飛行機の計器を操作しているキミ。名前は?》

紅龍が聞くと・・・

《・・・・遠山キンジ。東京武偵高2年。探偵科所属の武偵だ》

キンジは戸惑いながらも答える。

《そうか・・・・キミが。それじゃ、通信機の周波数を僕の指示通りに合わせたまえ。チャンネルは・・・・》

紅龍の指示。

ふと刻桃を見ると、刻桃は無言で頷く。

それを見たキンジは、紅龍の事を信用するに足る人物と判断。通信機の周波数を紅龍の指示通りに合わせる。

そこから漏れてきたのは・・・・

《ぼ・・・・防衛省。応答を願います。非常事態です》

《どうした。旅客機に妙な動きがあったら、海上に出次第容赦なく撃墜せよと命令を出したハズだ》

《いえ・・・それが・・・・非常事態が起こったのは、この機体の方です》

察するに・・・防衛省の役人と、追跡してくる戦闘機のパイロットによる会話だろう。

ヒステリアモードのキンジと、元々それなりに推理力がある刻桃はもちろんのこと、推理が苦手なアリアでさえもそれは容易に理解出来た。

だが、何処か様子がおかしい。

撃墜するつもりだったという点は・・・・不愉快ながらも、わかりきっていた事だから今更驚かない。

しかし・・・戦闘機のパイロットはうろたえ、次の瞬間にはとんでもない現実を報告する。

《機体に・・・・私の目の前に、忍装束の・・・・・しょ・・・・少女が落下してきて・・・・私の目の前に張り付いています！！》

それを聞いた防衛省は『バカな事を言うな！』と一喝する。
キンジとアリアも『何言ってるんだコイツ』とでも言いたげに、隣を飛ぶ戦闘機を見た。

「！？」

すると・・・・キンジの顔が引き攣る。
アリアもそれが気になり、高性能双眼鏡を取り出して戦闘機を凝視する。

すると・・・・・

「キンジ、アレって・・・・」

「ああ・・・・女の子だ・・・」

高性能双眼鏡を使っているアリアと、同じく双眼鏡を取り出したキンジは・・・・戦闘機に取りついた少女をしっかりと目視する。

驚く二人を尻目に、刻桃は・・・・

「まさか・・・・ホントにこんな近くまで来てくれてるなんて。やっぱ有難いもんな・・・・・仲間って奴は」

感慨深そうに言う。

「アンタ・・・・アイツの事を知ってるの？何者なのよ！」

アリアは刻桃に振り向き、少女の正体を尋ねる。

「前に・・・・言ったよな。俺にも仕事仲間がいるって。それがアイツ。戦国時代から尾張時代にかけて裏世界にその名を轟かした忍の一団・・・・『真庭忍軍』の子孫、真庭紅龍だ」

刻桃の紹介を受けて・・・・

《改めまして・・・・僕の名前は真庭紅龍。こんな厳つい名前だけど・・・・そこから見てもわかる通り、その実態は花も恥じらう可憐な少女さ。以後、お見知り置きを》

紅龍は中性的な声で改めて挨拶する。

・・・・・・・・・・・・・・

飛行機の操縦室で、刻桃が紅龍の紹介を端的に行う中・・・・その会話内容を傍受する１人、防衛省から飛行機の撃墜命令を受けている戦闘機のパイロットは、目の前の光景にただただ絶句するしかなかった。
彼の視線は、突然目の前のフロントガラスに飛び乗ってきた少女・・・・真庭紅龍へと釘づけになっていた。

年齢は１０代後半。袖が斬り落とされた紅い忍装束を纏い、両手には黒い革手袋。頭には額当て。防具の代わりなのか・・・両腕と両足には鎖が巻かれている。
髪は・・・外側にはねた茶髪をボブカットにしており、忍装束と合わせて活発な印象を受ける。

戸惑うパイロットを尻目に・・・・紅龍は、ニィィィとパイロットに笑いかけながら、頭部に装備したインカムを操作する。

「さて、キミには何の恨みはないが、ここで退場してもらおう。いくら僕でも戦闘機の重量を全て無くす事は出来ないが・・・・この暴風雨が僕に味方してくれる。覚悟はいいかい？」

紅龍の言葉は・・・・彼女の目の前にいるパイロットはもちろんのこと、彼女自身が自分の意思で通信を繋げた者達全てに届く。

「真庭忍法・・・・・・」

第１８話（後書き）

というわけで、やっとの事で初登場にこぎつけた真庭紅龍。その正体は、尊大な口調の『僕少女』でした。
最初から女の子である事は決めており、一応微妙な感じで伏線は張ってましたけど、アレだけで気づけた人は・・・・・凄いです。感想欄を読んだ時、気付いた方が何人かいて驚きました。

忍び装束は、『真庭狂犬』の物と色違いで、かぶり物の代わりに額当てを装着。使用忍法は原作からの物と、それからオリジナルのや他の作品から引っ張ってきた物も使う予定。独自解釈も含まれるので、その辺はご容赦ください。

声優イメージは・・・刻桃と風花のもあわせて、今日中に活動報告の方で紹介します。キリのいい所でキャラ紹介も執筆するので、そこにも載せたいと思っています。

第１９話

《真庭忍法・・・・・・・・・足軽!!》

紅龍の声は通信機越しに、刻桃、キンジ、アリアがいる操縦室にもしっかり届いた。

「・・・・・忍法?」

「アイツ、忍者って言ってたけど・・・何する気なの?」

キンジとアリアが・・・怪訝そうな顔で刻桃を見る。

「戦闘機・・・・・・・・見てみな」

刻桃に促される形で、２人は防衛省の手先たる戦闘機を見た。

すると・・・・

「「!?」」

戦闘機は突然バランスを崩し、台風による暴風雨に吹き飛ばされるがごとくフェードアウト。
防衛省が慌てた様子でパイロットに通信を送る声が聴こえたが・・・
アリアとキンジは突然の出来事に理解が追いつかず、刻桃に詳細な説明を求めた。

「アレがアイツが使う忍法の１つ・・・・『足軽』だ」

「・・・・足軽？」

アリアが聞き返す。

「簡単に言えば・・・・紅龍自身の体重や、紅龍が触れた物体の重量を消す事ができる忍法だ」

「・・・・忍法って。いくらあの紅龍って子が超能力者（ステルス）であったとしても、そんな簡単に戦闘機の重量を消せる物なのか？」

キンジの疑問も最もだった。戦闘機・・・Ｆ－１５の機体重量は約２７トン。それだけの重量を一瞬で消すのはどう考えても無理がある。
忍法・・・という時点で怪しさ全開だが、この際それは置いておく。

「その辺の理論は面倒だから省くけど・・・別に重量を全部消す必要はない。一部分・・・例えば前方の重量だけでも消せれば、重心が後方に移動して勝手に退場してくれる」

刻桃の簡単な解説。

飛行機が空中を飛行できるのは、機体の重量に等しい揚力を翼で発生させ、重力と上下方向の力のバランスを保っているからである。

その絶妙なバランスの中で・・・重心が後に下がりすぎると機首が上がり、エンジンを最高推力にしても機速は下がり、ついには失速して墜落する。

逆に・・・ある程度前方に重心が移動したら、機首が下がることによって機速が上がり、空中分解するか地面に激突するかのどちらかとなる。

更には、台風による暴風雨。

これが決定的となり、戦闘機はあっけなくフェードアウトに追い込まれた。

「だが・・・あの子は大丈夫なのか？」

キンジが聞くと、刻桃は素っ気なく答える。

「紅龍の事も心配はない。アイツはアイツで・・・ハングライダー

やパラシュートを使って勝手に助かってくれる」

「とにかく・・・・これで邪魔者はいなくなったわ。あとは直線距離で『空き地島』を目指すだけよ」

アリアが操縦する飛行機は、邪魔者が居なくなった事によって難なく直線最短距離を飛行。ついに東京湾へと差し掛かる。

「キンジ、ここからは・・・・アンタの仕事よ」

着陸に備えて車輪を出すと、アリアは操縦のメインをキンジが座る副操縦席へと移す。

操縦桿を握るキンジは、そろそろ見えてくるハズの『空き地島』を探すが・・・・・・・・・すぐに結論を出せてしまった。

（・・・・・・っ!?無理だ。着陸は・・・・・・不可能だ）

そう。空き地島は・・・・・・・・周囲が暗闇に包まれているせいで全く見えないのである。

こんなコンディションでは、例えベテランパイロットでも惨事は免れない。キンジは仕方なく着陸を諦め、どうやって被害を最小限に『墜落』させるか・・・・と、頭を切り替えようとした時・・・

「キンジ、諦めないで」

「今度はお前が頑張る番・・・・なんだろ？」

第六感でキンジの考えを察した・・・・アリアと刻桃が、静かに言った。

「アンタなら大丈夫。武偵辞めたいのに武偵のまま死んだら負けよ。それにあたしは・・・・まだママを助けてない！！」

「俺だって、少なくとも・・・・『銃』を取り返すまでは絶対死ねない。だからお前も諦めるな。運命って奴は・・・・常に諦めない奴にだけ味方してくれるもんだ」

2人の言葉の途中で・・・・

「そう。刻桃の言う通りよ。あたし達はまだ死ねないのよ。だからこんなところで・・・・」

まるで魔法のように・・・・

「俺達は・・・・」

キラ、キラ、キラ・・・・・・と。

「「絶対死ぬわけがない！！」」

空き地島の上に光が出現。

同時に・・・・

《キンジ、見えてるかバカヤロウコノヤロウ！！》

スピーカーから武藤の声が響いた。
さっきまでは教室から喋っていたようだが、ビシャビシャと大雨の音が聴こえる所から察するに・・・・今は野外にいるようである。

《お前が死ぬと、白ゆ・・・・いや、泣く人がいるからよ。車輌科で一番デカいモーターボートと装備科の懐中電灯を・・・・みんなで無許可で持ち出して来たんだ。全員分の責任・・・・後でしっかり取ってもらうぞ！！》

叫び声に続いて、キンジと武藤の回線に・・・

《キンジ！アリア！それから刻桃！！》

《機体が見えてるぞ！！》

《あと少しだ！！》

《根性見せやがれ！！》

次々と通信が割り込んで来る。

刻桃にとっては誰が誰だかわからない赤の他人の声にしか聞こえなかったが、キンジとアリアは顔を見合われる。

「キンジ・・・・」

「ああ。こいつら、俺とアリアがバスジャックから助けたヤツらじゃないか！」

そう。駆けつけてくれた生徒達の殆んどは、バスジャックの被害者だったのである。

武偵憲章第1条『仲間を信じ、仲間を助けよ』。以前2人に助けられた借りを返すべく、罰則覚悟で装備を無断で持ち出し、学園島から空き地島へと渡って誘導灯を作ってくれているのだ。

「行くぞ！しっかり掴まっていろ！！」

アリアから・・・・刻桃から・・・・空き地島にいる生徒達から勇気をもらい、キンジは丁寧に高度を下げていく。彼らが示してくれた・・・・即席の滑走路へと。

ザシャアァァァァァ！！と凄まじい音と振動を響かせながら、飛行機は空き地島への着陸を慣行。

「止まれ・・・・止まれ・・・・止まれ！！」

アリアが逆噴射を掛けるが、路面が雨で濡れている事もあってなかなか止まらない。

「まだだ！！まだ・・・・手はある！！」

キンジは・・・地上走行用の操縦桿を操作し、機体をカーブさせた。青天の真昼間だったらともかく・・・・雨で路面が濡れている空き地島では、止まり切るのはギリギリ。

だが、キンジには、止まり切れなかった時の策もあった。そのつもりで・・・・それを見越して空き地島に突っ込んでいる。

ここは空き地島。名前の通り何もない。

だが、本当に何もないわけではなかった。

島の隅っこには・・・・ある物が点在していた。

そう。迫る・・・・風力発電の風車。その柱に翼を引っ掛け、ストッパー代わりにするために突っ込んだのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・

アレから約1日が経過した。

飛行機は・・・・『無事』とは言えない状態ではあったが、片翼と風力発電の風車一本を犠牲にして何とか着陸に成功。

乗員乗客は特に目立った怪我もなく、空き地島で待機していた武偵高生徒達によって速やかに救出された。

その後、今回の功労者たる武偵3人は、病院での検査や警察の事情聴取、テレビの取材やらで引っ張りだこだったが・・・・夜になってからようやく解放され、キンジの部屋へと帰りついた。

そして今は・・・・・

「東京で・・・・こんな綺麗な星空、見えるとは思わなかったわ」

「南米で見た星空には負けるけど・・・・・こっちも悪くはない」

「台風一過・・・・・って奴だな」

アリア、刻桃、キンジは、満天の星空の下、ベランダで語り合っていた。

「・・・ママの公判が延びたわ。今回の件で『武偵殺し』の分の罪が冤罪だって証明できたから・・・・弁護士の話では最高裁、年単位で延期になるんだって」

「・・・・・そうか」

アリアにとって・・・キンジにとってもいい知らせ。だが、『おめでとう』と言える空気じゃなかった事もあり、キンジは短く、それでいて軽く返す。

そんなやり取りを聞いた刻桃は、空き地島で解体待ちの身となった飛行機を眺めながら・・・・アリアに話しかける。

「・・・・・理子が『イ・ウー』の構成員だった事にも驚きだったけど、お前の母親に罪を着せてたのも『イ・ウー』だってのは・・・

・・初めて知った時はかなり驚いた」

「・・・・どうやって調べたのよ。『イ・ウー』は日本じゃタブーのハズよ？」

「アメリカにいた時から・・・連中とは因縁があってな。それに、俺が調査依頼を出した忍者・・・・・紅龍にとって多少の秘密はあって無きもの。この程度の事、アイツにとっては秘密のうちにすら入らねぇよ」

「そう言えば・・・・・」

と言って、キンジが会話に入る。

「あの時から気になってたんだが、『イ・ウー』って、なんｎ《ピンポーン♪》・・・・・！？」

しかし、呼び鈴によって出端を挫かれる。

キンジは額に手を当てながら、予期せぬ邪魔者となった来客を迎え入れるべく玄関へと向かう。

キンジがドアを開けようとすると・・・・

「モモちゃん！」

バァン！と音を立て、来客たる・・・茶髪のボブカットに紅い忍装束を身に纏った少女が、痺れを切らしたかのようにドアを勢いよく開けた。

「お、お前は・・・・・？」

戸惑いながらも、キンジが尋ねる。

「ああ、キミが遠山キンジか。昨日はお互い空の上で、目視も困難だったから・・・こうやって直接会うのは初めてだね。それより・・・」

「お、おいっ！」

少女はキンジを押しのけると、勝手に部屋へと上がり込む。

そして、ベランダまで辿り着くと・・・・・

「酷いじゃないか、モモちゃん！！」

刻桃に文句を言った。

「こ・・・・紅龍!?」

突然の来訪者たる少女・・・・真庭紅龍の姿に、刻桃は驚く。

「無事なら無事だと連絡の1つくらいよこしたまえ!どれだけ心配したと思っているんだ!!」

「・・・・・悪い。取材やら事情聴取やらあって、すっかり忘れてた」

ふくれっ面の紅龍の剣幕に押され、刻桃は素直に謝る。
いくら忙しかったとはいえ・・・ある意味今回の功労者の1人たる紅龍に、何の連絡も入れなかったのは流石にマズかったと今更ながら自覚させられた。

「まぁ、無事ならいいさ。それと・・・」

紅龍は・・・今度はアリアへと振り向く。

「神崎・H・アリア。キミも・・・・とりあえずは初めましてだね」

「その声、アンタ・・・・あの時の!!」

「そう。改めましてかな。僕の名前は・・・・真庭紅龍。親しみを

込めて気軽に『コウ』と呼びたまえ」

ハッとなるアリアと・・・ベランダへと引き返してきたキンジに対し、紅龍は改めて自己紹介する。

「お前が、刻桃の仕事仲間の紅りゅ『コウ・・・と呼びたまえ』・・・コウなのか？」

紅龍の殺気に気圧され、キンジは慌てて言い直す。

「そう。確かに、僕が・・・『コウ』こと、真庭紅龍さ」

「小学校の頃、刻桃から名前だけは聞いてたんだが、まさか・・・・女子だったなんてな。名前が名前だから、俺はてっきり・・・・」

「男だとでも思っていたかい？全く・・・それもこれも、モモちゃんのせいさ。モモちゃんが行く先々で僕の事を『紅龍』と呼び続けるせいで、モモちゃんの知り合いに会うたびに同じような反応をされているからね」

恨みのこもった視線を、刻桃に向ける。

「それはお互い様。お前が俺の事を『モモちゃん』って呼ぶから、お前の知り合いに会うたびに・・・いつも女だと勘違いされてた

からな」

刻桃は溜息をつきつつ紅龍を睨む。
2人は顔つき合わせて睨みあい、それを見ていたキンジはもちろんのこと、普段あまり空気を読まないアリアでさえも、ハラハラしてしまう。

一触即発。

その四文字が頭をよぎる。

しかし、2人の予想に反し・・・・

「ククッ・・・」

刻桃と・・・・

「プッ・・・・」

紅龍は・・・・

小さく・・・それでも確かに笑いだした。

キンジとアリアが流れについていけない中でも、２人は笑い合う。

名前の呼び方。

たかがそれだけ。

されどそれだけ。

呼び方に対し、お互い不本意感が全くないわけではない。

だが２人は、そこに確かな絆を。確かな繋がりを感じていた。

「ねぇ、キンジ。今だから聞いておきたい事があるんだけど。なんで・・・あの飛行機に、あたしを助けに来てくれたの？」

そんな２人を見ながら・・・アリアはキンジに聞く。

「・・・なんでって」

キンジは少しだけ考えるそぶりを見せる。

「まぁ、バカのお前じゃ『武偵殺し』には勝てないと思ったからだよ。事実、お前は一度負けちまっただろ」

俺もだけどな。と、キンジは付け加える。

「べ、別に・・・あのぐらいあたし1人でもなんとかできた。バカはそっちよ!」

「そうだな。お前みたいなバカを助けようとした俺は、もっとバカなのかもなぁ。刻桃とコウがいなかったら、多分生きてここに帰ってこれなかっただろうし」

キンジは深く・・・深く溜息をついた。
アリアは少し口ごもると・・・

「ごめん。1人でなんとかできた・・・・っていうのは、やっぱり嘘」

恥を忍んでいるのか・・・アリアの声が若干小さくなる。

「あたし・・・空で戦ってから、なんでパートナーが必要なのかわかったんだ。今回、アンタがいなかったら・・・刻桃やコウが来てくれなかったら、今回の事件・・・解決できなかった」

「・・・・・・・・」

「・・・だから今日はね、お別れを言うつもりでここに来たの」

「お別れって・・・・」

「あたし、パートナーを探しに行く事にしたの。ホントはアンタだったらよかったんだけど・・・約束したでしょ?組むのは・・・・1回だけって」

アリアは俯きながら言う。
それを受けて、キンジは『そういえば・・・・』と思い出したように言い、刻桃と紅龍も、黙って2人の次の言葉に耳を傾ける。

「ねぇ、キンジ。今のアンタは立派な武偵よ。アンタの意見は尊重するし、もう『奴隷』なんて呼ばない。だからね、もし・・・・その・・・・気が変わったら・・・・」

「・・・・・・・悪い」

諦めきれていないアリアの申し出を、キンジは目を逸らしながら断った。
それを聞いたアリアは、『・・・今言った事は忘れて』と言ってキンジに背を向け、今度は刻桃を見る。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

しばらく無言で見つめ合う2人だったが・・・

「俺は・・・お前の事、最初は大っ嫌いだった」

先に口を開いたのは、刻桃だった。

「我儘で、自己中で、戦闘狂で、協調性皆無で、それこそ、うっかり斬り殺しかねないぐらいに嫌いだった」

「なによ・・・そんな事ワザワザ言われなくてもわかってるわよ。あたしだっt『けどよ・・・今は違う』・・・え?」

「お前は色々身勝手な女だけど、改めて考えてみれば・・・少なくとも、欲望や保身のためにしか動かないボンクラ貴族よりは、ずっとマシな女だった。一見滅茶苦茶な行動にも確固たる信念と筋は通ってたみたいだし、なにより・・・お前はもう仲間だからな」

「仲間？」

「今回の事も含めて、俺や紅龍と同じ敵・・・・・・『イ・ウー』と戦ってる以上、もう仲間だろ。最後も・・・・なんだかんだでしっかり意見が合っちまったし。今ならお前に対して言った『嫌い』って言葉も、何のためらいもなく否定できそうだ」

――――――絶対死ぬわけがない！！――――――

「・・・・・っ！？」

飛行機での、着陸直前のやり取りを思い出したのか・・・アリアの顔が若干赤くなる。

「だからと言って、我儘も大概にしとけよ。じゃないと、この先パートナーを見付けられても2秒で逃げられちまうぞ」

「そんな事・・・アンタに言われなくてもわかってるわよっ！」

「どーだか」

「うるさい！でも・・・・・・」

アリアは、言いにくそうに俯く。

「あたしも、ホント言うとアンタの事は・・・・そんなに嫌いじゃなくなってたわ。飛行機では・・・・なんだかんだで助けてくれたし、『囮作戦』の時も、あたしの事も本当に信じてくれた。だけど、初めて会った日の決着はいずれつけるつもりよ。覚悟しておきなさい！」

そして顔を上げ、ビシッと刻桃を指差した。

「ああ、待ってる。その時は・・・・思いっきり戦おう」

刻桃は『フッ・・・』と微笑。

アリアはそれを見届けると、ゆっくりと玄関へと向かう。

キンジと・・・・刻桃と紅龍もそれに続く。

「見つかるといいな。お前のパートナー」

キンジが言うと・・・・

「きっと見つかるわ。アンタ達のおかげで、『この世界のどこにもいない』ってワケじゃないことがわかったし」

アリアは、目の前に居る3人を見ながら自信満々に言った。

斑が大きいとは言え、時に絶大な戦闘能力を発揮する・・・・・遠山キンジ。

己の身体を一本の日本刀として鍛え上げた無刀の剣士・・・・・鑢刻桃。

真庭忍法と呼ばれる超能力を使う忍者・・・・・真庭紅龍。

彼らの存在こそが、その自信の裏付けとなっていた。

「そっか。そうだな。じゃあ・・・・頑張れよ」

「・・・・・またな」

「縁があったら・・・・また会おう」

キンジ、刻桃、紅龍がそれぞれ別れの言葉を告げると・・・・

「うん・・・・・バイバイ」

アリアはあっさりとドアを開き、外に出た。

第１９話（後書き）

紅龍の使用忍術其の一、『足軽』。原作で真庭喋々が使用していた『足軽』は、実際に重さを消してはいない『歩法』という技術でしたけど、ここでは単純に超偵として重量を消す忍法としました。他にも真庭忍法を習得しているという設定の、紅龍ならではの忍法ととらえていただいても結構です。

少しネタバレになりますが、これから披露予定の彼女の忍法数種類と、既に披露した『足軽』。実は一本の線に繋がっていて・・・・とある共通項があるという設定。

彼女の新たな活躍と・・・次なる忍法の登場にご期待下さい。

こないだ『ハリーポッターと死の秘宝』を観てきました。

倒れていく仲間。分霊箱の破壊。ヴォルデモートとの最終決戦。そして、エピローグ。

尺の都合なのか、大人の事情なのか、小説版から若干いじられた部分もありましたが・・・・物語の最終章を飾るに相応しい作品だと思いました。

ドクター真木の言葉を借りるなら、『物事は終わりを迎えて初めて完成する』ということなのかもです。１０年近くレギュラーを演じきった仲良し三人組の役者さん達もお疲れ様です。

第２０話

「ふぅ・・・お腹空いたね。モモちゃん、今夜の食事はなんだい？」

アリアが別れを告げて出ていき・・・バタンとドアが閉まると、紅龍は身体を伸ばしながら台所へと向かって冷蔵庫を漁る。

刻桃は、そんな幼馴染の姿を見て・・・・

「まだ決めてない。さて、どうするか・・・」

呟きながら後に続こうとしたが、ふと・・・・玄関のドアの覗き穴の前に立ったままだったキンジが目に入った。

「・・・・・？」

苦難の末、やっとの事で奴隷から解放されたというのに・・・・その表情は沈み、自らの拳を硬く握りしめている。どこからどう見ても・・・・どう考えても、キンジは迷っているようにしか見えなかった。

「・・・・・・・・・」

刻桃にとってのアリア。

我儘で自分勝手で喧嘩っ早くって。マトモな人間・・・マトモじゃない人間でも付き合いきれない変わり者。

自身も変わり物と言う自覚も全く無くも無い。だか、彼女のそれは自分のそれを遥かに上回るほど酷い。

しかし今となっては、紆余曲折を経て少しは仲良くなれた仲間。そんな彼女が遠くに行ってしまうのには・・・・ある種の寂しさを感じずにはいられなかった。

ウザい、迷惑、邪魔だと考えながらも、なんだかんだで退屈しなかった日々。

彼女がいなくなることで空いてしまうであろう・・・・心の風穴。

それだけ絶大だった存在感。

良く思っていなかったハズなのに、感じてしまった寂しさ。

それが・・・何故だかは、もうわかっていた。

切っ掛けが『因縁』であったとしても、出会いの直後に交戦状態に陥ったといえど、アリアは・・・刻桃にとって、日本に帰って来てから最初に出来た『繋がり』であり、同じ敵と戦う敵の敵。つまり・・・今回の事がなくとも、『仲間』と呼べるかもしれない存在だったのだから。

基本的に相性が悪かったハズの刻桃でさえそうなのだ。

一緒に生活し、行動を供にしてきたキンジの心の空白は・・・この場にいる誰よりも大きいだろう。

キンジがドアの覗き穴から何を見たかは知らない。何を聞いたかもわからない。今、何を考えているのか・・・知る由もない。

しかし・・・これだけは想像できてしまった。

キンジは間違いなく迷っている。

このままアリアのパートナーとして武偵を続けるか。それとも・・・・当初の予定通り、来年武偵を辞める道を突き進むか。

紅龍も冷蔵庫を漁るのをやめ、いつの間にか刻桃同様キンジの姿を

凝視する。まるで、彼の結論を待つかのように。

「・・・・・・ったく」

刻桃はキンジの机に向かい、引き出しからある物を取り出した。

キンジが作成した・・・転出申請書類が入った茶封筒である。

そして・・・・

「キンジ!!」

「・・・・・・!?」

未だにドアの前に立っていたキンジの真後ろから、その襟首を掴んだ。

そしてそのままドアを開け、強引に部屋の外へと追い出した。

「刻桃!?お前・・・・なにするんだ!!」

「いつまでも辛気臭い顔してるな。ウジウジ悩むぐらいなら・・・・今すぐ結論出しちまえ!」

「お前、何言って・・・・・」

「こっからは自分で考えろ。どうせ後悔するなら・・・・『決断しなかった事』よりも、『決断した事』を後悔しろ!」

言い切った刻桃は、転出書類入りの茶封筒を投げ渡し、バタンとドアを閉める。念のためチェーンロックを掛ける事も忘れない。

しばらくすると・・・・

「くそっ・・・・甘いな・・・・甘いよ・・・・・。キンジ、お前は本当に大甘野郎だ!畜生っ!!」

廊下からキンジの独り言が聴こえてくる。

意を決したかのような心からの叫び。
次の瞬間には大きく足音を立て、エレベーター・・・・または階段に向かって駆け出していった。

刻桃はそれを聞き届けると、チェーンロックを外してドアを開ける。
そして・・・キンジが真っ二つに破り捨てた、転出申請書類のなれの果てを回収。ゴミ箱に投げ捨てた。

「モモちゃん・・・・随分粋な事をするじゃないか」

紅龍はニヤニヤ笑う。

「ウジウジしてたアイツを見てらんなかっただけだ」

「なら、あんな遠回しな言い方じゃなくても、直接言ってあげればよかったじゃないか。『とっととアリアを迎えに行って来い！』・・・と」

「キンジが最終的に何を選ぶか。それはアイツ自身が決める事だろ？それに、ワザワザ答えを用意してやるほど・・・・俺はお人好しじゃない」

そう言うと、刻桃は台所に向かい、夕食の準備を始めた。
ここで紅龍は・・・・ある事に気づく。

「あれ？４人分・・・・かい？」

用意された米などの食材の量を見て、紅龍は首を傾げる。

「来なかったら来なかったで、俺が食えば済む話しだ」

「・・・・そうかい」

素っ気なく調理する刻桃を見て、紅龍は『フッ・・・・』と笑いながら手伝いに加わった。

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・

それから数十分後。

ピンポーン♪

呼び鈴が鳴った。

紅龍が覗き穴から来客の姿を確認すると、チェーンロックを外して呼び鈴を押した2人を・・・・・キンジとアリアを招き入れる。

「やぁ、遅かったね・・・・・・って、どうしたんだい?その格好」

キンジとアリアの姿を見ながら首を傾げる。

制服に付いた泥や、髪の毛に引っかかった木の葉。今の2人は、まるで・・・どっかの屋上から温室にでも落下したかのようにボロボロだった。

「なんでもないわ」

アリアは何故かご機嫌そうだったが・・・・

「・・・・・・気にするな」

それとは対照的にキンジの表情は沈みまくり、暗く俯きながら部屋へと入る。

「どうした?まさか・・・・もう『決断した事』を後悔したのか?」

気になった刻桃が聞いてみると、キンジはさらに俯き・・・・

「その・・・・・・・・・まさかだ」

短く言い切った。

「アリア・・・・キミはキンジに何を言ったんだい？」

紅龍がアリアに尋ねる。

「大した事は言ってないわ。ただ・・・・あたしのフルネームを教えてあげただけよ。キンジは・・・・あたしのパートナー、『Ｊ・Ｈ・ワトソン』に決定したの！」

ビシッとキンジを指差すアリア。

それを見て、刻桃と紅龍は『『ああーーーー・・・・・』』と声を上げて納得。

「そういや、まだ報告してなかったけど・・・・・もうその必要はないみたいだな」

刻桃がキンジを見ながら言った。
ここ数日間は色々あったせいか・・・・『アリアに関する調査結果』を未だにキンジに報告していなかった事を思い出したのである。

「じゃあ・・・・お前、知っていたのか?アリアは・・・・」

「まぁな。コイツが、武偵の始祖である『シャーロック・ホームズ』の曾孫・・・・『神崎・ホームズ・アリア』って事は、紅龍にしっかり調べてもらってたからな」

シャーロック・ホームズ。

１００年ほど前に活躍したイギリスの名探偵であり、拳銃と格闘技（バリツ）の達人。その経歴と能力から、現在では『武偵の始祖』と呼ばれており、武偵で彼の名を知らぬ者はいないと言われている。
彼は様々な難事件を論理的に推理し、解決に導いてきたと言われているが・・・・その曾孫のアリアは、事あるごとに感情に任せて発砲する危ない女。論理的とは程遠く・・・何事も直感を優先して独走するスタイル。

刻桃がそうであったように・・・・キンジもまた、短気なアリアがシャーロック・ホームズの曾孫である事を知っても、そう簡単には受け入れられないようだった。

「知ってたなら何で教えてくれなかったんだ・・・・・」

「いや、あの時はそんな空気じゃなかっただろ。それに、理子もフランス語で『Ｈｏｌｍｅｓ（オルメス）』ってしっかり呼んでたから、もう知ってる物だとばかり」

フランス語では『Ｈ』の発音はされない。だから『Ｈ』という頭文字でも『オルメス』という発音になってしまうのである。

「俺は英語はダメだが・・・・フランス語はもっとダメだ」

キンジはまたまた溜息をつきながら言う。

そんな2人のやり取りを黙って聞いていたアリアは、得意げに笑いながら『とにかくっ！』と言って会話に入ってくる。

「今回の事で分かったんだけど・・・・キンジには、何かを引き金にして急激に高まる不思議な力があるの。それがなんなのかは、あたしにもわからない。けど、これだけはわかっているわ。キンジは・・・・それを自分では制御できない。実力のムラッ気が大きいのもそのせいなのよ！」

だからっ！・・・と言ってアリアは言葉を続ける。

「出来ないなら、出来るようになるまで調教してやればいいのよっ！簡単な事だったんじゃない！！ね♪」

「・・・・・ね♪じゃねーだろ。この部屋出ていった時のしおらしい態度はどこ行ったんだ。この我儘大王」

刻桃が顔をしかめながら言った。

確かに、アリアが戻ってきた事は・・・・一部不本意感がありながらも、同時に若干の嬉しさはある。

しかし、まさか元の我儘大王に戻った状態で帰ってこようとは・・・・誰が想像できたであろうか。

「・・・・・ったく。ついさっきの、アリアを認めた俺自身を否定する」

「刻桃うるさいっ！それに・・・・よく考えたら、『武偵殺し』の一件は犯人を捕まえてないからまだ解決してないでしょ。まだ契約満了とはいえないわ」

「それ・・・屁理屈だぞ。まぁ、あいつが生きている事は間違いないだろうから、結局は・・・こうなってもおかしくはなかったって事か」

刻桃は、自らの銀髪を束ねたピンク色のリボンに軽く振れる。

「そう言えばモモちゃん。そのリボン、女の子の物みたいだけど・・・・随分似合ってるじゃないか。どこで手に入れたんだい？」

目敏く気づいた紅龍が尋ねる。

「ただの願掛けだ。気にするな」

いろいろ詮索されるのは面倒だった事もあり、刻桃は素っ気なくあしらう。

「とにかくだ。俺も『武偵殺し』とはまた会わなきゃいけないし・・・ヨロイや残りの刀も追わなきゃなんない以上は、『イ・ウー』との戦闘は避けては通れない。だから、当面は協力してやるよ。結局の所・・・俺達の敵は同じだったんだからな。お互いの目的のためにもその方が都合がいい」

「それはそうかも。だけどアンタ・・・・・ヨロイとも関係あったの？」

「まぁな。だけど・・・・安心しろ。アイツをとっ捕まえて、奪う物も奪ったら、手柄と奴の身柄はお前にくれてやる。それで神崎かなえの罪は１００年分減刑されるだろ」

「・・・・・そこまで知ってたんだ」

「ヨロイの事はともかく、神崎かなえに奴の罪が着せられてる事は・・・紅龍からの情報で知ったんだけどな」

刻桃に促される形で・・・アリアは、いつの間にかテーブルに座って一足早く晩御飯に舌鼓を打つ紅龍を見た。

「ふむ・・・これはなかなか。腕を上げたね、モモちゃん」

「・・・ありがとよ。食い終わったら、食器は自分で片付けといてくれ」

「委細承知♪アリアとキンジも早く食べたまえ。冷めたらせっかくの料理の味も半減してしまうよ？」

「・・・う、うん」

紅龍の言葉を受けて、アリアはテーブルに座る。

本当は、刻桃がヨロイや完成形変体刀を追う理由や・・・彼の相棒たる紅龍が、機密性の高い情報をどうやって集めたかなど・・・聞きたい事もいろいろあったが、一先ず腹ごしらえを優先。

沈みまくっていたキンジも晩御飯の匂いに釣られ、現在進行形の悩みを一先ず保留。テーブルに座った。

その後・・・・夕食の席で、アリアは『キンジのスーパーモードとバカモードの切り替えの鍵を探す！』と言って、一方的に同居を宣言した。因みに、スーパーモードとはヒステリアモード。バカモードとは、通常モードのキンジを意味している。

当然キンジは、自身が忌み嫌うヒステリアモード化の芽を摘むためにも全力で拒否、反論した。だが、同じく当然の如くアリアに反発され、オマケに武偵殺しの一件はまだ解決していない事まで持ち出されてしまい、押し切られるのも時間の問題となった。

そこでキンジは・・・刻桃に期待した。基本的にアリアとの相性が悪い刻桃なら、理詰めなり力ずくなりの手段で、どうにかして追い出してくれると考えたが・・・・

「家事分担してくれるか・・・・生活費を出してくれるなら、俺としては異論無し」

条件こそ出してはいるが、あっさりアリアの同居を認めてしまった。予想外の事態に、キンジがコッソリ真意を尋ねると・・・・刻桃はキンジを手招きし、アリアと紅龍には聴こえないよう耳打ちする。

「期間限定とはいえ、チーム組む以上は一緒にいた方が都合いいだろ。それに、もしかしたら金一さんの情報も手に入るかもだぜ」

「・・・・兄さんの？」

「実力的に考えて、理子が金一さんを殺したとは・・・・どうしても思えない。死体も見つかってない以上、生きてる可能性が出てきたって事だ」

それに・・・・と言って、刻桃はさらに言った。

「いっそのこと、この機会にヒステリアモードを制御できるようになっといた方がいい。武偵の道を捨てることは出来ても、その特異体質とは死ぬまで付き合わなきゃなんなんだろ？」

「しかし・・・俺はもう二度とあんなモードには・・・・」

「なりたくないなら、尚更ならない方向で制御できるようにしろ。でないと一般校に転校できても、前に言ってた・・・・中学時代の二の舞になるぞ？」

痛い所を突かれ、キンジは『うっ・・・・』と言葉を詰まらせる。単純計算で、人類の半数・・・・約３０億人は女性。これから先の学生生活・・・・そして社会に出てから死ぬまでの間、女性を意図的に避けて生きていく事は難しい。というより不可能だ。

さらに刻桃は・・・・

「この話はここまでだ。それでも嫌なら、あとは自分でどうにかしろ」

と言って、夕食の後片付けを始めた。
ヒステリアモードのキンジならまだしも・・・通常モードのキンジには、刻桃を説得できるだけの知略もアリアを追い出すだけの戦闘能力も無い。
最も、ヒステリアモードのキンジは女たらし・・・女性に対して甘くなってしまうため、結局追い出す事は出来ないのだが。

刻桃が台所で食器を洗っていると、テレビの前では・・・

「かぁーわぁーいぃー♪」

愛玩動物番組に夢中になるアリアと・・・

「ふむ。本当なら、僕はドーベルマンやシェパードのような実戦で使えるタイプが好みなのだが・・・こうして見るとチワワもなかなか」

顎に手を当てながら頷く紅龍の姿があった。
このままでは、アリアだけでなく・・・紅龍まで居座りそうな予感を感じずにはいられなかった。

「安心したまえ」

それを察したかのように、紅龍は言った。

「モモちゃんの食器洗いが終わって・・・・少しだけ話しをしたら、僕は出ていくよ」

「話し？何のだ？」

キンジが聞くと・・・・

「食事の用意をしてた時に、あの飛行機で何があったかは・・・・モモちゃんから大体聞いた。キミも知りたいとは思わないかい？『完成形変体刀』の事を。そして・・・僕とモモちゃんの目的を」

「・・・・・！？」

キンジの顔が強張る。

あの事件の時・・・理子が使用した絶対に壊れない刀。さらに、刻桃がそれと同格の刀を持っていた事も・・・・トランシーバーからの会話を聞いて知ってはいた。『炎刀・銃』という、刻桃が持っていた回転式連発拳銃の名前を知ったのもこの時だ。

絶刀・鉋はともかくとして、なんで拳銃が刀なのか。疑問に思いつ

つも、事件の事後処理に追われて結局なあなあになってしまった事を思い出す。

「お前達、一体・・・・」

「落ち着きたまえ。焦らずとも・・・・すぐに話してあげるさ」

紅龍は真面目な顔つきとなって・・・・キンジの鼻先１０?まで顔を近づける。

そんな紅龍を見て、キンジは・・・・自らの身体の奥底に、焼けたように熱い感覚を感じた。

（マズイ・・・・ヒスる!?）

そう。ヒステリアモード化の前兆を感じたのである。

彼女・・・・真庭紅龍は、『紅龍』という厳つい名前を持つ『僕少女』ではあっても、黙っていれば男が放っておかない程の美少女に位置付けられる。

「・・・・っ!?」

キンジは、彼女から漂うある種の『女の香り』を嗅ぎ取ってしまった事と・・・・忍装束から覗く『美乳』とも言える胸元が目に入ってしまい、慌てて距離を取った。

紅龍は『ウブだねぇ・・・』とクスクス笑いながら改めてアリアの隣に座り、動物番組を再び見始めた。最悪の事態を回避したキンジもまた、紅龍とアリアから距離を取る形で座り、テレビに集中する。そうでもしてないと、間が持ちそうになかったからだ。

刻桃が食器を洗い終わるまでの２０分間。キンジは家主であるにも関わらず、妙な圧迫感を感じながら刻桃を待ち続けた。

第２０話（後書き）

出戻ってきたアリア。

もう奴隷と言わないといったにもかかわらず、その後も奴隷という言葉を使うアリアは・・・・我儘大王の称号を得るにふさわしい存在かと。

俺がＢＧＭぐらいにはなってやる。

アニメでもカットされてしまった名言。この小説が刀語メンバー視点で進んでる都合上、ここでも泣く泣くカット。期待してた方、ごめんなさいです。

次回はいよいよ完成形変体刀の話題に移りたいと思います。

そして、ヤンデレ巫女も登場し、一巻編・・・・堂々完結です。

第２１話

「待たせたな」

刻桃が皿洗いを終えた頃には、ちょうど愛玩動物番組も終わった。
片方のソファーに刻桃と紅龍が座り、テーブルを挟んだ向かい側のソファーにキンジとアリアが座る。

机には・・・コーヒーが人数分置かれており、話し合いの前準備も完了した状態。

そう。今回のハイジャック事件を経て・・・刻桃と紅龍は、自分達の目的を話す事にしたのである。
アリアは、敵対組織たる『イ・ウー』の情報を得るために。キンジも今回の事件の関係者として、いつ話しが始まってもいいように耳を傾ける。

「さて、まずはどこから・・・そしてどこまで話すか」

「その前に・・・これを見てもらおうよ」

刻桃が頭の中で整理する中・・・紅龍は胸元に手を突っ込んだ。そして自動式連発拳銃（オートマチック）を取り出し、机の上に置いた。

「これって・・・・」

「刻桃が持っていた銃と・・・・似ているな」

アリアとキンジが、机に置かれたそれを凝視。

机の上に置かれた拳銃は・・・・全体的に黒く、銃身とグリップには赤と金色の派手な装飾が施され、グリップの先端には水晶付きの赤い吊り紐が取り付けられている。
装弾数は・・・目測で察するに１０発前後。自動式と回転式という違いこそあれど、キンジが言うように・・・その外観は理子に奪われてしまった『炎刀・銃』と酷似していた。

「この『刀』の名前も『炎刀・銃』。モモちゃんが持っていたリボルバータイプと合わせて、四季崎記紀が二丁拳銃を模して造った『刀』なのさ」

紅龍は、少しだけ誇らしげにその名を口にした。
しかし、アリアは眉間に皺をよせ、バン！と机を叩く。

「ふざけないで！なんで拳銃が『刀』なのよ。それに・・・・四季崎記紀は戦国時代の人間でしょ？火縄銃しかないような時代に・・・どうやったら拳銃なんか造る事ができるのよ。まさか・・・時代を先取りしてたって言う気じゃないでしょうね！」

「流石は直感型。察しがいいね。結論から言ってしまえば・・・・まったくもってその通りなのさ」

「どういう意味なんだ?話しが見えないんだが」

キンジは話しの流れについていけず、疑問符を浮かべる。アリアも・・・深い考えがあって言ったわけじゃない事もあって、キンジと同様訳がわかっていないようだった。

「どういう意味も何も、アリアが言ったように・・・・四季崎記紀は時代を先取りしていたのさ。生まれつき予知能力を持っていた彼は・・・未来の技術を逆輸入して、１０００本もの変体刀を造り上げたんだよ。当時の人間にとって変体刀が異端に見えたのは、その時代には存在しない技術を使っていたからだと言われているのだが・・・・この『炎刀・銃』は見ての通り完全に技術が追いついているため、今となってはただの拳銃でしかない。だが・・・・他の『完成形変体刀』は、少なくとも向こう１００年以上先の技術を使って造られている」

突飛過ぎる紅龍の説明を聞いて・・・・キンジとアリアは目を点にする。

今の世の中・・・・超能力の存在は否定されてはいない。

それどころか、武偵業界ではむしろ推奨傾向にあり、東京武偵高に

も『超能力捜査研究科（ＳＳＲ）』・・・通称『Ｓ研』と呼ばれる、超能力者や魔術師などの超常能力者を研究・育成する学科まで存在する。

しかし、だからといって、予言や予知といった物は未だに眉唾物。それこそ、朝のニュースで行われる星占い程度の信頼性しかない。

それだけに、信じ難い話しであるとしか言いようがない。

「紅龍・・・端折り過ぎだ。肝心な部分が抜けてちゃ、その理屈は理解できないだろ」

「そうかい・・・なら、ここからはキミが話したまえ」

紅龍は用意しておいたコーヒーを啜り、あとを刻桃に任せる事にした。

刻桃はソファーから立ち上がり、部屋の隅に置いておいたある物を持ってくる。

絶刀・鉋。

理子に奪われた『炎刀・銃』のリボルバータイプと引き換えに手に入れた、『頑丈さ』に主眼を置いて造られた完成形変体刀の一本。

それを机の上に乗せ、オートマチックタイプの『炎刀・銃』と並べるかのように置いた。

「・・・『鉋』はともかく、『銃』は本当に戦国時代に造られた物なのか？」

キンジが、『鉋』と『銃』を交互に見比べながら聞く。

「・・・・そうだ」

刻桃の肯定。

「四季崎記紀は占術師の家系出身で、その才を一族で最も色濃く受け継いでたんだ。それこそ、『自由自在』と言っても過言じゃないぐらい未来を見通す事ができたらしい。なにより凄いのは、ただ単に未来を見るだけじゃなく、その技術を事細かに理解出来るだけの頭脳を持ち・・・・現代でも製作が困難な『刀』を何本も造り上げる技術を持っていた事だ」

キンジとアリアは息を飲む。

戦国時代当時の人間が未来の技術を視て、それを形にするという事は・・・・簡単に言ってしまえば、小学生が大学生の授業を理解するのと同じくらい困難な事。

いや、戦国時代の人間と未来人の価値観に大きな差異がある以上、難易度はそれ以上とも言える。

「でも・・・なんでこれが『刀』なの？」

今度はアリアが聞く。

「これは俺の母上・・・鑢風花の推測だけど、当時の日本で最強かつ最も使われていた武器は『刀』だったわけだから・・・外観が多少逸脱していても、『刀』って呼ぶ方が話しが通りやすかったのかもしれないらしい」

ここで刻桃は・・・水性のマジックペンを取り出し、机にこう記した。

絶刀・鉋（カンナ）

斬刀・鈍（ナマクラ）

千刀・？（ツルギ）

薄刀・針（ハリ）

賊刀・鎧（ヨロイ）

双刀・鎚（カナヅチ）

悪刀・鐚（ビタ）

微刀・釵（カンザシ）

王刀・鋸（ノコギリ）

誠刀・銓（ハカリ）

毒刀・鍍（メッキ）

炎刀・銃（ジュウ）

「これらが、１０００本の変体刀の中でも異端中の異端、『完成形変体刀十二本』の銘だ。『銃』のように日本刀としての形状を保っている物もあれば、『鉈』のように刀とは名ばかりの刀もあるけど・・・他の９８８本の変体刀は、この十二本を造るための習作だったとも言われている」

「十二本のための９８８本・・・狂ってるな。なぁ、１ついいか？」

キンジが恐る恐る挙手をする。

「ここまでの話しを聞いて、『完成形変体刀』ってのが、戦国時代当時では異端の武器であった事は・・・まぁ、わかった。しかし・・・飛行機での戦いで俺とアリアが戦線を一時離脱した時、置いてきたトランシーバーでお前と理子の会話はある程度聴いていたんだが・・・あの時言っていたじゃないか。完成形変体刀は・・・お前の先祖が全て破壊したって」

その言葉を受けて、刻桃は・・・・

「問題はそこ・・・・なんだよな」

と言ってさらに言葉を続ける。

「お前が言うように、これらの刀は３００年前・・・・俺の先祖が全て破壊しているんだ。今存在している『炎刀・銃』は、母上・・・・鑢風花が、かつての『炎刀・銃』の残骸をベースに復元したものだ」

「じゃあ、他の刀・・・・・その『絶刀・鉋』もアンタの一族が復元した物なの？」

アリアが・・・・今度は鋭い視線で睨みながら聞く。
ハイジャック事件の時、完成形変体刀の脅威を身を持って味わっているだけに・・・・その心中は穏やかじゃいられないのだろう。

「・・・・いいや、違う」

刻桃は即座に否定。
そして、不愉快そうに表情を歪める。

「他の刀の出所は目下調査中・・・・つまり、なんで存在しているのかすらわかっていないんだ。その存在が初めて確認されたのは４年前。この・・・『賊刀・鎧』の所有者が、中東で派手に虐殺事件を起こしたのが全ての始まりだった」

そう言って、机に書いた『賊刀・鎧』の文字に〇印をつける。

「鎧って・・・・もしかして！」

ハッとなるアリア。

「・・・・察しの通りだ。あいつの・・・『ヨロイ』って通称は、『賊刀・鎧』の銘をそのまま名乗ってるんだ。中東の虐殺事件以外にも・・・奴は何件も目を覆いたくなるような事件を起こしている」

そのうちの１００年分の罪が、アリアの母・・・神崎かなえに着せられている形となっている。

「ヨロイだけじゃない。他の完成形変体刀・・・・その半数近くが一癖も二癖もある犯罪者の手に落ちている。つまり、俺と紅龍・・・・鑢一族と真庭一族の目的は、これ以上の被害を食い止めるために、これら十二本を全て蒐集・・・・もしくは破壊することだ」

「・・・・正確に言えば、この『薄刀・針』は風花さんが所有者を倒して破壊し、そして『悪刀・鐚』の所有者はモモちゃんが倒し、蒐集にも成功している。だから、現存する完成形変体刀は・・・・ここにある『炎刀・銃』と『絶刀・鉋』を含めて、あと十一本という事になっている」

紅龍は補足すると同時に・・・・『薄刀・針』と『悪刀・鐚』の文字に?印をつけた。

その際・・・・刻桃の顔に影が落ち、若干沈んだようにも見えたが、紅龍は話しを継続させる。

「さて、アリア。これまでに話を聞いて、キミは何か・・・・思う所はないかい？」

「・・・・え？」

「キミも『イ・ウー』と敵対しているからには・・・・刀について、なにか思い当たる事はないかと聞いているんだ。どんな些細な事でもいい。知ってるなら教えてはもらえないだろうか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

紅龍の質問に対して・・・・アリアの長い沈黙。
それによって、紅龍は・・・・刻桃も・・・・大体の答えを察する事ができた。

アリアは何の情報も持ってはいない・・・・と。

「・・・・そうかい。まぁ、気にする事はないよ。こんな話、普通は右から左へと受け流す物だからね」

「俺は最初からダメ元のつもりだったけどな」

「刻桃うるさいっ！！」

「じゃあ、何か知っているのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

再び沈黙のアリア。

「まぁ、こっちもお前の母親を助けられるような情報を殆んど持ってない以上・・・あんま偉そうな事は言えないんだけどな。けど、安心しろ。今後『イ・ウー』の情報が入ったら、一応お前にも教えてやる。だから・・・・」

「いいわ。私も、『イ・ウー』の・・・・刀の情報が入ったら、アンタ達に教えてあげる。だけど、もしも情報を出し惜しみしたら・・・・風穴あけるわよ!!」

アリアが素早くガバメントを一丁だけ抜き、刻桃に向ける。

「構わない。ただし、お前が裏切ったり、刀の情報を意図的に隠したってわかった時は・・・・即座に八つ裂きになってるだろうけどな。覚悟・・・・しとけよ!」

刻桃は机の上の『絶刀・鉋』の柄を持ち・・・・アリアのガバメントを軽く小突いた。

契約成立。とでも言うかのように、2人は互いの得物を重ねて不敵に笑い合うが・・・

（・・・・こいつは貴重な情報源）

（けど、手に入れた情報全てを与えてやる必要もないわ）

（（場合によっては・・・・））

腹の底では、最大限に利用する気や出し抜く気も満々だった。

「おい、ちょっと待ってくれ！」

一件落着と思いきや・・・・ここでキンジが口をはさむ。

「お前達だけで勝手に話しを進めるな！大体さっきから・・・・いや、ハイジャック事件の時からそうだ。『イ・ウー』って一体なんなんだよ。まぁ、おおかたどっかの秘密結社かなんかだとは思うが・・・・一時的とはいえチームを組む以上は、俺だけ除け者って法はないだろ！」

キンジにとっては成り行き上の済し崩しとはいえ、『イ・ウー』という組織はこれから嫌でも関わらなきゃいけない・・・・避けては通れない敵。

そもそも避けようにも・・・・理子と一戦やらかしている以上、向こうが放っておいてはくれない可能性が高い。だったら、少しでも

『イ・ウー』の事を知って何らかの安全対策を考えようとしたのだが・・・・

「「「・・・・・・・・・・」」」

刻桃、紅龍、アリアの3人は口を噤む。

「・・・・っておい、無視するな！俺を巻き込む以上はちゃんと答えてもらうｚ《～♪～♪～♪～♪～♪》・・・・・メールか？」

キンジはポケットに手を入れ、携帯電話を取り出した。
この部屋は微妙に電波状態が悪いせいで、たまにメールが送られてから着信するまでの間にタイムラグがあり、あとで纏めて着信したりする事があった。
キンジは3人を問い詰めるのを一時中断。メールを読み始めた。

すると・・・・

「・・・・・っ！？」

キンジの顔から見る見るうちに血の気が引いていく。
ガクガクビクビク震え・・・・挙動不審に辺りをウロウロしはじめる。

「・・・・・・どうした？」

刻桃が聞く。

本音を言えば、話しが上手い具合に逸れてくれた事に安心していたのだが・・・その安堵感が吹き飛ぶほど、今のキンジの様子は明らかにおかしい。

「一体どうしたんだい？不幸のメールが４９件ぐらい着信でもしていたのかい？」

紅龍がニヤニヤ笑いながら聞くが・・・キンジは全く笑わない。反論すらしない。それどころか・・・コクリと頷き、肯定とも取れる答えを返した。

そして・・・・

「おまっ・・・お前達・・・・ににに・・・に、逃げろ・・・・・」

「な、何よ。なに急にガクガク震えてんのよ。キ、キモいわよ、キンジ・・・・」

アリアもまた・・・・キンジの不自然さに釣られるかのように、訳もなく悪寒を感じてしまう。

同時に、ドドドドドドド・・・と足音が寮の廊下に響き渡った。
その足音の主は・・・キンジの部屋の前で停止すると、鬼か般若か、はたまた阿修羅の如く、強靭な殺気を発する。

「マズい・・・・『武装巫女』が・・・・来た。もう・・・・ダメだ・・・」

顔面蒼白なキンジの全身から、ダラダラと冷や汗が流れる。
刻桃、紅龍、アリアも・・・・殺気の発生源たるドアの向こう側に対して意識を集中させると・・・

シャキン！

「「「「！？」」」」

鋭い金属音と共に・・・玄関のドアが、縦一閃で切り開けられた。
障害物が無くなった事で・・・・殺気の主の姿が顕わになる。

そこに仁王立ちしていたのは、巫女装束を身に纏った・・・額当て

と襷掛けという戦闘準備万端の少女だった。

黒く長い髪と、雪のように白い肌。いわゆる『大和撫子』を体現させているというのに・・・その戦姿と、ドアを切り裂いた時に使ったと思われる日本刀が、それら全てを台無しにしていた。

「キンちゃんっ！！」

「！？」

少女が叫ぶと、キンジは全身を強張らせる。

（あいつ・・・・・確か、あの時のヤマトナデナデ・・・・だっけか？）

こんな状況でも、刻桃は冷静に殺気の主を見定める。目の前の少女とは、転入初日にちょっとした縁があったからだ。

あの時、例え暗がりであったとしても、あれだけの美人で・・・・オマケに巫女装束という印象に残りやすい格好をしていれば、簡単に忘れられるはずも無かった。

その少女とキンジが知り合いだった事はともかくとして、何故に日本刀を持って来襲してきたのだろうか。

刻桃がそれを尋ねようとした時・・・・

「し・・・・白雪・・・・・？」

キンジが恐る恐る少女に名を口にした。

少女・・・星伽白雪（ホトギ・シラユキ）は部屋中を見渡すと、キンジの近くにいた・・・・アリアと紅龍に目を止める。

そして、バッツンと切り揃えられた前髪の下の眉をツリ上げ・・・・

「見つけた・・・・この泥棒猫！！」

「ま、待て・・・・落ち着け、白雪！」

「キンちゃんは悪くない！キンちゃんは騙されてるに決まってる！！」

白雪はバーサーカーの如く突進。日本刀・・・・『色金殺女（イロカネアヤメ）』を上段に構え、アリアと紅龍に斬りかかる。

２人は白雪の剣幕に引きながらも刀をかわすが・・・・彼女が斬撃の手を緩める気配は微塵も無い。

「神崎・H・アリア！ついでに忍者！！キンちゃんを誑かして汚した罪・・・死んで償え！！」

「な・・・何なのよアンタ！」

「や、やめたまえ、部屋の中でそんな物振り回すなんて危ないじゃないか。キミはそれでも巫女なのかい？」

紅龍が机の上に置かれた『絶刀・鉋』を手に取り、白雪の斬撃を防御する。
ギィィィンと金属同士が擦れ合う音が響き・・・白雪はさらにドロドロに濁った瞳を紅龍へと向ける。

「2匹目の泥棒猫・・・いくら忍者だからって、房中術でキンちゃんを・・・キンちゃんを・・・はうっ！？あああああ！！殺す殺す殺す！！！」

紅龍の忍装束を見て、白雪は良からぬ想像を膨らませる。
そして、真っ赤になりつつもバーサーカーレベルをさらに上昇させ、アリアと紅龍を斬り殺そうと斬撃を繰り出し続ける。

「やめろ白雪！俺はどっこも汚されてない！！」

キンジが止めに入るが・・・

「キンちゃんどいて！どいてくれないと・・・・そいつを、そいつらを殺せない！！」

白雪は聞く耳を全く持たない。

「キンジ、何とかしなさいよ！な、なんなのよ・・・・この展開！」

「これがリアルヤンデレ・・・・実に興味深いが、身を持って被害を被ることは勘弁願いたいね。どうにかしてくれないかい？」

銃を抜く事も忘れ、慌てふためくアリアと・・・・まだ余裕な態度ながらも、表情を引き攣らせる紅龍。

それを横目にキンジは思う。

刻桃も、あまりの急展開に、同じような事を考える。

そんなの・・・・こっちが聞きてぇよ！！

・・・・・と。

第２１話（後書き）

一巻編、ついに完結。長かった。ここまで応援してくれた方々には感謝してもしきれないです。
完成形変体刀についてはまだまだいろんないわくがありますけど、今回はとりあえずここまで。刻桃と紅龍が全て知ってるわけではないというのもありますけど、それは後の情報交換で明かしてもらうつもりです。

緋弾のアリア１０巻やっと読み終わりました。
新レギュラーキャラ？ジーフォース改め、遠山かなめ。白雪以上のヤンデレぶりに引き気味ながらも、その白雪にも誕生日イベントで一大事。
必要以上のネタバレは避けますが・・・・キンジのあの言い回し、あの場所、あの花。アレじゃ・・・誰だって勘違いしますよね？逆に言ってしまえば勘違いしない人の方が少ない気がしました。無知は身を滅ぼす。カナの警告が現実になりつつあります。

劇場版仮面ライダーオーズ／ＯＯＯ　ＷＯＮＤＥＲＦＵＬ　将軍と２１のコアメダル。２Ｄ版観てきました。

ネタバレ防止のために詳細を簡略しますけど・・・・出現する最

強の敵に、グリード陣営の手助けによって集結するコンボ。ゲスト出演の将軍と、１３代目平成仮面ライダー・・・仮面ライダーフォーゼ。イメージ的に、身体の一部に武器を召喚する所などは、バースの戦闘方法に近い感じ。至る所に盛り上がり所が随所に織り込まれた良作でした。

ゴーカイジャーもゴーカイジャーで、ＣＧを駆使したゴーカイオー同士のガチバトルは圧巻。

最後には毎年恒例、年末年始に公開予定の『ＭＯＶＩＥ大戦』の告知。

今度は３Ｄ版観たいかなーとか思ってたり。

カウント・ザ・メダル。現在闇丸が所有するメダルでコンボ発動可能なのは・・・

タジャドル

ラトラータ

サゴーゾ

シャウタ

プトティラ

・・・の5種類。

ウヴァのコンボはカマキリとバッタが不足。そんなわけだから、タトバコンボも使用不可。タマシ―コンボはまだ不明。

ブラカワニは全部無し。出遅れてしまいましたので、中古品かオークションで手に入れる予定です。

第２２話

星伽白雪。

前髪をパッツンと切りそろえた黒髪ロングヘアーに、大和撫子を絵に描いたような性格。お淑やかで慎ましく、炊事・掃除・洗濯といった家事全般も得意で、誰にでも優しいスタイル抜群な巫女少女。

東京武偵高校２年Ｂ組、超能力捜査研究科（ＳＳＲ）に所属。真庭紅龍が使う『真庭忍法』と同格の力、『鬼道術』を操る超能力者武偵・・・・いわゆる『超偵』と呼ばれる存在でもある。

彼女の実家・・・・青森県に存在する『星伽神社』では、巫女たちが武装する事で御神体を守っており、そこでお勤めする巫女たちは『武装巫女』と呼ばれ、並の武偵や犯罪者では太刀打ちできない程の戦力を保有している。

武偵として、超能力者として、家柄と実力も確か。おまけに東京武偵高では生徒会長を務め、園芸部・手芸部・女子バレー部でも部長を兼任。偏差値４５も満たない東京武偵高で７５オーバーをキープし続ける・・・・男女問わず誰もが憧れる文武両道の完璧超人である。

そんな白雪とキンジは、４～５歳の頃から付き合いがある・・・いわゆる幼馴染の関係にあり、ヒステリアモード化を恐れて女性と関わりを持とうとしないキンジにとっては、数少ない女友達と言える存在だった。

「幼馴染とは言っても、兄さんと星伽神社に行った時に会うだけだったし、今も今で・・・・頼んでもいないのに、白雪が勝手に世話を焼いてくれてるだけなんだが。まぁ、そういう事だ」

キンジは、日本刀片手に殺気を振り撒く白雪を見ながら・・・・刻桃に彼女の情報を端的に話した。

「幼馴染さん・・・・か。まさか、あのヤマトナデナデがお前の知り合いだったなんてな」

「それを言うなら『大和撫子』だろ。白雪の事・・・・知っていたのか？」

「転入初日の夜に、二言三言話しただけの薄っぺらい関係だけどな。けど・・・・アイツ、本当に巫女なのか？」

刻桃の目の前では、白雪が振りおろした日本刀を・・・・紅龍が『絶刀・鉋』で受け止めた所だった。
白雪は、狂気の雄叫びを上げながら・・・・・

「キンちゃんは悪くない！キンちゃんのせいじゃない！アリアが悪いに決まってる！！忍者もついでに・・・・いなくなれぇーーー！！」

「僕はついでかい!?まったく・・・・・なんでまたこんな事に・・・・これがヤンデレの恐怖と狂気という物か。身を持って体験する事になるとは、夢にも思わなかったよ」

恨み節を吐く紅龍と、鍔迫り合い状態となっている。
恰好だけを見れば、巫女である事は一目瞭然。だが、行動と言動がそれらを真っ向から否定しまくっている。武装巫女である事を差し引いてもだ。

「絶対通り魔・・・・・百歩譲ってニセ巫女の間違いだろ」

刻桃が指摘すると、キンジは溜息をつきながら自分の携帯電話を渡した。

「こいつは？」

「・・・・・メール、読んでみろ」

言われるがまま・・・・刻桃は着信メールボックスを開く。
そこには・・・・同じ人物から大量のメールが着信していた。その数、計４９件。

差出人は、言うまでもなく星伽白雪。

彼女が送信したメールを古い方から適当に選択して読んでいくが・・・メールが新しい物になって行くのに比例し、刻桃の表情も強張っていく。

その内容はというと・・・・

『キンちゃん、女の子と同棲してるってホント？』

『ついさっき合宿から帰って来たんだけどね、神崎・H・アリアって女の子が、キンちゃんを誑かしたって噂を聞いたの！』

『どうして返事くれないの？』

『すぐ行くから！』

特に・・・最後の３０分の間に送信された白雪からのメールが、ドンドン恐ろしい物に変化していく様子が見て取れる。

刻桃は、どこからどう突っ込めばいいかわからず・・・・無言でキ

ンジに携帯電話を返す。

キンジは、額を片手で押さえつつ・・・・白雪の悪癖について話し始めた。

「どういうシステムなのかは謎なんだが・・・・白雪は子供の頃から、この発作を起こすんだ。こうなったら俺の経験上・・・・誰も手がつけられない。なんで自分が襲われているかもわからない被害者・・・・大抵、女子がボッコボコになるまで」

「・・・・別に謎でも何でもないだろ。この場合、思い当たる可能性は1つだけだ」

「刻桃は・・・・・なんで白雪がああなっているのかわかったのか？」

「逆に聞くけど・・・・お前は本当にわからないのかよ。薄っぺらい付き合いの俺でもわかるくらい、あからさまだってのに・・・・」

「わからないから聞いているんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

キョトンとするキンジに、刻桃はただただ呆れるしかなかった。

確かに、白雪の行動は誰の目から見ても明らかに行き過ぎているし、それなりの修羅場を経験した刻桃でさえ、目を覆いたくなる物を感じてしまう。

しかし・・・これまでの話しを聞き、彼女の行動原理と狂気の理由は容易に想像がついた。

キンジの身を案じているから。キンジの事を大切に思っているから。そして・・・さらに言ってしまえば、キンジの事を心から愛しているからである。

だからこそ、好意云々問わずキンジに近づく女（今回の場合はアリアと紅龍）の存在を許せないし・・・邪魔者の芽は徹底的に刈り取ろうという狂気に駆られてしまうのかもしれない。

（察する所・・・・白雪はキンジに告ってはいないみたいだし、キンジは白雪の想いには全く気付いていない。だからこんなややこしい事になってんのか・・・・）

刻桃が脳内で情報を整理する中・・・・

「天誅ーーーー！！」

いつの間にか、標的を紅龍からアリアに変更していた白雪が・・・・その脳天を目掛けて刀を振りおろした。

（あの女・・・・・流石にやり過ぎだ！）

ただの喧嘩の延長じゃ済まされない。本気の殺気が込められた斬撃。
せっかく得た情報源を・・・・新しい仲間を抹殺させるわけにはいかない。だが・・・・・割り込もうにも、もう間に合わない。

ここで・・・・刻桃はアリアに向かって叫ぶ。

「挟め！！」

「！？」

アリアは・・・・刻桃の声に反応。そして、バチィィィ！！と、白雪の日本刀を左右の手の平で挟んで受け止めた。

いわゆる、真剣白刃取り。

「危ないじゃない・・・・この、バカ女っ！！」

アリアがバリツの達人であった事と・・・・以前、刻桃の真剣白刃取り・・・・虚刀流で言う所の『名前の無い技』を実際に掛けられた経験があったからこそ、できた芸当とも言える。

「もうキレたっ！！風穴あけてやるっ！！」

流石に口には出さなかったが、刻桃の助言に感謝しつつ・・・・二丁拳銃を抜き、白雪に向かって発砲。反撃に転じる。

防弾巫女服の部分を狙い、弾倉が空っぽになるまで連射するが、白雪は・・・・

「いなくなれ泥棒猫！キンちゃんの前から・・・・消えろっ！！」

弾丸を・・・・さも当たり前のように、刀で弾き、斬り払った。それも全弾である。

殺意を向けられているアリアと紅龍だけではない。キンジと刻桃も驚愕するしかなかった。

一応、キンジは『弾丸斬り』をヒステリアモードでやった事があるし・・・・刻桃も、数発ぐらいなら玉鋼製の手甲で弾き、軌道を逸

らす事も可能だ。

だが・・・今回白雪が行ったように、全弾を避けずに全て斬り払うような芸当は流石に出来ない。

これが超偵・・・武装巫女の実力。

刻桃は、これ以上の白雪の暴走を止めるべく・・・手加減無用で突進。それに気づいた白雪の斬撃をかわしつつ一気に距離を詰める。そしてそのまま右足を軽く振り上げ、白雪の両足に絡め・・・さらに、平手で彼女の上半身を思いっきり突いた。

「虚刀流・・・・菫！」

これは、虚刀流では珍しい投げ技・・・『菫』。

白雪の体重が後ろに掛かった瞬間を狙い・・・柔術の如く一気に床へと叩きつけた。

「紅龍！」

「心得た！！」

刻桃の声に応じ・・・紅龍は身体に巻き付けた鎖を外し、白雪の身体に巻き付けて動きを完全に封じる。そして猿轡も噛ませて無理矢理黙らせる。
白雪は『んーーー！んーーーーー！！！』と芋虫のようにもがいて抵抗を続けるが、刀も紅龍に取り上げられたことで、もう成す術がないようだった。

部屋は・・・白雪の斬撃によって、壁やら家具やらに多大なダメージが残ったが、彼女が単独で起こした暴動は・・・・怪我人ゼロでどうにかこうにか鎮圧された。

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・

「さて、落ち着いたか？」

「んーーーー！んーーーー！！」

刻桃が・・・未だに鎖で縛られ、猿轡で口封じされた白雪に聞く。

白雪は不本意そうながらもコクコク頷き、肯定の意思を示す。

「まぁ、このままじゃ会話できないし、猿轡だけはなんとかしてやる。紅龍！」

「有難く思いたまえ。モモちゃんの頼みじゃなかったら・・・・向こう数時間は、このままにしていたところさ」

悪態つきつつも、紅龍は白雪から猿轡を外す。
外された瞬間、白雪は新鮮な空気を求めるように大きく肩で息をした。

「はぁ・・・・・はぁ・・・・・・。えっと、もしかして・・・・・刻桃・・・・君？」

白雪が尋ねる。

「俺・・・・名乗ったっけ？」

「ううん、小学校ぐらいの時・・・・キンちゃんから刻桃君のお名前だけは聞いてたの。とっても仲がいい・・・・お友達だって。それにさっきも・・・・キンちゃん、キミのお名前呼んでたから」

「そっか。それと・・・・俺もついさっき、お前の事はキンジから大体聞いた。白雪もコイツと幼馴染なんだって？」

刻桃が・・・キンジを指差しながら聞く。

「う、うん・・・・・はうっ！？」

キンジの顔を見た途端・・・・白雪の顔色が変わった。

「キ、キンちゃん様っ！」

瞳をうるうると潤ませ、縛られたままの身体を屈め、その膝で顔を覆った。

「こ、こんな辱め・・・こんな失態・・・・・死んでお詫びしますっ！キンちゃん様が私を捨てるなら・・・・・アリアと紅龍を殺して・・・私も今ここで切腹して、お詫びします！！」

二重三重に訳がわからない事を言い出す白雪。

「な・・・何故僕がキミに殺されなければならないんだ。アリアを殺すのは別に構わないが、死ぬならキミ１人で死にたまえ！」

「ちょっと・・・・コウ！なに１人だけ逃げようとしてんのよ！」

「この場合、僕が一番無関係じゃないか。ロクに話しも聞いてくれないヤンデレには付き合いきれないよ！」

「それを言ったらあたしだって無関係よっ！！」

白雪の一言に触発され、彼女の暴走の標的にされた紅龍とアリアは不毛な言い争いに発展。
これ以上放っておくわけにもいかない。キンジは、捕縛された白雪の目の前にしゃがみ込んだ。

「あのな・・・・白雪。誑かされたとか・・・・捨てるとか捨てないとか・・・・アリアとはそんな関係じゃない。武偵として一時的にチームを組んでいるだけだ。紅りゅ・・・・コウにしても同じだ。コウは元々刻桃と組んでて・・・・刻桃ともチームを組む事になったから、必然的にコウも仲間になったんだ。わかったか？」

「で・・・・でも、みんな言ってたよ。紅龍さんはともかく、アリアとは恋・・・・恋人・・・・恋人って・・・・それに同棲・・・・」

「白雪は・・・・誰が流したかもわからない根も葉もない噂と、俺の言葉。一体どっちを信じるんだ？」

真剣な表情で問い詰めるキンジ。
そんな彼の剣幕に白雪は押し切られ・・・・

「キ・・・・キンちゃん様です。キンちゃん様を信じてる・・・・

信じてますっ！！」

再三の説得により、白雪はようやく態度を軟化させた。
紅龍も・・・・誤解は完全に解けたと判断。彼女の身体から鎖を外して解放してやる。

「あ、ありがと・・・・紅龍さん」

「僕の事は『コウ』と呼びたまえ。本名は嫌いなんだ」

「あ・・・・ごめんなさい、紅りゅ・・・・コウさん」

白雪は丁寧な姿勢で頭を下げる。
そして、慎ましく頭を上げ、キンジへと振り向く。

「じゃあ・・・・キンちゃんとアリアはなにもなかったんだね。キスとかも・・・・してないんだよね！！」

と、落ち着いた声で問いただす。

「「・・・・・・・・・・」」

だがここで、キンジとアリアは顔を見合わせ、同時に石化。
キンジは挙動不審に目を泳がせ、アリアは真っ赤になってアタフタ。
そして、ギロリ・・・と、キンジを睨む。

それを見た白雪の瞳孔が・・・

「・・・・・し・・・・・た・・・・・の・・・・・ね？」

怨念こもった声と一緒に・・・・ゆっくりと開く。

誰も何も言っていない。だが、ついさっきのアリアの反応は・・・・
・キスを『肯定』したのと同義。

そう判断した白雪の顔は・・・・表情と生気を失い、喉の奥からは
『ふふふ・・・・うふふふ・・・・ふふふふふ・・・・』と、虚ろ
な笑い声まで発する始末。

彼女の巫女服の袖からは、隠し持っていたトゲトゲ付きの鉄球と鎖
鎌が落っこちる。

鎖鎌はともかく、鉄球はどうやって仕舞っていたかは不明だが・・・
・彼女が再びバーサーカーモードになってしまったのは、誰に目か
ら見ても明らか。

（（なにあれ・・・・・・・・・・超怖い））

若くして相当数の修羅場を潜り抜けてきたハズの刻桃と紅龍でさえ、白雪の変貌ぶりにドン引き状態。得体の知れない恐怖を感じ、ゆっくりと後ずさる。

そんな中・・・・アリアは堂々と白雪の前に堂々とそびえ立ち、寄りも上がりもしない胸を堂々と張る。

「確かにキスはしたけど・・・・でも、大丈夫だったのよ?大丈夫だったんだから!!昨日分かったんだけど・・・・・」

いつ火が噴き出してもおかしくないほど真っ赤なアリアは・・・・・・次の瞬間、衝撃的な一言を口にした。

「こここここ・・・・・子供はできてなかったんだから!!」

・・・・・・・・・・・・・・・はい？

アリアは『どうよっ！！』とでも言いたそうな顔で鼻を鳴らすが・・・・それ以外の者達の精神には一大衝撃が与えられた。
白雪は・・・・白雪の身体からは、白雪の形をした透明な何かがスーーーっと抜けていった。そして・・・・そのまま真後ろに倒れ、目を回して失神してしまった。

そして、刻桃と紅龍は・・・・ジトっとした目でキンジを見た。

「お前・・・・・キスぐらいは想像してたけど、まさかそこまで・・・・」

「いいじゃないか。これも若さというものさ。だけどまぁ・・・・・ねぇ♪」

「勝手な想像するなっ！アリア、お前・・・・なんでここで『子供』なんだよ！おかしいだろ！！」

「こ、この無責任男！あたしはあれから人知れず結構悩んだのよ？だって、キスしたら・・・・」

アリアは、再び衝撃の一言を発する。

「キスしたら子供ができるって・・・・小さい頃お父様が言ってたんだからっ！！」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

ホームズ家の皆様。そして、世のお父様お母様方。子供の性教育はしっかり行いましょう。

アリアの言葉を聞いたキンジ、刻桃、紅龍の考えが・・・・見事なまでにシンクロした瞬間だった。

「あんな事で子供ができるわけねーだろ！いまどき小学生でも知ってるぞ、そんな事！！」

「なによなによ！じゃあどうやったらできるのよ！！教えなさいよ！！」

キンジの突っ込みと、アリアの追求。

「お、おお・・・教えられっかバカ！！」

「どうせ知らないんでしょ！」

「知ってる！！」

「じゃあ教えなさい！！」

「教えられるかバカ！」

キンジとアリアは・・・お互い真っ赤になりながら詰め寄り、額と額が引っつき合いそうなぐらいの距離で睨みあう。

「モモちゃん・・・・少しお腹空かないかい？」

呆れたような声で紅龍が聞くと・・・・・

「・・・・減った」

刻桃は、同じく呆れたような声で・・・片手で腹を押さえながら肯定。

すると紅龍は、ベランダまで移動すると・・・左腕を真横に振り上げる。

「ここに来る途中でラーメンの屋台を見付けたんだ。この時間ならまだギリギリやってるかもだから、行ってみないかい？奢るよ？」

「いや、今日は俺が奢る。連絡入れるの忘れてた・・・詫びって

ことで」

「そうかい。なら、その言葉に甘えるとしよう。ほら、早く来たまえ。置いていくよ？」

紅龍が言うと、刻桃は軽く飛び上がり・・・・紅龍の左腕に着地する。

「「！？」」

それを見たキンジと・・・・アリアの目が驚愕の色に染まる。言い争う事も忘れ、その光景に目を奪われる。

刻桃の体重はどんなに少なく見積もっても４０ｋｇ～５０ｋｇ。それを紅龍は、左腕だけで、全く微動だにせず涼しい顔をして支えている。

誰がどう見てもおかしい状況。

「そんなに驚かないでくれたまえ。モモちゃんの体重消すのなんて、戦闘機の重量消すよりも遥かに簡単なんだから」

ここで、紅龍が種明かしをする。

「これが僕の得意忍法の１つ・・・『真庭忍法・足軽』。見ての通り、僕は・・・・僕自身の体重と、僕が触れた物体の重量を自由に操る事ができるのさ」

最も、重量を軽くする事は出来ても、元よりも重くする事は不可能だけどね。・・・・と、紅龍は言葉を続けた。

「アリア、キンジ、帰りはいつなるかわかんないから、先に戸締りして寝ててくれ」

「近いうちにまた会う事になるだろうけど、今日の所はさよならだ。じゃあ・・・良き眠りを」

それだけ言うと、刻桃を腕に乗せた紅龍は・・・・・ベランダから一気に飛び降りる。

慌てた様子でキンジとアリアがベランダまで駆け寄ると、ハングライダーを展開させて上昇気流に乗っかる紅龍と・・・・ハングライダーの上で身を屈める刻桃の姿がギリギリ見て取れた。

第２２話（後書き）

子供の性教育についてはいろんな所で議論されてる所。
俺の場合は、周りの大人に聞いてもはぐらかされた上、自分で調べようとするほど真面目じゃなかった事もあり、真実を知ったのは中学生を半分過ぎた頃でした。
若いうちから知識を与えるのは危険。という見解も否定はしませんが、しっかりとした知識を身につけさせておかないと後々面倒の事になる上、恥もかきかねない物だと俺は考えています。

次回からは魔剣編・・・・の前にオリジナルストーリーを数話行います。

刻桃ＶＳアリア。体育倉庫、教室、キンジの部屋に続き・・・・・四度目の決戦です。

第２３話

ハイジャック事件・・・・及び、白雪の来襲から１週間。

あの後、アリアは『子供の作り方』についてしつこく尋ねたが・・・・刻桃は紅龍と一緒に『ラーメンを食べに行く』と理由をつけてエスケープ。キンジも頑として口を割らなかった。

故にアリアは『自分で調べる』という武偵らしい選択肢を選び、図書館に籠って１から・・・それこそ、『おしべとめしべ』レベルから自己学習する事になった。

結果・・・・自らの保健体育知識が、かつての『天動説』レベルに間違っていた事を認めざるを得なくなり、ついでに『子供の作り方』を男に尋ねる事が、人前で裸になるのと同じぐらい恥ずかしい行為だという事まで無駄に学習。

しばらくの間は、キンジと刻桃の顔を見るたびに真っ赤になり・・・・慌てたり硬直したりなど、挙動不審な行動に陥った。

しかし切り替えは早い方らしく、それも数日経つ頃には落ち着きを取り戻し、今ではすっかり元の理不尽我儘自己中大王に戻っていた。

基本的に３人は・・・・普段は同居人として、クラスメイトとして、仕事仲間として、武偵高生徒として特に当たり障りのない生活を送っていたが・・・・アリアはキレたり気に入らない事があったりするとすぐに発砲。刻桃は、そんなアリアの行動をある程度妥協しつつ軽くあしらってはいるが、危害が及べば容赦なく手刀足刀で反撃。交戦状態寸前に陥る事は未だに少なくなく、キンジはそんな２人の間に挟まれ貧乏くじの常連状態。

それが・・・・一時的とはいえチームを組んだ3人の日常だった。

そんなある日の事。

武偵高・強襲科第一体育館。

通称・・・・闘技場。

スケートリンクのような楕円形のフィールド前に、ギャラリーたる生徒達が大勢集まっている。

その防弾ガラスの向こう・・・・・闘技場の中央では、2人の生徒が睨み合っていた。

1人は、長い銀髪をリボンで束ね、若草色の着流しを纏い、背中には長刀入りの薙刀袋を背負った少年。

もう1人は、桃色ツインテールが特徴的な、武偵高のセーラー服を

着た少女。

そう。言うまでもなく、鑢刻桃と・・・・神崎・H・アリアであった。

「刻桃・・・・覚悟はいい？今更謝っても許さないわよ！絶対後悔させてやるんだから！」

アリアは二刀を抜いて二刀流の構えを取り・・・・

「後悔するのは・・・・そっちだ！」

刻桃は、虚刀流二の構え・・・『水仙』の体勢を取る。
身体を開いた『鈴蘭』とは対照的な半身の構えであり、前後の同じ高さに配された両手は、平手ではなく貫手で構えている。

「噂の転入生・・・・お手並み拝見だな」

「神崎無敗伝説。終わるか否か」

「さぁさぁ！現時点での賭け率は神崎7、鑢3！さぁ賭けた賭けた！まだ間に合うよ！」

一部の生徒が賭けを仕切る中・・・・

「やれややれや！とっとと始めろや！どっちかが死ぬまで・・・・とことんやれや！！」

強襲科女教師・・・・蘭豹（ランピョウ）が、防弾ガラスをガンガン蹴飛ばしながら叫んだ。

年齢は１９歳。生徒達と同年代なのだが、香港では凄腕の武偵と恐れられた女傑である。現在は教職についているが、各地の武偵高を次々クビになり、今は東京武偵高に腰を落ち着けている状態にある。

「いざ尋常に・・・・・華々しく死んで見せろや！！」

蘭豹の物騒極まりない合図。

それを受け、アリアは二刀を携えて突撃。刻桃はそれを迎え撃つ。

武偵高において、実銃・刀剣を使った決闘形式の模擬戦は、カリキュラムの１つとして存在する。

だがその実施には、身体中を完全防護する『C装備』の着用が義務付けられている。防弾性とはいえ、着流しや制服での模擬戦は明らかな武偵法違反。

それでも・・・現実的には生徒同士の私闘や、蘭豹の命令で稀に行われてしまっているのが悲しい現実である。

しかし・・・そんな事は今は問題じゃない。

問題なのは・・・何故、刻桃とアリアが戦う事になったかだ。

それを語るにはまず・・・話しを前日まで遡らなければならない。

・・・

・・・・・

遡ること、前の日。

「ただいま」

夕方。強襲科での授業を終えたアリアが、キンジの部屋へと帰ってきた。

「ああ、お帰り。おやつなら冷凍庫にアイスが入ってるぞ」

アリアよりも一足先に帰ってきていた刻桃が、ベランダで洗濯物を取り込みながら彼女に出迎えの一言を掛ける。
アリアはそれに従って冷凍庫を開け、中に入っていた棒アイスを取り出して食べ始める。それを横目に、刻桃は仕事を再開。黙々と洗濯物を取り込み、それを終わらせると今度は畳み始める。

キンジ、刻桃、アリアの3人が同居するようになった直後、ある取り決めが行なわれた。

そう。家事分担の割り振りである。

これは家主であるキンジの提案で、アリアとの同居が回避できないのなら・・・せめて同居人がいる事のメリットを利用しようと考えたのである。

それによって、この中で唯一マトモな料理が作れる刻桃が必然的に炊事全般を引き受け、洗濯と掃除はキンジとアリアが当番制で行う事になる・・・・・・ハズだった。

なのに、アリアは『家事なんか奴隷や使用人の仕事！あたしはやらないわよ！』と強く反発。『奴隷』という言葉を忌み嫌う刻桃とは一触即発の危険な空気になりかけたが・・・ここでキンジは事態を収拾すべく、『やりたくないなら代わりに生活費を多めに出せ』とダメ元でアリアに提案。

アリアはそれで妥協し、家事をやらない代わりに生活費を他の2人より多く出す事となった。
リアル貴族であり・・・・ロンドン武偵局に居た時の収入もあるアリアは、言うまでもなく金持ち女子高生である。そんな彼女にとって、その程度の出費は何の痛手にもならなかった。

よって現在。炊事は刻桃、掃除はキンジが全面的に引き受け、洗濯は交代で行う事となった。

今日の洗濯当番は刻桃であり、取り込んだばかりの3人分の衣類を畳んで整理していた。

そんな時・・・

「っ!?な・・・・ななな・・・・なにやってるのよっ!!」

アイスを食べ終えたアリアが、突然叫んだ。
挙動不審に動揺し、プルプル震える手で刻桃を・・・・正確に言えば、刻桃がちょうど手に持っていたある物を指差していた。

「なにやってるって・・・・どう見ても洗濯物畳んでるだけだろ。手伝う気がないなら邪魔するな」

刻桃はどうでもよさげに再び手を動かすが、アリアはもう気が気じゃなかった。何故なら、刻桃がちょうど触れていたのは・・・・

「あたしの下着に触るなーーーーー！！」

アリアの叫び声が部屋中・・・否、部屋の外にまで響いた。
彼女が言うように、刻桃が今畳んでいたのは・・・アリア愛用のトランプ柄のブラジャーとパンツだったのである。

「触るな！・・・って。触んなきゃ畳めねぇだろ」

女性物の下着にも関わらず、刻桃は男とは思えないほどの鮮やかさでテキパキと畳んではいるが・・・アリアの表情は怒りと羞恥で歪みまくる。

（こんの・・・・・！！）

思えば、こういう可能性をすっかり失念していた。風呂に入る時は、無意識に脱いだ服や下着は脱衣所の籠に放り込み、次の日の夜には洗濯された状態で部屋の隅に置いてあったので、特に気にも留めていなかった。手間が省けたと喜んでいたぐらいだ。

特に何も忠告していなかった以上、感謝こそすれ、恨むのは筋違いなのだが・・・・アリアは太腿のホルスターからガバメントを２丁抜き、刻桃に向ける。

殺気に感づいた刻桃は畳む手を止めるが・・・その手には今もア

リアのブラジャーが握られていた。

「・・・・・ったく。邪魔するなって言ったばっかだろ」

「うるさいっ！今すぐそれ、よこしなさい！」

「・・・・・・それ？」

「い、今・・・・手に持ってる物よ！」

「？・・・・・・・ああ」

アリアがなぜ怒っているか。
ようやく理解した刻桃は、手に持っていたブラジャーをアリアへと投げ渡す。アリアはガバメントで絡め取るようにキャッチ。いそいそと背中の中に隠した。

「俺に畳まれるのが嫌なら、自分で洗濯しろよ。洗濯機の使い方ぐらい知らないわけじゃないだろ」

「嫌よ。なんであたしが。洗濯なんて使用人や奴隷の仕事よ。そのために生活費多く出してあげてるんだから、アンタが嬉し泣きしつつ喜んでやるのが当然でしょ！」

「・・・・・奴隷？・・・・・使用人？・・・・・誰が？」

刻桃が・・・・こめかみに青筋を浮かべ、平静を装いながら聞き返す。
それを知ってか知らずか、アリアは無い胸を大きく張り、堂々と・・・・言う。

「なに今更な事言ってるのよ。チーム組む事になった以上、アンタはあたしの・・・・・奴隷2号じゃない！」

「・・・・・・は？」

「いい？超人集団の『イ・ウー』と戦うためには、こっちもいろんな特技を持った仲間を揃えておく必要があるの。アンタや・・・コウのような有能な奴隷と出会えたのは、あたしにとっｔ『今・・・・・何て言った？』・・・・！？」

刻桃は・・・・座ったままの体勢で。地を這うような低い声で、アリアの言葉を阻んだ。

「・・・・・・もう一度聞く。お前、今・・・・・・俺に何て言った？」

「ど・・・・奴隷って言ったのよ。アンタはあたしの奴隷2号に決定してるんだから、当然でしょ！」

その剣幕に押されつつも、アリアは言葉を絞り出した。

「・・・・・俺には、この世で最も嫌いな物が2つある。アホな貴族と・・・・『奴隷』って言葉だ。そもそも、どんな理由があろうと仲間に対して使うべき言葉じゃねぇだろ」

キッ・・・と、刻桃はアリアを睨んだ。

奴隷。それは『あの人』を生涯苦しめ続けた忌むべき言葉。

そして、アホな貴族。それが誰を差しているのかは・・・・もう明白だった。

「誰がアホな貴族よ！あたしは・・・・・・」

「高名な貴族だろうが、シャーロック・ホームズの曾孫だろうが、アホはアホだ。貴族云々以前に・・・・・お前の頭は一体何本ネジがぶっ飛んでるんだ。とっとと工場にでも行って脳みそオーバーホールして出直してこい！」

「余計なお世話よ！なんで・・・・アンタなんかにそこまで言われなきゃなんないのよっ！」

「言わない方がおかしいんだよ！誰が使用人だ！誰が奴隷だ！そういう時代錯誤なこと口にする時点で、その貴族は親の七光のボンクラ・・・・・つまりアホ貴族って相場が決まってんだよ！」

「いいいい・・・・・言ったわねーーー！！」

アリアは背中から二刀を抜刀。刻桃に斬りかかる。
刻桃は当然の如くそれ避けるが・・・かわされた刃は、床に置かれていた洗濯物を。正確に言えば・・・アリアの下着を掠めてしまった。

「ああっ!?」

アリアの悲痛な叫び。
刻桃が避けたせいで、アリアの刀はバックリと・・・お気に入りのブラジャーを見事なまでに切断しまったのである。

「アンタ・・・なんて事してくれたのよ!もう許さないわよ!」

「お前の手落ちだろ。大体、お前の『偽造胸』にブラジャーなんて必要なのか?」

偽造胸。刻桃に一言に反応し・・・アリアの目が泳ぐ。

「な・・・なんの・・・・こと?」

「俺が知らないとでも思ったか?さっきお前が切り裂いた下着・・・『寄せて上げるブラ』だろ」

「なに言ってるのか全然わかんないわーーーー」

トボケまくっているが、明らかに棒読み口調。もう自白したも同然である。
それが自分でもわかったのか・・・アリアは誤魔化すのはもう無駄だと判断。刻桃に睨みかえす。

「それよりっ！なんで人のブラの種類知ってんのよ。男のクセに！」

「俺ん家は母子家庭で家事は交代でやってたし、母上も似たようなブラ使ってたからな。だから嫌でもその手の知識は身に付くんだよ」

とは言いつつも、刻桃が『寄せて上げるブラ』に気づいたのは、下着の縁に付いているタグに『６５Ａ→Ｂ』と表記されていたからだ。
洗濯する時に品質を確認する必要があったからたまたま気づいたのだが、アリアの場合・・・・気の毒な事に、誰がどう見ても胸の偽造は失敗していたとしか言わざるを得ない。

そもそも、寄せて上げるには、ある程度の元手という物が必要になってくる。元手が乏しければ、寄りも上がりもしないのは当然の結果だった。

余談ではあるが、同じく『寄せて上げるブラ』を愛用している風花は、元々それなりに元手があった事で胸の偽造にはさり気なく成功していたりする。

「この変態！スケベ！色情魔！」

「・・・酷い言いようだな。大体、お前みたいに貧相な体格の奴に欲情してやれるほど・・・俺は初心でもガキでもねぇよ。もう少し・・・胸だけでも成長させてから出直しな」

「ななな・・・・今何て言ったーーーー！！」

「胸だけでも成長させてから出直しな」

「一言一句間違いなく言うなーーー！嫌味か！？そんなに大きい胸がいいか！白雪や理子みたいな！」

「白雪はともかく・・・なんでそこで理子が出てくるんだ」

どういうわけか、論点がズレてきている。だが、刻桃は改めて考えてみる。

白雪。

言うまでもなく、スタイル抜群の巫女少女。初対面の時は、一瞬目を奪われたのも忘れたわけじゃない。

数日前のバーサーカーモードを目の当たりにしていなければ、それこそ『完璧な大和撫子』という評価を下し、ヘタすれば心を奪われていたかもしれない。

そして理子。

アリアレベルに低い身長の割には、身体の凹凸がハッキリしてて・・・一部では『ロリ巨乳』と呼ばれてありがたがれていた。

実際に上からのしかかられて・・・擦り寄ら得た経験。更にはつ

いつい奪ってしまった唇の感触からも・・・・彼女もまた、『色気のある女』であった事を思い出した。

「アンタのそのリボン・・・・理子のでしょ。ど、どうせ・・・あの子の色気とかに惑わさちゃったから、あの時あっさり逃げられたんでしょ！」

「逃げられた時の状況なら、お前や警察にも事細かに話したハズだ。アレが全てで・・・・アレ以上の事実や真相はない」

「どうだが！アンタの実力を考えれば、あの時『炎刀・銃』を奪われたのは、どう考えたっておかしいわ。どっかで手を抜いてたんじゃないの？」

アリアの指摘。彼女は、鑢家が代々受け継いできた『武器を持つと弱くなる』という特異体質を知らない。だが、それを差し引いても強引極まりない仮説。
刻桃の表情が歪むが・・・・ワザワザ真実を教えて訂正してやるわけにいかないこともあり、口を噤む。

アリアはそれを『肯定』と受け取り、ここぞとばかりに責め立てる。

「どうせ理子に・・・・変な下心で感情移入でもしてたからそうなったんでしょ。武偵にあるまじき行為よ！」

「ある種の感情移入があった事は認めるけど、人としてあるまじき行為ばっか重ねてるお前にだけは言われたくねぇ！！」

「あたしのどこが人としてダメな事やったっていうのよ！いつ？どこで？何時何分何十秒？地球が何回周った時？」

「・・・・その言葉、完全に死語だぞ。けど、俺はあの時・・・・本気でやった。その上で『鉋』を奪い、『銃』を奪われた。謂れの無い事で責められる筋合いはねぇよ。あの時、勝手に突っ込んで・・・・あっさり返り討ちにあったクセに、偉そうに言うな！」

「あんなの・・・・最初から本気でやってれば、絶対後れなんか取らなかったんだから。これは本当。本当の本当よ！！だからアンタに決闘を申し込むわ。あたしが本気の本気でやれば・・・・アンタなんか、全身風穴だらけにしてられるんだから！」

アリアは、怒りのあまりガバメントを抜き、刻桃に突きつける。

「・・・・いつか戦う事になるとは思ってたけど、今がその時ってわけか」

刻桃は目を閉じ、少しだけ考える素振りを見せ・・・・

「いいぜ。その挑戦・・・・真っ向から受けてやる」

決闘の申し込みを受けた。

「そんでもって、負けた方が勝った方の言い分を全面的に聞き入れる。それでいいな？」

「どっちが泣きを見るかはもう決まってるけどね。絶対・・・・・ぜえーーーったい、でっかい風穴あけてやるんだから！」

「やってみろ。ただしその時にはお前の方が八つ裂きになってるだろうけどな」

・・・・・

・・・・・

と、言うわけで・・・・2人は険悪になりながらも、その日のうちに一緒に強襲科へと向かい、闘技場使用の申請を行った。
それをたまたま担当した強襲科教師・蘭豹が悪乗りし、次の日・・・つまり今日の昼頃には、刻桃ＶＳアリアの噂は強襲科を中心に大きく広まった。

同居人たるキンジは全力で決闘を止めようとしたものの・・・・刻桃とアリアの一睨みによって、これまた一気に沈黙へと追い込まれ

た。
こういう時だけは妙に息の合う2人に逆らえる者は・・・・・この武偵高には教員を含めてもそうそういないだろう。

そして、時間軸は序盤へと戻る。

「いざ尋常に・・・・・華々しく死んで見せろや！！」

蘭豹の物騒極まりない合図。

それを受け、アリアは二刀を携えて突撃。刻桃は『水仙』の構えでそれを迎え撃つ。

初めて会った日からの因縁。４度目の戦いの火蓋が・・・・今、斬って落とされた。

第２３話（後書き）

家事分配の問題と、言葉に対する重みと認識の違いから発展した今回の戦い。
いくらアリアが刻桃の実力を認めたうえで『奴隷』と言っても、刻桃にとってそれは大切な友を生涯苦しめ続けた忌むべき言葉。
さらには下着から言い争いやあらぬ疑いやなにやらで・・・・・・
戦う事でしか語り合えない状態に。

因みに・・・刻桃の母、風花も寄せて上げるブラを愛用していた事が発覚。彼女が本格登場した時にでもネタにするつもりです。

次回はいよいよ決闘です。お楽しみに！

第２４話

「はあああ！！」

アリアは二刀を振りかざし、真正面から突っ込む。
対する刻桃は『水仙』の構えを保ったまま、じっくりとアリアの動きを見据え、彼女が間合いに入ってくるのを今か今かと待ち構える。

「虚刀流二の奥義・・・・・」

アリアが間合いに入った瞬間・・・

「花鳥風月！」

虚刀流二の構え・・・・『水仙』から繰り出される、敵を突き刺す貫手を放った。
例え殺す気で放ったとしても、防弾制服を着たアリアの身体が実際に貫かれる事は無いが、それを差し引いても鋭く・・・それでいて疾風の如き速さを誇る刺突技。

だが、アリアは小柄な体躯を活かして寸での所で屈みこみ、『花鳥風月』をかわしつつ、滑り込むようにして刻桃の懐に入り込んだ。

「やあっ！！」

「・・・・っ！？」

アリアの斬撃が刻桃の腹部に叩き込まれようとしたが、寸での所で真後ろに跳躍。距離を取ってやり過ごす。

一撃。互いに一撃だけ斬撃を放っただけ。だが、たったそれだけの一合でも、２人の戦闘能力が並外れていた事は・・・傍から見ていたギャラリー達も否応なく理解する。

「・・・・やるな。大抵の奴は、今のカウンターでぶっ倒れてるとこなんだけど」

刻桃は構えを解きつつも、いつでも動けるような軽い足取りで地を踏みしめる。

「あ、あんなの大した事ないわ！」

とは言いつつも、アリアの精神はヒヤヒヤ物だった。

奥義というだけあって、貫手の速さと威力は、以前喰らいかけた手刀技『雛罌粟』とは比べ物にならない。もしもあらかじめ『カウンター狙い』の可能性を読んでいなければ・・・今の一撃で決まってしまっただろう。

「今まで戦った奴が弱かっただけなんじゃないの？」

「なかなか言うじゃねぇか。今度は・・・・・こっちから行くぜ！」

今度は刻桃が駆け出す。

真正面から・・・・堂々と。そして突撃の勢いをつけたまま跳び上がり・・・

「虚刀流・・・・・薔薇！！」

爪先による飛び蹴りをアリアの身体を目掛けて放つが、アリアは刀を交差し、そのどてっぱらで防ぐ。

「くっ・・・・・」

それでも衝撃を殺しきれず、アリアは顔をしかめる。

「まだまだ行くぜ！！」

刻桃は続けて、ローキック、ハイキック、回し蹴りといった足刀技の連続攻撃を繰り出し、アリアに反撃の隙を与えない。

接近戦での勝ち目は薄い。そう判断したアリアは・・・・刀を鞘に

収納してホルスターからガバメントを二丁抜く。

そして・・・・

バァン！バンバンバァン！！！

刻桃の足元を目掛けて乱射。

「・・・・・チッ」

縦横無尽に飛び交う弾丸を避けるべく、刻桃はアリアから距離を取る。

そして驚異の脚力で闘技場中を縦横無尽に駆け回り、弾丸を回避しながら再びアリアに接近。

真後ろへと回り込み・・・・一直線に突撃した。

弾丸をかわした時の脚力や、変幻自在の足運びにギャラリー達は目を奪われるが・・・・対戦者たるアリアは、ニヤリと不敵に笑う。

「甘いわよ！！」

ガガガガァン！！

一気に振り向き、両手のガバメントを・・・・残りの弾丸を撃ち尽くすまで発砲。全弾防弾服に覆われた部分を狙い、刻桃の動きを制しに掛かる。

「甘いのは・・・・そっちだ！」

刻桃は両腕を交差させて頭部をガード。
突撃の勢いはそのままで、要である軸足を斜めに捻じり・・・

「虚刀流・・・・・柳！」

身体を回転させながらアリアに向かって跳躍。
迫りくる弾丸の殆んどを喰らいながらもアリアへと突っ込み、再び背後を取る。

そしてすぐさま振り返り・・・・

「虚刀流・・・・雛罌粟！」

手首を返して手刀技・・・・『雛罌粟』を放つ。

「・・・・くっ!?このぉ!!」

アリアはの所ギリギリの所でガバメントを盾代わりにして、どうにか受け流す事に成功。
それでも手首・・・腕にはジィィィィンと、骨や関節が疼くような痺れが残ってしまう。

「痛てて・・・・左肩と脇腹、2発だけ喰らっちまったか。慣れない事はするもんじゃねぇな」

刻桃は距離を取ったアリアを目で追いながら・・・弾丸を受けた箇所を右手で軽く擦る。

「・・・2発だけなの?少なくとも、半分くらいはしっかり命中したハズよ」

「ああ、これの事か?」

刻桃が軽く身体を振ると、パラパラパラ・・・と、着流しから弾丸がこぼれ落ちてきた。

「ちょっと・・・・それって・・・」

全て・・・・ついさっきアリアが発砲した弾丸だ。

「さっきの技・・・『柳』は、身体の回転と着物やコートの袖や裾を利用して、弾丸を絡め取るようにして受け流す技。無意味に着流しで武偵やってたわけじゃないって事だ」

武偵高の制服及び、刻桃が愛用している着流し、ついでに紅龍の忍装束など・・・武偵が着用している防弾服は、『ＴＮＥ繊維』と呼ばれる特殊な素材が使用されており、通常の銃弾を貫通させる事はまずない。

だが、ダメージが無くなるわけでもなかった。銃弾が命中すれば金属バットで殴られたような衝撃を受け、心臓などの急所に喰らえば死ぬ事だってある。

そこで開発されたのが、『虚刀流・柳』だった。

敵に向かって突っ込みつつも、身体の回転を利用して最小限のダメージで弾丸を受け流し、絡め取り、手刀足刀を叩きこむべくカウンター狙いで間合いに入る。

戦国時代や尾張時代とは異なり、防弾服を身に纏って戦う事を前提とした近代の虚刀流ならではの技と言える。

「おい、すげぇな・・・・・あの転入生」

「ああ、あの神崎相手にあそこまで戦える奴・・・・いままでいなかったんじゃねぇか？」

「しかも・・・・素手でだぜ。まだ刀もまだ抜いてないってのに」

「嘘でしょ・・・・鑓君って、アレでホントにＢランクなの？」

「ざまぁみろ、神崎！」

ギャラリー達は目の前の激戦に目を奪われる。

「あの男・・・・・女の子相手にやり過ぎでしょ」

「アリアたんファンクラブメンバーとして許すまじ！」

「あとでフクロにしちまおうぜ！」

「鑢君って・・・・・絶対ドSね」

刻桃に対して称賛と非難が跳ぶ中、戦いは継続される。

戦況だけを見れば・・・・刻桃とアリアの戦いは、一進一退の互角そのもの。

だが、アリアが『双剣双銃』の通り名の通り、二刀と二丁拳銃を駆使して戦うのに対し、刻桃は己の肉体と身体能力だけで戦っている。

その事実が・・・・刻桃の実力の高さを否応なく認識させられる。

アリアもまた、両手のガバメントの弾倉を交換。刻桃の次の動きを警戒する。

長期戦に持ち込めばこちらが不利になる。何故なら・・・

（弾が無くなる前に決着つけないと・・・・こっちが負ける。それにアイツはまだ・・・・）

背中の薙刀袋から刀を・・・・『絶刀・鉋』を抜いていない。

それこそがアリアにとっての、最大の不確定極まりない不安要素だった。

もしも刀を使わない剣士が、刀を使えばどうなるか。

間合いが広くなり、攻撃力も増す。

単純に考えても、今よりも強くなってしまう事は明白。

かつて理子が所有者だった時の『絶刀・鉋』には、苦汁を舐めさせられたという苦い記憶もある。

アリアはガバメントの銃口を刻桃へと向け、刻桃のこれまでの戦術をから考えて最も効果的な攻め方を考えが、結局のところ・・・・やる事はもう決まっている。

遠距離戦に持ち込んで銃撃主体に攻めるか。刻桃が『鉋』を抜く前に接近し、一気に畳みかけるか。そのどちらかしかなかった。

それに『鉋』の全長は約１５０ｃｍ。一気に接近してしまえば、抜刀を防ぐ事は十分可能。

「絶対・・・風穴あけてやるっ！！」

アリアはガバメントを発砲しながら接近。

（こう来るって事は・・・・一気に勝負を決める気か！）

だが、刻桃にとってそれは好都合だった。銃弾の飛び交う遠距離戦は対応できない事はなくとも、苦手分野であることに変わりなかったからだ。

実際に戦ってみて感じた事であったが・・・・アリアの二丁拳銃から繰り出される素早く正確な銃撃は、刻桃にとっては脅威だった。

こちらは変幻自在の足運びを売りとする『杜若』を併用しつつ攻めたと言うのに、アリアは驚くほど正確に狙ってくる。

そして・・・・バリツを主体とした体術と、二刀流剣術。『花鳥風月』をかわした時といい、小柄な体躯を上手く活かして攻めてくることも含め・・・・やりにくい相手だった。

双剣双銃のアリア。

ロンドン武偵局に居た時、９９回連続強襲を成功させたという実力は伊達ではないと、改めて認識させられた。

だからこそと言うべきか・・・・『鉋』を警戒してくれる事は都合がよかった。

刻桃は武器を使えない。手に持っただけで、あり得ないぐらい弱くなってしまうという『呪い』を代々受け継いでいる。

だが、アリアはそれを知らない。知らないからこそ、『虚刀流の剣士は、刀を使えば更に強くなる』と思い込んでくれている。

理子に奪われた『炎刀・銃』にしろ、現在所有している『絶刀・鉋』にしろ、使えもしない武器を所有している理由はここにあった。

武器は、持っているだけで敵対する相手に威圧感を与える事ができるし、犯人を威嚇する時にも絶大な効果を発揮する。

例えば・・・犯人を追いつめた時。実際に斬れもしない手刀や足刀で脅すより、いとも簡単に傷つける事ができる拳銃や刀で脅した方がわかりやすいからだ。

「フッ・・・」

刻桃は、不敵に笑う。
そして・・・・

「さぁ来い！お前の実力・・・・見せてみろ！」

虚刀流一の構え・・・・鈴蘭。
最も基本的な構えを取り、アリアを迎え撃つ。
アリアは、刻桃に接近してからは・・・・抜刀の隙を与えないよう格闘戦主体で攻める。

「何が、見せてみろ・・・・・よ！偉そうに」

アリアの斬撃が空を斬る。

「大体、なんで男のクセに腰まで髪伸ばしたり、リボンつけたりしてんのよっ！このキモロンゲ！！」

それに対し・・・

「余計な御世話だ！」

刻桃の回し蹴りがアリアのツインテールを掠める。

「お前も女だってんなら・・・・料理の1つぐらい焦がさずに作ってみやがれ!!」

「な・・・・っ!?アレは焦がしてなんか無いっ!そう・・・・卵焼きよ!」

遡る事数日前。
何を思ったのか・・・アリアは目玉焼きを作ろうとしたのだが、卵を割ろうとして手をドロドロにしたり、焼こうとしたらフライパンに油をなじませる事もせず、結果・・・・出来上がった物はもはや『炭』。

そう、所謂・・・・

「アレのどこが卵焼きだ!どんな贔屓目で見ても、『可哀想な卵』以外の何物でもねぇだろ!ニワトリや養鶏所の人に謝れ!!」

「いいいい言ったわねーーーー!!」

「先に言ったのはお前だろ!俺のスタイルにケチつけるな!!」

「うるさいうるさーーーい!!」

互いに罵詈雑言を浴びせまくる2人。
それでもその激しい攻防は、ギャラリー達の目を惹きつけてやまない。

「なぁ、キンジ・・・・」

「なんだよ、武藤」

「アリアはともかくとして・・・・刻桃の奴、あんなに強かったのかよ」

ギャラリーの1人として戦いを観戦していた武藤が、隣にいるキンジに聞く。

「アイツ・・・銃と刀を相手に、これまでずっと素手だぜ」

「でも鏖君・・・・背中に刀を背負ってるよ?隙を見て使うつもりなんじゃないかな」

キンジ、武藤と一緒に、戦いを観戦している不知火が言う。

「いや、それはない」

刻桃の『呪い』を知るキンジは即座に否定。

「あんな刀を使わなくても、アイツには虚刀流が・・・・鍛え上げた身体がある。それに、奥義もまだ1つしか使っていない。接近戦に持ち込めさえすれば・・・相手がアリアだろうと十分倒せる」

「それはつまり、遠距離戦に持ち込めば、神崎さんに勝機があるって事だよね」

「俺が知る限り、虚刀流の技に遠距離専用の物は無い。どんな技でも敵に接近することを前提としているわけだから・・・・」

「鍵となるのは、神崎さんの残弾数・・・・だね」

キンジと不知火の推測。

今のこの戦況。傍から見れば、どちらが勝ってもおかしくは無いように見える。

それでもあえて戦いを決する要因を挙げるとすれば、アリアの残弾数である。

拳銃を併用する都合上、弾切れになればアリアの戦闘力は大幅にダウン。接近戦でのアドバンテージが大きい刻桃が、一気に優位に立つ。それは誰もが予想する所だった。

この戦いも佳境に突入。

誰もがそう考えた時・・・・

「神崎ーーーーーー！！」

「「！？」」

決闘の最中・・・・野太い男の声が割って入った。

第２５話

「神崎ーーーーーー！！」

決闘の最中・・・野太い男の声が割って入った。
場外のギャラリー達はもちろんの事、闘技場中央で交戦中だった刻桃とアリアも、突然の乱入者を見据える。

「フフフ・・・・・」

声の主は不敵に笑いながら、ガシャン・・・ガシャン・・・ガシャン・・・と奇妙な足音を立てながら歩む。

さらに・・・

「でひゃひゃひゃ、神崎・Ｈ・アリア・・・」

「今日が年貢の納め時。ククククク・・・・・」

不気味に笑いながら、２つの人影が後に続く。

その数、計３人。

三者三様に、ガシャン・・・ガシャン・・・ガシャン・・・と音を立てながら仁王立ちする。

「なぁ、アリア・・・・」

刻桃は・・・目の前で日本刀を構えるアリアに聞く。

「なに?刻桃」

「アイツら・・・・誰だ?お前の事、呼んでたぜ」

「知るわけないじゃない。だってアイツらみんな・・・・」

アリアが、乱入者達の事をキッ!と鋭い視線で睨む。

「あんな全身鎧を着てたら、知ってたとしてもわかるわけないじゃない!」

「・・・・まぁ、否定はしない」

刻桃も同意。

まさにその通りだった。乱入者たる3人は、頭の天辺から足の爪先

まで・・・西洋甲冑を身に纏っていたからである。
3人とも腰には銃を差したホルスター。リーダー格と思われる男の背中には、鉄製と思われる棍棒。甲冑は生身を晒している部分が殆んどなく、関節部分が僅かに見え隠れしている程度であった。

「神崎ぃ!!ここで会ったが百万年!今日こそ・・・・てめぇにコケにされた恨み、晴らしてくれるわ!!」

リーダー格の男が叫ぶ。

「だから・・・・誰なのよアンタ!」

アリアが聞くと・・・今度は、リーダー格の男の隣に立った腰巾着と思われる2人が声を発する。

「お前のせいで俺達は大恥かいた!汚名をすすぐには、今最も注目が集まっているこの場でお前を倒すしかねぇ!!」

「さぁ・・・今死ね、すぐ死ね、とっとと死ね!!」

乱入者3人・・・リーダー格の甲冑男は、腰に装備したホルスターから拳銃を・・・44マグナムを抜く。

「喰らいやがれぇ！！」

両手で構え、アリアの足元を目掛けて発砲。
世界最大級の拳銃の威力は伊達ではなく、アリアの足元を大きく抉る。

「ちょっ・・・話ぐらい聞いたらどう！？結局アンタ誰！最低限の受け答えも出来ないなんて、人として最低よ！」

「・・・お前が言っても説得力ねぇだろ」

刻桃が、これまでのアリアの行動を振り返りながら突っ込んだ。
ロクに話も聞かずに発砲するそのさまは、我儘大王たるアリアといい勝負だった。

「お前のその調子のよさ・・・俺は否定するぜ？」

「刻桃うるさいっ！あんな奴・・・絶対風穴あけてやる！！」

アリアはガバメントを発砲。
しかし、全身を西洋甲冑で覆われた彼らにダメージを与える事は敵わない。

「ひゃはははは！」

「流石の『双剣双銃』様も、自慢のガバメントを無効化されちゃ、赤ん坊も同然だぜ」

調子に乗る腰巾着2人。

この状況を何とかするには・・・・

「いいわ。風穴あけるのは諦めてあげる。でも!!」

アリアは背中から二刀を抜刀。一気に2人組へと接近。
当然2人組は４４マグナムを発砲して応戦。

だが、西洋甲冑を纏っているせいなのか、そのモーションは大雑把で単調。腕の動きと銃口の向きに注意を払っていれば、かわす事は難しくない。
しかし、油断はできない。もしも・・・・もしも一撃でも直撃を喰らえば、防弾制服を身に纏っていようとタダでは済まない。確実に意識を持って行かれるし、最悪の場合は内臓破裂で死んでしまう可能性もある。

アリアは銃口を見据えながら・・・・・2人組に対してすれ違いざまに峰打ちを繰り出した。

普通に考えれば・・・・全身甲冑を纏って相手に対しては、効果が期待できないハズの一撃。

だが・・・・

「がっ・・・・・」

「テメェ・・・・神崎!!」

2人組は、甲冑の下で苦悶の表情を浮かべながら地面に膝を突く。

「いくら全身に甲冑を纏っていても、関節部分は手薄よ!!」

その隙を見逃さず、アリアは武器をガバメントに切り替え、発砲する。

先程峰打ちを繰り出した・・・・甲冑を纏った敵の弱点たる、関節部分を狙って。

普通なら、僅かな間接の隙間を狙うのは高度な技術が必要とされるが、アリアは不安定なパラシュート上からでも正確な射撃を繰り出す事ができる。それに比べれば、造作もないことだった。

バンバンバンバンバンバンバン！！

アリアが2人組に対し、両手のガバメントから4発ずつ。計8発の弾丸を発砲。弾丸は甲冑に覆われていない肩や肘、膝などの関節部分に直撃。

「「ぎゃあああああああ！！」」

腰巾着たる2人組は、断末魔の悲鳴を上げながら戦闘不能に追い込まれた。
それを見たリーダー格の甲冑男は、甲冑の下で冷や汗を流しながら刻桃に近づいた。

「確か・・・・鑢だっけ？お前の噂は聞いてるぜ」

「へぇ・・・・どんな？」

「お前も神崎と一悶着起こしてんだろ？ここは1つ・・・・手を組んで一緒に倒さねぇか？」

甲冑男は・・・得意げな態度で、刻桃の肩に手を置く。

「なぁ・・・お前も神崎の態度が我慢できないからこそ、こんな決闘しているんだろ?だったら俺と・・・・ヘブッ!?」

言葉の途中で舌を噛む。

刻桃が・・・甲冑男の頬に当たる部分を殴ったからだ。

「へぶっ・・・えっ!?お前、なにするんだ!」

甲冑を身に纏っていたおかげでダメージこそないようだったが・・・・舌のダメージが深刻である事を容易に想像させる。

殴った刻桃はと言うと・・・そんな甲冑男を尻目に、軽い足取りでアリアの方に移動する。

「アリア、決闘はここまでだ」

「え?なんでよ。あたしはまだ戦えるわ!アイツを倒したらすぐに・・・・」

「弾・・・・もう少ないんだろ?」

「・・・・・・・・っ!?」

図星だった。

「そんなわけだから、最後の奴は俺が戦らせてもらう。決闘を邪魔した以上・・・・それ相応の報いは受けさせる」

刻桃は・・・ゆっくりと構える。

「虚刀流五の構え・・・・夜顔！」

両足を肩幅の広さで左右に揃え、両手は平手の形にし、肘を折りたたむようにして胸の前に。
一の構え『鈴蘭』と二の構え『水仙』と同様『静』の構えに分類されるが、一見するとそれらよりもやや攻撃的な構え。

「さぁ・・・・来いよ。それとも、その甲冑と棍棒はただの飾りか？」

「・・・・なんだと？」

「お前・・・・・弱いだろ」

「貴様・・・・・いま・・・・・何て言った？」

甲冑男の声に、怒りの色が混じる。
刻桃はニヤリと笑うと、さらに追い撃ちをかける。

「弱っちいからこそ、腰巾着引っ張って決闘に乱入なんてマネしたり、それでも不利になったからこそ俺を引き込もうとしたんだろ。違うか？」

「違うに決まってる！俺は強い！強くなったんだ！この甲冑は装備科の特注品・・・・新たなる俺の誕生の証だ！！」

甲冑男は誇らしげに叫び、自慢の甲冑を見せびらかすように両腕を大きく広げる。
しかし、ギャラリーの反応は・・・・

「・・・・・キモい」

「・・・・・ウザい」

「・・・・・・邪魔」

「・・・・・・悪趣味」

「・・・・鬱陶しい」

冷淡な物だった。

「つーか、お前らのせいで決闘が中断して、こっちは迷惑してんだ

よ」

「賭け金どうしてくれるんだ！！」

「イキナリ乱入しといて盛り下げてんじゃねぇよ！」

「「「ブーーー！ブーーーー！ブーーーーー！！！」」」

非難ボーボー、ブーイングの嵐。

完全にアウェーとなった甲冑男は、背中から棍棒を取り外して頭上で勢いよく回転させる。

その棍棒と怪力から発生する風圧は空気を揺らし、彼の目の前に居る刻桃とアリアの髪を揺らす。

「だったら・・・まずはテメェから血祭りに上げてやらぁ！！」

甲冑男は棍棒を振りまわしながら刻桃に接近。全身全霊の気迫を込めて振り下ろした。

しかし、刻桃にとっては予想の範疇だった。そもそも、ワザと挑発して怒らせ、４４マグナムではなく棍棒を使うように誘導したのだから。

「虚刀流五の奥義・・・・・」

刻桃は棍棒の一撃をかわしつつ・・・・甲冑男の懐に飛び込む。

そして平手に構えていた両手をパァン！と手を合わせるように叩き・・・・

「飛花落葉！」

甲冑男の身体を目掛けて両手を打ち出した。

平手打ちではない。それは・・・張り手。

左右からのその打撃が、甲冑男の全身を震わせる。

瞬間・・・・

ガシャアアアアアン！

「！？」

甲冑男が身に纏っていた甲冑が粉々に砕け・・・・防弾制服を身に纏った男子生徒の姿が顕わになる。

刻桃にとっては、初めて見る顔だ。

しかし、例え顔見知りであったとしても、今この場で敵である事に

は変わりない。

刻桃は間髪入れずに・・・

「虚刀流・・・・梅！」

「びでぶっ！？」

身体を一回転させての回し蹴り。回転の勢いをそのままに浮かせた前足で、足刀技を喰らわせた。

急所は避けてやったとは言っても・・・甲冑を失った男子生徒の意識は遠のき、その身体を闘技場へと降した。

まさに秒殺。

虚刀流五の奥義・『飛花落葉』は、内側を破壊せずに外側を破壊する装甲破壊・・・鎧崩しの張り手。

全力で打ち込めば他の奥義と同様一刀両断の必殺技となるが、ある程度手加減することで、足止めや武装解除の要素を含んだ奥義となる。

本来ならこの局面では、虚刀流四の奥義・『柳緑花紅』を使う方が戦術上は正しかった。

打撃を透徹させ、外側でなく内側を破壊する『鎧通し』の拳。そっちを使った方が、それこそ一撃で勝負を決める事ができたからだ。

なのに、刻桃はそれをしなかった。ワザワザ甲冑を破壊した上で、

止めを刺した。
その理由は・・・・

「で、アリア。こいつの事・・・・何か知ってるのか？」

刻桃が気絶した男子生徒の襟首を掴み、アリアの目の前に突き出した。

そう。甲冑男こと男子生徒の正体を確認するためである。

決闘を邪魔した男の自信を粉々に打ち砕きたかったという考えもあったが・・・実務的な理由を挙げると、もしも内側からしか脱げないような仕掛けになってでもいれば面倒だったから。だからこそ、武装解除技たる『飛花落葉』を行使。その後で改めて止めを刺したのである。

アリアは、男子生徒の顔を見ながらほんの数秒だけ考えるが・・・・

「やっぱり知らないわ。こんな奴」

「・・・そっか。で、これからどうする？」

「どうするって・・・・あたし達も賭けをしてたじゃない。あれはどうなるのよ」

「ああ、アレか・・・・」

負けた方が勝った方の言い分を全て全て聞き入れる。
賭けの内容は、刻桃としても忘れたわけじゃない。

だが・・・・

「決闘は中止。引き分けになった時の取り決めもしなかった。だから、俺達の賭けも『お互い何もなし』が妥当なとこだろ」

決闘の結果など、心底どうでもよさそうに言った。

「そんなことより・・・・俺は腹が減った。これからどっか行かねぇか？」

「どっかってどこよ」

「桃饅でも食いに」

「！？」

アリアが・・・・ピクリと反応する。
やがてボソッと『・・・・行く』と、短く呟く。

そんなこんなで話は纏まり、2人は・・・というより、刻桃は甲冑を脱がせた乱入者3人組を引き摺り、闘技場の出入り口に打ち捨てる。

「おい、刻桃、アリア！」

キンジ、武藤、不知火の3人を筆頭に、ギャラリー達が駆け寄ってくる。
その時、乱入者の顔を間近で確認した不知火は・・・爽やか笑顔を崩さずにハッとなる。

「彼ら、前に神崎さんに因縁つけて決闘して負けた・・・強襲科の3年のグループだよ」

思い出したように言った不知火の言葉を受けて、アリアは改めて戦闘不能になった3人組の顔を凝視。

結果・・・出された結論は。

「こんな奴ら、やっぱり知らないわ。あたしが覚えてないって事は・・・元々大した実力持ってなかったんでしょ」

存在そのものを記憶からバッサリと消去していたようだ。
その乱入者3人はと言うと、幸いにも意識は取り戻したようだった

が・・・ガクガクプルプルと震え上がっていた。
蘭豹と、それからギャラリー達によって逃げ道を塞がれ完全包囲されていたからだ。

特に、賭けを行っていたギャラリー達は殺気立ち、ある者は拳の関節を鳴らし、またある者は拳銃を取り出している。

「まぁ、アイツらの処遇は蘭豹先生達に任せるとして・・・・腹減ったからとっとと行こうぜ」

「別にいいけど・・・・アンタって、男のクセに甘いもの好きなの？」

アリアが聞く。

「俺の好みにケチつけるな。それに、俺が好きなのは和菓子や果物のようなサッパリした甘さであって、逆に言えば、チョコや生クリームのような後に残る甘さはあんま好きじゃない」

「ふーん。まぁいいわ。早く行きましょ。奢ってくれるんでしょ？」

アリアは桃色のツインテールを揺らし、刻桃にくるりと振り向く。

「・・・・誘ったのは俺だし、１つぐらいなら別にいいぜ。キンジ

達はどうする？」

刻桃が、キンジ、武藤、不知火を見ながら聞くが・・・・3人は言葉少なくそれを断る。
そして3人は、アリアと・・・アリアに急かされる刻桃を見送るが・・・ここで、ある疑問がわいてきた。

「なぁ、キンジ。そもそもアイツら・・・なんで決闘なんて事になったんだ？しかも、険悪だったのにアッサリ仲直りして桃饅食いに行くなんて・・・・結局何がしたかったんだ？」

武藤の言葉を受けて、キンジは・・・

「刻桃は・・・・昔っから喧嘩でのいざこざをネチネチ引き摺るタイプじゃない。それに、本当に腹も減ってたんだろ。アリアはなんだかんだで単純だし、桃饅に釣られて喧嘩の事なんかどうでもよくなった・・・・といった所じゃないのか？」

「鑢君と神崎さんの事、よくわかってるんだね。でも・・・いいの？」

今度は不知火が尋ねる。

「・・・・なにがだ？」

「鑢君と神崎さん、なんだかんだで少しはいい感じだったよ?このままじゃ・・・・・」

「・・・・・このままじゃ?」

キンジが聞き返すと、不知火は『なんでもないよ。忘れて』と、ニコッと爽やか笑顔で笑いかける。

彼の言っている意味が、真意がわからず、キンジはただただ首を傾げるばかりだった。

第２５話（後書き）

決闘は甲冑男達の乱入によって中止。なりゆきで、刻桃とアリアの険悪だった空気も小康状態へと向かいました。
アリアはもちろんの事、刻桃も桃饅は好きな設定。本人いわく、サッパリした甘さが好きとの事。彼が言うように、ケーキとかの洋菓子はフルーツがないと食べるのキツイですから。

さて、次回は原作よりも早く装備科のあのキャラが登場。さらに、刻桃と紅龍の知られざる関係も明らかになります。

一応次話も途中まで出来ており、サイトの執筆モードに移動させてあるのですが、入院の都合で完成させるには携帯使わなきゃなんないので、失敗した場合は退院するまで投稿できないので悪しからずです。
上手く行ったら入院中でも投稿します。それではまた次回！

第２６話

決闘から3日後。ある日の早朝。

刻桃もある程度は武偵高に慣れ、今は装備科棟の・・・・とある一室を目指して歩いていた。

その部屋は地下（学園島は人工浮島なのでその辺微妙だが、便宜上はそう呼ばれている）にあり、無数の武器がラックに収められた廊下を歩き・・・・目的の部屋の前に辿り着く。

表札には平仮名で『ひらがあや』と書かれている。

「・・・・・ここか」

刻桃が軽くノックすると・・・・

「はーい！開いてますのだー！」

部屋の中から子供のような声が返ってくる。
刻桃が扉を開けると、室内はどっかの雑貨店の如く物に溢れ・・・
様々な工具や銃火器のパーツが所狭しと、それこそ天井に到達する
ほどの高さにまで積み上げられている。

「・・・・・アンタが、平賀文（ヒラガ・アヤ）さん？」

遮光ゴーグルを額に装着した・・・見た目小学生ぐらいの少女に
尋ねる。

「おおっ！？そういうキミは、噂の銀髪の転入生・・・・鑢君なの
だ！長くて綺麗なのだ！とーやま君から話しは聞いてるのだ！」

「アイツからどんな話を聞いてるかは知らないけど・・・・・・アン
タが平賀さんで間違いないな？」

「そうなのだ！あややが装備科一の天才、平賀文なのだ！えっへん
ですのだ！」

少女・・・・平賀文は、アリアよりもさらに小さい胸を堂々と張る。

「・・・・・もう知ってるみたいだけど、俺が鑢刻桃だ。以後よろ
しく。それより・・・・キンジ経由で頼んどいた物、出来てるか？」

「あはっ。ご注文の品・・・・しっかり出来ているのだ。あとは、実際に入れてみればいいだけなのだ！」

平賀は、ガラクタの山の中から・・・・一本の棒のような物を取り出す。

全長１m前後の・・・・所々に金色の装飾が刻まれた真っ黒い鞘である。

刻桃はそれを受け取ると、持参した薙刀用の袋から『絶刀・鉋』を取り出した。そして、ゆっくりと・・・・注文した鞘へと収納する。

「・・・・・・ピッタリだ。キンジの紹介だけはあるな」

「お安いご用ですのだー！あややに掛かれば、この程度は朝飯前ですのだー！」

再び無い胸を張る平賀。

そんな彼女は・・・・『平賀源内』という尾張時代の発明家の子孫で、彼女自身も機械工学の天才児と呼ばれていたりする。

あのハイジャック事件以降、刻桃は・・・・理子から奪った『絶刀・鉋』を薙刀用の袋に入れ、出来るだけ持ち歩くようにしていた。

武器を持つと極端に弱くなる・・・・という鑢家の『呪い』も、武器を手に持たない限りは発動しないため、持ち歩くだけなら特に不

都合もなかった。
アリアとの決闘の時のようにハッタリも利くし、武偵高では日本刀を帯刀している生徒も少数ではあるが存在するため、特別目立つ事もない。
だが、いくら『絶刀・鉋』が、折れず、曲がらず、錆びつかない、頑丈な刀でも、鞘のない状態で・・・薙刀袋に入れただけの状態で持ち歩くのは、いささか危険だった。切っ先が薙刀袋を突き破って外に飛び出す事がたまにあり、危なく怪我しかけた事もあった。

よって、刻桃が最低限の安全対策として鞘をどうにかしようと考えていた時・・・それを知ったキンジは、装備科所属の武偵高2年『平賀文』を紹介した。

当初刻桃は、見ず知らずの人間に『鉋』を預ける事に抵抗があったため断ろうとした。
だが、キンジは『平賀さんなら、鉋の写真と寸法データさえあれば、しっかり造ってくれる』と言い、他に当てがなかった刻桃はダメ元で信用してみる事にした。
そして、キンジが刻桃の代理で『鉋』の鞘を発注してから数日後に当たる今日・・・キンジの言葉に嘘偽りがなかった事を実感させられたのであった。

「それじゃ鑢君、支払いは期日までにお願いしますのだ！」

「！？」

平賀は、無邪気な笑顔で伝票らしき物を渡す。
そこに書かれていた金額を見て、刻桃は若干顔を引き攣らせる。

（・・・・鞘って、こんなに高かったっけ？）

ある程度の装飾や秘密ギミックの搭載を頼んだりしたが、それらを差し引いても法外な金額。

平賀文は、アメリカの武器メーカーからスカウトが来るぐらいの天才児。戦闘能力こそ低いが・・・武装の製造、強化にかけては本来ならSランクの実力があった。
だが・・・たまに、すぐ不良が出るようないい加減な仕事をする上、当たり前のように違法改造を行い、相場無視の金額を吹っかけることから・・・武偵ランクは『A』で止まっている状態だった。

つまり、刻桃と同様『ワケあり』な理由で降格されている口なのである。

キンジ経由で仕事を依頼する前、一応彼からその手の情報を聞いてはいたのだが、目論見が少しばかり甘かった・・・と、刻桃は溜息をついてしまう。
それでも、何度確認しても鞘の出来は確かだったため・・・刻桃は渋々半分、納得半分で、財布の金を全部はたいて料金を支払った。

平賀は、無邪気な笑顔で『毎度ありなのだー！』と言って刻桃を見

送ったが・・・・

（・・・・こいつには、もう2度と発注するまい）

刻桃は・・・そう心に堅く誓った。

そして、鞘に収納した『絶刀・鉋』を背中に背負い、校舎へと向かう。

今日は教室で、ある意味重大イベントが起こる日。本当は今日学校に行くのはあまり気が進まなかったのだが・・・後々面倒な事を言われたくないと思い、刻桃の歩く速度は自然と早足になっていた。

その途中で・・・・・

「刻桃！」

「！？」

キンジに呼び止められた。

その隣には、当たり前のようにアリアも一緒にいる。

それも何故か・・・・チアガールの格好をして。

黒を基調とした、ノースリーブかつスカートの丈も短い露出の多いコスチュームで、胸元の上部には銃弾型の穴が空いている。

（そういや・・・『アドシアード』が近いんだったな。アリアの奴、こないだ閉会式の時だけチアダンスやるとか言ってたっけ）

アドシアード。

年に一度行われる武偵高の国際競技で、スポーツで言えばインターハイやオリンピックのようなものに位置付けられる。

そこでメダルを取れば、武偵大学も推薦入学が可能で、武偵局もキャリアで入局できる上、民間の武偵企業も一流どころの内定がもらえたりもする。

本来なら、アリアは拳銃射撃競技の代表に選ばれていたのだが、『競技の練習で時間を取られるわけにはいかない』と言って辞退。それでも手伝いには参加しなければいけない規則になっているため、チアダンスをやる事となった。

刻桃は実力はあっても、新参者であるため特にお呼びがかかる事もなく、キンジも表向きはEランク武偵であるため、同じくお呼びがかからず、2人とも適当に割り振られるであろう手伝いをする事になっていた。

「・・・・・何じろじろ見てんのよ。見せ物じゃないわよ」

刻桃の視線に気づいたアリアが、頬を染めながら噛みつく。

「いや、どう考えてもチアガールは見せ物だろ」

しっかり突っ込む刻桃。

本音を言えば、多少体格が貧相でも、黙っていれば可愛く見えないこともない・・・と思っていたのだが、それは口が裂けても言わない。

一緒に生活してきてわかった事だが・・・アリアには、ヘタに褒めたり妥協しすぎたりすれば、ここぞとばかりに突け上がってくる傾向があった。約１０日前の去り際に・・・『キンジの意思を尊重する』とか言っておきながら、戻ってきた途端に元の我儘大王に戻っていたのがいい証拠だ。

百歩譲って褒めるとしても、可もなく不可もなく・・・適当にお世辞でも言っておく。それが無難な所だった。

「そういえば・・・」

キンジは、刻桃が背負った鞘入りの『絶刀・鉋』を見る。

「刀の鞘、受け取ってきたのか。出来はどうだった？」

「実際入れてみた感じ上出来・・・・だったけど、あの金額だけは思いっきり否定したくなった」

「そういうな。確かに平賀さんは相場無視の金額を要求してくるし、たまにいい加減な仕事をする事もあるが・・・・腕はこれ以上ないくらい凄いんだ。あんな金額でも客が尽きず、商売になっているのがいい証拠だ。俺の新しいベレッタも、平賀さんに改造の予約を入れてある」

「金・・・・多めに用意しとけよ」

「・・・・・・心得ている」

ついさっき、金を絞り取られたばかりの刻桃の警告。キンジは言葉少なく頷くしかなかった。

「ねぇ、刻桃。『刀』って聞いて思い出したんだけど・・・・」

ここで、アリアが会話に入ってくる。

「アンタって、『菊』や『真剣白刃取り』以外にも・・・・剣士に対抗できるようなカウンター技って、知ってたり使えたりするの？」

「ないこともないけど・・・・どうした？突然」

「刀を使わない『虚刀流』だからこそ・・・・剣士へのカウンター技も多く知ってるんじゃないかと思って聞いただけよ。イ・ウーには『どんなものでも斬り裂く剣の名手』がいるらしいし、対ナイフ戦は武偵の基本でしょ？それに・・・・今朝からキンジに『アレ』の特訓させてる事は、アンタにもちゃんと言ったハズよ」

「ああ・・・『アレ』か。ホントに今日からやってたのか。その格好でか？」

「当り前よ！あたしの練習とキンジの訓練。同時にやった方が、時間も無駄にならないでしょ！」

刻桃は前日の事を思い出す。

前日の昼頃。アリアはキンジに『潜在的な力を引き出す訓練』という名目で、その次の日から・・・・つまり今日の早朝から、そのための朝練を行う事を宣言した。

アリアは、キンジの得意体質・・・・ヒステリアモードを『二重人格』の一種と睨み、『幼少期のトラウマによって生まれた別人格が存在し、戦闘時のストレスでそっちに切り替わる』と解釈。

よって、キンジに戦闘のストレスを感じさせ、別人格に覚醒させるために最も都合のいい手段。そして対ナイフ戦が武偵の基本という事にも則り、カウンター技・・・・『真剣白刃取り』を覚えさせる事にしたのである。

だが、実際にはヒステリアモードとは、『心因性の獲得形質』ではなく『神経性の遺伝形質』。つまり、アリアの見解は全くの見当違いなものだったのである。
キンジは、ヒステリアモードの覚醒条件を知られる事を避けるためにも、アリアの仮説を適当に肯定。刻桃も・・・キンジに『秘密は守る』と約束した手前、アリアの間違いにはあえて突っ込まなかった。

「で、成果はどうだった？」

刻桃が聞くと・・・・

「まだ始めたばかりだから、身体を使ってイメトレさせてるだけよ。実際にやるのは明日からになるわね」

「へぇ・・・・。だってよ、キンジ」

「・・・・・・正直勘弁願いたい」

キンジは頭を抱える。

ハイジャックの一件で・・・・キンジは決断した。アリアのパートナーを続ける事を。アリアの味方になってやる事を。

だが、それは『一度決めた事は曲げない』というキンジにとってはごく当たり前の事をしているだけだった。

同時に、他にも決めていた事・・・武偵高から一般校に転校する計画を変更するつもりもなかった。

あの時、衝動的に破り捨ててしまった転出申請書類も、既に新しい物を作成済み。提出こそまだであったが・・・期限までには確実に、今度こそ間違いなく提出するつもりだった。

「そういや、キンジ」

「・・・なんだ？」

「あれから・・・・・白雪はどうしてる？」

刻桃が聞くと・・・キンジが軽く手を動かし、後ろを見るように促した。

それに従い軽く振り向いてみると、そこには・・・・・

「あ・・・・・」

「・・・・・・っ！？」

数十メートル程後方に・・・白雪はいた。

だが、刻桃と目が合った瞬間、警戒心の強い小動物の如く・・・・適当な物陰に姿を隠した。

「・・・・・相変わらずか」

刻桃の言葉を受けて、キンジが頷いた。

白雪がバーサーカーモードと化し、アリアと紅龍の抹殺を企んだあの日。

アリアのあまりの無知さに呆れ、刻桃と紅龍がラーメン食べに出掛けた直後・・・・残されたキンジとアリアが気づいた頃には、白雪はいつの間にか意識を取り戻したようで、誰に何を言う事もなく、煙のように姿を消した。

そしてそれから今日までの間・・・・現在進行形で白雪はキンジを避けるようになっていた。正確に言えば・・・・物陰からコソコソ様子を窺ってはいるのだが、その存在に気づいたり・・・・声を掛けようとすれば神速で逃げ去られてしまうので、結局は避けられているのと同義である。

「白雪なんかどうでもいいでしょ。そんな事より・・・・アイツはどうしたの？」

白雪の存在を完全無視するアリアが、刻桃に聞く。

「ああ。昨日様子見に行ったら、アイツはもう準備万端だった。今頃は教務科で挨拶してる頃だろ」

「しかし・・・お前に続いて、アイツも転入してくるとはなぁ・・・」

今度はキンジが言う。

「どうも・・・俺が転入決めた時からそのつもりで、いろいろ準備してたらしい。多分、俺達と同じクラスに転入してくると思う」

「・・・・そうか」

今日この日。武偵高2年A組に、新しい仲間が加わる。

この3人は、それを他の生徒達の誰よりも早く知っていた。何故なら、その人物とは・・・

武偵高2年A組。

「それじゃ、自己紹介お願いしまーす」

朝のHR時。教壇の前に立つ担任教師・・・・高天原ゆとりが促すと、その隣に立った少女は黒板に自らの名前を書き、改めて生徒達に向き直る。

外側にはねた茶髪をボブカットにし、武偵高のセーラー服を身に纏った少女は・・・・・堂々と名乗る。

「知っている顔もいくつかあるが・・・・便宜上は、初めましてと言っておこう。僕の名前は真庭紅龍。本名は嫌いだから、親しみをこめて『コウ』と呼びたまえ。ついでに言っておくと、あそこにいる鑢刻桃こと・・・・モモちゃんとは幼馴染の関係にある。以後よろしく」

そう、真庭紅龍が、東京武偵高2年A組に転入してきたのである。
彼女は制服こそ普通に着てはいたが、両手には忍装束の時と同様に黒い革手袋を装着。両足には、靴下の上に防具用の鎖を巻き付けて

いた。

装備や口調など、多少は変わった雰囲気を放ってはいても・・・・

「うおおお！！僕っ娘だあああああ！！」

「うちのクラスにはいなかったタイプ来たーーーーー！！」

「美少女でボーイッシュ・・・・・それがまたいい！！」

「チア服とか、テニスウェアとか似合いそうだな・・・・」

「尊大な口調に萌える！」

紅龍は顔立ちも良く、スタイルも平均的な美少女に分類されるためなのか・・・男子生徒達から歓喜の声が上がる。

「あの鎖で縛られてみたい・・・・」

「刻桃の奴・・・紅龍さんという幼馴染がありながら、りこりんに手を出していたのか。許すまじ！」

一部危ない事や間違った見解を口にする男子生徒もいたが・・・・

刻桃が転入してきた時は女子生徒が中心になって質問したのとは対照的に、男子生徒達は紅龍に質問すべく、ここぞとばかりに挙手を

する。

「ああ・・・みんな・・・・落ち着いて・・・・真庭さんは大丈夫かしら？」

盛り上がってる男子生徒達に戸惑いながらも、高天原は紅龍に尋ねる。

「言いたくない事と、聞かれたくない事以外でいいなら、別に答えても構わないさ」

紅龍の許可が出ると・・・・男子生徒達が熱を上げてこぞって挙手。
高天原は、一際大きな声で手を挙げていた男子生徒を指した。

「それじゃ、武藤君！」

「はいはーーーーい！！」

そう・・・武藤であった。
指された事が相当嬉しいのだろうか・・・・武藤はいつもよりも高めのテンションで返事をしつつ立ち上がった。

「・・・・・ったく」

その姿を見て、刻桃は軽く呆れる。
すぐ傍の席に座るキンジと・・・・その隣に座るアリアも同様だ。

車輌科所属の武藤剛気は、乗り物と名のつく物なら汽車から飛行機、原子力潜水艦まで乗りこなせる乗り物オタク。・・・・というのが、クラスメイト達共通の認識。
考えようによってはある意味多彩な能力を持ち、一応は優等生に分類されているのだが・・・ガザツでお調子者な性格が災いし、女受けは悪い。必然的に彼女がいるわけもなく、現在進行形で募集中だったりする。

（ようやく運が向いてきたぜ！）

武藤は心の中でガッツポーズを取る。
本音を言ってしまえば、気になる女性は・・・・同じ学年にいない事も無かった。だが、この機会に紅龍と仲良くなっておくのも決してマイナスにはならないと考える。
何故なら、紅龍は一般的な目で見れば間違いなく美少女。『東の海』でも言われているように、『恋はいつでもハリケーン』。何が切っ掛けで恋愛に発展してもおかしくはないのだから！

武藤は爽やかなつもりの強張った笑顔を・・・紅龍に向ける。

「俺、俺は武藤剛気！車輌科所属で、乗り物と名のつく物は大抵乗りこなせます！紅龍さんはどんな乗り物が好みですか？良かったら今度一緒に・・・・・」

HR中にもかかわらず、武藤が堂々と紅龍をナンパしようとした時・・・・

ザクッ！

黒い何かが武藤の右頬をかすめ、その後ろの壁に突き刺さった。

壁に刺さったそれは・・・・漆黒の苦無。

投げたのは・・・・

「全く。さっきも言ったじゃないか。聴こえなかったのかい？本名は嫌いだから、僕の事は『コウ』と呼びたまえ・・・・と。まぁ、名字なら許容範囲だからいいけど、同じ事を2度も言わせないでくれたまえ」

紅龍だった。彼女はしてやったりと得意げに笑うが・・・・苦無の餌食になりかけた武藤は、もう気が気じゃなかった。ガタガタと震

え、まだ答えも聞いていないのにゆっくりと着席。
それでも、男子生徒達はライバルが一人減ったと判断。気を取り直して次々と挙手をする。ただし・・・うっかり『紅龍』とは呼ばないようにし、『コウ』・・・もしくは『真庭』と呼ぶようにするように心がける事も忘れない。

「コウさんはどこの科に入るんですか？」

「情報科さ。情報収集は、僕にとっては得意分野だからね」

「真庭さんのご趣味は？」

「そうだね・・・ゲーム全般やアニメ鑑賞といった、現代人としてはありきたりなものさ」

「真庭さんの好み・・・好きな男性のタイプは？」

ありきたりな質問を経ての、ある男子生徒の質問。

「そうだね・・・特にこだわりはないけど、色黒で・・・細身でも逞しくて・・・銀髪のロングヘアーだったら最高だね」

紅龍がニヤニヤ笑いながら言うと・・・彼女に向けられていた男子生徒の目線は一斉に、このクラスに存在する唯一の銀髪ロングヘアーの少年に向く。
当の銀髪の少年・・・刻桃はというと、その視線にある種の鬱陶し

さを感じ、ツーンとそっぽを向く。

「あの、紅りゅ・・・・コウさん。刻桃とは、幼馴染以外で・・・・・どんな関係なんですか？」

苦無の恐怖から持ち直した武藤が、恐る恐る挙手をしながら尋ねる。

再び紅龍へと視線が集中する中・・・・

「簡単な事さ。モモちゃんこと・・・・鑢刻桃と、僕・・・・・真庭紅龍は、仕事仲間であるのと同時に、将来を誓った仲・・・・・いわゆる婚約関係にあるのさ♪」

楽しげに、それでいて愉快そうに、ポッ♪と頬を染めながら暴露した。

それを聞いた途端・・・

「刻桃コノヤロウ!!」

「あんな美少女と婚約なんて・・・・・」

「このリア充!!」

「にもかかわらず、りこりんにまで手を出して・・・・許すまじ!!」

武藤を筆頭に、眼を血走らせた男子生徒達が数人・・・・刻桃の机の正面に立ち、バァン!!と叩く。

「・・・ったく。そんな目くじら立てなくても、俺と紅龍はそんな関係じゃねぇよ」

刻桃は彼らの追求を煩わしく思いながらも、ここではぐらかすのも得策ではないと判断。
これ以上面倒な事にならないためにも、誤解を解くためにも、紅龍

の言う『婚約関係』の真相を話す事にした。

「確かに紅龍とは幼馴染で、仕事上のパートナーではあるけど、婚約関係についてだけは全否定だ」

「だが、コウさんは・・・・・」

「武藤・・・少し黙ってろ」

刻桃が睨みを利かせると、武藤を筆頭とする男子生徒達はその殺気に気圧され、黙ってしまう。

「そもそも『婚約』って言ったって、俺の母上と紅龍の父さんが勝手に口約束しただけで・・・しかも、当人のうち片方が拒否っちまえば、簡単に契約解除ができるくらい薄っぺらい物だ。理由は面倒だから省くけど、俺は5年近く前に婚約を否定した。だから、コイツとは友達程度、パートナー以上の付き合いはねぇよ」

これこそが、『婚約関係』の嘘偽りのない真相だった。
殺気に気圧された事もあってか、流石の武藤達もこれ以上は突っ込めず、ある者は安堵し、またある者は渋々といった感じで席に戻っていった。
一部納得しない男子生徒もいたようだが・・・それでも、刻桃の端的な説明によって事態は沈静化に向かった。

「まぁ・・・・そういう事にしておこうか」

フフフ・・・と腕を組みながら、顎に手を当て不敵に笑う紅龍。

「頼むからそうしてくれ。それより今日の放課後、ちょっと付き合ってくれないか？」

「ほぅ、デートのお誘いかい？」

「期待してくれてるとこ悪いんだけど・・・・ただの仕事の話しの誘いだ」

「それでもいいさ。楽しみにしているから、忘れないでくれたまえよ？」

「あいよ」

言葉少なく返す刻桃。

その様子を見て、クラスメイト達は・・・・この2人の関係がイマイチよくわからなくなった。

仲がいいのか悪いのか。恋仲なのかそうでないのか。

そして、紅龍を狙う男子生徒達は改めて決意する。

隙あらば、刻桃を尋問してでも真相を問いただそう・・・・と。

第２６話（後書き）

晴れて東京武偵高２年Ａ組に転入してきた真庭紅龍。忍者であるため超偵に分類されますけど、特技を活かすため専攻は情報科。
彼女は厳つい本名を嫌い、それで呼ばれる事を拒否っていますが、ほぼ唯一の例外である刻桃に対してだけは渋々そう呼ぶ事を許しています。名前の呼び方に、ある種の特別な絆を感じているのでしょう。それについては刻桃も同じですね。
ですが婚約関係についての認識は大きなズレが。それには、幼少期の２人の関係も大きく影響していたりします。

さて、前回あんな事書きましたが、どうにか間にあったのでこれが正真正銘入院前最後の更新になります。パソコンも持ち込めそうなので、体調が安定している限りは続きを書き続けます。

それではまた次回。

第27話

放課後。

「行くぞ、紅龍」

「ああ、待ちくたびれたよ」

退屈な授業が全て終わり、探偵科と情報科でそれぞれ授業を受けていた刻桃と紅龍は、教室で待ち合わせてた上で一緒に帰ろうとした。

その時・・・・

「待て、刻桃！逃がさないぞ！逃げたら轢き殺してやる！」

「そーだそーだ！」

「おうよ！」

「ふんす！」

関係を改めて追及しようと企む、武藤を筆頭にした数人の男子生徒達に囲まれた。

どんな贔屓目で見ても、鬱陶しいことこの上ない状況。

「どうするんだい？モモちゃん」

「どうするもこうするも・・・・」

刻桃は懐から煙玉を取り出し・・・

「・・・・じゃあな」

床に落とした。

その瞬間・・・・ボン！という軽い爆発音と共に、煙玉が破裂。

「うわっ！？」

「ゲホッ・・・ゲホッ・・・」

「前が・・・見えな・・・」

教室と廊下が真っ白な世界に染まる中、刻桃と紅龍は逃走。

煙が晴れた時には2人の姿は完全に消え、取り囲んでいた男子生徒達を、文字通り見事に煙に撒いたのだった。

屋上。

購買でジュースやお茶を適当に調達した刻桃と紅龍は・・・・屋上の一角を占領し、適当に飲みながら話し始める。
本来なら、残りの『完成形変体刀』の行方や『イ・ウー』の動向などの仕事の話をするハズたっだのだが、あれから１０日程度では特に真新しい情報が入るわけもなく、すぐに談笑へと切り替わった。

今日１日の出来事・・・探偵科の授業で何やったか、情報科の授業はどうだったか等を始めとし、紅龍が転入前の１週間、何をやっていたかなど。

聞くところによると・・・・転入試験に合格した紅龍は、情報科と通信科の女子寮に入居後、教科書や制服などの準備を行う傍ら同室となった『極端に人見知りが激しい女生徒』を現在進行形で攻略中だとか。

「そいつ・・・・気の毒にな」

「そんな事はないさ。極めて良好な関係を築いているから、今度モモちゃんにも紹介してあげよう。楽しみにしておきたまえ。彼女・・・・中空知美咲（ナカソラチ・ミサキ）さんは、結構な美人さんだよ？照れてる姿なんか最高に可愛いんだ。モモちゃんもきっとメロメロさ！」

「・・・期待しないで待ってるよ」

紅龍にいじられまくっているであろう『中空知美咲』と言う名の女生徒に同情しながら、刻桃は素っ気なく言った。

そんな時・・・・

「・・・見られてるね、さっきからずっと。そろそろ鬱陶しくなってきたかな」

不審な気配を感じた紅龍は、刻桃に目配りする。

「そうだな。俺が突っ込んで陽動かけるから、お前が生け捕れ」

「委細承知！」

同じく不審者の気配に・・・・視線に気づいていた刻桃は、一気に駆け出す。

目標は、屋上の出入り口近くの物陰。

あと数メートルと言う所まで接近した時、物陰から・・・・不審な

気配の主が姿を現す。

「・・・・・・っ！？」

「やっぱお前か・・・・・白雪！！」

不審な気配の発生源・・・星伽白雪は、『色金殺女（イロカネアヤメ）』を抜刀。横一閃の斬撃で刻桃を迎え撃つ。

だが、刻桃はそれを紙一重の動きでかわし・・・白雪の後ろに回り込む。

「虚刀流・・・・牡丹！」

そして振り向きざまに、腰の回転を乗せた後方回し蹴りを放った。

白雪は寸での所で前方に跳んでこれを避け、すぐさま反撃に転じようとしたが・・・

「きゃっ！？」

突如身体に鎖が巻きつき・・・白雪はこんな時でも慎ましい悲鳴を漏らしてしまう。

そのままゴロリと転がってしまい、『色金殺女』も取り上げられて

身動きを完全に封じられてしまう。

「真庭忍法・・・鎖縛」

「さ・・・さばく?」

「とは言っても、『足軽』とは違って特殊な能力は不要だし、僕の一族なら誰でも使える教科書忍法だけどね」

紅龍は両手を広げておどけて見せる。
そして白雪を拘束していた鎖を解いてやり、『色金殺女』も返してやる。

「あ・・・・ありがとう」

「ちょっと甘いんじゃないか?紅龍」

「構わないさ。もしも変な動きを見せれば・・・・僕とモモちゃんで一気に畳みかければ済む話さ」

睨みを利かせる紅龍。
その視線に白雪は悪寒を感じ・・・・その場で正座。

「ご・・・・ごめんなさいっ!!か、監視・・・・・覗いてたりして。こんなはしたないこと・・・・・生徒会長失格ですっ!!」

整った姿勢で土下座。これまでの非礼を詫びる。

「あー・・・・とりあえす顔上げろ。こっちもやり過ぎた」

刻桃が促すと、白雪は遠慮がちに面を上げる。
それでも誠意を示すためなのか・・・・整った正座の姿勢だけは崩さず、紅龍によって返却された『色金殺女』も左脇に置いている。

「一体・・・・僕らに何の用があったんだい？用があったからこそ、僕らを見張っていたのだろう？」

紅龍が尋ねると・・・・

「ううぅ・・・・あの・・・・・その・・・・キンちゃん様が・・・・・・あうぅ・・・・」

白雪は、ギリギリ聞きとれるか取れない程度の小さい声でホソボソと話す。
しかし・・・・しどろもどろな口調な上、要領も全く得る事ができない。

ここで・・・・

「白雪。これからキミにいくつか質問をする。ＹＥＳなら頷いて・・・・ＮＯなら首を横に振ってくれたまえ。できるかな？」

紅龍が聞くと、白雪はコクリと頷く。つまり、ＹＥＳと言う事である。

「そうか。なら、１つ目の質問だ。キミは僕達に話があった。そうだね？」

その質問に頷く白雪。

「では２つ目。キミはその話を僕達に話したいと思っているが、話の内容が恥ずかしいせいで・・・上手く伝える事ができない」

頬を染め・・・またまた頷く白雪。
それを見た刻桃は・・・・

「だったら俺・・・・席を外すぜ？こういう場合は女同士の方が都合いいだろ？」

気を利かせて言う。

「え!?あ・・・・ち、違うの。違うんです。コウさんだけじゃなくて、刻桃君にも聞いてもらいたいの。でも・・・・その・・・・やっぱり恥ずかしくて・・・・あうぅ・・・・」

縮こまる白雪を見て・・・・

「・・・・わかった。それならいい方法がある」

紅龍は黒い革手袋を右手側だけ外す。

「白雪。キミは僕達に伝えたい事だけを、頭の中で思い描きたまえ。僕の忍法なら・・・・それだけで読み調べる事ができる」

「よみ・・・しらべ?」

そして両目を閉じ、右手の平で・・・・戸惑った様子の白雪の額に振れる。

「真庭忍法・・・・記憶辿り!」

瞬間、紅龍の右手がほんの少しだけ発光。
額に触れられた白雪はと言うと、目をパチクリとさせ、『え・・・・・あれ？』と、何をされたかわかっていないような、あっけに取られたような声を出す。

「読み調べ完了・・・と言うより、ワザワザ読み調べるまでもなかったと言うのが率直な感想かな」

紅龍はどうでもよさそうに言い、右手に革手袋を嵌める。

「あの・・・コウさんは・・・私に何をしたの？」

白雪が聞くと、刻桃が答える。

「驚くかもだけど・・・紅龍は、お前の『表層意識』を読み取ったんだ」

「ひょうそういしき・・・え！？それじゃ・・・・・」

「ああ。一種の『探魂法』のようなものだ。紅龍は、その手で触れた相手の心を・・・魂を読む事ができるんだ」

「流石に何でもかんでも・・・と言うわけにはいかないが、情報収集をする上でこの忍法はかなり役に立っている」

最後に、術者である紅龍による補足説明。
そして、その証明と言わんばかりに、読み調べた事を話し始める。

「白雪。キミはキンジとアリアの関係がどうなってるのか不安で仕方ない。そうだね？」

「・・・・うん」

「だからキンジを見張ったりしたけど、詳しいことがわかるハズもなく・・・・一緒に暮らしているモモちゃんに詳細を訪ねようと考えたものの、そんな機会もなく、勇気も出ずで、ストーキングを続ける結果となってしまった。これで間違いはないかい？」

「・・・・・・・・はい」

「そして、以上の事から・・・・」

ここで紅龍は・・・・核心を突く。

「キミはキンジを心から愛している」

「・・・・・・・っ！？」

「だからこそ、キミは彼に近づく女性が許せないし、全力を持って排除しようという危ない考えを抱いてしまうのだろう」

「・・・・・・・・・」

真っ赤になり、無言で頷く白雪。
表層意識だけとはいえ、心を覗かれた事もそうだが、生徒の模範たるべき生徒会長がストーキングなど・・・軽く不祥事物の行為。
他人に見られたくない・・・話すつもりもなかったマイナス要素まで露見してしまった事で、白雪の表情がどん底のように沈むが・・・

「まぁ・・・いいんじゃないのかい？それでも」

「・・・・・え？」

「キミはキンジを愛している。だから必然的に、今現在彼の最も近くにいるアリアを邪魔に思ってしまう。それは別に恥ずべき事じゃない」

紅龍は・・・さらに言葉を続ける。

「いけない事だとわかってはいても、自分ではどうしようもない黒い感情。誰かを押しのけてでも、意中の異性を手に入れたいという欲望。僕に言わせれば・・・それこそが人間として当たり前の本能。否定する理由なんかどこにもないさ」

「・・・・コウさん」

白雪は顔を上げる。

「でも、私、コウさんに酷い事を・・・・」

「それは・・・確かに、僕に斬りかかってこられた時は頭に来たし、許せないとも思ったよ。だけど・・・・キミと僕はよく似ている。愛のために戦える存在に・・・悪い者はいないさ」

フッ・・・と微笑する紅龍。
白雪は瞳を潤ませ・・・紅龍の両手を握る。

紅龍もまた、それを快く受け入れる。

2度に渡る交戦を経て、女同士の友情が成立した瞬間だった。

「・・・・そんじゃ、俺はこの辺で」

この場にいる意味を感じなくなった刻桃は、紅龍に新しい友達ができた事を適当に祝福しつつ、屋上の出入り口に向かうが・・・・

「待ちたまえ、モモちゃん！」

紅龍に腕を掴まれる。

「さっきまでの話を聞いてなかったのかい？それで・・・・キンジとアリアは一体どうなっているんだい？どこまで行ってるのか・・・・是非とも聞いてみたい物なんだけど」

「・・・・随分抽象的な問い詰め方だな。もっとハッキリ言ってくれ」

「それは出来ないさ。僕も一応は花も恥じらう乙女である事だし・・・初心な白雪を放心状態にさせるわけにもいかないから、単刀直入はあえて避けて聞いているんだよ。でも、どうしてもわからないと言うなら・・・・・」

ここで、紅龍は刻桃の耳元に近づき、『ヒソヒソヒソ・・・・・』と、軽く耳打ちをする。

それを一言一句、全て聞いた刻桃は、顔をしかめ・・・・

「・・・・・それなら全否定だ。あの2人、夜は普通に寝てるだけだぜ」

「ほぅ？でも、キミ達が同じ部屋で寝ているのは紛れもない事実なのだろう？キミが眠っている間に、2人がこっそり情事に耽っているいると言う可能性は・・・・全くないと言い切れるのかい？」

「切れる」

言い切る刻桃。

それには理由があった。

刻桃達が生活しているあの部屋は・・・元々は四人部屋。故に、寝室には2段ベッドが2基あり、４人全員が同じ部屋で寝られるようになっている。

まず、アリアが2段ベッド1基を丸々乗っ取り、主にその上段を使用。隣にある2段ベッドの上段は刻桃が使い、その下段・・・つまり、アリアから最も離れた位置を、キンジが使用していた。

キンジは、自らがヒステリアモードになってしまうような事は、極力避ける傾向にある。

アリアもまた、ついこないだ『子供を作る仕組み』を知ったばかり。

そんな2人が、刻桃も一緒に眠ってる部屋で・・・文章にするのもヤバい『あんなことやこんなこと』をするだろうか。

答えは・・・『否』しかあり得ない。

同じ部屋で眠ってはいても、出来るだけ遠くで眠ろうとする所からも・・・それは間違いなかった。

それでも紅龍は納得せず、手袋を嵌めたままとはいえ追求する気満々。

刻桃としては、これ以上いくら問い詰められても有益な情報は出せなかったこともあり・・・いっそのこと『記憶辿り』を使ってもらった方が楽かもしれないと考えてしまう。

そんな時・・・・

《あー・・・あー・・・生徒の呼び出しをー・・・・する。2年A組、情報科、真庭・・・紅龍。2年B組、超能力捜査研究科、星伽白雪・・・。至急ぅー・・・教務科まで来いやぁ》

やけに気だるそうな女の声が、校内放送で紅龍と白雪を呼び出した。
それを聞いた刻桃は、白雪と紅龍の顔を交互に見る。

「白雪がなにやったかは・・・・ともかくとして」

白雪が呼び出される事に驚いたりしない。
ついこないだバーサーカーモードを目撃したことからも、他の場所でも似たような暴走行為を起こしてしまい、それがバレて呼び出されでもしたのだろう・・・と、適当に推測する。

「紅龍、お前・・・・転入初日から一体何やらかしたんだ？」

紅龍が何かやったとしても、これも本来なら驚く事じゃない。
しかし、転入初日から教師に目を付けられるとなれば話は別だ。
ジトっとした目で尋ねる刻桃を見て、紅龍は肩をすくめて見せる。

「フッ・・・・。心当たりなら、いつでもどこでも無数に存在するさ。武偵として、忍者としても、多少なりとも恨みを買っている自信はあるからね」

「俺も偉そうなことは言えないけど・・・・・自慢する事じゃねぇだろ」

「そこは置いておきたまえ。じゃあ・・・行こうか、白雪。先生を長々と待たせるわけにもいかないからね」

「え・・・・う、うん」

「それじゃモモちゃん、僕達はもう行くよ。いつまで時間取られるかわからない事だし、明日・・・・また会おう」

紅龍は白雪の腕を掴み、屋上の出入り口へと向かう。

「了解。また明日な」

刻桃は軽く手を振り、2人の姿を見送った。
教師に呼び出されたとは言っても、ここは生徒同士のドンパチが日常的に行われる武偵高。あの2人がなんらかの不祥事を起こした事がバレたのだとしても、せいぜい厳重注意をされるか、何らかのペナルティを喰らうかで終わる話。

だが・・・そうは問屋がおろさなかった。

この呼び出しこそが、紅龍と白雪だけでなく・・・アリアが強引に首を突っ込み、芋蔓式に刻桃とキンジが巻き込まれる事となる大事件の始まりになろうとは・・・今はまだ、誰も知らなかった。

第２７話（後書き）

今回は連続投稿。明日朝は番外編を投稿します。

特別番外編・キャラ紹介と裏話

名前／鑢刻桃（ヤスリ・コクトウ）

性別／男

年齢／１７歳

身長／１７０ｃｍ

所属／虚刀流　東京武偵高校２年Ａ組

専門科目／探偵科

武偵ランク／Ｂ

武装・玉鋼製手甲付きオープンフィンガーグローブ　煙玉などの忍具　炎刀・銃（リボルバー）→絶刀・鉋

趣味／鍛錬　カードゲーム

ＣＶ／鈴村健一

本作の主人公。虚刀流十九代目当主予定。

銀髪と褐色の肌といった日本人離れした外見を持つ。腰の所まである長い銀髪はうなじの所で束ねており、前髪は若干逆立っている。

比較的細身ではあるが、１０年以上の修行によって鋼の如く鍛え上げられた肉体を持ち、『動きやすい』という理由から、武偵高の防弾制服以外では防弾仕様の着流しを身に纏っている。
普段はクールで落ち着いた雰囲気の性格だが、その胸の奥には熱い心を秘めており、好戦的で情熱的な面もあり、欲望や本能に忠実な面も合わせ持つ。

紅龍とは幼馴染の関係にあり、『モモちゃん』と呼ばれている。

当初はただの髪留めで髪を束ねていたが、峰理子に『炎刀・銃』を奪われてからは、彼女のリボンを使って髪を束ねている。

虚刀流初代当主・鑢一根から代々受け継がれてきた『呪い』のせいで武器を扱う才能がマイナスにまで達しており、武器を手にするだけで極端に弱くなってしまう。それ故なのか・・・無意識に銃を構えると、グリップではなく銃身を持ってしまうという悪癖がある。
しかし、代を重ねるごとにある程度『呪い』は薄くなっており、包丁などの調理器具やバイクなどの乗り物、手甲や煙玉といった補助装備は問題なく使う事ができる。

名前／真庭紅龍（マニワ・コウリュウ）

性別／女

年齢／１７歳

身長／１６０ｃｍ

所属／真庭忍軍　東京武偵高校２年Ａ組

専門科目／情報科

武偵ランク／Ａ

武装／手裏剣などの忍具一式　炎刀・銃（オートマチック）

趣味／情報収集　１８禁ＰＣゲーム　アニメ鑑賞

ＣＶ／木村亜希子

真庭忍軍次期頭領候補。

赤みがかった外側にはねた茶髪をボブカットにしており、袖を切り落とした忍装束と防具代わりの鎖を身に纏う。武偵高の制服を着ている時は、両脚にのみ鎖を巻き付けている。

尊大な口調の『僕少女』ではあるが、恋愛事には敏感だったりするなど年頃の少女らしい面も見せ、それ故なのか『紅龍』という厳つい本名を嫌っており、周りの人間には自分の事を『コウ』もしくは名字で呼ぶように念を押している。

刻桃とは幼馴染の関係にあり、渋々ながらも本名で呼ぶ事を許している。

特殊な素質が必要な真庭忍法、『足軽』や『記憶辿り』等、通常１人につき１つ習得するのがやっとであるハズの忍法を複数使える他、『教科書忍法』という特殊な能力を必要としない忍法も使いこなす。また、彼女が使用する真庭忍法は、ある１つの忍法が根源となっており、『足軽』と『記憶辿り』、その他忍法（教科書忍法以外）は、すべてその１つの忍法から派生した物となっている。

名前／鑢風花（ヤスリ・カザハナ）

性別／女

年齢／？歳

身長／１６０ｃｍ

所属／虚刀流

武偵ランク／？

武装／？

趣味／？

ＣＶ／三石琴乃

虚刀流十八代目当主。

流れるような黒髪ロングヘアをうなじの所で束ねた、外見年齢２０代半ばの未婚の母。

女手一つで刻桃を育て、１０年以上に渡って虚刀流を教え込んできた。１０歳を過ぎてからは彼を連れて一緒に海外へと旅立ち、武偵としての仕事に同行させながら本格的に鍛え始める。基本的に母として刻桃のことは溺愛しているが、時には修業と称してアマゾンのジャングルや、サバンナでライオンの群れに放り出すなど・・・・師匠として容赦のない一面も持つ。

鑢一根から続く『呪い』を代々受け継いでいるため、武器を使う才能は皆無。呪いが一世代分強いせいか、道具を使う才能や料理の腕は刻桃を下回っていたりする。

結婚願望があるものの、当たりをつけている男性は特にはいない。

闇丸「この小説、連載開始してからまだ半年も経ってないのにＰＶが３０万アクセス突破。すげぇよ刀語。すげぇよ緋弾のアリア。というわけで、話の流れもキリがいいのと、３０万アクセス突破を記念して、今回はオリキャラ紹介も含めた座談会となります」

刻桃「具体的には、なにを話すんだ？」

闇丸「けいおん編でも似たような事やりましたけど、基本的にはこの作品の裏話について話したいと思います。ではまず・・・ゲストを紹介します。どうぞ！」

クロノ「仮面ライダーキバ・レプリカフォーム？こと、桜井黒乃だ。年は１９歳。それから・・・・」

デルフ《俺の名は、インテリジェンスソードのデルフリンガー様だ。しっかり覚えとけよ！》

刻桃「・・・・何でこいつらが？呼ぶなら2年分若い方のクロノを呼ぶべきだろ。ゼロ編凍結状態だろ？」

クロノ「しゃーねーだろ。俺はともかく・・・デルフはこーゆー場所じゃねーと出番全くねーんだし。それに・・・・昔の俺を呼ばなかった理由ってのも、少しはあるんだ」

刻桃「・・・・・どんなだ？」

クロノ「武器を持たない剣士と、あらゆる武器を使いこなす『ガンダールヴ』。お前と今の俺は、まさに陰と陽。対極の存在にあるって思わねーか？」

闇丸「二年前のクロノ君はガンダールヴではありませんからね。まぁとにかく、それは置いといて・・・・とりあえず、最初の裏話へ行きたいと思います！」

裏話1・主人公の名前設定。

刻桃「最初は俺の事か・・・・・・」

クロノ「ある意味お決まりだよな。俺の時もやったし。で、こいつの名前・・・・どんな基準で付けたんだ？」

闇丸「はい。まずは鑢家の子孫である事を考え、果実や植物の名を加えることは最初から決定していました。紅龍との絡み、女の子に間違えられる渾名・・・・という事で、『桃』という字を加える事は、結構すんなり決まりました」

クロノ「じゃあ・・・・『刻』は？」

闇丸「そこにはやんごとなき事情が・・・・聞きたいですか？」

刻桃「いいから、とっとと話せ」

闇丸「はい。それじゃ・・・・。元々は『鑢刻桃』ではなく、もう二つの小説の主役たる『桜井黒乃』から一文字とって、『鑢黒桃』となるハズでした。ですが、ある事情からそれを断念しました」

デルフ《おいおい、なにがどうなったらそうなったんでぇ？》

闇丸「まず、クロノの時の失敗をしないように、『黒桃』という単語をネットで検索したんです。そしたら色んなのが数多くヒットし

てしまって・・・・・」

クロノ「それで断念したのか」

闇丸「はい。キミの時も、クロノ・ハラオウンとかぶる結果になってしまいましたし」

刻桃「このサイト、なのは系ファンフィクション多いからな」

デルフ《それもしかたねーって事か。んでもよ、コクトーって『劇場版ＢＬＥＡＣＨ　地獄篇』でも同じ名前のキャラ居たよな？それはどーする気だ？》

闇丸「許容範囲と判断しました。クロノの場合も、『クロノクルセイド』や『クロノトリガー』など多少かぶってる自覚はありましたし、漢字も違う事ですから」

刻桃「いいかげんだな。で・・・・『刻』にはどういう意味が？」

闇丸「はい。『刻』は言うまでもなく『刻む』という意味が込められています。そしてそれは、虚刀流だからこそある意味ピッタリですし、クロノとの繋がりを持たせることも出来ました」

クロノ「・・・・・・・・・どの辺が？」

刻桃「・・・・『刻む』は、『物』を物理的に刻むだけじゃなく、『時』を刻むって意味でも使う。つまり・・・・」

闇丸「はい。『Ｃｈｒｏｎｏ（クロノ）』は、ギリシャ語で『時間』を意味する接頭辞。つまり、主役であるキミ達２人で、『時を刻む』という意味になるのです」

デルフ《意味深だな、おい。具体的にはどういう意味なんだ？俺はただの剣だが・・・・割と興味がわいてきたぜ？》

闇丸「・・・・・・・・・

わる物ですから・・・・あえて確定させることも出来ないんです」

デルフ《誤魔化しやがった!?》

裏話2・桃色の髪の女と、これから先。

クロノ「・・・・・・・・・」

刻桃「・・・・・・・・・」

闇丸「お2人とも・・・・・・何か思う所は?」

刻桃・クロノ「「・・・・・・・・・ぁあん!!」」

闇丸「!?」

デルフ《おーおー、2人とも殺気立ってるねぇ。桃色の髪の女がそんなに嫌いか？》

クロノ「少なくとも・・・・・好きにはなれない。前世で何かしらの因縁があったとしか思えねー！」

刻桃「同居人として妥協は出来ても、パートナーとして受け入れる事は・・・・まぁ、無理だな。キンジを尊敬するぜ。あんなガキ丸出しな我儘女とパートナーとして半年以上も付き合えるんだし。俺がパートナーだったら・・・・一日経たないうちに喧嘩別れしている自信がある。そういった意味では、お前にも頭が下がるな」

クロノ「尊敬なんかしなくていーぜ。俺とルイズだって、互いの利益のために利用し合ってる薄っぺらい間柄なんだし。まぁ、約束した手前、元の世界に帰るまでの間はあの女を命懸けで守るけどな」

刻桃「なんだかんだでいい奴だな、お前。可愛らしい彼女も出来るわけだ」

クロノ「その梓に捨てられる前に、とっとと帰らなきゃなんだよな。どんなに遅くなっても、せめて学園祭ライブまでには帰らねーと」

デルフ《がくえんさい？相棒、そこじゃ梓って嬢ちゃんが何か面白い事でもやるのか？》

クロノ「ああ。アイツが軽音部の部長になって、新しいバンドが結成されてからの初めてのライブなんだ。憂と純、それから菫に直、ついでにさわ子さん。みんながなにしてくれるか・・・・今から楽しみだ」

闇丸「嬉しそうですね。けど、二年前のキミには、もうじき大変な困難が訪れるんですよね」

クロノ「・・・・『ＢＬＡＺＩＮＧ．ＢＬＯＯＤの世界』。奏夜達の世界から戻ってから、あんま経たないうちに起こった『アレ』か」

刻桃「・・・・・何の脈絡もなく話が変わったな。一体何があったんだ？」

デルフ《俺も興味あるぜ。どうなんだ、相棒》

クロノ「・・・・・・・・・・・・・・・」

闇丸「とりあえず、書きかけの原稿とプロットがあるので、どうぞ」

デルフ《俺、この世界の文字は読めねぇぞ》

刻桃「俺が読んでやる。どれどれ・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・

閲覧完了。

刻桃「俺には家族が母上しかいないから、父親って物がイマイチわかんねぇんだけど・・・・・・・・こりゃ酷いな」

デルフ《警察って奴も、アホな貴族や憲兵と同じくらい鬱陶しいな。相棒・・・・・・ガンバ！》

クロノ「お前達の気遣いが逆に痛い。けど、俺にとってはもう終わった事だし、もう全部水に流している。だから、励ましの言葉は昔の俺にかけてやってくれ。正直・・・・・あの時はかなりへこんだ。１７年も養ってもらっておいて、俺は父さんの存在を・・・・思

いっきり全否定した」

闇丸「今も今で、書くのも滅入る鬱展開を執筆中です。後半スカッと盛り上げるつもりですけど、そこに至るまでの道が険しく長い」

刻桃「それが、１９歳のクロノが呼ばれた理由か。なんか納得。まぁ・・・・彼女さんに慰めてもらえ。俺は個人的にツインテールの女が嫌いだけど、お前の彼女さんは割と好きになれそうだ」

クロノ「・・・・・やんねーぞ。アイツは俺のだ」

刻桃「・・・・・とらねぇよ」

デルフ《おーおー、若いっていいねぇ。それより銀髪の兄ちゃん。オメェはその辺どうなんだ？》

クロノ「・・・・・俺も興味あるな。やっぱり幼馴染の忍者さん？それとも・・・・・仲が悪いのも好きのうちっつー事で、アリアか？」

刻桃「・・・・・・・・否定する。よりにもよって、アイツらとそういう関係になるなんて、ツチノコの存在と同じくらい否定してやる。それに・・・・・」

クロノ「それに・・・・・なんだよ」

刻桃「俺には・・・・・そういうの、よくわかんねぇんだ。いや、わからなくなった・・・・って言う方が正しいか。基本的に女は好きだけど、恋とか愛ってなると・・・・どうしてもな。他人の事はある程度察しがついても、自分の事となるとお手上げだ」

デルフ《・・・・・地雷ふんじまったか？》

闇丸「はい。思いっきり。ここに一応未来の設定資料（現段階版）があるので・・・・読んでみます？」

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・

閲覧完了。

デルフ《なんとまぁ・・・・・・》

クロノ「プロット読んだ事・・・・・・・・・思いっきり後悔したくなったのは、多分これが初めてだ」

刻桃「これも過ぎた事だ。流石に忘れる事は出来ねぇけど・・・・・発狂しない程度には心の整理をつけたつもりだ」

クロノ「昔は発狂してたのかよ・・・・・」

闇丸「そこはおいおい明かしていきます。まだ設定段階なので、物語の流れで変わる可能性もあるので悪しからず」

刻桃「それでもいいさ。とりあえずは・・・目先の事から片付けないとな。今度の事件の犯人、もしかしたら・・・・・もしかするかもしれないんだ。目的を達成するためにも・・・必ずとっ捕まえる！」

クロノ「俺もとっとと帰る方法を探す！」

デルフ《俺はただの剣だが・・・・相棒、お前とならどこまでだって行くぜ！》

闇丸「是非とも頑張って下さい。物語を盛り上げるためにも！」

刻桃「・・・・・お前が一番頑張れよ」

クロノ「・・・・・・入院中の身じゃんか」

闇丸「それでも容体が安定してる限りは続き書けるし、プロットも含めればストックも少しはあるので。まぁ、なんとかなるでしょう」

デルフ《そうなる事を祈っててやるよ》

闇丸「ありがとうございます。それでは、今日の所はこの辺でそろそろお開きという事で」

クロノ・刻桃・デルフ「「《じゃあな！！！》」」

おまけ

ルイズ・アリア「「あたし達の出番は!?」」

刻桃「アホな貴族に出番は無し」

ルイズ・アリア「「いま何て言った!?」」

クロノ「桃色の髪の女が2人もいて・・・・しかも同じ声でハモってる。悪夢だ」

刻桃「その割には、シャナとは仲良かったな」

クロノ「少なくともシャナは、こいつらと違ってアホみたいに無駄なプライドはなかったからだろ。なんつーか・・・・誇り高くて、

とんでもなく大きな器を持ってたっけ」

刻桃「なるほど。こいつらとは大違いだ」

ルイズ「キィィィ！もう許さない！！」

アリア「風穴あけてやる！！」

クロノ「来いよ。ガイアメモリは使わないで、真っ向から相手になってやる。行くぞ、デルフリンガー！」

デルフ《おうよ！銀髪の兄ちゃんもいいな？》

刻桃「ああ。ただしその頃には、お前達は八つ裂きになってるかもしれないけどな」

クロノ・デルフ・アリア・ルイズ「《「「な・・・・・なんでっ！？」」」》」

特別番外編・キャラ紹介と裏話（後書き）

今回は、本編とキャラ紹介を含めた番外編の、ほぼ同時更新。作中でも言われたように、未来の設定は変わる可能性があるので悪しからず。

また、出番の少ない最強のオリキャラ・・・・鑢風花については、本格的に登場した後でまた他のオリキャラと一緒にキャラ紹介やるかもです。上書き要素があれば、刻桃と紅龍も含めて。

以前描写はしましたけど、紅龍の髪型は外側にはねたボブカット。『.ｈａｃｋ』というゲームのブラッククローズ、志乃、アトリのような感じをイメージしてます。

最新巻でレギュラー化?したジーフォースこと『遠山金女』もボブカットと描写されてたため、差別化を図るためにも念を押しておきます。

さよならオーズ。そして、ハッピーバースデー!仮面ライダーフォーゼ!!

色んな意味で型破りな仮面ライダーが織りなす一年。あのフォルムはまだ違和感バリバリですけど、動けば例にもれずにカッコいいハズ。また楽しみでしかたないです。噂じゃ過去の仮面ライダーも登場とか。

第２８話

次の日の夜、キンジの部屋。

「なんで・・・・こんな事になっているんだろ」

刻桃は、台所で中華スープ用の出汁を取りつつ、チャーハンを炒めながら呟いた。

「あの・・・・ごめんなさい。キンちゃんだけじゃなくて・・・・刻桃君にも迷惑かけちゃって」

その隣では、何故か白雪が鮮やかな手付きで野菜を刻み、豚肉の下拵えを行っている。

「・・・いいさ。これがアリアの我儘だけなら、問答無用の力ずくで否定してやるとこだったけど。今回は・・・・事が事だからな。黙って協力もするさ」

「でも、『魔剣（デュランダル）』は存在してるかどうかも確かじゃないんだよ？」

「それは知ってる。けど、お前や紅龍が狙われてるってのは穏やかじゃないし、『魔剣（デュランダル）』の件は・・・俺にとっては全く無関係な話じゃないかもしれないんだ」

「・・・・・・？」

疑問符を浮かべる白雪。

何か聞きたそうにしていたが、刻桃が『この話はここまでだ。サッサと用意しちまおうぜ』と言って、夕食の用意に集中するように促す。

白雪もそれに従い、止めていた手を再び動かし始めた。

そして、テレビの前の居間では・・・・

《あ、あの・・・・初めてなので・・・・優しくしてください・・・・》

「ふふふ・・・・やっと落ちたか。どれどれ、可愛がってあげようではないか♪」

ノートパソコンの前で、不敵に笑いながら１８禁ＰＣゲームに興じる紅龍の姿があった。

一応イヤホンを装備し、ノートパソコンの液晶画面が誰の目にも入らないように気配りしてはいるが、どう考えても自称『花も恥じらう乙女』がやるようなことではない。

ベランダの窓の傍では・・・

「何やってんだアリア」

「見ればわかるでしょ。この部屋を要塞化してるのよ」

「すんなよ！」

アリアが・・・顔を引き攣らせるキンジを尻目に、警報機や赤外線探知機、簡易式トラップなどを設置して回っていた。

「何驚いてるのよ、武偵のクセに。こんなのボディーガードの基礎中の基礎でしょ？アラームをいっぱい仕掛けて、依頼人に近づく敵を見付けられるようにしておくの。ちょうどいろいろぶっ壊れたし、やりやすいわ」

「お前が、ぶっ壊したんだろ」

「ＯＫ。あとは天窓ね」

キンジの突っ込みをスルーし、アリアは次なるトラップ設置に動いていた。

一体全体何故こんな事になっているのか。

アリアが部屋を要塞化している理由と・・・・紅龍と白雪が当たり前のように居る理由。

（たしか・・・紅龍やキンジの話だと、こんな感じだっけ）

刻桃は・・・・紅龍から聞いた話を脳内で反芻する。

前の日の放課後。２人が呼び出されたのは、俗に『魔剣（デュランダル）』と呼ばれている犯罪者の暗躍が関係していた。

『魔剣』は、超能力を用いる武偵・・・『超偵』ばかりを狙う誘拐魔とされ、存在自体がデマだと言われて久しいが・・・・教務科の教師達はそう見てはいなかった。

２人を呼び出した尋問科教師・・・・綴梅子（ツヅリ・ウメコ）は、事件を未然に防ぐためにも、所属問わず高ランクとされている超偵の生徒達を呼び出しては、ボディーガードを付けるように勧めている所だった。

剣術と鬼道術の達人であり、東京武偵高の秘蔵っ子と評価される白雪。

転入したてとはいえ・・・・転入試験時、真庭忍法を併用した情報

収集能力と戦闘能力を惜しげもなく披露した事によって、Ａランクの評価を得ていた紅龍。

優秀な超偵であるが故、最も狙われる可能性が高いであろう彼女達にも、当然ボディーガードを付けるように勧めていた。

しかし紅龍は『鬱陶しいから謹んで遠慮させてもらうよ』と言い、白雪は『幼馴染の男の子のお世話をするのに、誰かがいつもそばにいると・・・その・・・』と、しどろもどろな口調で断った。だが、それで綴が納得するわけもなく、最後には『教師命令』として、強引にでもボディーガードを付けると言いだした。

特に白雪は、それを何度も断り続けてきた事もあり・・・もう崖っぷちに追い込まれた状態だった。

選択肢は２つ。首を縦に振り、ボディーガードを受け入れるか。首を横に振り、強制的にボディーガードを付けられるか。どちらにしても、『幼馴染の男の子』の世話をするには都合が悪い。

そこに・・・その時の白雪にとっては、悪魔・・・場合によっては天使とも取れる存在が天井裏のエアダクトから現れた。

――――そのボディーガード、あたしがやるわ！――――

そう。天井裏でこれまでの会話をこっそり盗み聞きしていたアリアが、キンジと一緒に颯爽登場。
本来は教務科から呼び出しを喰らった白雪の弱みを探るという・・・・貴族らしからぬ企みで忍びこんだのだが、何を思ったのか方針を変更し、白雪と紅龍のボディーガードを引き受けたのである。それも無償で・・・・２４時間体制で。

性格に難はあれど、アリアはＳランク武偵。この申し出に、綴は『ボディーガードを選ぶ手間が省けた』と提案を受け入れる気満々。
紅龍も、『面白そうだねぇ。キミが引き受けてくれると言う事は、必然的にモモちゃんも一緒なんだろう？だったら・・・僕も異論はないよ』と快諾。

だが、白雪は最後の最後まで渋った。『アリアが四六時中一緒だなんて穢らわしい』と、拒絶の意思を見せた。

これでは話しはまた振り出しに戻ってしまう。そこで紅龍は白雪に耳打ちし、ある事を入れ知恵した。

それを聞いた白雪は・・・・『条件があります』と前置きし、涙声混じりでこう叫んだ。

一一一一キンちゃんも２４時間体制で私の護衛をして！わ、私も・・

・私もキンちゃんと一緒に暮らすぅーーー！！ーーー

・・・・・というわけで、その次の日に当たる今日から。しばらくの間、紅龍と白雪もキンジの部屋で寝泊まりする事となった。普通、この手の依頼を受けた武偵は、警護対象の家に住み込むものなのだが・・・・白雪と紅龍の強い希望により、逆に彼女達がキンジの部屋へと居候する事となった。

夕食をあらかた用意をし終えると、刻桃は沈みまくっているキンジへと声を掛ける。

「災難だったな。調子はどうだ？」

「・・・・・最悪だ。全く、なんでこんな事に」

部屋を要塞化されているだけでなく、ヒステリアモード化の火種が一気に2つも増殖したことにも気が滅入っているのだろう。

「大体、お前は本当にいいのか？アリアの我儘で、イキナリ同居する事に決まって・・・・・」

「もしも気に入らなければ、アリアを八つ裂きにしてでも追い出してるよ」

「・・・お前がそれをしないって事は、何か理由でもあるのか？『魔剣』は、存在自体が疑わしいんだぞ」

「まぁな。けど・・・奴は剣の名手で、鋼すらも斬り裂く剣を持ってるって言われてる。だから、もしかしたら・・・もしかするかもしれない。そういう事だ」

「それって・・・・」

キンジの目の色が変わる。
刻桃の言い方は遠回しではあったが、言わんとする事は察しがついた。

それを追求しようとした時・・・

「キンジ、刻桃、白雪が持ち込んだ荷物もチェックしておきなさい。移動中に危険物が仕込まれたかもしれないでしょ？」

アリアの声が割って入る。

「・・・・どうするんだ？」

刻桃がキンジに聞く。

「一応は調べておくしかないだろ。風穴だらけにはされたくないからな」

キンジは渋々・・・・白雪が持ち込んだタンスの周囲をチェックするが、怪しい物はなに1つ・・・発信器すらついてない。

そして、最後に引き出しを開けると・・・・

「・・・・・っ!?」

「どうした?」

「・・・・あった・・・・危険物・・・・ダメだろこんなの」

キンジが赤くなった顔を押さえながら後ずさる。

刻桃は気になり、引き出しの中を覗き込んで見る。

そこには・・・・

「すげ・・・・黒い上にスケスケ・・・・何考えてんだ、あの女」

そう。中身は全て・・・・紐のように細く、向こう側が透けて見えるぐらい薄そうな生地の、黒い下着だった。
いつもお淑やかで慎ましい大和撫子の振りをしているくせに、バーサーカーな本性と同じで・・・こちらの方もとんでもない物を隠していたようである。

「・・・・なるほど。確かに危険物だな。お前にとってはだけど」

「い、いいから引き出しを閉めろ！目の毒だ！」

「・・・・・あいよ」

動揺するキンジを横目に、刻桃は大胆な下着が詰まった引き出しを閉めた。
そしてタンスを部屋の隅っこに追放した頃・・・・トラップの設置を終えたアリアがやってくる。

「2人とも、何サボってんのよ。真面目にやりなさい！」

「やってるよ。ついさっきも、危険物を遠ざけたところだ」

刻桃は、親指で軽くタンスを指差す。

「？・・・・・まぁ、いいわ。兎に角、やってやり過ぎるって事はないんだから、警戒を怠っちゃダメだからね」

「・・・・っていうかなぁ。なんでお前、白雪のボディーガードをやるなんて言い出したんだよ」

鼻息を荒くするアリアに、キンジが尋ねる。

「・・・『魔剣』は、あたしのママに冤罪を着せてる敵の1人なのよ。迎撃できれば、ママの刑が残り735年まで減らせるし、上手くすれば高裁への差戻審も勝ち取れるかもしれない」

「そういう事情があったのか・・・・」

キンジは、一応は納得する。
教務科の天井裏で、アリアと一緒に白雪達の会話を盗み聞きしてた時、『魔剣』の名を聞いた途端に目の色が変わった事を思い出したからだ。

「今回は白雪だけじゃなく、コウも狙われてる。刻桃も・・・当然、力を貸してくれるんでしょ？」

アリアが刻桃に聞く。

「聞くだけ野暮だろ。それに・・・この仕事は、俺にとっても有益になるかもだからな」

「・・・・どういう意味？」

「後で話してやるよ。それより・・・そろそろメシの準備が終わる。話しはその後にでもしようぜ」

話しを打ち切り、３人は食卓へと向かう。
そこには中華料理の皿が・・・中華スープや酢豚、チャーハンにエビチリ、餃子などが所狭しと並んでおり・・・・

「た、食べて、キンちゃん。全部・・・・キンちゃんのために作ったんだよ？」

白雪が前髪をせっせと整えながら懇願する。

「遅いじゃないか。３人とも早く座りたまえ。物凄く美味しいよ、白雪の料理は！」

ついさっきまでＰＣゲームをプレイしていた紅龍は、椅子に座って既に食べ始めていた。
紅龍につられて、キンジも料理・・・・試しに酢豚に箸を付け、口の中へと放り込む。

（・・・・美味い。舌をやわらかく包み込む、この芳醇な甘酢の味。いかにも酢豚の肉って肉だ）

心の中で、キンジは白雪の料理を大絶賛。

「おいしい・・・・です？」

不安げな表情の白雪が尋ねると・・・

「うまいよ」

キンジが言葉少なく返すと、さっきまで不安げだった白雪の表情がパアッと明るくなる。

「ああ・・・うれしいです・・・・あなた♪」

そして、小声で何やら呟く。

キンジは、白雪が言う『あなた』がどこのどなたの事なのだろう・・

・・と、疑問符を浮かべて少しだけ考えた。

「「・・・・・・・・・」」

だが、紅龍と刻桃は、その言葉をあえて聞かなかった事にし、あえて突っ込む事をしなかった。
答えがわかりきっている問題をあえて追求するほど、２人は愚かでも暇でもなかった。

「ねぇ、ちょっといい？」

ここでアリアが、口をはさむ。

「なんであたしの席には・・・・中華スープとチャーハンしかないのかしら？」

アリアの指摘通り、席には・・・・刻桃が作ったチャーハンと中華スープしかなく、白雪が用意した料理は漬物１つ置かれてはいなかった。

「・・・・・アリアにはこれ！」

キンジと話していた時とは対照的に・・・恐ろしいほど露骨に絶対零度の声になった白雪は、アリアの目の前に皿を置いた。
皿の上には、生の状態の・・・あまり物と思われる豚肉が乗っかっており、ご丁寧にもその上にはナイフが突き刺さっていた。
明らかに、露骨な嫌がらせである。

「文句があるならボディーガードは解任します！」

「・・・・・・・・っ！！」

そっぽを向く白雪と、悔しさのあまり歯ぎしりをするアリア。
このままでは再び乱闘になるかと思われたが・・・

「・・・・・ほらよ」

「・・・・・え？」

刻桃が、自分のエビチリを皿ごとアリアへと差し出した。

「前にも言ったかもだけど・・・俺は食事の時間に些細な争いはしたくないし、させたくもない。だから今日の所はこれで妥協して

くれ」

刻桃が言うと・・・

「モモちゃんがそうするなら、僕も・・・・・」

それに合わせて、紅龍も餃子が乗っかった皿を渡した。
さらに、2人はキンジを睨み、同時に目配りを行う。

（・・・・そ、そんな目で見るな。わかったよ）

2人の視線に耐えかね、キンジも・・・・食べ掛けではあったが、酢豚の皿をアリアへと献上した。
突然の事に、アリアは目を丸くして戸惑う。

「い・・・いいわよ、そんな今更。べ、別にあたしは・・・・食べたいとか、お腹空いたとか考えてなかったんだから・・・」

精一杯の虚勢を張るが・・・・

ぐうぅぅぅぅ・・・・・

「・・・・・・・っ！？」

身体は正直だった。

アリアは顔を赤らめながらも、『・・・お礼は言わないわよ』と、精一杯の感謝の言葉を述べ、遠慮がちに料理を・・・酢豚を摘まむ。

刻桃と紅龍は再び自分達の分を食べ始め、キンジも戦いが未然に防がれた事に対して安堵の表情を見せる。

だが・・・・

（アリアが・・・・キンちゃんの酢豚・・・・これじゃ間接・・・・キス・・・・間接キス・・・・間接キス・・・・間接キス・・・・）

ワナワナと震え、アリアへの怨念をより色濃くしてしまった白雪が・・・・心の中で呪詛の念を込めて呟き続けた事は誰も知らなかった。

第２９話

真庭忍軍。

伊賀、甲賀、風魔と並び、戦国時代から尾張時代にかけて裏世界にその名を轟かせた忍の一団。

他の里と異なっていた点といえば、彼らは暗殺を専門に請け負う忍者集団であった事と、服装が一般的な忍者のイメージとかけ離れていた事だった。覆面はしておらず、装束には袖がなく、主に防具として全身に鎖を巻いていたことが挙げられる。

彼らは『真庭忍法』と呼ばれる特異な能力を駆使し、幕府を始めとする要所からあらゆる仕事を請け負い、一時は繁栄を極めた。

だが、尾張時代の半ば頃。『天下太平』の時代の流れにより、忍者は徐々に活躍の場を奪われれていった。

極端な話し、それだけなら全ての忍軍に言える事だったのだが・・・・暗殺を専門としていた真庭忍軍は特に酷く困窮した。

貴重な忍法の伝承も危ぶまれ、時には餓死者まで出る始末。

起死回生を狙って幕府を裏切って独自の行動を起こすも、結局成果を上げる事は適わなかった。

幕府を裏切った事は完全に裏目に出る結果となり、当時の忍軍内の実力者・・・『真庭忍軍十二頭領』達は次々と落命。挙句の果てに、十二頭領の総指揮官にして真庭忍軍の実質的頭領・・・『真庭鳳凰』が乱心。その手で、生き残った同士達を何のためらいもな

く惨殺した。その鳳凰自身も、当時幕府に雇われていた剣士・・・虚刀流七代目当主・鑢七花によって斬り殺され、真庭忍軍の歴史は幕を閉じる事となった。

しかし、真庭忍軍は滅びても、真庭一族の血と忍法が完全に途絶える事はなかった。

２００年に渡る真庭忍軍の歴史の中。里の方針に背いた者、里によって捨てられた者・・・所謂『抜け忍』となった真庭忍者も少数ながら存在し、彼らも独自に子孫を成し、忍軍の血と技と忍法を後世へと伝えていた。

子孫達は自分達のルーツである真庭忍軍が滅びた事を知ると、離反後に各地に散らばっていたにもかかわらず、誰に招集を掛けられるでもなく集結。そして長きの渡る話し合いの末、彼らの手で新たに『真庭忍軍』を再編することを決定した。これが・・・現代の真庭忍軍のルーツとなったのである。

再編された真庭忍軍と、滅びた真庭忍軍の異なる点は、暗殺以外の仕事も請け負うようになった点。具体的に言えば、『何でも屋』のような形態に変化した事にあった。

現在は里はなく、山奥の村の一角に暮らす二十数人程度の少数一族となってしまったが、その忍法は代々の忍者達によって研鑽され・・・後世へと受け継がれてきた。

夕食後。

台所で刻桃と白雪が後片付けを行う中、居間では・・・・

「じゃあ、アンタって・・・・人の心が読めるの！？」

アリアが驚きながら紅龍に聞いた。

「そうさ。まぁ・・・いろいろ制約はあるけど、基本的には僕が相手の肌に直接触れる事で、表層意識を読む事ができるんだ。尋問や情報収集においても、最後の詰めを行う時は大いに役に立っている」

端的に答える紅龍。

夕食後、たまたま放送していた国民的忍者アニメを観ていたアリアは・・・・それを切っ掛けに紅龍が使用した『真庭忍法・足軽』の

事を思い出し、真庭忍軍の概要や・・・他にどのような忍法が使えるかを尋ねている所だった。
アリアにとって、紅龍とは・・・同居人にして協力者でもある刻桃のパートナー。そして今は護衛対象である彼女が、どんな戦術を使い、どんな能力を持っているか知りたがるのも・・・ある意味必然だった。

紅龍は特に嫌がるでも、隠すでもなく、忍者とは思えない口の軽さで自らの忍法について話していた。

既に見せていた『足軽』だけでなく、『記憶辿り』のことまで事細かに。

「それで・・・どんな制約があるの」

再びアリアが聞く。

「そうだね。人間の表層意識は、数秒触れるだけで読み調べられるんだけど・・・『深層意識』に関してはそう簡単にも行かないんだ」

「・・・・・？」

「人間に対して『記憶辿り』を使う場合、その人間にある程度の質問する事で、その質問の関連項目を表層意識上に持って行かせる事で読み調べるんだけど・・・・・『深層意識』は、文字通り心の最も奥深い部分にあるんだ。それを探るためには時間がかかるし・・

・場合によってはある種のキーワードが必要なのさ」

「・・・・キーワード？」

ここで、テレビを見つつ、話にも聞き耳を立てていたキンジが会話に割り込んできた。

「専門的な事は、キミ達の価値観では理解できないだろうから省くけど・・・深層意識を表層に持って行かせる一種の鍵みたいなものさ。イメージ的には、インターネットの検索サイトに単語を打ち込んで検索を掛けるようなものかな」

アリアとキンジは『『ああーーー・・・』』と声を漏らし、漠然とではあるが瞬時に理解する。

紅龍の『記憶辿り』。読み調べる『人間』とは『サーバー』や『ハードディスク』に当たり、その情報を引き出す紅龍は、『検索システム』に当たる。

検索システムなしで、サーバーやハードディスクから必要なデータを手探りで探すと膨大な時間が取られるように、紅龍が『人間』の深層意識をキーワードなしで探ると言う事は・・・それと同義である事を意味していた。

「それを差し引いても、便利と言うかなんというか・・・・情報収集や尋問にはもってこいの、とんでもない能力じゃないか」

キンジが、顔を引き攣らせながら言った。
人には・・・特に女子には知られたくない秘密を持つキンジにとっては、冷や汗物の能力でしかない。

「安心したまえ」

その心中を察したかのように、紅龍は言った。

「子供の頃の僕ならともかく、今は・・・何でもかんでも無作為に心を読み取ってしまうと言う事はない。念には念を入れて、そうならないために革手袋も常時嵌めているしね」

両手を前に出し、革手袋を見せる。
紅龍の革手袋は、刻桃の手甲付きのオープンフィンガーグローブとは異なり、手全体を覆うような作りとなっている。

「じゃあ能力的には、子供の頃より今のほうが弱くなってるって事？」

アリアが聞く。

「そうさ。だけど・・・僕はこれでよかったと思っている」

「なんでよ。どう考えても、昔の方が便利じゃない！武偵だったら・・・誰だって欲しがる能力よ。あたしだって・・・・」

そんな能力があれば、ママを救うための大きな助けになる。
アリアはそう言おうとしたのだが・・・紅龍はそれを片手で制し、顔を俯かせる。

「自慢じゃないけど、僕は・・・近代の真庭一族の中では1、2を争う才能を持った天才忍者と呼ばれている」

「それ・・・自慢にしか聞こえないわよ」

アリアが突っ込む。

「まぁ、黙って聞きたまえ。その理由の1つは・・・・僕は、生まれながらにして・・・・物心ついた頃にはもう『記憶辿り』を使えたからなんだ。それも当時は、相手に振れる事もなく、ある一定の範囲内にいる人間の表層意識が無作為に流れ込んで来たんだ」

「おいおい・・・・」

「嘘でしょ・・・・・」

キンジとアリアが息を飲む。

紅龍が言ってた事が本当なら・・・幼少時の彼女には、誰も嘘がつけなかったということ。

それが何を意味しているのか。

「当時の僕は・・・嫌な子供だったよ」

2人がそれを察する前に、紅龍は顔を若干俯かせながら語る。

「僕の力は、既に一族の皆が知っていた。でも、みんなは普通に接しているつもりでも・・・その考えは嫌でも頭の中に流れ込んできた。みんな『気味が悪い』・・・と、僕を恐れたさ。僕に本音を見透かされる事を・・・ね」

「「・・・・・・・」」

「唯一、父様だけは心から僕の事を受け入れ、愛してくれたけど・・・それを除いてしまえば、僕はいつも1人だった。友達を作ろうとも思わなかった。この能力がバレた時、裏切られるのが怖かったからね。だから誰かれ構わず当たり散らして、遠ざけて、僕は一族からも・・・通っていた分校からも・・・住んでいた村からも孤立していた」

この能力のせいで、僕は・・・ずっと孤独だった。

「・・・・・・・・」

紅龍の独白を聞き、彼女の能力の利点だけを褒めちぎっていたアリアは・・・・気まずさを感じずにはいられず、黙ってしまう。
アリアも・・・ホームズ家最大の特徴がである『推理力』が遺伝しなかったせいで、イギリスに居た頃は一族から無視されて生きてきた。唯一・・・・母である神崎かなえだけは、あるがままを受け入れてくれたが、そのかなえとも離れ離れ。

才能が全くないから。才能があったからこそ。・・・という違いこそあれど、紅龍は同じ痛みを抱えていた。だからこそ、不用意に踏み込み過ぎた事を少しだけ後悔してしまう。

「ちょっと・・・・いいか？」

ここで、キンジが恐る恐る口を挟む。

「なんだい？」

「その能力・・・・いつ頃から制御できるようになったんだ？」

「そうだね、１０歳ぐらいの時にはもうなんとかなっていた。不用意に触れたりしない限りは、心の声も自然と聴こえなくなった。能力が弱くなったか・・・・はたまた僕にとって都合のいい方向に進化したか。どっちにしても、ありがたいことだったよ」

「じゃあ・・・刻桃とは何時仲良くなったんだ？今のお前の口振りだと、能力が制御出来るようになるまで友達がいなかったように聞こえたんだが。俺が刻桃からお前の名前を初めて聞いたのって、それよりももっと前だったと記憶してる」

小学校低学年ぐらいだから、だいたい８歳ぐらいの時だったか・・・・と、キンジは付け加えた。

紅龍は少しだけ考えると、『フッ・・・・』と微笑。

「モモちゃんと初めて会ったのは、僕達が８歳の頃。彼の母である風花さんが・・・・僕の住んでた村にモモちゃんを連れてきたのが始まりだった」

憂いを帯びた表情となり、キンジの質問に答える。

「当時は会うたびに喧嘩になってね。それこそ、お互い傷だらけになってしまうのは当たり前だった。血で血を洗う激戦の日々だった

よ。比喩ではなく、本気の本気で・・・ね。モモちゃんはどうだったかは知らないけど、僕は殺すつもりで戦ったっけ」

「その時は・・・どっちが勝ったの？」

「そもそも殺し合う時点でおかしいが・・・どうなったんだ？」

懐かしむように言う紅龍に、恐る恐るアリアとキンジが聞く。

１０歳に満たない子供が殺し合うような状況。なにがどうなったらそうなるのだろうか。

「あの時・・・モモちゃんは風花さんに言われて、嫌々僕に話しかけてきたんだ。当然、僕は『記憶辿り』で彼の考えを読み取ってしまったし、モモちゃん自身も特に隠そうとしてなかった。それが無性に気に入らなくて、気がついたら僕は・・・彼を鎖で縛ってタコ殴りにしてた。もう2度と近寄って来ないように、徹底的に痛めつけたよ」

「「・・・・・・・・」」

何でもないように言う紅龍だが、キンジとアリアは黙ってしまう。

鎖にしろ、タコ殴りにしろ、子供がやるにしては過激すぎる事この上ない。

しかし、紅龍は『でもね・・・』と言って、さらに言葉を続けた。

「彼はその後も風花さんと一緒に村に来てくれたんだ。そして、懲

りもせず僕に話しかけてきて、最後にはいつも交戦状態に陥った。
最初の頃は、心が読める僕の方が有利だったけど・・・そのうち苦手だった長期戦に持ち込まれたり、僕の身体能力では対応しきれない技が使われ、負けてしまう事もあったっけ」

「そんなに仲が悪かったのに、なんで今はチーム組んでられるのよ。アンタにしても・・・刻桃にしても・・・とても正気とは思えないわよ」

「アリアだって・・・最初はモモちゃんやキンジとは険悪だったって聞いているよ?それに比べたら大差はないだろう」

「それを差し引いたって・・・・異常すぎるだろ」

「・・・・まぁ。続き、行ってみようか」

キンジの突っ込みをスルーする紅龍。

「そんな関係が2年近く続いて・・・・気がついた頃には、僕にとってモモちゃんとの繋がりは、かけがえのない物になっていたんだ。たまに会うだけとはいえ・・・当時の僕は、父様以外と繋がりを持とうとしなかったからね。それに、彼は僕を恐れなかった。僕の忍法を知った上で、僕に関わり続けてくれたんだ。村の大人達が恐れ、遠ざけたこの僕と。どんなに酷い事しても、懲りずに声を掛け続けてくれた。僕の行き場のなかった怒りを・・・憎しみを・・・悲しみを・・・全力で受け止めてくれた」

「「・・・・・・・」」

本音を語り合える関係。それがどんなにかけがえのない物であるかは・・・・人には言えない事情を抱えるキンジとアリアも、漠然とではあるが理解することができた。

「・・・・アイツ、少しはいい奴だったのね。結構いい話じゃない」

アリアがうんうんと頷くが・・・キンジは顔を引き攣らせる。

「どこがだ。そこに至るまでの経緯が・・・いい話とは言えないだろ」

幼少期における殺し合い寸前の喧嘩を切っ掛けに、刻桃と紅龍の間には絆が生まれた。アリアは勝手に『いい話』として受け入れていたが、キンジのツッコミ通り、そこに至るまでの経緯は『いい話』どころか、むしろ危険極まりない物だった。

余談ではあるが・・・後に刻桃が婚約を拒否したのも、この時の経験が大きく起因していた。それを差し引いても、その後そういう意識をしないで友として、パートナーとしての関係を築いてしまったため、恋愛感情が芽生えるに至る事もなかったのである。

「まぁ、そんな事より、キミ達2人には是非とも聞いておきたい事

があるんだ」

「「・・・・・・・・？」」

キンジとアリアの反応を見て、紅龍は得意げにフフンと笑う。

「理子って女の子は・・・・モモちゃんとどういった関係なのかな？」

「「！？」」

さっきまでの会話を打ち切った上での、紅龍の詮索。

「彼女も同じクラスで、今は休学してるみたいだけど・・・・・・クラスのみんなは口を揃えて言ってたよ。モモちゃんと理子は、仲が良さそうに見えたって。それにモモちゃんが髪を束ねるのに使ってるあのリボンは、彼女の物らしいじゃないか。気にならない方がおかしいという物さ」

「・・・・刻桃は、何て言ってたんだ？」

キンジが聞く。

「聞いてもはぐらかされるばかりさ。だけど、彼女があのハイジャック事件の犯人で・・・さらに言ってしまえば、あの『アルセーヌ・リュパン』の曾孫なのだろう?モモちゃんの『炎刀・銃』を奪っていった以上、僕にとっての彼女は『敵』にカテゴライズされている。敵の情報はなるべく多く知りたい・・・と思うのは、武偵としては当たり前の事だろう?」

「ちょっと待って!なんでアンタがあの事件の犯人が理子だって知ってるのよ。まさか・・・刻桃が喋ったの!?」

息巻くアリア。

「おい・・・落ち着け、アリア!」

「黙りなさい、キンジ!こんなの落ち着いてなんかいられないわよ。確かに理子は敵だったけど・・・『少年武偵法』で、その手の情報の公開は禁止されてるじゃない。アイツは・・・刻桃はその禁忌を破ったのよ!」

アリアの言うとおりだった。

犯罪を犯した未成年の武偵の情報公開は、少年武偵法によって禁止されている。

そのやり取りは武偵同士の間でも禁忌とされ、知ることができるのは事件関係者と限られた司法関係者のみ。

故に、事件の関係者であるキンジ、アリアは、『武偵殺し』が理子

の仕業だとは誰にも言っていない。

紅龍も事件の関係者ではあるが、直接理子と戦ったわけじゃないため、本来なら知る事がない情報。彼女がそれを知っているとなれば・・・刻桃が喋った可能性が高いという事になる。

そう推測したアリアは、刻桃に対して怒りを顕わにする。

「だから落ち着けって。刻桃は理子についての事は、はぐらかしているって・・・さっきコウも言ったじゃないか。なぁ？」

「その通りさ。僕は僕で、勝手に事件の事を調べたり、モモちゃんに対して『記憶辿り』を使う事でこの答えに辿り着いたのさ。モモちゃんが口を割ってはいない以上、禁忌を侵した事にはならない」

「・・・・・あ。そっか」

紅龍の特技は情報収集能力。それを思い出したアリアは、妙に納得した上で黙ってしまう。

アリアが落ち着いたのを見計らうと、紅龍は・・・自分の両手の革手袋を、ゆっくりと外した。

「まぁ、キミ達が口を割らない・・・・もしくは割れないのなら、勝手に調べさせてもらうだけさ。さぁ、痛みは一瞬だ。僕に身を委ねたm『紅龍、そろそろ黙れ』・・・・！？」

ギョッとする紅龍。

恐る恐る振り向いた瞬間・・・

ばちこーん！

まるで脳みそが入っていないような、いい音が響いた。
後片付けを終えた刻桃が、紅龍の後頭部を手刀で叩いたのである。
因みに白雪はというと、台所でデザートの杏仁豆腐を人数分用意している所だった。

「モモちゃん・・・・・・不意打ちは卑怯だよ！？」

紅龍が涙目で睨む。
だが、刻桃はそんなことおかまいなしに、もう一度手刀を落とした。
今度は後頭部ではなく、頭頂部に。

ごおぉぉん！！

さっきよりいい響きだ。

「うう・・・・痛い・・・・・」

「・・・・・ったく。いらん事べらべら喋っただけならともかく、俺に『記憶辿り』使う事は禁止してたハズだぜ」

「それは謝るよ。けど、だからって・・・・・殴る事ないじゃないか」

「俺は刀だ。刀は所有者を選んでも、斬る相手は選ばない。次やったら・・・・本気で斬るぞ」

刻桃が睨みを利かせると・・・・紅龍は気圧され、黙らざるを得なくなる。
それを確認すると、キンジとアリアに対して『迷惑かけたな』と、謝罪の言葉を入れる。

「それに理子とは・・・大切な物を奪い、奪われた間柄でしかない。お前の考えてるような関係じゃねぇよ」

改めて理子との関係を否定するが、それを聞いた紅龍の顔は、わかりやすいほど引き攣った。

「大切な物・・・・まさか、モモちゃんの貞操を彼女が!?」

根も葉もない勝手な妄想をし、うろたえる紅龍に対して・・・・

「頭冷やせ！」

「ぎゃふん！？」

今度は刻桃の踵落としが炸裂。紅龍は意識を失い、その身を床へと沈める事となった。

第２９話（後書き）

幼少期の紅龍の『記憶辿り』。イメージとしては、『範囲の狭いマオのギアス』といったところでしょうか。
そして現在では、デカレンジャーのジャスミンと似た感じの能力となり、深層意識の検索なんかは仮面ライダーWのフィリップを参考にしてます。条件無しで心が読めたら・・・もう完全にチートですから。

明かされた近代の真庭忍軍の成り立ち。里を離反した抜け忍の子孫達で再編成されました。何処かが違えば、御側人十一人衆の真庭子々もその中の一人として名を連ねていたかもです。

次回もお楽しみに！

仮面ライダーフォーゼ、ついにスタート。

あのフォルムの酷評を覆すぐらいのストーリーの良さと、学園にはびこる個性豊かなキャラクター達。なによりあのライダーキックが印象的でした。宇宙空間で炸裂するロケットドリル宇宙キックは圧巻。地上でのロケットドリルキックも、推進力を利用することで飛び蹴り技にありがちなデメリットも解消していますし。今後の展開にも目が離せません。あの数々の都市伝説から察するに、過去のライダーの登場もほぼ確定か？

第３０話

翌日、武偵高屋上。

刻桃はアリアに連れられ、ある人物と会うために屋上へとやってきた。

因みに・・・・白雪の護衛は、依頼人本人の強い希望によって、キンジへと一任。同じく護衛対象であるはずの紅龍は、自分がいろんな意味で邪魔者だと認識した上で2人にくっついていった。

「さ、こっちよ」

アリア先導のもと、刻桃が後に続く。

「・・・・ホントにこんな所に居るのか？その・・・・狙撃科のレキって奴」

「ええ。何を考えているかよくわかんない子だけど、今の時間ならいっつもここに居るわよ。それに、この場所は今回の仕事にはかなり向いてるらしいし」

「敵が現れても狙撃しやすい・・・・・ってことか」

刻桃は立ち止まり、屋上からの景色を見渡す。

狙撃に関しては素人よりはマシ程度の知識しかなかったが、こういった場所が狙撃手に好まれるぐらいの事なら知っていた。裏路地に逃げ込まれたとしても、一流の狙撃手なら跳弾を駆使して追いこむ事も出来ると言われている。

そうこう考えているうちに、2人は屋上の隅っこへと到達。

そこには・・・・

「あっ、いた。レキ！」

アリアが・・・屋上の隅っこで体育座りをしていた少女へと声を掛けた。

青いショートカットの髪と、整った顔立ち。肩には狙撃銃・ドラグノフが掛けられており、頭には大きなヘッドホン。そして・・・何を考えているのか察する事が困難な程の無表情。

レキと呼ばれた少女は、ロボットのような正確な動作で首を動かし、刻桃へと振り向く。

「アリアさん。彼が・・・・そうなのですか？」

抑揚のない声で、レキが尋ねる。

「ええ。今回の依頼の仕事仲間で・・・・刻桃とだけは顔を合わせ

てなかったでしょ？いい機会だから連れてきたわ」

「わかりました。刻桃さん・・・・ですね？初めまして。私は狙撃科のレキといいます」

アリア仲介のもと、レキは僅かな動作でペコリとお辞儀しながら自己紹介した。

「ご丁寧にどうも。もう知ってたみたいだけど、俺の名前は鑢刻桃。学科は・・・・」

「探偵科ですね」

「・・・・アリアから聞いてたのか？」

「いえ・・・風が教えてくれました」

レキが立ち上がると、サーーーーッと風が吹き、屋上にいる3人の髪が軽く揺れる。

「風は教えてくれます。私がすべきことを。これから起こりうる事も。私はそれを受け入れ、従うだけです」

表情を変えずに淡々と言うレキの姿を見て・・・

（・・・・見てくれはいいけど、噂通りの女って感じだな）

事前にアリアやキンジから聞いていた話。そして、武偵高内でレキに対して流れていた噂を思い出す。

レキ。

ファミリーネーム不明。本人もそれを知らない。その時点で滅茶苦茶怪しい上、『無口』・『無表情』・『無感情』と三拍子揃っていることから、『ロボットレキ』という渾名で通っている。『風』と呼ばれる謎の声に従い、それを行動理念にもしていることで・・・・所謂『電波系少女』とも噂されている。

だが・・・その狙撃の技術はSランクに格付けされる程の腕を持ち、かつて『武偵殺し』・・・・理子が起こしたバスジャック事件時は、後方からキンジとアリアを援護。機関銃装備のオープンカーを停止させ、バスに仕掛けられた爆弾を狙撃で剥がすなど・・・・事件解決に大きく貢献した。

「まぁ、レキは狙撃競技の日本代表でアドシアードに出るせいでいろいろ忙しいから、『腕の時間貸し』・・・パートタイムだけどね。でも、用心するに越した事はないわ。だから声を掛けたの」

「けどよ、本来スナイパーはボディーガード向けじゃないだろ」

「わかってる。だから基本、あたしとアンタ、それからキンジの中

の誰かが常に張り付いて、白雪とコウをしっかり守るのよ！いいわね！！」

やる気満々のアリアに、刻桃は・・・・

「紅龍は仲間だ。アイツに危険が迫ってるって言うなら・・・・俺は全力で守るだけだ。刀の事を差し引いてもな」

素っ気なく答えつつも、その瞳にはある種の闘志が宿る。
だがアリアは、刻桃が発したある一言が引っ掛かった。

刀。

刻桃がその単語を口にする時は、大抵『完成形変体刀』の事を差している。

それはつまり・・・

「ねぇ、『魔剣』って、もしかして・・・・」

「・・・その話なら、場所を移動しようぜ。誰かれ構わず聞かれていい話じゃないだろ」

「・・・・そうね」

アリアと刻桃はレキに軽く手を振り、屋上を去った。
その後コンビニで桃饅を数個購入。女子寮の近くにある温室に入り、桃饅を食べながら話を再開する。

「・・・・『斬刀・鈍』？」

「そう。四季崎記紀が、『斬れ味』に主眼を置いて造った完成形変体刀十二本が一本。どんな物でも・・・例え鋼であろうと一刀両断しちまうらしい」

「それって！」

「ああ。魔剣のヤローが持ってる『何でも斬り裂く剣』ってのは、『斬刀・鈍』である可能性が高いって事だ」

刻桃の仮説を聞きながら、アリアは桃饅を食べつつフムフムと頷く。

「・・・・『魔剣』は『イ・ウー』と繋がってる。ヨロイや理子が完成形変体刀を持っていた事を考えれば、あり得ない話じゃないわね。でも・・・」

アリアは、刻桃が背負っている『絶刀・鉋』を見る。

「もしも『斬刀・鈍』で、アンタの『絶刀・鉋』を斬ろうとした場

合・・・どうなるの？」

そして、ある意味当然の疑問を口にした。『頑丈さ』と『斬れ味』。対照的な特性を備えた刀がぶつかり合った場合、一体どうなるのか。思い付きで聞いてみたにすぎなかったが、『魔剣』が『斬刀・鈍』を持っているかもしれない以上、聞いておいて損はない。

刻桃は・・・・

「実際に試してみない事には、何とも言えないけど・・・・」

と、前置き。

「あえて答えを出そうとするなら・・・その場合は、完成度の低い方が矛盾なく負けるらしい。俺の先祖が破壊する前の・・・・かつての『完成形変体刀』は、後に造られた刀の方が完成度が高かったって言われてる。そこから考えると、造られたのは『鈍』の方が後だったハズだから・・・・『鉋』が真っ二つに斬られる可能性が高い。最も、今存在している『完成形変体刀』の完成度や造られた順番は目下調査中だから・・・・この答えは予測の域を出ないけどな」

答えを出しつつも、これは結論ではない。あくまで『予測』であることもしっかり付け加える。

「アンタは・・・・それに対して、何か対抗策とか練ってるの？」

「これと言って特に」

言い切る刻桃。

「ちょっ・・・・・！？アンタ、『魔剣』に対して何も考えてないって言うの！？」

何かしらの対策を期待していたアリアは文句を言おうとするが・・・・刻桃は『まぁ落ち着け』と言って、桃饅を押し付けて黙らせる。アリアは渋々沈黙。桃饅を食べながら次の言葉を待つ。

「虚刀流ってのは、己の身体を一本の日本刀として鍛え上げる流派・・・・・ってことは知ってるよな？」

「・・・・今更でしょ」

「けど・・・・刃物を全く通さないわけじゃない」

「あ・・・・！？」

「どんなに鍛えようと、生物の硬度には限界がある。俺がどんなに『刀』になろうとしても、本質はあくまで『人間』だからな。どんなナマクラでも、刃が触れれば俺の身体は簡単に傷ついちまう。だ

ったら斬れ味の鋭さなんかあるだけ無駄だ。俺にとって『斬刀・鈍』は・・・・その辺の刀と大差はない。それなら単純に・・・・油断も過信もせず、いつも通り戦うだけだ」

刻桃の説明に・・・アリアは納得するしかなかった。

いくら自らの身体を一本の日本刀に見立てて鍛えているとはいえ、実際に刀と鍔迫り合いする事はしない。というより、出来るわけがない。

玉鋼製の手甲や防弾服があれど、刻桃が『人間』である事は変えようのない・・・覆しようのない本質。だったら、どんなに切れ味が鋭い刀が相手でも、いつも通りに虚刀流の技を行使して戦うだけだった。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・

刻桃とアリアが話していたのとほぼ同時刻。

武偵高生徒会室に設置された『アドシアード実行委員会』では、生徒会長の白雪を筆頭にアドシアードに関する会議が行われていた。

その末席には護衛であるキンジが座り、その隣は白雪と同様護衛対象である紅龍が座る。

そして紅龍はキンジに・・・会議の邪魔にならないような小声で、『魔剣』が所有している可能性が高いとされている『斬刀・鈍』の情報を話していた。

「なるほど。だから刻桃の奴・・・・何の文句も言わないでアリアに協力的だったのか」

同時刻・・・刻桃がアリアに話していたのと同様の情報を伝えた所で、キンジが納得したように言う。

「アリアは『魔剣』本人。モモちゃんは『斬刀・鈍』。狙っている対象は違えど・・・・この2つがセットになっている可能性が高いとなれば、協力し合うのはむしろ自然な流れだろう」

「だが・・・・『魔剣』は存在自体が怪しいんだぞ」

「それでも、用心するに越した事はないさ。戦国時代・・・・破壊される前の『斬刀・鈍』を所有していたのは、『宇練金閣』という居合を得意とする剣士だったのだが・・・・彼が『鈍』で斬り殺した剣士の数は、一万人を越えたt『ちょっと待て!!』・・・・!?」

キンジは、ついつい声を張り上げて突っ込んでしまった。
会議を進めていた白雪と・・・・その他大勢である生徒会役員の視線がキンジへと集中する。

「あ・・・・す、済まない。続けてくれ」

キンジが謝ると、何事もなかったかのように会議は再開された。
そして、改めて紅龍に尋ねる。今度は・・・・小声で。

「いくらなんでも一万人はおかしいだろ。だいたい、いくら鋭い斬れ味を持った刀でも、１０人も斬ってしまえば刃が血と脂と肉にまみれて使い物にならなくなるだろ」

キンジの指摘。
通常、刀は消耗品とされている。理由はキンジが言ったように、人や物を斬ってしまえば・・・斬っただけ刃に負担がかかり、刃が欠けたり錆びついたりして、その分だけ斬れ味が失われてしまうからである。

「いや、一概にそうとは言えないんだ」

紅龍はそれを真っ向から否定。

「・・・どういう意味だ？」

「そのままの意味さ。確かにキミが言うように、三流の剣士が人を斬れば、１０人も斬らないうちにその刀は使えなくなってしまう。しかし、一流の剣士は刀に負担を掛けずに斬る術を心得ている。加

えて、その剣士が『業物』クラスの刀を所有していれば・・・・それこそ半永久的に使い続ける事は理論上可能なんだよ」

「・・・・・途方もない話だな」

ナイフは使っても、刀を使わないキンジにとっては、俄かに信じ難い話だった。

「刀を傷めずに人を斬れるようになって、ようやく剣士は一流・・・と言い換えてもいいかな」

「・・・・その話が本当なら、少なくとも、四季崎記紀は刀を消耗品と考えてなかったって事だよな?そしてそれが最も極端な形で出たのが・・・・『絶刀・鉋』ってわけか」

「理解が早くて助かるよ。流石は・・・・モモちゃんやアリアが一目置くだけの事はあるね」

紅龍が微笑しながら褒めると、キンジはそっぽを向く。

来年には武偵を辞める身の上であるせいか、武偵として評価されていのは・・・・複雑な事この上なかった。

そんなこんな話しているうちに会議は終了したのだが、最後の方で・・・白雪は他の生徒会メンバーの1人から『チアの欠員が数名でたから参加してみませんか?』と頼まれた。

他のメンバーも・・・

「星伽先輩は美人だし、報道陣も好印象を持つと思います」

とか。

「武偵業界全体のイメージアップになるハズです」

など。

便乗して白雪を誘ったが・・・

「は、はい。でも、私はその・・・あくまで裏方で貢献させてください。と、とにかくっ！これで会議を終了します！」

強引に会話を打ち切り、よく通る綺麗な声で会議終了を宣言。この場は解散となった。

帰り道。

道路側から数えて紅龍、キンジ、白雪の順に夕焼けの道を並んで帰る。白雪だけは他の生徒達に『お台場に行きましょう』と誘われたが、言葉少なくそれを断って今に至る。

さっきまでの会議。キンジが見ていたことで、白雪はいつもより緊張していたそうだったが・・・キンジが『みんなに信頼されてる感じがしたよ。いいんじゃないか?』と褒めると、白雪ははにかみながら嬉しそうな顔をする。

「そういえば、お前はチアやらないのか?最後の方で・・・みんな出てくれって言ってたじゃんか」

キンジが聞くと・・・

「ダメだよ。出られないよ。チアは・・・もっと明るくてかわいい女の子の方がいいよ。私みたいに地味な女の子が出たら・・・武偵高のイメージが悪くなっちゃう」

「そんな事は無いさ。キミみたいな大和撫子なら、老若男女に幅広

く受ける事間違い無し。もう少し自信を持ちたまえ」

照れて俯く白雪を、紅龍が褒めちぎる。

「ありがと、キンちゃん、コウさん。でも、ダメなの。『魔剣』の事以前に・・・『星伽』に怒られちゃうから」

星伽。

白雪がその単語を使うときは、『星伽神社』・・・つまり、白雪の実家を意味している。

「なんで怒られるんだ。そんなことで」

キンジが尋ねるが・・・実のところ、聞くまでもなかった。
星伽神社は東京に出た白雪に色々制約をつけている。アレをしたらダメ、これをしたらダメと、何百年も続く格式を重んじる家系にはありがちな事を言われているなど・・・幼馴染としてある程度の事情は知っていたりする。

「私は・・・あまり大勢の人前に出ちゃいけないの」

「さっき生徒会の連中の誘いを断っていたのも・・・ひょっとして星伽のせいか？」

まさか違うだろう。と思いつつキンジが聞くと・・・

「うん。私は、神社と学校からは・・・・許可なく出ちゃいけないの」

「おいおい・・・」

キンジは絶句する。

いくら実家とはいえ、さすがに束縛しすぎではないか。そう思わざるを得ない。

それを察したようなタイミングで、白雪は言葉を続ける。

「星伽の巫女は、守護り巫女。生まれてから逝くまで、身も心も星伽を離るるべからず。私達は代々・・・・本当は一生星伽神社に居るべき巫女なの」

白雪が独り言のように言うと・・・・

「・・・・でも、今は義務教育とか他の神社へのご用もあるだろう。それはどうしているんだい？」

紅龍が口を挟む。

「それもあくまで最低限にしなくちゃいけないの。私が武偵高に来たのだって、すっごく、すっごく反対されたよ。だけど、外に出られないのはそれだけじゃないの」

「・・・・どういうことだい？」

「外に出て、上手くやっていく自信がないの。お買い物とか、買い食いとか、一度はしてみたいけど、私・・・・みんなが知っている事を何も知らないから。学校の話じゃないと会話が持たないし、どんな服を着ればいいのかもわからない。流行とかそういうのもわからなくて・・・・・・みんなと、当たり前の事も理解し合えないの」

白雪の独白を聞いて、キンジと紅龍は何かを言おうとするが、言葉に詰まってしまう。

「でも、いいの。私にはキンちゃんがいる。今は・・・コウさんっていう新しいお友達も出来た。キンちゃんも・・・コウさんも・・・私の事を理解してくれる。だからこれでいいの。他には何もいらないの」

「白雪・・・・」

力無く笑う白雪。しかし、キンジは納得ができなかった。
ここは東京。白雪の実家である青森の星伽神社からは遠く離れている。なのに・・・・白雪は未だに見えない何かに繋がれている。いや、見えない檻の中に閉じ込められているようにも見える。

籠の鳥。

幼少期。かつて、兄である金一と一緒に星伽神社に行った時、彼が星伽巫女達の事を哀れむように呼んでいた事を思い出す。

（これじゃ、あの頃と同じじゃないか。星伽神社から・・・・こんなにも離れているってのに）

キンジは拳を握る。

もう星伽神社を出てきたってのに、こんなにはおかしい！

そう白雪に言おうとする前に・・・

「・・・・くだらないね。バッカじゃなかろうか」

紅龍が・・・明らかな侮蔑の感情を込めてバッサリ切り捨てる。
その瞳は濁り、汚物でも見るかのように白雪を見下す。どう考えても・・・・『友』に向けるような視線ではない。

「こ、コウさん?えっと・・・・どういう意味?」

慌てた様子で白雪は声を絞り出す。

「言葉のままの意味さ。実にくだらない。キミの家庭の事情もそうだが・・・・なによりおかしいのは、僕が『キミの事を理解してる』って思われてるところさ。ちゃんちゃらおかしいよ」

「でも、コウさんは・・・・」

「確かに、キミは僕とよく似ている。キミに共感した部分もある。だけど、モモちゃんの言葉を借りるなら・・・・今の僕は、あの時の感情を『否定』するよ。キミと僕はやっぱり違う」

次の瞬間、紅龍は・・・・鋭い視線で白雪を睨む。

「僕は・・・・自分の全てを『運命』と決めつけ、何もしないうちから諦めるような奴は大っ嫌いだ!」

そして、プイっとそっぽを向く。

突然事実上の絶交を宣告された白雪は、今にも泣き出しそうな顔になる。キンジも・・・・言いたい事があったハズなのに、言葉が出てこない。

真っ赤な夕焼けに照らされる中・・・・まるで時が止まってしまったかのように、3人は立ちつくし続けた。

第３０話（後書き）

次回は、残念な忍者こと、風魔陽菜が一足早く登場です。

第３１話

夕焼けに照らされる学園島。

武偵高校舎から寮までの道のりを、刻桃とアリアが並んで歩いていた。

話も一区切りつき、桃饅も食べ終わったことで・・・後は帰りながら話す事にしたのである。

紅龍がキンジに話していたように、刻桃もまた・・・アリアに『斬刀・鈍』の詳細情報を伝えきった時。

「・・・『宇練金閣』と『一万人斬り』。それが『斬刀・鈍』の力なのね」

全てを聞き終えた時の、アリアの第一声がそれだった。

「・・・割と簡単に信じるんだな。疑ってくるとばかり思ってたけど」

刻桃は意外そうに言う。

どんな物でも斬り裂くという特性はともかくとして・・・『一万人斬り』は流石に眉唾物。

頭から否定されてもおかしくないと考えていたのだが・・・

「・・・『魔剣』は、間違いなく実在しているわ。あたしの勘ではもう近くまで迫ってる。どんな疑わしい話でも・・・『魔剣』を捕まえるためなら信じるし、備えられる事は備えられるだけ備えるつもりよ」

「具体的にはどうする気だ？」

「まずは部屋の警備システムを強化して、『魔剣』に関する情報収集。それから・・・キンジの特訓ね。あれから全然朝練できてないから、これからは奇襲形式の訓練に切り替えるわ。『魔剣』が持ってる剣は、鋼でも斬り裂くって言われてる。だとしたら、ナイフやジュラルミンの盾でも防御できない。白刃取りの訓練は・・・今こそ重要な意味を持つのよ！」

やる気満々のアリア。

刻桃は、それを頼もしく思いつつも、若干不安を覚える。

母親を一刻も早く助けたいと願うアリアはもちろんの事、刻桃も『斬刀・鈍』を蒐集・・・もしくは破壊するために『魔剣は存在する』という前提で動いている。護衛対象の1人である紅龍も、パートナーたる刻桃の方針に従っている。

だが、キンジと白雪は別だ。

キンジは『魔剣』の存在を都市伝説程度の物としか考えていない。悪く言ってしまえば、『魔剣なんか実在しない』と思い込んでいて

も不思議ではない。

そして白雪は、キンジと合法的に一緒に暮らしたいがために・・・・護衛対象としてアリアの我儘に付き合っている節が見え隠れしている。

「ま、そっち方面はお前に任せるとして・・・明日からは護衛対象1人につき、最低1人はつく事にするか。今日みたいに・・・・キンジ1人に2人も押し付けるのは酷だし、バランスも悪すぎる」

「同感だけど・・・編成はどうするの？」

「そこは俺達だけで決めていい事じゃない。キンジ達の意見も聞かないと・・・・・・ん？」

刻桃が立ち止まる。

「どうしたの・・・・・あ！？」

アリアも歩みを止める。

そして、刻桃の視線を追うように見てみると・・・・道の真ん中で立ち止まるキンジ、白雪、紅龍の姿が目に止まった。

何か話しているようだったが・・・・ここからでは会話が聴こえない。

刻桃とアリアは同時に頷き合うと、３人の元に向かって歩く。

一緒に帰るために。そして、これからの方針を話し合うために。

しかし・・・・

「僕は・・・・自分の全てを『運命』と決めつけ、何もしないうちから諦めるような奴は大っ嫌いだ！」

紅龍は・・・・鋭い視線で白雪を睨み、辛辣な一言を投げつけた。

白雪は今にも泣き出しそうな顔となっており、キンジも・・・・気まずそうに立ちつくす。

明らかな異常事態。刻桃とアリアもまた・・・慌てて駆け寄る。

「ちょっと、大声なんか出して・・・・何があったのよ！キンジ、説明しなさい！」

「なんで俺が・・・・」

アリアが聞くと、キンジは目を泳がせる。

状況を把握しているとは言い難いということもあり、どこからどう話すか以前に・・・・何でこんな事になったかを考える必要があった。

だが・・・・

（・・・・ダメだ。わからん）

キンジはただでさえ鈍感な上・・・ヒステリアモード化を恐れ、これまでの人生で『女心』に関する知識を意図的に避け、取り込んでいく事をしなかった。

具体的に言ってしまえば、エロ本、エロＤＶＤはもちろんの事、恋愛系の本やテレビ番組も極力見ないようにしてきた。

おまけに、最悪の出会い方をした紅龍と白雪が、何故仲良くなったかなど・・・２人の関係に関する情報も少ない。

そんな彼に、突然怒り出した紅龍の心情を説明するなど・・・・不可能な話。

「そう難しく考える必要はないよ」

悩みまくっていたキンジに、紅龍が助け船を出す。

「キミが見聞きした事を、見たまま感じたままに説明してやればい

いさ。それじゃ・・・・行こうか、モモちゃん」

「行くって・・・・どこにだ?それより俺にも・・・・」

ちゃんと説明しろ!と、刻桃が言い出す前に・・・・

「説明ならするさ。ただし、2人っきり食事でもしながら・・・・ゆっくりじっくりとね。忘れたとは言わせないよ?この間の情報料代わりに・・・・美味しい店で何かを奢ってくれるという約束を♪」

ニヤリと・・・・得意げに笑う紅龍。

東京武偵高に転入してからまだ一週間も満たなかった頃。刻桃は紅龍に対し、『アリアに関する素性調査』という依頼を出し、報酬として『美味しい店で何かを奢る』という約束を交わした。彼女の言葉を受けて、刻桃も頭の片隅に放置したままだった約束を思い出したのである。

「そういや、まだだったな。美味い店なら一応調べてあるから・・・・そこに行くか。奢ってやる以上はちゃんと話せよな」

「キミが約束を果たしてくれるなら、僕もその約束は守ると誓おう」

「つーわけで、俺と紅龍はここで抜けさせてもらうけど・・・・いいか?」

刻桃がアリアに聞く。

「・・・・いいけど、しっかりコウの事を守るのよ」

「お前も白雪の護衛、手を抜くなよ。それから・・・・キンジもな」

「済し崩しとはいえ、一度受けた仕事だ。敵が実在していなかったとしても・・・・やり遂げてやるつもりだ」

「・・・・・・・・・」

敵が実在しなかったとしても。

キンジの言葉が一部引っ掛かったが・・・刻桃は『そっか』とだけ言って返し、紅龍と一緒にお台場方面へと向かった。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・

お台場。５階フードコース。

刻桃と紅龍は、その中の一角に存在する中華料理店・・・・『新都

城』へと入った。
武偵高生徒達の間でも『美味い』と評判の店。ガヤガヤガヤ・・・・と他の客達が賑わう中、店員によって2人用の小さなテーブルに案内される。
対面に座ってから、刻桃がメニュー表も全く見ないで『この店で一番高いメニュー』を2人分注文すると・・・・紅龍はお冷を飲みながら話を切り出した。白雪に・・・・怒鳴ってしまった理由をポツリポツリと。

「・・・・・・そっか。そんな事が」

全てを聞き終えた刻桃は、一気にお冷を飲み干す。

「呆れてくれてもいい。事実、今思い返せば、世間知らずの星伽巫女には酷な事を言ってしまったと思う。だけど・・・・僕はどうしても我慢できなかった。キンジを手に入れるためなら手段を選ばない。という危険極まりない強引さはあるのに、そのくせ籠の中から脱獄する覚悟は皆無ときてる。家や生まれ、掟を言い訳にして、何もしないうちから諦めている。彼女は・・・・か？」

「あの時のお前と同じだから・・・・・か？」

刻桃の一言に反応し、紅龍は口に含んでいた水を噴き出しそうになる。

「ゴホッ・・・ゲホッ・・・・え!?」

「強い能力持ってるクセに、自分の運命を悲観して。周りに当たり散らして孤立して。白雪は昔のお前よりはずっとマシだけど、『何もしないうちから諦めてた』・・・って点だけは同じだろ」

お前の話を聞いた限りだと・・・俺はそう感じた。と、最後に付け加える。

「あの時の僕は、何もしないうちから全てを諦めていた。この世に僕の居場所なんか無い。唯一僕を受け入れてくれる父様さえ居てくれたらそれでいい。それ以外の人間なんかいなくなってしまえばいい。そんな・・・そんな歪んだ考えを持っていた。一歩・・・ほんの一歩だけでも外に飛び出せば、世界はどこまでも広がっているというのに。それを知らないうちから諦めるなんて、もったいなさすぎるよ」

「経験者は語る・・・・か?」

「あんな歪んだ考えを持っていたせいで、キミにも・・・相当酷い事をしてしまったね」

紅龍は俯く。

幼少期。『忍法・記憶辿り』を無制限に使えたせいで、彼女は村中の大人達から恐れられ、敬遠され、嫌われ、孤立していた。
そんな病んだ時期に、風花命令で嫌々声を掛けてきた刻桃は・・・・邪魔者以外の何物でもなく、追い払うために過剰に攻撃しすぎてしまった事もある。

「そうだな。最初のうちは会うたびに半殺しにされたっけ。ありゃ痛かった・・・・・」

今でこそ何でもないように言う刻桃だが、当時は・・・・半殺しにされた屈辱が簡単に忘れられるはずもなかった。
最悪の出会い以降・・・・紅龍と会う時は本気の本気の交戦状態に陥り、一歩間違えば殺し合いに発展しかねないような危険極まりない戦いを繰り広げた。

それでも、刻桃が紅龍と関わり続けたのは・・・・彼女が自分より強かったからだ。当時は無制限に発動していた『記憶辿り』によって戦術を読まれ、『足軽』を併用した変則的な攻撃方法は、当時の刻桃を大きく苦しませた。

若くして複数の真庭忍法使える天才にして、近代の真庭忍軍で1、2を争う神童。

紅龍より強くなりたい。紅龍に勝ちたい。その想いが刻桃を駆り立て、虚刀流の修行をより一層真剣に取り組ませる切っ掛けとなった。

「よく言うよ。キミだって・・・あれから1年程度で比べ物にならないほど強くなって、同じくらい僕の事を殴ったじゃないか」

「ああ。アレはアレで、スカっとしたな。あの時はお前の事なんか・・・・うっかり斬り殺しても心が痛まないぐらい大っ嫌いだったし」

「・・・・少しはオブラートに包みたまえ」

と、言いつつも。紅龍は軽く微笑。幼少時の刻桃との出会いは、それだけ刺激的で、尚且つ心に残る大切な思い出の一つだった。当時彼女は・・・・同年代の少年少女の中では村一番の実力を持っていたにも関わらず、刻桃は彼らを凌駕する実力を持ち、天才と呼ばれた自分に喰らい付いてきた。

最初こそ『記憶辿り』によって手の内が読めた紅龍が圧勝状態だったが、1年も経つ頃には刻桃の方が基礎戦闘能力が高くなり、10歳を過ぎる頃には勝率が逆転するようになった。

ちょうどその頃、2人の関係にも変化が起こった。数年単位の不仲の末、2人はやっと『友達』になれたのである。

当時、術者本人の意思に関係なく発動していた『忍法・記憶辿り』が進化・・・・はたまた退化したことも理由の1つであったが、精

神的に病んでいた紅龍が変われたのは・・・・・どんなにぞんざいに扱っても、殴って無理矢理拷問ごっこを敢行しても、彼女と関わる事を止めなかった刻桃の存在があったからだとも言える。

彼女にとって、刻桃は・・・・親友、パートナー、元婚約者以前に、自分の閉鎖的な価値観を八つ裂きにし、広い世界へと連れ出してくれた恩人だった。

刻桃がいたからこそ紅龍は武偵になり、彼のパートナーとなった。

終わり良ければ全て良し。というのは些か都合良すぎな解釈だが、不仲な時期があったからこそ、刻桃と紅龍はお互いの存在を糧に修行に打ち込み、更なる高みを目指すことができた。

敵からライバル。ライバルから友達。友達からパートナー。

「「・・・・・・・・・」」

改めて思い返すと、なんだか感慨深い物があった。

「お待たせしたでござる！」

独特の喋り方と共に・・・店員が注文した品を2人分運んでくる。
艶やかな黒髪ポニーテールの少女だ。年の頃は刻桃や紅龍とほぼ同じくらい。間違いなくアルバイト店員だろう。

しかし、口調がどこかおかしい。

ござる口調など・・・刻桃はもちろんの事、本職が忍者である紅龍にとってもあまり馴染みがない。
ふと、刻桃はポニーテール少女の胸に付いた名札を見る。

（風魔・・・陽菜？）

書かれていた名は風魔陽菜（フウマ・ヒナ）。『風魔』と言う名に、ござる口調。ともなれば、ある事が連想される。

「なぁ、紅龍・・・」

「言いたい事はわかっているよ、モモちゃん。ここは僕に任せたまえ。店員さん、ちょっといいかな？」

紅龍は店員・・・風魔陽菜に声をかける。

「なんでござるか？」

陽菜が聞くと・・・・

「キミはもしかして・・・・忍者なのかい？」

策も何もあったものでない。直球ど真ん中ストレートな尋ね方をした。

「・・・・おい」

刻桃は呆れるしかなかった。

忍者とは・・・・諜報活動や破壊活動、暗殺など、基本的に隠密行動を得意とする集団。

つまり、彼ないし彼女達は言うまでもなく口が堅い。

この程度の質問で簡単に口を割るわけがない。刻桃はそう思ったのだが・・・・

「な、なんで・・・・なんで某が、風魔忍軍出身であることがわかったでござるか！？」

正体を見破られた事に驚き、後ずさる陽菜。

予想に反し、彼女の口は忍者とは思えないほど軽かったのである。

風魔忍軍と言えば・・・・真庭忍軍と同様、戦国時代に活躍した忍の一団。陽菜の言葉を信じるのなら・・・・彼女はその末裔という事になるのだろう。

「どうだい？モモちゃん。僕の誘導尋問は」

得意げに言う紅龍。

「どこが誘導尋問だ。こんなの、こいつがただマヌケだっただけだろ」

刻桃のダメ出しは、陽菜の心にクリティカルヒット。苦しそうに『ううっ・・・』と呻き声を漏らす。

「と、とにかくっ！」

と言って陽菜は話を逸らす。

「ご注文の品をお届けに上がったでござるよ。ささっ、どうぞ！」

そして・・・ドスン！と、重量感溢れるラーメンを２人分置き放った。

「こちらが、お２人が御所望なされた当店で一番高いメニュー・・・『壺麺』でござる！昨日からの新作メニューでござるよ！」

陽菜は得意げに言いつつ・・・ペラッと、パンフレットらしき紙を取り出す。
そこには・・・『新メニュー・壺麺！３０００円。※ただし３０分以内に完食出来たら無料！』と書かれていた。

そして陽菜は・・・いかにも忍者らしい黒い笑みを浮かべる。

「それでは３０分、只今より計測開始！はい、スタート！」

ストップウォッチを押す。
陽菜の笑みはさらに黒さを増し、『ククククク・・・・』と、声まで漏れる始末。

「ふふふ・・・さっきは不覚を取ったでござるが、あの程度で忍者をマヌケ扱いするその思い上がり・・・ここで挫いてやるでござるよ！」

本人は心の中で言ったつもりのようだが、しっかり口にも出ていた。
しかし、刻桃と紅龍は軽やかに無視を決め込み、2人同時にパチンと割り箸を割る。

そして・・・・

2人揃って麺から先に食べ始めた。

麺は水分を吸うと伸びてしまうため、この手の大食い料理を攻略する手段としては、正攻法の常套手段と言える。

だが・・・陽菜は2人が食べる様子に目を奪われる。目を離す事が出来なかった。

何故なら・・・・

「「ちゅるるるる・・・・ずずずずずず・・・・」」

全くペースを緩めることなく麺を吸い上げ、胃袋に入れていたのである。
口が動いている所を見ると、飲み込まずに一応は噛んで食べているようだったが・・・・それがまた2人の食べる速度が異常である事を思い知らされる。

そして、2人は7分も経たないうちに麺を完食。今度は具に、スー

プに取りかかる。

刻桃はスープを飲みながら具を食べ、紅龍は先にある程度具を食べてから最後にスープを飲む。

順番こそバラバラだったが・・・それからさらに8分経つ頃には、ほぼ同時のタイミングで、2人の手元にある巨大な器は見事なまでに空っぽとなった。

所要時間は・・・約15分。

驚く事に・・・刻桃と紅龍は、制限時間の半分程度で完食したのであった。

「ふぅ・・・なかなか美味かったな」

刻桃はテーブルの隅に置かれた水差しをグラスに注ぎ、口直しに水を一気に飲み干す。

「これでタダとは・・・この店も太っ腹だね。来てよかったよ」

「・・・だな。けど、結局奢らなかったな。これって約束果たした事になるのか?」

「ギリギリOKだと思うよ?もしも僕が失敗したら・・・キミが

奢ってくれたのだろう？だったら同じ事さ」

「そっか。なら、せめて・・・・・」

刻桃は、魂が抜けたかのように棒立ちする陽菜を見る。

「食後のデザートにアイス２つ・・・・・・・？」

せめてデザートだけでも奢ろうと考え、アイスをオーダー。

だが・・・・

「・・・・聞こえてるか？」

刻桃が声をかけるが、陽菜はというと・・・・

「ゆ・・・・夢でござる・・・・これは・・・・・・悪い夢でござるぅ・・・・・・」

何やらうわ言のようなものを呟き、現実逃避している真っ最中だった。

その後何を言って声を掛けても、陽菜は魂が抜けたかのように呟くだけ。結局、向こう１０分間は陽菜が正常に戻る事は無く、刻桃は

他の店員にアイスをオーダーすることになった。

余談ではあるが、それから数カ月後。この時の反省を踏まえて『新都城』店主は新メニューを開発した。

その名も、『超壺麺』。

量と値段は壺麺の２０％増し。壺麺をあっさり完食した2人組を打倒するために開発した新メニューとも言えた。

だが、その超壺麺は・・・・またしても1人の少女によって難なく攻略されるという憂き目に遭ってしまう運命にあった。

驚くべき事に、その少女は、刻桃と紅龍が壺麺攻略に要した時間よりも遥かに早く、超壺麺を攻略したのだ。

それによって店主が頭を抱えて悔しがり、陽菜が再び現実逃避してしまうのは・・・まだ誰も知らない未来の話である。

第３１話（後書き）

どうでもいい未来の余談も交えた今回。

紅龍の絶交宣言の理由と、風魔陽菜の一足早い登場。

昔話も交えて、ほのぼのお食事タイム。刻桃と紅龍は大食いという設定で。

次回は、キンジとアリアが仲違い。原作でもある意味重要な場面に、刻桃と紅龍はどんな行動に出るのか。お楽しみに！

第３２話

次の日。

「・・・・・・うぅ」

キンジは風邪をひいた。

熱は３８度前後。護衛どころか・・・・登校すらままならない状態だった。

アリアは『だらしないっ！』と、おかんむり。白雪は物凄い勢いでキンジを看病したがり、一時は自分も学校休むと言い出したが・・・・キンジに説得され、何とか登校した。

そんなわけで今・・・・・校舎までの道のりを、道路側から数えて刻桃、紅龍、アリアの順に歩いていた。因みに白雪は生徒会の用事で先に登校し、彼女の見張りはレキに一任してある。

「まったく・・・・だらしないっ。こんな時に風邪だなんて、たるんでる証拠よ！」

アリアがムスッとした顔で恨み節を吐くが・・・・

「・・・何がたるんでる証拠だよ」

刻桃が舌打ち混じりで言う。その顔は若干イライラ気味だ。

「キンジが『魔剣』の存在を疑ってるって点は、確かにたるんでるかもだけど・・・・風邪は間違いなくお前のせいだろ」

「・・・・うっ！？」

「そうだね。全く、こんな大事な時期に貴重な手駒を減らしてしまうなんて・・・・キミは本当に『魔剣』を捕まえる気があるのかい？」

「・・・・ううっ！？」

紅龍も辛辣である。

アリアは気まずそうに顔をしかめるも、次の瞬間には開き直ったかのように気を取り直す。

「あ、あるわよっ！それに・・・・アレはキンジが絶対悪い！依頼人とあんな事するなんて・・・・武偵失格！ボディーガードの禁止事項よ！」

「話聞いた限りじゃ・・・・白雪の暴走とお前の早とちりが原因だったみたいだけどな。そもそもキンジは・・・・」

「なによ・・・・」

ジトっと睨むアリア。

「・・・・・なんでもね」

だが、刻桃はそこから先を言わない。素直にあるがまま言ってしまうと、ヒステリアモードの秘密に直結する可能性があったからだ。

（まぁ、こいつがヒステリアモードの詳細情報を知らない事を考えれば・・・・・あの解釈も全くの筋違いってわけじゃないか）

つい前日の夜１０時頃。

刻桃と紅龍がお台場から帰ってきた時・・・・・２人は寮の前で、キンジとすれ違った。

何故か上半身裸の・・・・ずぶ濡れ状態で。しかも妙にぐったりとした覚束ない足取り。

一緒に部屋に戻ってみると、そこでは・・・・何故かアリアが怒り狂っており、妙に色っぽく巫女服を着崩した白雪が、部屋に帰ってきたキンジに慌てて抱きついた。

ついさっきまで外出していた刻桃と紅龍は状況が飲み込めず、一体何があったのか・・・・3人に事情を尋ねた。

アリア曰く。

――――キンジが白雪に強制猥褻を行うべく脱がそうとしていた！『仲良し』ぐらいなら大目に見るけど、依頼人とそういう関係になるのは武偵失格！――――

白雪曰く。

――――それは合意の上。私がキンちゃんに電話で呼ばれて脱衣所に入って、不公平だったから私も脱ごうとしてたの！だからアリア・・・負け惜しみはやめて！――――

キンジ曰く。

――風呂場にいたら白雪が乱入してきて・・・訳がわからないこと言って巫女服脱ぎだして・・・それを止めようとしたら・・・アリアが・・・で、暗く冷たく汚い東京湾に――

三者三様の言い分。

どこがどうなってそのような状況に陥ったかは要領得なかったが・・・刻桃は大体の事は察する事ができた。

キンジの特異体質を、この場で唯一知っていたからこそとも言える。

風呂場にいたキンジ。

どういうわけか白雪乱入。

キンジの裸を見て、白雪乱心。自分から巫女服を脱ぎ出す。

そこにタイミング悪くアリア介入。キンジが白雪を脱がそうとしてたと思い込む。

そして怒り狂って発砲。キンジをベランダに追い込み、東京湾へと突き落とした。

単純なアリアと、外見に反して肉食系な白雪。そして、キンジが『その手の事は出来ない男』という前提で考えれば、驚くほどすんなり纏める事ができる話だった。

一晩明ける頃には誤解が解けたものの、結果的にキンジは風邪でバタンキュー。

そして今に至る。

「まぁ、『土下座して謝れ！』とまでは言わねぇけど、ケジメぐらいはつけとけ。でないと、この先チームワークとかに絶対支障出るぞ？」

刻桃が忠告すると・・・・

「アンタに言われるまでもないわ。ちゃんと考えてあるんだから！」

アリアは自信満々に言うと、一枚のコピー用紙を取り出した。

見た所・・・・地図が印刷されている。

都内の一部で、上野と御徒町の中間ぐらいに赤丸印が付けられている。

「ただ謝るのもなんだか癪だから・・・・アイツのために風邪薬ぐらいは買ってあげるつもりよ」

「こんな遠くまで行くのかい？近所の薬局で済ませてもバチは当たらないと思うよ？」

紅龍が聞くと、アリアは地図を仕舞いながら答える。

「前にキンジから聞いたの。アイツ、体調崩した場合は大和化薬の『特濃葛根湯』しか飲まないって。でもそれ『アメ横』って所にしか売ってないらしいから、午前中は学校休んでこれから買いに行くつもり」

「・・・・そういや昔言ってたな。アイツ、市販の風邪薬は効きにくい体質だって」

刻桃が思い出したように言うと、アリアは刻桃と紅龍の前に出て２人の正面に立つ。

「あたしが戻るまでの間、白雪の見張りはレキに任せてあるけど・・・・アンタも念のため警戒しておきなさい。もちろん、コウの護衛も疎かにしちゃダメだからね！」

「言われるまでもねぇよ。わかったから・・・・とっとと行って来い」

「お土産に何か名物でも買って来てくれたまえ」

「遊びに行くんじゃないのよっ！」

プンスカと怒りながら、アリアはお台場方面に・・・・駅に向かって走る。

刻桃と紅龍は黙ってそれを見送りつつ・・・・校舎へと向かった。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・

またまた次の日。

アリアがアメ横まで行って買ってきた特濃葛根湯が効いたのか・・・・キンジの熱は見事なまでに下がり、まだ万全とは言わないまでも護衛が出来る程度には回復した。

そして放課後。授業が終わり、生徒会長である白雪監督の元に行われたチアダンスの練習が終わった頃。練習に参加してたアリアは『白刃取りの特訓を再開するわ！』と息巻き、キンジを探して何処か

に消えた。

そんなわけで現在。刻桃は1人で紅龍と白雪の護衛を行っていた。
正確に言えば・・・今の時間に限っては屋上からレキにも見張らせているため、2人で護衛中だった。

しかし・・・・

「あの、コウさん・・・・」

「・・・・・・つーん」

「その・・・・えっと・・・・」

「・・・・・・プイッ」

これである。

学校にいる間・・・紅龍は白雪に話しかけられても一言も話さず、プイっとそっぽを向いて無視を決め込むだけだった。

それでも白雪は、何とか仲直りしようと慎ましく・・・・それでいて積極的に話しかけるが、紅龍の方はまだその気になれないようで、白雪と目を合わせようともしなかった。

「・・・・・ったく」

刻桃はそんな2人の間で板挟みとなり、何とも言えない居心地の悪さを感じるハメになった。
幸か不幸か決戦・・・・否、血で血を洗う喧嘩になる事だけはどうにか避けられてはいるが、気まずい空気のまま行動を供にするしかなかった。

その時・・・・

よく見なれた桃色ツインテール少女が、真正面から駆けてくる。
言うまでもなくアリアである。

「おい、アリア！」

すれ違いざまに刻桃が呼び止めた。
だが・・・振り向いた彼女の表情を見るや否や、心臓のあたりがゾクリとなるのを感じた。

「お前・・・・」

今のアリアは・・・・両目を赤くして一筋の涙を流していたのである。

「・・・・っ！？」

アリアは慌てて自分の両目を拭い・・・・・

「な、なんでもないっ！！」

そのまま駆け出していった。

「刻桃・・・・君？」

「どうしたんだい？モモちゃん」

白雪と紅龍は、アリアの涙までは見えなかったようで、刻桃に尋ねてくる。

刻桃は『なんでもね』と短く言い、気を取り直して紅龍と白雪の護衛を優先させた。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・

そして夕方、キンジの部屋。

刻桃、紅龍、白雪の3人が部屋に入ると・・・・

「・・・ああ、おかえり」

ソファーに座ったキンジが声を掛ける。
病み上がりのせいもあるのだろうが・・・キンジの声にはまるで力がこもっていない。

「キンジ、お前・・・またアリアと喧嘩したのか？」

刻桃が尋ねる。少し前にすれ違ったアリアの様子から考えても、そうとしか考えられなかった。
キンジは顔を上げると・・・・

「その・・・まさかだ。だが、俺からあんな勝手な奴に謝る気なんかねぇからな！」

と、語気強く言った。

「大体、アイツは『魔剣』の名を聞いて平常心を失ってるとしか思えない。『あの件』から考えても、アリアは奴に『いてほしい』と思ってる。存在してるかさえ怪しいのにだ」

あの件・・・『神崎かなえ』の事に間違いないだろう。

「そして、その『いてほしい』が、いつの間にか『いる』って錯覚に陥ってるとしか思えない。勘だけで『間違いなくいる』とか言い切られても訳わかんねぇよ。だから言ってやった。『白雪は絶対大丈夫だから、どっか行け。アドシアード終了まで俺が守る！』・・・・って」

イライラしながらキンジが言う。
すると白雪は・・・・

「キンちゃんがアリアと喧嘩・・・・・・じゃあ、これからはキンちゃんが付きっきりでボディーガードしてくれるの？」

むしろ喜んでいるようだった。
キンジと一緒に生活する上で、言うまでもなくアリアは最も邪魔な存在。そしてどういうわけか、そのアリアとキンジが不仲に。
彼に想いを寄せる白雪としては、吉報に他ならなかった。

「いや、それは・・・・刻桃もいる事だし、これからは交代で・・・・」

キンジが、白雪と紅龍の護衛をローテーションで行う事を提案しようとすると・・・

「・・・ちょっと待て」

刻桃が待ったをかける。

「俺はアリアの所に行ってくる。紅龍も連れてくから・・・お前は白雪の護衛しててくれ。行くぞ、紅龍」

「モモちゃん!?けど・・・・・いいのかい?」

「ヤンデレ巫女のお守より、忍者のお守の方がずっと楽だからな」

「キミはさり気なく酷いね。でも・・・まあいいか。今回はキミの方針に従うとしよう」

刻桃と紅龍は玄関に向かう。
キンジは慌てた様子でソファーから立ち上がり、2人の後を追う。

「おい、待てよ・・・・」

「お前が白雪を守るんだろ?だったら、消去法で俺は紅龍の護衛に回るしかねぇだろ。『魔剣』なんかいないんだから、絶対大丈夫なんだろ?」

少しだけ棘を含んだ物言いに、キンジはうろたえる。

「しかし・・・・」

「男の二言はみっともないよ？自分の言葉には責任を持ちたまえ」

紅龍も素っ気なく言い放ち、刻桃の後に続く。
それでもキンジは呼び止めるが・・・・2人はそれを無視。部屋を出ていった。

「で、モモちゃん。アリアがどこにいるか・・・・心当たりはあるのかい？」

「なければあんなこと言わねぇよ。多分・・・・アイツなら知ってるだろ」

刻桃は携帯電話を取り出し、電話帳で番号を呼び出す。
アリア経由で手に入れた・・・・今回の仕事仲間の番号を。

女子寮、レキの部屋。

そこは・・・・見事なまでに何もない部屋だった。

テレビやパソコンはおろか、冷蔵庫や電子レンジといった家電、ベッドも・・・タンスも・・・・カーペットや畳さえ存在しない空間。

部屋の主であるレキは、壁に背を向けて体育座りしていた。

ドラグノフ狙撃銃を杖のように抱き、すぐ手に届く範囲には、コンビニで調達したであろう・・・・未開封のカロリーメイトが複数種転がっている。

そんな彼女の眼前には・・・・

「ムグモグ・・・・パクパク・・・・」

口一杯に桃饅を頬張るアリアの姿があった。
無言で、黙々と、それでいてイライラしながら桃饅を食べ続ける。

ガチャッ！

「！？」

呼び鈴も鳴らないのに、突然ドアの開く音がした。
アリアが振り向くと、そこには・・・・

「・・・・よう」

刻桃と。

「モモちゃんの読み・・・・当たったね」

「刻桃・・・・・それにコウ！？」

コンビニの袋を持った紅龍の姿があった。
2人の姿を見るや否や、アリアはギロリと睨みを利かせる。

「なんでアンタ達がここに来るのよ。ここは・・・・」

「レキの部屋・・・だろ?ついさっき電話で許可取ったから、お前に文句を言われる筋合いはない」

刻桃は携帯電話を取り出す。

「!?」

アリアは慌てた容姿でレキを見る。
するとレキは、小さく・・・それでいて確かにコクリと頷き、携帯電話を見せた。

「レキ・・・アンタが教えたの!?」

「刻桃さんは今回の仕事仲間です。アリアさんが依頼人の元から離れてしまった以上、適度な情報交換は必須だと判断しました」

「・・・・・・っ!?」

淡々と言い放つレキに、アリアはグゥの音も出ない。
刻桃と紅龍は部屋に上がり込むと、部屋の中央で腰を下ろしてアリアと目を合わせる。

「さて、アリア。単刀直入に聞くけど・・・・キンジと何があった？」

「・・・・・・・・っ！？」

刻桃が話を切り出すと・・・・アリアは顔を歪めて立ち上がり、ガバメントを向ける。

「刻桃うるさいっ！アンタになんか・・・・・関係ないでしょ！」

「脅してるつもりなら無駄だぜ。そんな震えた手で発砲しても、俺には当たらねぇよ」

「・・・・・・・っ！？」

刻桃が指摘する通り、アリアのガバメントを握る手は、両方ともガクガクと震えている。
これ以上脅しても無駄だと判断したアリアは、ホルスターにガバメントを収納。不機嫌そうに腰を下ろす。

「キンジが・・・・キンジが悪いのよ」

そして、ポツリポツリと話し始める。

「アイツがあたしの事・・・・パートナーのクセに全く信じてくれないから。理解してくれないから」

声に嗚咽が混じる。

「みんな、あたしの事なんかわかってくれないんだ。みんながあたしの事を、先走りの、独り決めの、弾丸娘・・・・『ホームズ家の欠陥品』って呼ぶ」

拳を硬く握りしめ、身体を小さく震わせる。

「あたしにはわかるの！『魔剣』はいる！白雪とコウには危険が迫ってる！でも、あたしにはそれを上手く・・・・曾お爺様みたいに論理的に説明できない。だからみんな、あたしを信じてくれない。こんなにあたしが言ってるのに・・・・・パートナーのキンジも信じてくれない」

最後には涙目になって、床に拳を打ちつける。

アリアの悲痛な叫び。

誰も自分の事を信じてくれない。理解してくれない。認めてくれない。

酷い時は爪弾きにされて、孤立して、1人で戦う事を余儀なくされる。

味方も仲間もいない孤独な戦い。

それがどんなに辛く、厳しい物なのか。

幼少期。村の大人から疎外された経験を持つ紅龍は、グッと拳を握る。壁を背に偵行く座りしたままのレキは、相変わらず無表情のだんまり状態だったが・・・・アリア達から目を離さず、凝視し続ける。

だが・・・・

「お前・・・・・・・・」

全てを聞き終えた上で、刻桃が発した一言は・・・・

「・・・・・・バカか？」

溶岩さえも氷りつかせかねないほどの・・・・・・絶対零度の辛辣な一言だった。

第３３話

「お前・・・・・・・バカか？」

全てを聞き終えた上で刻桃が発した一言は、溶岩さえも氷りつかせかねないほどの・・・・・絶対零度の辛辣な一言だった。
紅龍は驚いた様子で刻桃を見るも、当の刻桃は全く顔色を変えずにアリアを見続ける。
そのアリアはというと・・・・

「アンタ・・・・あたしを怒らせたいの？」

背中から日本刀を抜刀。怒りと憎しみが入り混じった顔で刻桃を睨み、その首筋に日本刀の切っ先を突きつける。

「そんなにあたしを怒らせて楽しい？どうせアンタも・・・・心の中で大笑いしてるんでしょ！！あたしがパートナーに信じてもらえない・・・・パートナーにも見放された大マヌケだって！」

怒鳴るアリア。
だが、刻桃は眉１つ動かそうとしない。それどころか・・・・

「はぁ・・・・」

小さく溜息をついた。
とてもじゃないが、急所を捉えられた者の反応とは言えなかった。

それが癇に障ったのか・・・・アリアは刀を引っ込め、刻桃に向かって素早く蹴りを放った。
技も型もあったものではない。力と怒りと感情任せに放った、ただの蹴り。普通に考えれば、刻桃にそんな適当な蹴りが当たるハズがない。

避けられるか、防御されるか、カウンターで返り討ちにされるのが関の山である。

だが・・・・

ドスン！

アリアの蹴りは刻桃の顔面に直撃。

「くっ・・・・・・ってぇ・・・・」

その衝撃によって、何もない床に仰向けに倒れる。

「モモちゃんっ！？」

紅龍は目を見開き、慌てて刻桃を抱き起こす。
座ったままのレキも、ほんの少しだけ表情を変化させる。どうやら・・・一応は驚いていたようである。

「嘘・・・・」

しかし、この場で一番驚いていたのは、蹴った本人・・・・アリアだった。
先程までとは違い、少しだけ頭が冷えた今ならわかる。

こんなのはおかしい。

いつもの刻桃なら、避けるか防御するか、カウンターを放ってくるハズ。

なのになんでこんな簡単に？あの時はさんざん手こずったのに。

訳がわからず、アリアが考えあぐねていると・・・・

「・・・・少しは頭冷えたか？」

刻桃が顔面を押さえながら言った。
その顔にはアリアの足跡がしっかり刻まれていたが、幸いにも鼻血は出ていないようである。

「なんで・・・・なんでワザと喰らったのよ。アンタなら、あの程度簡単に対応できたはずよ」

アリアが改めて尋ねる。
だが、刻桃は・・・・

「・・・・・・・・・2年だ」

アリアの意とは異なる答えを返す。

「・・・・なによ。なにが2年なのよ」

「俺は、今のパートナ・・・・紅龍と友達になるまで、それだけの時間がかかった」

「・・・・・・・・・？」

「それどころか、僕達は出会ってから半年以上マトモな会話もしなかったね。当時は、目を合わせた瞬間交戦状態に陥ってしまったから」

紅龍が補足する。

「そんでもって、正式にパートナー契約を交わしたのは、友達になってから3年後。俺と紅龍が13の時だった」

「・・・・・結局、何が言いたいのよ」

「・・・・・まだわかんないのか」

刻桃がアリアを睨む。

「俺が言いたいのは・・・・一時でも仲が悪かった奴とチーム組むって事は、本来ならそれ相応の時間を要するって事だ」

「わ、わかってるわよ。そんな事、アンタに言われるまでも・・・・・」

「いーや、わかってない。お前のそういう都合のいい考え・・・・・俺は否定するぜ?」

その視線に何処か悪寒を感じ、アリアはほんの数ｃｍだけ後ずさる。

「確かにキンジは、『魔剣』の存在を疑ってるどころか・・・・へタすれば『いない』とさえ思いこんでる。そんなアイツに問題ある事は否定しない」

「そ、そうよっ！全部キンジがわｒ『調子に乗るな。お前も相当問題あるだろ』・・・・！？」

「もしも俺だったら・・・勝手なアホ推理で勘違いして、話もロクに聞かずに東京湾に突き落とした女なんか・・・・絶対信用しない」

「でも、キンジはあたしのパートナーで・・・・」

痛い所を突かれても食い下がるアリア。

しかし、刻桃は・・・・

「そのパートナーを相変わらず奴隷扱いで、気に入らない事があればすぐに発砲。オマケに出会ってから日も浅く、まだまだ溝も健在ときてる。逆に聞きてぇよ。どうやったら、そんな危ない奴を信じられるのかを・・・・な」

バッサリ切り捨てる。

「白雪と紅龍の危機を上手く説明できない？だから信じてもらえない？それ以前の問題だ。理屈なく無条件で自分の事を信じてほしいのなら、もっと・・・・もっと単純な事から始めてみたらどうだ？」

「なによ、単純な事って。それがわからないから、あたしはこんなに・・・・」

悩んでいるというのに。

「こっから先は自分で考えろ。それでもわからないなら・・・・・所詮お前はそれまでの女だったって事だ」

「・・・・・・・・・・・・」

アリアは歯ぎしりしながら刻桃を睨む。
だが不思議と、最初顔を蹴ってしまった時のような怒りは湧いてこなかった。

そして改めて考えてみる。

パートナーとの理想的な信頼関係を。

（・・・・・・・わかんない）

しかし、キンジと出会うまでの間、1人としてパートナーがいなかったアリアには考えが浮かばない。

試しに・・・目の前にいる例を参考にしてみる。

そう、刻桃と紅龍の関係である。

2人とはそんなに付き合いが長いわけではないが、それでもパートナーとしてお互いに信頼し合い、実力を認め合っているような関係に見える。

自身が思い描く理想的なパートナー関係の1つと言えるだろう。

「・・・・・・・1つ聞いていい？」

最後の抵抗と言わんばかりに、アリアは声を絞り出す。

「答えられない事と、答えたくない事以外でいいなら」

刻桃の許可の元、改めてアリアは尋ねる。

「アンタは・・・・・なんで協力してくれるの？いくら刀の事があ

るからって、なんであたしの『魔剣はいる』って勘を信じてくれるの？」

「それこそ勘違いするな。俺は俺の目的のために、俺自身の『魔剣はいる』って直感を信じて行動してるだけだ」

アリアと大して変わらず、何とも直感的な答え。

「それに、『魔剣』が『刀』を持ってた場合・・・・紅龍と白雪だけじゃなく、俺の『刀』も狙ってくる可能性もある。つまり・・・・・」

「アンタが狙われる可能性もある・・・・・ってこと？」

「優先順位は３人中最下位だろうけどな」

隅に置いておいた『絶刀・鉋』に軽く触れながら、刻桃は皮肉まじりに言う。

「まぁとにかく・・・・これからどうする？紅龍の守りは堅くなったけど、逆に白雪の守りは手薄になっちまったわけだし」

「キンジの実力は確かなんだろうけど・・・・流石に油断してる状態ではあまり当てに出来ないからね。アリア、何か策とかは用意しているんだろうね？」

「・・・・・なんであたしに聞くのよ」

「元々それを聞き出すために、僕とモモちゃんはここに来たんだよ。キミが任務を放棄したのは策なのか、無策なのか。もしも策の内だというのなら、それはどんな策なのかを・・・・ね」

紅龍が聞くと、刻桃も同意するように頷く。
そんな2人を見て、アリアはこれまでの不機嫌さを振り払うように、ニヤリと笑う。

「当然よ。でも、それにはアンタ達の協力があった方が都合いいんだけど、2人は・・・・どうするの？」

アリアが聞くと・・・・

「策があるってなら、まずはその策ってのを聞かせろ。全ては・・・・そこからだ」

刻桃に促され・・・・アリアは自らの作戦を話し始めた。

アリア立案の作戦。

それは、白雪の護衛の手をワザと手薄にする事によって、『魔剣』をあぶり出すというもの。

護衛が始まってから今日までに調べた情報（大部分紅龍提供）によれば、『魔剣』は剣の達人であるのと同時に『イ・ウー』の中でも指折りの策士とのこと。

敵が複数いる場合は、まず距離を置いて観察。敵の戦力を分析した上で上手く分断し、1対1で片付けようとする。これが『魔剣』の基本的な戦術パターン。

そんな奴が厳重な警備体制の中で、危険を冒して白雪と紅龍を狙ってくるだろうか。

答えは『否』しかあり得ない。

それならこちら側でワザと穴を用意し、そこに誘い込んで一気に捕らえる。

幸いにも・・・現在、『仲間割れ』という自然な形で『穴』は用意出来た。

あとは『魔剣』が動きだすのを待つだけ。

残る問題は・・・・

「・・・『魔剣』だけじゃなく、キンジにも感づかれないように、白雪を見張る・・・・・か。誰がその役をやるんだ？」

刻桃が聞くと・・・・ガチャッと、金属音が軽く響いた。

レキがドラグノフを掲げて、『私がやります』と視線だけで訴えていた。

「確かに、レキなら適任か。となると、俺とアリアの役目は・・・・今までと大して変わらないってことか」

「そうよ。コウと、ついでにアンタの『鉋』を守りつつ、引き続き『魔剣』の情報収集・・・ってところね。でも・・・・あの・・・・・あとその・・・・」

「・・・・なんだ？」

刻桃が聞き返すが・・・・アリアは顔を俯かせ、目を泳がせながらゴニョゴニョゴニョと呟くばかり。

その隙に、紅龍はアリアへとツツツーと接近。その手に触れた。

ただし、愛用の革手袋はしっかりと外した状態で。

瞬間、パチッ・・・と少しだけ発光。

アリアは驚いたように飛び上がり、いつの間にか接近していた紅龍を見る。

すると紅龍はニヤニヤ笑いながら・・・ついさっき、読み調べたばかりのアリアの表層意識を読み上げる。

「・・・『3人とも、あたしを信じてくれてありがとう。それと刻桃、さっきは蹴ったりしてゴメン』・・・だってさ。モモちゃん、許してあげたらどうだい？」

「蹴られた事に関しては、許すも何もないだろ。結局の所、避けなかったのは・・・俺の責任なんだし」

「そうかい。キミがそれでいいなら・・・僕はもう何も言わないさ」

満足気に微笑む紅龍。

だが、アリアのはらわたは煮え滾っていた。心を覗かれ・・・しかも照れくさくて言えなかった事まで暴露された事で、頭には熱い血流が一気に上昇。

「コウ！アンタ・・・・よっくも覗いたわねっ！」

すぐさまガバメントを抜いて威嚇する。

「ほんの意趣返しだと思いたまえ。例えモモちゃんが許しても、僕も許すかどうかは・・・・どう考えても別問題だからねぇ」

「・・・・・・・っ!!」

得意げに笑う紅龍。アリアは、少しは自分が悪い事を自覚しているのだろうか・・・紅龍を睨む事はしても、発砲までは踏み止まっている。

刻桃は騒がしい2人から離れ、レキの隣に腰を下ろす。

「騒がせて悪かったな」

「いえ。仕事仲間として、ある程度の情報共有は必要な事です。それを怠るという事は・・・任務遂行にも支障が出ます」

刻桃が謝罪すると、レキは淡々と答える。

「そっか。まぁ・・・これは手土産と騒がせたお詫びってことで、とっといてくれ」

刻桃は・・・・紅龍持参のコンビニ袋をレキに渡す。

中身は、レキの主食であるカロリーメイトの詰め合わせ。

手ぶらではなんだという事で、紅龍がレキの部屋を尋ねる前に購入しておいた物だった。

袋の中身を確認すると、レキは『ありがとうございます』とお礼を言い、中からカロリーメイトを取り出して食べ始める。

そして・・・・

「どうぞ」

刻桃にもカロリーメイトを1本だけ渡した。

「ん？・・・・ありがと」

「いえ」

刻桃とレキはカロリーメイトを齧りながら、相変わらず騒がしく言い争うアリアと紅龍（実際はアリアが噛みつき、紅龍は軽くあしらってるだけ）の姿を眺め続けた。

それから数日間。

キンジが白雪の護衛を行う中、刻桃、アリア、レキの3人もまた、紅龍を護衛しつつ白雪の行動を見張った。
白雪の見張りは主にレキが担当。元々彼女はキンジと仲間割れしたわけでも、依頼を放棄したわけではないので、両方の橋渡し役という意味でも適任だった。

紅龍はというと、刻桃とアリアが交代で護衛に付くことになった。
そして現在・・・・紅龍はアリアに護衛されながら、情報科のパソコンルームで『魔剣』の情報収集を行っていた。
手慣れた手付きでキーボードを叩き、ディスプレイにはあらゆるウインドウが現れては消え、消えては現れ、必要な情報を絞り込んでいく。

「ふぅ・・・・・」

パソコンに向かってから数時間後。
結局有益かつ真新しい情報は得られず、紅龍は溜息をつく

「やっぱり・・・・・ダメだったの？」

隣の椅子に腰掛けるアリアが聞く。

「簡単に出てくるわけないとは思ってたけど・・・・・ここまで新しい情報が何も出ないと流石に気が滅入るよ。『存在さえも疑われている』という前情報は、流石に伊達じゃないね」

試しに各国の武偵局のコンピューターをハッキングし、『魔剣』が起こしたとされる事件の調査資料を引き摺り出してみたが、出てきたのは真偽の怪しい眉唾物の情報ばかり。新規の情報は皆無同然だった。

「この手の資料は、手掛かりが少ないせいで捜査員がいい加減に片付けてしまった可能性が高い。これ以上は調べるだけ無駄さ。それより・・・少し息抜きでもしないかい？」

「いいけど・・・・・どこに行く気よ」

「さぁね。とりあえず・・・何かおいしい物でも食べに行こうか」

紅龍はパソコンの電源を落とし、アリアと一緒に情報科を後にした。

第３３話（後書き）

次回は紅龍とアリアの会話。そしてついに事件発生します。・・・・・長かった。

状態は、ここのところ安定していたり、苦しかったり。
自由な生活や、食生活、美味い物が美味いと感じる事がどんなに幸福か。身に沁みてます。

グリードほどではないにしても、満たされない苦しみというのは結構辛いものです。

１０月に入り、新番組が続々スタート。

携帯の録画機能があったおかげで、観られた分を軽くレビュー。

ＧＡＲＯ
映画やパチンコにもなった人気シリーズの続編。
黄金騎士牙狼の新たな戦いと、さらに進化したであろう特撮やアクションに期待が高まっています。

バクマン
第二期。もう1人の天才マンガ家、平丸一也がレギュラーで登場。
ラッコ11号の登場も期待。

WORKING!!
こちらも第二期。変わり物揃いのファミレスを舞台にしたコメディ。
山田の兄など、新規キャラも登場。

僕は友達が少ない
エア友達。ここ最近ではかなり刺激的な意味合いの新単語です。

ハンター×ハンター
日本テレビでリニューアルにアニメ化。原作でのキメラアント編が
色々ハードだっただけに、あの頃が滅茶苦茶懐かしい。

第３４話

学園島の外に位置するオープンカフェ。

紅龍とアリアはその一画を陣取ってケーキを注文。年頃の少女らしく、満面の笑みを浮かべながら舌鼓を打つ。
ケーキを食べ終えると、最後のシメにブレンドコーヒーを注文。チビチビと飲みながら2人は他愛のない話に花を咲かせる。

とはいっても、その会話内容は・・・武偵としてこれまで関わってきた事件がどうの、愛用する武装がこうのなど、年頃の少女にしては何とも物騒な物だった。

そんな物騒な話題が一区切りついた頃・・・・

「ねぇ、コウ。１つ・・・・聞いてもいい？」

アリアが遠慮がちに言う。
紅龍は・・・・

「構わないよ。なんだい？」

店員にコーヒーのおかわりを頼みつつ、肯定の意を示す。

「こないだ刻桃が言ってた事なんだけど・・・・アレってどういう意味なの？」

「アレとは・・・・・・？」

聞き返しつつも、紅龍には大体察しがついた。

――――理屈なく無条件で自分の事を信じてほしいのなら、もっと・・・・もっと単純な事から始めてみたらどうだ？――――

ついこの間、刻桃が投げつけた言葉。

アリアは答えが見つからず、未だに悩んでいたようだった。

紅龍は少しだけ考えると・・・・

「そう難しく考える必要はないよ。どうしてもわからないというのなら・・・・そうだね、キミは・・・・なんでキンジを信じているんだい？今はパートナーであり、ルームメイトであっても、ついこの間出会ったばかりの薄っぺらい関係でしかない。なのに・・・・何故だい？」

アリアに聞き返す。
だが・・・・
「・・・・・・・・・・・・」
アリアは無言となり、答えを出す事が出来なかった。
紅龍は『やれやれ』と首を横に振りながらながら微笑。
「いいかい？キミ達に足りないのは・・・・・心と心をさらけ出した『対話』さ」
「話なら・・・・毎日してるわよ」
「でも、お互いの身の上や家庭の事情、言いにくい秘密なんかを全て暴露したわけじゃない」
「そんなの・・・・出来るわけないでしょ！！」
何故かアリアが怒鳴る。
勢いよく立ち上がり、テーブルを破壊しかねない威力でバン！と両手で叩く。
コーヒーカップの水面も大きく揺れるも、２人とも既に半分以上を

飲み干していたため、零れる事は無かった。

「事情は人それぞれだからね。それより座りたまえ。みんなの視線が集まってるよ？」

「・・・・・・・・っ！？」

今更になって恥ずかしさが込み上げてきたのが・・・・アリアは真っ赤になりながら座り直した。

「まぁ、話の続きと行こうか」

紅龍が仕切り直す。

「キミが自分の事情を全て話す気がないというのなら、それもいいさ。だけど・・・・同じように、キンジにはキンジの事情が・・・・簡単には打ち明けられない秘密や譲れない考えもある」

「そんなのわかｔ『わかってる。とは言わせないよ』・・・・！？」

アリアの言葉を容赦なく遮る。

「モモちゃんには悪いけど、この際僕の口から答えを言わせてもら

おう。自分の事を信じてほしいのなら・・・・・もう少し他人の事も信頼したまえ」

「・・・・・・・・・!?」

「キミはキンジに信じてもらいたいのに、おかしなことにキミ自身はキンジの事を心から信じているわけじゃない。それは流石に都合良すぎだろう」

「そ、そんなことないわよ。あたしはキンジを信じてる。これは本当!本当の本当!!」

「だが、当のキンジはそう思っていない。キミにあらぬ疑いをかけられて東京湾に落とされれば・・・・愛想を尽かしたくもなるだろう。それになにより・・・・いくらパートナーとして組んだとはいえ、すぐに阿吽の呼吸が可能な信頼関係を要求するのは些か無理があるだろう。キミは・・・・会ったその日から、その人物と親友になれるとでも考えているのかい?」

「・・・・・・・・・」

痛い所を突かれまくったせいで俯くアリアを、ジッと見据える。

「けど、1つだけ腑に落ちない点がある」

「なによ・・・・」

「アメ横に買いに行ったっていう、風邪薬の件はどうなったんだい

？アレがあったからキンジの熱は思ったより早く引いたのだろう？罪滅ぼしと仲直りのタイミングとしては、バッチリだったはずだよ？」

紅龍は前々から気になっていた事を、改めて尋ねてみた。
寝込んでいるキンジのために、アリアが風邪薬を買ってくる。謝罪や仲直りにはうってつけのシチュエーションだったにもかかわらず、キンジとアリアの関係はあのあたりからこじれ始めたように思っていたからだ。

「だってキンジは、あたしよりも白雪を信じてるから・・・・」

「・・・どういう意味だい？」

「それは・・・・」

アリアは気まずそうに俯きながらも・・・驚くほど素直にポツリポツリと話し始める。

キンジが風邪を引いた日。アリアは午前中は授業を休み、アメ横まで風邪薬を買いに行った。

薬が効きにくい体質のキンジにも、効果が望める数少ない薬。

そして昼休みの時間帯に学園島に帰りつき、ビニール袋に入れた状態で薬を寝室のドアの取っ手にかけてきた。

だが、それがマズかったのだろう。

あろうことかキンジは、薬を買って来てくれたのが白雪だと思い込んでしまい、白雪もその勘違いに便乗したという。

本当の事を言おうにも『貴族は自分の手柄を自慢しない』という変なプライドのせいで言い出す事も出来ず、結局その事が決定的となって仲間割れに発展。そして・・・今のこの状況に至った。

全てを聞き終えた紅龍は・・・・

「なんとまぁ・・・間が悪いとしか言いようがないね」

呆れ顔で突っ込むしかなかった。

それを自覚してる故なのか・・・アリアも黙りこんでしまう。

「白雪にも困ったものだけど・・・・とにかく、キミの勘では『魔剣』が迫ってる事は間違いないんだろう?だったら・・・・やる事は決まってる」

「・・・・・え?」

「ここでキミの主張通り『魔剣』が現れれば、キンジも自分の間違いを認めざるを得ない。己の行動を悔い改め、自然と味方に戻ってくれるだろう。キミはそれを拒んだりしない。そうだね?」

「だけど・・・・あたしの言ってる事、信じてくれると思う？」

アリアが俯きながら聞く。

キンジと仲違いした事が、心の傷となってしまったのだろう。

「それは今後のキミ達次第さ。パートナーの先輩として言わせてもらうと、年単位の付き合いがあっても理解できない事、どうにもならない事っていうのはどうしても出てきてしまうからね」

「それって・・・・刻桃の事を言ってるの？」

「モモちゃん・・・・・か。恥ずかしい話、僕もある問題に直面してしまったから」

紅龍は、自らのパートナーの事を思い浮かべる。

鑢刻桃。

最も付き合いが長い親友であり、父親に次いで最も信頼しているパートナー。

9年に及ぶ付き合いと、こっそり『記憶辿り』を使う事もあるせいか、彼の事は殆んど全て知っていた。

好きな食べ物は・・・・基本的にカレーやラーメン、ハンバーグな

ど、ファミレスで見かけるような大衆的な物の他、小豆系などの後味のいい和菓子。

好きなゲームは・・・・アクション要素の多いＲＰＧや、トレーディングカードゲーム。

好きな女の子のタイプは・・・・知る限りはこれと言って定まっていないようにみえるが、前例から考えると年上好き。

戦闘における戦術・・・・流派の特性上、基本的に前衛として戦う事が多く、後方からの援護は不向き。

それから、『イ・ウー』を、『完成形変体刀』を、『ヨロイ』を追う理由。

そして・・・・彼の罪と深い悲しみ。心が引き裂かれるようなとんでもない二択の末、失ってしまった物。

「僕じゃ微力かもしれないけど、パートナーとして救ってあげたいんだ。あの日からずっと泣いている・・・・・・彼の・・・・・・・・・・・・・・・彼の心を」

意味深な一言を呟いた。

「アイツも・・・・・なにか人に言えない事でも抱えてるの？」

アリアが顔を上げて尋ねる。

「おっと、口が滑ってしまったね。この話はオフレコで頼むよ」

「う・・・・・うん」

最後に不覚を取ってしまったものの、紅龍は話しをシメた。
紅龍の言葉の意味が気になりながらも、アリアは直感的に深入りを避けた。何の覚悟も無く聞いたら、心底後悔してしまいそうな・・・・・そんな嫌な予感を感じたからだ。

2人はコーヒーを再びおかわり。今度は無言で飲み干し、オープンカフェを後にした。

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・

そんなこんなで数日が過ぎた。
白雪には常に・・・・・とは言わないまでもキンジが護衛につき、刻桃とアリアは紅龍の護衛を交代で行いつつ、『魔剣』に関する情報収集。
本来はパートタイマーであるレキはというと、ドラグノフで白雪を見張りつつ、両者の橋渡しのような役割を押し付けられる形となった。それでも文句一つ言わずに淡々とこなす辺りは、流石はSランク武偵といったところだろう。

そして、とりあえずは何事もなく・・・・武偵高の国際競技『アドシアード』当日を迎えた。

開会式直前のメインゲート前では、刻桃と紅龍、それからキンジが、取材に訪れた報道陣の誘導を行っていた。

Eランク武偵であるキンジは言うまでもなく・・・・実力があっても刻桃と紅龍は新参者であるため、基本的にどこの競技からもお呼びは掛からず、アドシアードの間は来客や報道陣の誘導といった雑用が主だった仕事であった。

数時間後。開会式が終わった直後にはあらかた整理が終わる。休憩時間に入ると、3人はポカリを飲みながらベンチに腰をかける。

「そういやキンジ、白雪は・・・・大丈夫なのか？」

刻桃が何気なく尋ねる。

「大丈夫って・・・・なにがだよ」

「護衛に決まってるだろ。競技が始まっちまえば、狙撃競技代表のレキはそっちに回るから当然見張りから外れる。その間は・・・・・」

「それなら大丈夫だ。その時、白雪は生徒会や実行委員会の連中と一緒だ。万が一『魔剣』が現れても返り討ちになるのが落ちだし、俺1人で護衛するよりはずっと頼りになる。だから心配ない」

言い切るキンジ。

刻桃と紅龍が、キンジの楽観的な考えに不安を覚えていると・・・・

「おーーーーい！キンジーーーーー！刻桃ーーーーー！コウさーーーーん！」

武藤が、周りの注目が一身に集まる程の大声を響かせ、息を切らせながらとんでもない速度で走ってくる。
そしてキキキーーーと足でブレーキをかけるように、３人の前で立ち止まった。

「・・・・・武藤？」

キンジがあっけに取られたような声を出す。

「・・・・どうした？」

刻桃が聞く。

「騒々しいよ。今頃来ても、キミの分のポカリはもう無いよ？」

紅龍に至っては若干おどけていたにもかかわらず、武藤は真剣な表情で自分の携帯電話を取り出して３人の前に掲げる。

「周知メール読まなかったのかよ。ケースD7だ！ケースD7が起きた！！」

「「「！？」」」

3人の意識が、休憩モードから一気に仕事モードに覚醒する。

ケースD・・・とは、アドシアード期間中の、東京武偵高内で事件が発生したことを意味する符丁だ。

そのうちの『D7』となると、『ただし事件であるかどうかは不明確で、連絡が行くのは一部の者のみ。保護対象者の身の安全のため、みだりに騒ぎ立ててはならない。予定通りアドシアードを継続しつつ極秘裏に解決せよ』・・・という状況を示す。

3人は同時に携帯電話を取り出すが・・・

「・・・マナーモード」

「・・・なんでドライブモードになってんだ？」

「・・・バッテリー切れ。充電サボったのがマズかったかな」

キンジ、刻桃、紅龍の携帯電話の状態。

三者三様に着信に気づかない状態だった事に、武藤は苦笑いしつつも声をひそめて詳細情報を伝える。

「星伽さんが失踪したらしい。昼過ぎから連絡が取れないみたいだ」

「し・・・・失踪！？」

キンジは慌ててメールを確認すると・・・・・武偵高からの周知メール以外にも、1件だけメールが着信していた。

白雪からだ。

その内容に・・・・キンジの血が、凍りつく。

『キンちゃんごめんね。さようなら』

これは明らかな異常事態だった。

生徒会長であり、アドシアード実行委員会責任者である白雪は、言うまでもなく責任感が強い。

自分に与えられた仕事・・・・アドシアードの仕事は閉会式まで確実にやり遂げる。そういう少女だ。

それが突然姿を消したから。元々彼女が『魔剣』のターゲットになっている可能性が高かった事もあり、武偵高も『ケースD』を発令したのだろう。

「クソッ・・・・」

とにかく手分けして探そう。そう提案した武藤と別れた後、キンジは当てもなく白雪を探して走り回る。

あとには刻桃と紅龍が続くが、2人には目もくれない。

今となっては何を言っても言い訳だ。『魔剣なんかいない方がいい』が、いつの間にか『魔剣なんかいない』に変わっていたのである。

アリアが白雪の護衛を放棄し、刻桃が紅龍の護衛に専念するようになった時点でもっと気を引き締めるべきだったというのに。

（俺が・・・最低最悪にバカだったんじゃねぇか！）

アリアの直感を信じず、喧嘩の末に追い出した。
楽観的な俺に、刻桃とコウは呆れて離れていった。
そして極めつけは・・・・白雪の信頼を裏切ってしまった事。『信じてる』と言ってくれたのに。

全力疾走の末、キンジは立ち止まる。
肩で大きく息をし、呼吸を整える。
あらかた呼吸を整えると顔を上げ、再び当てもなく手掛かりを探そうとしたが・・・

「ちょっと待て！！」

「ぐえっ・・・・・！？」

刻桃がキンジの襟首を引っ張り、それを阻んだ。

「少しは落ち着け！」

「これが落ち着いてられるか！俺がバカだったせいで白雪が危険な目に遭っちまってるかもしれないんだぞ！」

「だから・・・・・・」

刻桃は・・・・

「落ち着けって言ってんだ！！」

投げ技・・・・『菫』でキンジを投げ飛ばした。
ただし、事態が事態だけに、最低限の・・・・怪我しない程度には手加減はする。

「・・・・どうだ。少しは頭は冷えたか？」

「あ、ああ・・・・・・」

キンジは背中をさすりながら身体を起こす。

「自分のバカさ加減がわかったのは・・・・まぁいいとして。それで冷静さをなくして当てもなく突っ走るのは違うだろ」

「だが、俺がいい加減だったせいで白雪は・・・・・」

「確かに過去は変えられない。けど、未来はこれからの行動次第でいくらでも変えられる。白雪助けるためにも、全力で手掛かりを探して挽回すればいい」

「探すにしたって・・・・その手掛かりそのものがゼロなんだぞ。どうすりゃいいんだ」

キンジが聞くと・・・・

「だったら、情報科や通信科と連携しながら探せばいいさ。僕のルームメイトの美咲なら、もしかしたらもう有力な情報を持ってるかもしれないからね」

紅龍は携帯のバッテリーを交換。すぐさま友人の元に電話を掛ける。それと同時に・・・・

《～♪～♪～♪～♪～♪～♪》

キンジの携帯電話が鳴る。

液晶画面に表示されている名前は『レキ』。キンジはむしり取るよ

うに電話に出る。

《キンジさん、レキです》

「・・・・・レキ」

キンジが呟く。

刻桃は会話の内容が聴こえるよう、ツツツーとキンジの携帯に耳元を近づける。

《ケースD7だそうですね？狙撃競技のインターバルに携帯を確認しました》

「あ、ああ・・・・・」

「・・・・・・ん？」

聞き耳立てていた刻桃は、ある事に気付いた。

向こう側の雑音に混じって、『何やってるんだレキ！』とか、『世界記録目前だったのに』などという声が流れ込んでくる。

だが『ダァン！』という銃声と同時に、雑音の主は黙る。さらにもう一撃分の銃声が響くと、足音と共に雑音は遠ざかっていった。

《雑音、すいません。競技中にレーンを離れたので、私は失格になりました。それで皆さん怒ってるようでして。ですが、既に黙らせ

ましたのでご安心を》

「「・・・・・・・・・・」」

察するところ、銃撃で脅して追っ払ったのだろう。

「で、レキ。お前今どこにいるんだ？」

気を取り直してキンジが聞く。

《狙撃科棟の屋上です。ここからなら、あなたと刻桃さん、それからコウさんの姿も確認できます》

レキが答えると・・・・キンジと刻桃は、揃って北側約２ｋｍ先にある狙撃科棟の方角を向く。

《白雪さんは見当たりませんが・・・・海水の流れに違和感を感じます。第９排水溝辺りです》

人工浮島である学園島外周には２８の排水溝が存在し、雨などで不規則に入り込んだ水を排出するために使われている。

「ど、どっちだ?」

キンジが聞く。
するとレキは・・・・

《私は・・・・一発の銃弾》

意識を集中させるかのような声が返ってくる。
瞬間・・・ビシ、ビシッ、ビシッと。キンジ達から少し離れた位置のアスファルトに、なにかを点描するかのように狙撃銃の弾が傷を付けた。
出来上がったそれは・・・・全長３０ｃｍ程度の矢印だった。

《その方向です。調べてください。私は引き続き、ここから白雪さんを探します》

レキは携帯電話を切る。
彼女がいる狙撃科棟からここまでの距離は、ざっと２ｋｍ。キンジはもちろんの事、レキの狙撃技術を初めて目の当たりにした刻桃もまた・・・・驚きを隠せなかった。

「ふむ・・・・・うん、そうかい、わかったよ。ありがとう美咲」

紅龍もちょうど電話を終えた。

「キンジ、モモちゃん、聞いてくれ。今、ケースD7の連絡が届いた武偵は、教務科の指示に従い各学科が得た情報をベースに白雪を探しに行っているそうだ。それらしい場所を中心に・・・・・虱潰しにね」

だ・・・と言って、紅龍は言葉を続ける。

「美咲から得た情報によると、その『それらしい場所』の中に『第9排水溝周辺』は入っていない。つまり・・・・」

紅龍が刻桃を見る。

「この些細な違和感を知っているのは俺達だけ。だったら、行くべきなのは・・・・・」

刻桃はキンジに目配りする。

「行くぞ、第9排水溝周辺に！」

キンジ号令のもと、３人はレキが残した矢印が指し示す方向・・・・・
第９排水溝に向かった。

第３４話（後書き）

次回はいよいよバトルモード。
『魔剣』と『斬刀・鈍』。第二弾開始時からセットなってるかもしれないとしていましたが、その真相も明かされます。
そして・・・宇練金閣に次いで、あの人物が現代ではどのように語られているかも明かされます。

灼眼のシャナ完結。
思えばシャナの存在こそが、俺がラノベの世界に片足突っ込むようになった切っ掛けでした。それにラノベのメディア進出やアニメ化が進み出したのも、ちょうどあの頃だったような気がしています。
俺が知る限りはですけど。

活動報告にも書きましたが、今日から数日間、一日一話ペースで連続更新予定。ここの所安定してたので、この機会に一気に行きたいと思います。世の中、一寸先は闇なので。

第３５話

第９排水溝。

そこから流れ出る水の流れには、特に不審な点は見当たらない。
だがその蓋には、一度外した後で無理矢理繋ぎ直したような奇妙な跡が残されていた。

キンジ、刻桃、紅龍の３人は、レキの超人的な視力に感心しつつ、この排水溝がどこに繋がっているのかを武偵手帳で調べる。

「・・・・・地下倉庫（ジャンクション）！？」

キンジが呟くと同時に・・・・冷や汗を流す。
ここ東京武偵高は、隅から隅まで物騒極まりない場所。だが『地下倉庫』はそんな中でも『３大危険地域』の１つに数えられる・・・・特に危険なエリアとして知られている。

地下倉庫。その呼び名は対外用に柔らかく言い換えた物にすぎない。
そこはつまり、銃弾や爆薬が集まった・・・・いわゆる広大な火薬庫。

こうなってはもう、誰がどう考えてもマズイ状況。

3人は地下倉庫に向かうべく、そこから最も近くに位置する入口を目指す。

倉庫らしき建物に入って階段を駆け下り、地下1階の倉庫直行のエレベーター前に辿り着いた時。

「そんな・・・・・・」

キンジが悔しさに歯を食いしばる。

「予想は・・・・しとくべきだったか」

「完全に先手を打たれてしまったね」

キンジほどではないにしても、刻桃と紅龍も顔を歪める。

そう。地下倉庫直行エレベーターの出入り口は、完全に破壊されていたのである。それも鋭利な刃物で、まるで豆腐をズタズタに斬り裂いたかのようにである。

「・・・・・今から違うエレベーターに向かうのでは時間が掛かってしまう。非常用のハシゴがあるハズだから、そこから降りよう」

武偵手帳に書かれた地下倉庫の見取り図を見ながら、紅龍は言った。

キンジはコクリと頷き、先陣を切って非常用ハシゴを探す。

その時・・・・

「・・・・・!?」

「モモちゃん・・・・・どうしたんだい?」

「紅龍・・・・・少し黙っててくれ」

刻桃は・・・・ふと、不審な気配を感じた。

気のせい。そう言ってしまったらそれまで程度の薄さの気配。

だが確かに・・・・

僅かにではあったが・・・・

何がが接近してくるような感覚を・・・・直感的に感じたのである。

そしてそれは・・・・

「・・・・・・っ！？」

次の瞬間、確信に変わった。

「伏せろ！」

刻桃は、キンジと紅龍に飛び掛かり、強引に押し倒した。
イキナリ地面に叩きつけられて身体が全体的に痛む中、キンジと紅龍が文句を言おうとするが、言葉を絞り出す事は出来なかった。
何故なら・・・・

「「！？」」

さっきまで自分達が立っていた位置。正確に言えば、そこから少し先に位置する壁には、ついさっきまで存在しなかったハズの刀傷がバックリと入っていたからだ。

「刻桃に押し倒されなかったら、俺達は今頃・・・・」

「見事なまでに真っ二つ・・・・だったね」

キンジと紅龍は悪寒を感じずには居られなかった。
2人が顔を上げると、そこでは刻桃と・・・・

「よく・・・・わかったでござるな」

斬撃を繰り出したであろう人影が相対していた。

襲撃者の正体は・・・・20代前後と思われる総髪の美少年。

長い灰色の髪をポニーテールにしており、額は見事なまでに露出させている。

全身を漆黒のボディースーツで覆っており、その上に灰色のロングコートを羽織っている。

そして腰には・・・・一本の日本刀。

「ギリギリまで、気配を消して接近したハズでござるが？」

「気配は消せても、その・・・・腰に差した得物が発する奇妙な波動までは消せないだろ」

刻桃は、男が腰に差した刀を見ながら言った。

毎度そうであるように、今回もまた曖昧で・・・・気のせいだと言われてしまえばその程度のいい加減な感覚。

しかし、直接相対し、『刀』を目の前にした今では・・・・理屈抜きに感じてしまう。前情報とエレベーターの惨状から察するに、刀の名は・・・・

「お前のその刀、『斬刀・鈍』・・・・だよな？」

確認の意味を込めて刻桃が聞く。

「いかにも。この刀こそが伝説の刀工・四季崎記紀が造りし完成形変体刀十二本が一本。『斬刀・鈍』でござる」

男は誇らしげに得物の・・・・『斬刀・鈍』の名を口にした。
そして、それを聞いたキンジは、声を張り上げて男に向かって叫ぶ。

「じゃあお前が『魔剣（デュランダル）』なんだな。白雪はどこだ！」

「その質問には答えられぬが・・・・拙者自身は、『魔剣』の名を語った事は一度として無い」

男は白雪の居所を喋らず、それどころか自身が『魔剣』である事も否定した。

「そもそも、あのような者と拙者を一緒にするなど不愉快極まりない。あの者とは今回・・・・たまたま利害が一致したが故に組んだにすぎぬでござるからな」

「じゃあキミは・・・・・一体何者なんだい？」

「逆に問おう。真庭紅龍、そして・・・・・鑢刻桃。そなた達こそ、拙者のこの顔に見覚えは無いのでござるか？もしわからぬと言うなら・・・・・」

男は・・・・『斬刀・鈍』に手をかけ、居合い抜きの構えを取る。
そして、真面目な顔で・・・・・

「拙者に・・・・・ときめいてもらうでござる」

誰もが脱力しかねない奇妙な事を言い出した。
これが女を口説くためだけの台詞なら、まだ少しは決まるのだろうが・・・・・戦闘前に使う台詞としては完全に外している。

「なに言ってるんだ・・・・あいつ」

キンジは当然の如く突っ込むが、刻桃と・・・・それから紅龍までもが目を見開く。

自らの耳を疑っていたのだ。精神にも動揺が走る。

何故なら、その言葉を『決め台詞』として使用していた剣士は・・・・既に捕縛されていたはずだったからだ。

なのに、男とその剣士は何処か姿がダブり・・・・そして、重なってしまう。

「ようやく気づいたでござるか」

男はそれに目ざとく気づく。

そして刻桃を・・・・鋭く睨む。

「拙者は・・・・そなたの母親によって捕縛された『錆灰燼（サビ・カイジン）』の弟にして、尾張時代の剣聖『錆白兵（サビ・ハクヘイ）』の子孫・・・・」

フッ・・・・とキザっぽく笑いながら自らの名を堂々と口にする。

「錆（サビ）・・・・灰燕（カイエン）でござる」

錆白兵。

尾張時代半ばに活躍した幕府所属の剣士。彼が生きた時代は天下泰平の時代にも関わらず、若くして『剣聖』の称号を得た天才剣士として歴史に名を残している。
女と見まごうような総髪の美少年だったと言われており、彼が振るう『全刀流』は、空に浮かぶ太陽ですら真っ二つの出来るという触れ込みもあった。

生まれる時代を間違えた男・・・とも言われている。

戦国時代。飛騨の大乱。幕末。

彼の実力を考えれば、日本において剣士が最も輝いたと言われている戦乱の時代に生まれていても、間違いなく頂点に立った上で歴史に名を残せていただろう。

だが、そんな彼の最期には多くの謎が残った。

忠義厚い剣士の中の剣士であったにもかかわらず、彼はとある事を切っ掛けに幕府を裏切り、独自の行動を起こしたのである。
そして、それから半年も経たないうちに、『聖地・巌流島』で落命したと伝えられていた。

錆白兵が生きた時代から数えて約１００年以上前。巌流島は、『宮本武蔵』と『佐々木小次郎』が決戦を行った地として、現代でも剣士達からは四国の『清涼院護剣寺』と並ぶ聖地として崇められている。

当時、幕府に雇われていた剣士と決闘した上で敗北した事まではわかっているのだが・・・・その決闘に立ち合った者はいないとされ、必然的に詳しい公的な記録も殆んど皆無だった。

あるのは、決闘の末に錆白兵が落命したという事実と。その決闘の余波で、島の面積が元々の半分になってしまったという・・・・信じがたい現実だった。

～よい子の伝記シリーズ『錆白兵』より一部抜粋～

「キンジ、紅龍、お前達は先に地下倉庫に行け！こいつは俺が引き受ける！！」

敵は・・・錆灰燕は『斬刀・鈍』を所有している。
彼という敵が強大であることをわかった上で、刻桃は叫んだ。

「しかし・・・・」

キンジが反論しようとすると、刻桃は灰燕が破壊したエレベーターを見ながら言う。

「エレベーターがズタズタにされてるって事は、ここから先には行かせたくないって事だろ。なら、本物の『魔剣』は・・・・」

「地下倉庫にいる可能性が高くなった・・・・ってことか。だが、奴が『魔剣』の仲間なら、俺達をすんなり行かせてくれると思うか？ここは3人がかりで一気に倒すべきじゃないのか？」

「遠山の、心配には及ばぬでござるよ」

ここで、灰燕が会話に割って入る。

「あの者・・・・そなた達が『魔剣』と呼ぶ者と、拙者の目的は似て非なる物。それでも協力し合っていたのは、お互いの利害が一致していたからこそ。両者の目的が果たされつつある今・・・・これ以上の協力や肩入れをするつもりはなしでござる」

「なら、キミ達の目的・・・・・是非ともお聞かせ願いたい物だね」

「真庭の、それから鑢。そなた達なら既に気づいておるのではない

か？」

灰燕は・・・ニヤリと笑む。
そして刻桃と、彼が背負う『絶刀・鉋』を見ながらより一層鋭く睨む。

「今となっては『魔剣』の目的は周知の事実のようでござるが、拙者の目的は元々リュパン４世が所有していた・・・・その『絶刀・鉋』の奪取にある。そして鑢刻桃・・・・そなたには、鑢風花に復讐するための人質となってもらうでござる。兄者の無念を・・・・晴らすために！」

「やっぱりな。こうなってくると、狙いはあくまで俺だけ・・・・か」

刻桃はキンジと紅龍を守りように、灰燕の正面に立つ。

「キンジ！紅龍！わかったならとっとと先に行け。こいつを倒して『鈍』を奪ったら、絶対後から追いつく！」

その声に応じるかのように、紅龍はキンジに手首を掴む。

「キンジ・・・・先を急ごう。ここはモモちゃんを信じるべきだ」

「コウ!?だが・・・・・」

「キミがモモちゃんを心配するのはわかる。だが、白雪はさらに危険な状況に陥ってる可能性が高いんだ。いいかい?僕達は武偵だ。仲間と依頼人。どちらを助けるべきかは・・・もうわかっているだろう?」

「この場合、お前だって白雪と同様依頼人だろ・・・・」

「今は猫の手も・・・・依頼人の手も借りたい状況なんだろう?」

キンジは数秒ほど苦々しげに俯くが、次の瞬間には顔を上げて紅龍の手を振りほどく。

そして・・・・

「刻桃、絶対だぞ。絶対に・・・・・絶対に追いついて来い!」

キンジの願い。

口には出さずとも、紅龍の願いでもある。

それに対し、刻桃は右腕を真横に振り上げ・・・・

「極めて了解!」

サムズアップを向けた。
それを見届けると、キンジと紅龍は地下倉庫に降りるべく非常ハシゴに向かった。

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・

今回の事件の犯人・・・・『魔剣』と呼ばれている人物。そいつが所有している何でも斬り裂く剣こそが、『斬刀・鈍』。
当初の推測は若干覆される形となり、『魔剣』と呼ばれる人物と『斬刀・鈍』の所有者は、別人という結果が突き付けられた。

だとすれば、『魔剣』が持っている剣はなんなのか。そもそも持っているのか。

しかし、どちらにしても、やる事は変わらない。『斬刀・鈍』の所有者と『魔剣』が別人であったとしても、彼らが組んでいる以上は捕縛の対象でしかない。

非常ハシゴを伝い、キンジと紅龍は地下2階、3階、4階と降りていく。

現在の服装が制服である都合上、紅龍が先に降り、それに続いてキンジが降りる形になっている。

「リュパンに続いて、今度はあの錆白兵の子孫か。なぁ、コウ。聞いても・・・・いいか？」

「なんだい？」

「さっきの・・・・・錆の子孫。お前や刻桃とはどういう関係なんだ？」

ついさっきから気になっていた事を、キンジは下にいる紅龍を見ながら尋ねる。

「無関係だよ。僕はもちろんの事、多分モモちゃんも彼とは初めて会ったハズだ。けど・・・・彼の兄、『錆灰燼』の実力ならよく知っている。それこそ嫌という程ね」

「風花さんが、奴の兄さんを捕まえたって話だが・・・・・」

「事情なんか簡単なものさ。彼もまたとんでもない犯罪者であり、さらに言ってしまえば・・・・完成形変体刀の所有者だったんだ」

「前に話してた・・・・『針』って刀を持ってた奴か？」

「そうさ。彼が持っていたのは『薄刀・針』。四季崎記紀が『薄さ』

と『軽さ』に主眼を置いて造りし完成形変体刀の一本」

「・・・・・どんな刀なんだ？」

恐る恐るキンジが聞く。

「形状としては通常の日本刀を保ってはいるのだが・・・・この刀もまた、普通とは大きくかけ離れているんだ」

紅龍は、直接目にした事がある『針』の優美さを思い出しながら答える。

「その刀身は向こう側が透けて見え、目を凝らさないと見えないほどに薄く、それ故に美しい。その構造上、剣筋をずらさずに完全な軌跡を描いて斬りつけなければ、刀そのものが壊れてしまうぐらい扱いが難しい刀。まさに、一流の剣士のためにのみ造られた刀と言えるだろう」

「そんな刀、戦いには不向きだろ。鑑賞用ならともかくだが・・・・」

「僕やモモちゃんも、キミと同じような事を考えていたよ。そう・・・・あの日まではね」

紅龍は、約3年前・・・・とある南海の孤島で行われた戦いを思い

出す。

当時・・・錆灰燼は、刀剣を主体に戦う武偵を専門に狙う戦闘狂として、その悪名を轟かせていた。

かたっぱしから名のある武偵に果たし状を送りつけ、己の実力を誇示するかのように次々と斬殺。その果たし状を逆手にとり、大勢で待ち伏せして灰燼を捕縛しようとした武偵も居たが・・・それでも力及ばず、誰も生きて帰ってはこなかった。

彼はその頃には既に『薄刀・針』を所持しており、『持つと人を斬ってみたくなる』という『刀の毒』が深く食い込んだ状態となっていた。

そんなある日。１人の剣士の元に果たし状が届いた。

そう・・・虚刀流十八代目当主・鑢風花の元にだ。

風花はこの挑戦を真っ向から受け、１人で対戦場所の舞台として指定された、南海の孤島へと向かった。

しかし、本当に１人で・・・というわけではなかった。

風花の戦いをその目に焼き付けるべく、刻桃と紅龍もこっそり孤島へと向かったのである。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・

「海外でそんな事件があったってのは・・・・噂程度に聞いた事があったな。それで・・・・その後はどうなったんだ？」

キンジが尋ねると、紅龍は少しだけ降りるスピードを緩める。

「もう、凄まじい戦いだった・・・・の一言に尽きるものさ」

「抽象的すぎだろ」

「焦らないでくれたまえ。先もまだ長いし、続きなら・・・・ちゃんと話してあげるからさ」

まるで・・・あの戦いを思い出すのに集中するかのように数秒だけ目を閉じ、再び語り出す。

風花ＶＳ灰燼。

その戦いは、戦いを盗み見ていた刻桃と紅龍にとって、始まった瞬間から伝説となっていた。

立ち合いの瞬間から灰燼が見せた、変幻自在の移動法・・・・『爆縮地』。

虚刀流七の構えからの移動法・・・・『杜若』以上に変幻自在の足運びを前にして、風花は最初から出端を挫かれ、早くも劣勢に立たされる結果となる。

刀の柄と鞘を使用しての連撃技・・・・『逆転夢斬』。
フェイントとしての効果しかないように見えがちの技だが、その一撃一撃が敵を一刀両断する威力が込められていたため、二段構えの二刀流剣技と呼んでも差支えは無いだろう。

そしてなにより、剣士にとって最も恐ろしい技だったのは・・・・刀の刃渡りを伸縮自在にする妙技『速遅剣』。
この技こそ虚刀流にとっては最大の脅威。なにせ、『刀』という間合いが固定された武器でありながら、傍から見ても間合いの測りようがなかったのだから。

最終局面。

灰燼は、得物が『薄刀・針』だったからこそ実現可能だった限定奥義・・・・『薄刀開眼』を発動させようとした。
だが、それが裏目に出てしまい、そこに大きな隙が生じてしまう結果となった。

その隙を見逃さず、風花は虚刀流三の構え『躑躅』から繰り出される、虚刀流奥義応用編・・・・『百花狼藉』を放った。

三の奥義『百花繚乱』の膝蹴りで相手を怯ませた後、そのまま飛び上がって七の奥義『落花狼藉』の踵落としを叩き込む。フェイントを兼ね備えた風花考案の応用奥義である。

灰燼はその直撃を喰らい、派手に地面に叩きつけられて失神。その時の衝撃で『薄刀・針』も粉々に砕け散り、戦いは終わった。

その後・・・・失神した錆灰燼は風花の手で捕縛され、そこから一番近い警察に身柄を引き渡された。

あれから3年。現在では既に裁判も終了し、今の彼は警備の厳重な断崖絶壁の孤島に造られた刑務所で刑に服している所である。

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・

そしてようやく武偵高地下7階に。武偵高最深部にして3大危険地域の1つ、地下倉庫（ジャンクション）に辿り着いた。

「ようやく到着したね。ここが・・・・そうなのかい？」

「多分そうだ。俺もここに来るのは初めてだから、確かな事は言えないが」

紅龍とキンジが辺りを見回す。

本来なら第9排水溝を伝っても簡単には入れないのだが・・・・東京武偵高はただっ広い構造上外部からの侵入に対してそれほど堅牢ではなく、やろうとすれば意外と出来てしまったりする。

2人は広大な地下倉庫を警戒しながら先に進む。

「しかし・・・さっきまでの話しを聞いて思ったんだが。刻桃の奴、大丈夫なのか？せめてコウだけでも残った方がよかったんじゃ・・・」

「いや、錆灰燕の狙いはあくまでモモちゃん1人。モモちゃんが灰燕を引きつけてくれている隙に、僕達は『魔剣』の手から白雪を救出する。あの時点では、これが最も的確な配置だったと思うよ？」

それに・・・と言って、紅龍は言葉を続ける。

「モモちゃんは・・・あんな奴に負けたりはしない。必ず倒してから追いついてくる。僕はパートナーとして・・・それを信じるだけさ。だからキンジ、キミも友としてモモちゃんの事を信じたまえ」

言い切る紅龍。

しかし、その声は何処か震えており・・・いつもの尊大さが何割か損なわれているように聞こえる。

普段は女心に疎いキンジだが、この時だけは彼女の心中を察する事ができた。

不安なのだろう。

本当なら、今すぐにでも刻桃の元に駆けつけたいのだろう。

しかし今、その気持ちを押し殺してキンジに同行している。忍者ら

しい・・・と言ってしまえばそれまでだが、心の辺りにズシリと何か重い物がのしかかるような感覚を覚える。

「だったら・・・・早く白雪を探そう。『魔剣』倒して、白雪助け出した後でなら・・・・堂々と応援に向かえるだろ」

「そうだね。キミも・・・・たまには男らしい事も言えるんだね。少しは見直したよ」

「たまには・・・・は余計だ」

実にあっさりと、いつもの調子に戻った紅龍に・・・・キンジは溜息まじりに突っ込んだ。

第３５話（後書き）

連続投稿第二弾。

今回、風花が灰燼戦で使用したとされる応用奥義・・・『百花狼藉』は、以前『亀鳥虎龍』先生に考えていただいたオリジナル技です。

第３６話

「「・・・・・・・・」」

地下倉庫内をゆっくり・・・・じっくりと歩みを進めるキンジと紅龍。

ハシゴを降り切ってからは出来る限り音を立てず、会話も控え、ナイフの刃を即席の鏡にしながら通路をチェック。先へと進む。

ただ、２人とも銃はホルスターに収納したままだった。ここは危険な爆薬が無造作に収納・・・というより、一部では床に放置されているため、ヘタに発砲すれば火薬に引火して・・・最悪東京武偵高そのものが自爆同然に吹っ飛びかねないからだ。

「・・・・・・！？」

ナイフを持ったキンジが何かに気づく。

「・・・・キンジ？」

「・・・見つけた。白雪だ。前方約・・・・５０ｍ程離れた壁際だ」

紅龍とキンジは頭一つ分だけ身を乗り出し、状況を把握しようとする。
そこには・・・・

「どうして私なんかを欲しがるの、『魔剣（デュランダル）』。大した能力もない・・・・私なんかを」

身体中を鎖で、壁際の鉄パイプに固定するように縛りつけられた、巫女装束姿の白雪と。

「謙遜するな。お前はより強力な超能力者を磨く・・・・大粒の原石。それも、欠陥品の武偵にしか守られていない原石なら、手が伸びるのは自然な事よ。不思議がる事は無いのだ」

全身に黒いローブを纏った・・・・男喋りの女の声。

「欠陥品の武偵？・・・・誰の事？」

白雪の声に怒りの色が混じる。

「ホームズと虚刀流には少々手こずりそうだった上、結果的に守りを固められてしまった真庭のくノ一は諦めざるを得なくなったが・・・・お前の警備は誰のせいで手薄になった？他ならぬ遠山キンジの

せいだろう。奴が欠陥品じゃなくて、何だと言うのだ？」

「キンちゃんは・・・・キンちゃんは欠陥品なんかじゃない！」

「だが現にこうして、お前は私の手の中に落ちつつある。お前は遠山に迷惑を掛けたくなくて、奴を呼ばずに1人でここまで来たのだろうが・・・・だがな、白雪。お前も私の策に一役買ったのだぞ？」

ローブ越しであるのも関わらず、『魔剣』が醜悪な笑みを浮かべるのが嫌でも伝わる。

「ホームズは部屋に無数の監視カメラを仕掛けていたが・・・お前達の部屋を監視していたのは私の方だ。お前はリビングの窓際。遠山が入っていたバスルームの明かりが消え、そこにちょうど神崎・H・アリアが帰ってくる。私は・・・・そういう好機を見逃さない性格でな」

そして・・・・次の瞬間。

「【あの時の電話を覚えているだろう】」

発せられた『魔剣』の声。それは・・・・どこからどう聴いても、キンジの声だった。

白雪はもちろんの事、キンジと紅龍も驚きのあまり目を見開く。

奴の言葉を受けて・・・・あの時の状況の真相がだんだん飲み込めてきた。
仲間割れの切っ掛けとなった、バスルーム事件。あれはただ間が悪いだけじゃなかった。全て・・・・『魔剣』の手の中で踊らされていた末の結果だったのである。

「あとは転がる石のように・・・・だ。期待通りに。いや、むしろ期待以上の形で仲間割れしてくれた。だが・・・・」

魔剣は白雪から視線を逸らす。

「お前は・・・・『自分を何の抵抗も差し出す代わりに、遠山キンジをはじめとする武偵高の生徒には手を出さない』。そう約束した事を、私は確かに聞いた。しかしお前は、その裏で・・・・・奴を呼んでいる。正確に言えば、『奴等』と言うべきか」

魔剣が見た先は・・・・その場所から約５０ｍ離れた位置。
つまり、キンジと紅龍が隠れた場所だった。

「・・・・気づかれてるね。キンジ、僕が先陣を切って『魔剣』を引きつける。その隙にキミは白雪を助けたまえ！」

紅龍はホルスターから苦無二本と、木の葉を約１０枚ほど取り出す。

「おい！？何考えてんだ。お前も奴のターゲットなんだぞ！」

「キミは・・・・５０ｍを何秒で走れる？」

「・・・・６秒か７秒」

「じゃあ僕は４秒以下だ。これでも忍だからね。そういうわけだから反論は認めないよ？」

「・・・・わかったよ」

キンジは渋々納得。

「それじゃ・・・・行くよ！」

「ああ！」

紅龍号令のもと、２人は姿を現して一気に駆け出す。
見た所、敵は１人。その敵までの距離は約５０ｍ。それに対してこっちは２人。一気に飛び掛かって取り押さえてしまえばそれで終わり。

「キンちゃん・・・・来ちゃダメ！武偵は、超偵に勝てない！」

白雪の悲鳴のような叫び声に続いて・・・キンジと紅龍の足元に、目にも止まらぬ速さでサーベルのような小剣が突き刺さる。

「うおっ！？」

「キンジ・・・・・！？」

紅龍は寸での所で避けたものの、キンジは前のめりに転倒する。さらに、突き刺さった小剣を中心に白い何かが冷気と共に溢れ・・・パキ・・・パキ・・・と音を立てながら広がっていき、キンジの身体を拘束していく。

急いで起き上がろうにも、それは肘にも達し、ものの１０秒もしないうちに全身を氷で床に縫い付けられてしまった。

「・・・・くっ！？」

紅龍の右足にも氷が少しずつ広がり、足を拘束される。避けたとは言っても、その余波をしっかり受けてしまったようである。

「我が一族は光を身に纏い、その実体は、陰の裏・・・・策士の裏をかく、策を得手とする」

未だ真の姿も見せない『魔剣』は・・・・

「その私がこの世で最も嫌う物。それは・・・・『誤算』でな！」

身の丈ほどもある両刃の剣を抜き・・・・キンジに斬りかかる。

「させないよ！」

紅龍は自らの片足を拘束する氷を剥がし、両手に持った苦無を『魔剣』に投げる。

だが『魔剣』は剣の一振りで投げられた二本の苦無を・・・・真っ二つに切り裂く。そして、改めて・・・・キンジに向けて剣を振り下ろす。

キィィィン！

「・・・・・・っ！？」

キンジの目の前で金属同士がぶつかり合う音が響く。『魔剣』は真後ろに跳び、キンジの目の前には・・・武偵高のセーラー服を着た桃色ツインテールの少女が現れる。

「バトンタッチね、キンジ」

「ア・・・アリア！？」

そう。アリアだった。
その姿を確認すると、紅龍は片足をさすりながらアリアに近づく。

「遅かったね、アリア」

「しょうがないでしょ。場所はアンタからメール貰ったおかげでわかってたけど・・・アンタ達ほど近くにいたわけじゃなかったんだから」

「ホームズ・・・か」

ローブの袖に片手を入れ、『魔剣』は苦々しげに言う。

「あんたが『魔剣』ね。未成年者略取未遂の容疑で、逮捕するわ！」

アリアが宣言すると、『魔剣』は玉のような物を取り出して地面に投げつける。
その瞬間、玉は破裂し辺りは煙に覆われる。同時に1人分の足音がその場から離れていき、ガチャン・・・とどこかの扉が閉まるような音がした。

「・・・・逃げたわね」

アリアは刀を取り出し、キンジに貼りついた氷を剥がしていく。
あらかた剥がし終わると、キンジは立ち上がって身体の状態を確認。
そして、改めてアリアを見る。

「アリア、お前・・・・途中でいなくなってから、今まで何やってたんだ」

若干語気が弱いのは、己の力不足を痛感したからだろう。
アリアは特に気にするでもなく、フフンと自慢げに笑う。

「・・・・『魔剣』は白雪とコウを見えない所からずっと監視してた。でも、あたしや刻桃がついている間は決して襲ってこようとはしなかった。だからワザとボディーガードを外れたの」

「喧嘩してから姿消してたのは・・・・作戦だったのか。それじゃ、

コウ達も!?」

「そうさ。僕とモモちゃんも、アリアの作戦に乗らせてもらった。キミの不真面目さには文句の1つも言いたくなったけど・・・・そのおかげで『魔剣』は行動を起こしてくれたし、モモちゃんやアリアの動きからも目を逸らしてくれた。感謝してるよ」

「・・・・・・・おい」

「なんだい?その不服そうな目は」

「なんか文句あるの?役に立てなかったクセに」

フフフと笑う紅龍と、ムスッとするアリア。
しかし、キンジは不平を言えなかった。結果だけを見れば、アリアと紅龍がいなければとっくに殺されていたからだ。
それに・・・・白雪が攫われた時点で、自分のバカさ加減も身に沁みて感じていたからでもある。

「それより、早いところ白雪を解放しないと」

「そ、そうだな。大丈夫か?白雪」

紅龍とキンジは、白雪を拘束している鎖を外そうとするが・・・・1つ1つの輪が分厚い上、錠前も置時計ぐらいの大きさがある代物。
それが胸の所に三個。手足の所に一個ずつ。計七か所もロックされている難物である。

キンジ、アリア、紅龍が3人がかりで解除を試みるが、作りが複雑なせいで1つも開かない。

「キンちゃん・・・・ごめんなさい。私、ここに誰にも内緒で来ないと・・・・学園島を爆破して、キンちゃんの事も殺すって言われて・・・・ふぇっ・・・えっ・・・」

「いいから・・・・今は泣くな」

なだめつつも、キンジは自分が知らぬ間に取引材料に使われていた事に対し、苦い物が胸の内に滲むのを感じる。

「アリアも・・・・ごめんね。あんなに酷いことばっかりしてたのに、助けに来てくれたんだね」

「あっ・・・・あたしは依頼を引き受けたからアンタを守ってるだけ。あたしの本当の目的は『魔剣』を捕まえる事だけなの。だから、感謝なんかしなくていい」

「コウさんも・・・・・ありがとう」

「気にしないでくれたまえ。この借りは・・・・・いつか三倍にして返してもらうつもりだか・・・・・らっ！」

淡々と手を動かしながら言う紅龍。

同時に、ようやく足に付けられた錠前が一個、解除に成功した。

「さぁ、次だ。キンジとアリアも急ぎたまえ！」

続いてもう片方の足の解除に取りかかろうとするが・・・・

ズズン！

くぐもった音が地下倉庫に響き渡った。
全員が周囲を見回すと、床にあった排水溝から水が溢れ出てきている。水は勢いを増し、あっと言う間に地下倉庫の床を満たしてゆく。

靴から足首。足首から脛へ。水位はどんどん増していく。

キンジ、アリア、紅龍ならハシゴを使って逃げられる。しかし、白雪は全身を拘束されているため、このままでは溺れてしまう。

「アリア、お前は先に行け！」

キンジが叫ぶ。

「理子の資料に書いてあった。お前、泳げないだろ！」

「ち、違う・・・・浮き輪さえあれば・・・・・」

アリアは真っ赤になりながらも釈明しようとするが・・・・ポロリと自白同然の一言を口にしている。

「ここにそんな物はないっ！お前は先に行け！」

「ダメよ・・・・アンタ達を身捨てて逃げるなんてできない！」

首を横に振るアリア。
だがここで、２つ目の錠前の解除に成功した紅龍が顔を上げ、今度は手首の錠前に手をかけながら言う。

「勘違いしないでくれたまえ。キンジはこの場で最も的確な指示を出したにすぎない。キミには、僕達が鍵を解除出来なかった時のために・・・・『魔剣』から鍵を奪ってきてもらいたいんだ」

「で、でも・・・・・」

「それとも、キミがこの場に残るのかい？泳げない武偵なんて、足手纏いになるだけだよ？」

「そっ・・・・それは・・・・・」

「コウの言う通りだ。それに、戦闘力の高いお前の方が『魔剣』を早くブチのめせる。コウはどうかは知らないが、俺には超偵との戦闘経験がない。行け！今は1秒でも時間が惜しい！」

アリアは心配そうに拘束されたままの白雪を見つめたが・・・・ようやく、自分の解除キーをキンジに手渡した。

「わかった。でも、ダメだと思ったら絶対あたしを呼ぶのよ！」

呼んだ所でこの鎖はどうしようもない。どうにかなるなら3人がかりでとっくに何とかしてる。

悔しそうに背を向け、『魔剣』を追うアリアに・・・・キンジは『ああ』とだけ答えた。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・

水の勢いは激しさを増すばかり。

紅龍は、白雪の手首の錠前を解除しようとするが、構造がより複雑になっているようでなかなか上手くいかない。

キンジはやっとの事で胸の錠前を１つだけ解除する事に成功したが、まだ２つも残っている。

水位はもう、白雪の首の所まで来ている。このままでは間に合わない。

「キンちゃん・・・・コウさん・・・・もう行って」

白雪が・・・・力なく言う。

「私は・・・・もういいの。キンちゃんを危険な目に遭わせたくない」

「バカ言うなっ！」

キンジが怒鳴る。しかし、白雪もわかっているのだろう。この状況が・・・・もうどうしようもない事を。

「星伽の巫女は守護り巫女。誰かのために身も心も捧げ、投げ打つのが定め。キンちゃん達は・・・・もう避難して。私の事は・・・・もういいから」

「お前を置いていけるか！」

「いいの・・・・私は・・・・私は死んでも」

ついに、白雪の口元に水が届く。

「くっ・・・これは・・・・キツいね・・・・だけど諦めるな！
キミはまだ・・・・何もやっていないだろう！」

紅龍が片手の錠前を１つ解除に成功するも、錠前は胸の物を含めて
あと３つもある。

「コウさんも・・・・逃げて」

白雪はできるだけ首を伸ばして酸素を吸い込み、言葉を続ける。

「ぷはっ・・・・私が死んでも、きっと誰も泣かない。先生とかに
もてはやされてたかもしれないけど、それは私じゃなくて、星伽の
巫女の力が持ち上げられていただけ・・・・あぷっ」

苦しみに喘ぐ白雪。
キンジと紅龍の爪先も、浮力によって床を離れる。もう泳がないと
移動できない状態だ。

「白雪！今にアリアが鍵を持って来る。俺とコウも、ギリギリまで
頑張る。だから息を大きく吸え！１秒でも長く持ちこたえろ！依頼
人ならボディーガードの言う事に・・・・」

「ボディーガードの依頼は・・・・もう取り消します。キンちゃん・

・・・逃げ・・・・生きて・・・・・コウさん・・・・・ごめんなさい」

その言葉を最後に・・・・白雪は水面下に沈んだ。

「「白雪!!」」

1度浮かび上がった紅龍とキンジが叫ぶ。しかし、白雪はもう覚悟を決め、水の中で俯く。

2人が後腐れなく逃げやすいように。そして・・・・運命の瞬間を黙って待つように。

「白雪!」

紅龍は両手の革手袋を外し、水の中に潜る。そして手首に残った錠前の解除を試みる。

同時に・・・・

(真庭忍法・・・・意識同期!)

白雪の手に触れ、忍法を発動させた。

（白雪・・・・聞こえるかい？聞こえたら心で念じたまえ！）

（え・・・・コウさん？これって・・・・）

（僕の忍法の１つ・・・・『意識同期』。『記憶辿り』応用編で、僕が直接触れた相手に僕の意識を伝える忍法さ）

同時に相手の心の声を聞く事もできるため、ただ触れあうだけで会話が可能になる・・・・隠密行動に適した忍法である。

（今・・・・キミと僕は繋がっている。キミはいいのかい？本当にこんな所で死んで！まだまだやり残したことがあるだろう！キミはまだ・・・・世界の広さも、素晴らしさも、なにも知らないままじゃないか！）

（コウ・・・・・さん？）

（キミは言ったね。『私が死んでも、きっと誰も泣かない』・・・・・って）

（う・・・・うん）

（それは大きな間違いだ。キミが死ねば、キンジは絶望のどん底に突き落とされ、未来永劫残る心の傷を負う事になる。モモちゃんやアリアだって・・・・・絶対冷静じゃいられないよ。それがわからないほど・・・・キミは世間知らずじゃないだろう。人が１人死ぬと言うのは・・・・そういう事だ）

（・・・・・・・）

白雪の心に動揺が走る。
紅龍は錠前の解除を試みながら・・・・さらに念じる。

（僕だって同じだ。僕はこの前、キミに酷い事を言ってしまったけど・・・あの事だってまだ謝ってない。まだ・・・・キミと友達に戻っていない！）

（コウさん・・・・？）

（キミと僕はよく似ている。規模は違えど、古くから続く家に生まれ・・・特別な力を受け継いで・・・・見えない何かに縛られて生きてきた。キミは、籠から出ないうちに死ぬ気かい！）

（・・・・・え？）

（籠の中の鳥でも・・・・賢くなれば嘴で鍵を開けて、大空に飛び立てるんだ。もっと単純に・・・・籠そのものを破壊してもいい！）

（でも、私は・・・・そんなことしたら、星伽に怒られちゃう。そんな勇気・・・・）

（なら問題ない。キミにはいるじゃないか！どんな厳しい掟だって破らせてくれる・・・・キミを駆り立ててくれる、たった1つの存在が！）

紅龍が念じると同時に、白雪の眼前にはキンジが現れる。そして再び胸の錠前の解除をするために動きだす。
キンジもまだ諦めていない。それを見た白雪は・・・・紅龍から伝えられた言葉と合わせて、胸の内が・・・・目頭が熱くなるのを感じる。

生きたい。

諦めたハズの想いが強くなる。

それを感じ取った紅龍は・・・・開錠しながらさらに強く念じる。
白雪。諦めるな、諦めるな、諦めるな、諦めるな・・・・と。

さらに・・・・

（・・・・・・・・っ！？）

白雪の中に、覚えのない景色が広がる記憶が流れ込む。

何処かの山奥の・・・・小さな農村のようだ。

その中にいる白雪は・・・・白雪の姿をしていなかった。

年の頃は１０歳未満。肩までの長さの茶髪の少女になっていた。

その少女は孤独だった。同年代の子供からは石を投げつけられ、大人達からは冷たい視線を注がれる。

理由まではわからなかったが、少女が村中に人間から嫌われていた事は、容易に想像する事ができた。

次に、壮年の男性が少女の前に現れる。その男性の前でだけ、少女は年頃の少女らしい顔をする。心から安心する事ができた。恐らく、少女の父親だろう。

（これって・・・・・・コウさんの記憶？）

白雪の推測。

彼女自身がこれまで生きてきた範囲は、青森の星伽神社と通っていた学校周辺。そして、東京武偵高周辺だけ・・・と、傍から見れば極端な程限られている。

おまけに、今の自分は自分じゃない少女になっている。だからこそ、これが他人の・・・紅龍の記憶である事が容易に察しがついた。

また、場面が変わる。

今度は、目の前に1人の少年がいた。銀髪の少年だ。

少年が嫌々話しかけてくるのを見た紅龍は・・・・子供とは思えない身体能力で少年に接近。あっと言う間に投げ飛ばし、圧し掛かってタコ殴りにした。

傍から見れば明らかに行き過ぎた行動。しかし紅龍にとって、それは日常だった。

他者との繋がりを知らず、繋がりに必要性を見出すことができず、父親以外の繋がりを積極的に断ち切ろうとした。

アレだけ痛めつけたのだから、あの少年とはもう会う事はないだろう。

紅龍は・・・・胸に孤独感を感じながらも、少年の存在を記憶の片隅に追いやった。

（この後は・・・・・どうなったの？）

続きを知りたい。そう思った白雪の目の前で、また場面が変わる。

今度は・・・・その少年との戦いの記憶だった。

少年が体術中心に攻めるのに対し、紅龍は得意の忍法を併用しつつ・・・・苦無や手裏剣を容赦なく投げつける。

場面は次々代わり、様々な戦いの場面が白雪の頭に流れ込む。

山で、川で、雪が降り積もる中で、お互いの力を高め合うように、少年と紅龍は戦う。

その際、白雪は感じた。
紅龍の心境に、ある変化が起こっていた事を。

力いっぱい戦ううちに・・・・少年の力を、存在を、少なからず認めるようになっていた。
そしていつの間にか、この『繋がり』を大切に思うようになっていた。
初対面であんなに酷い事をしたのに、少年が・・・・自分と向き合ってくれるのが嬉しくて。

（これが・・・・・コウさんと、刻桃君の絆）

白雪は、その面影から銀髪の少年を刻桃だと判断する。
その瞬間にまた場面が変わる。ある程度成長した2人が、固く握手を交わしている様子が見える。

友達。

紆余曲折を経て、2人の関係が・・・・ようやく正しい物になった瞬間なのだろう。

（よかったね・・・・コウさん、刻桃君）

これは過ぎ去った過去。にもかかわらず、白雪は穏やかな心で呟く。

だが・・・・

「!?」

場面が再び切り替わった。

周りの景色がガラスのように砕け散り、辺りは・・・・・廃墟のようになる。

ここは外国に存在する小さな村と、そこに何故か場違いのように存在していた貴族の屋敷・・・・・の残骸。

既に見る影もなく崩れ落ちており、村のあちこちからも火の手が上がっている。村の住民と思われる人々が、悲鳴を上げながら逃げ惑う。

そのせいで時間帯が夜であるにも関わらず、空は炎で真っ赤に染まっている。

（なに・・・・・これ・・・・・）

白雪は辺りを見回す。
すると・・・身体が勝手に動くのを感じた。紅龍が・・・・何かを見つけ、走り出したのである。

そして、村の中央に存在する2人分の人影の前で足を止めた。

そこでは・・・・・・

（・・・・・・・・！？）

ズキリ・・・・と、心が痛むのを感じた。
それは・・・・この映像を見ている白雪自身の動揺と、記憶の主である紅龍の悲しみから来るものであった。

見ただけでは、何が何だか分からなかった。どうしてそうなったかも、これぱかりはもう知る由もない。

そこでは・・・・現在よりも、ほんの少しだけ若い刻桃が血塗れとなり。

胸を貫かれて絶命した血塗れの女性を抱きかかえ、血の涙を流している所だった。

（嫌だよ・・・・こんな・・・・この気持ち。胸が張り裂けそうなぐらい・・・・苦しい・・・・痛い）

その光景を見ている紅龍の感情が直接流れ込んでくる。

脳のキャパシティを超えかねないぐらいの、負の感情の激流。

嫌だ。苦しい。ここなら抜け出したい。

ガチャッ！

「！？」

音がしたのと同時に、白雪の意識が現実に引き戻された。

ここは地下倉庫。自分は鎖で縛られ、今は呼吸ができない水の中に沈んでいる。

結構長い間精神世界にいたつもりだったが・・・苦しさから逆算して、それほど・・・それこそ沈んでから1分程度しか経っていなかった事に気づく。

ふと手を動かして無ると、ついさっきまで拘束していたはずの鎖と錠前が無くなっている。

さっきの音は・・・紅龍が錠前を解除した時の音だったようだ。

（でも・・・もうダメだよ。錠前はまだ・・・2つある）

白雪が諦めていると、目の前に・・・

（キン・・・・・ちゃん？）

キンジが・・・・両肩を掴んでくる。
そして、2文字分だけマバタキ信号を送ってきた。

吸え！

それがどういう意味かはわからなかった。紅龍も同様だ。
しかしキンジは、次の瞬間には白雪を抱きしめ・・・・

「・・・・・・・・！」

口と口を合わせた。
口移しによって空気が白雪の口の中に流れ込み、白雪もまた呼吸する事でそれを返す。

（全く・・・こんな時に何をやってるんだ。こんなの、ただの一時凌ぎにしかならな・・・・・！？）

キンジの真意が理解できない紅龍だったが、すぐに考えを改めさせられる。キンジは・・・残された２つの錠前の鍵穴に対し、同時に道具を差しこんで解除に動きだしたのである。
忍者である紅龍でさえ、１個解除するだけでもそれなりの時間を要する代物にもかかわらず・・・・キンジは、まるで鍵の構造が手に取るようにわかっているかのような鮮やかさで、僅か１０秒足らずで２つ同時解除に成功した。

「「「ぷはっ！！！」」」

３人は揃って水面に顔を出す。

「キンちゃん・・・・コウさん・・・・私・・・・私・・・・」

「何も言うな、白雪」

キンジは、白雪の頬をそっと撫でてやる。

「俺は依頼なんか関係なく、白雪を守る。白雪だから守りたいんだ。俺のこの・・・熱い、熱い、想いを、白雪に受け入れてほしい」

囁くように・・・ハッキリというキンジに、白雪は感激しきった顔でコクリと頷いた。
そんな2人のやり取り・・・特にキンジの豹変ぶりを目にした紅龍は、ある可能性を察する。

（なるほど・・・『ＨＳＳ』か。これは失念していたね。流石は、遠山金一の弟というわけか）

ＨＳＳとは、ヒステリア・サヴァン・シンドロームの略し方の１つ。
刻桃や風花と同様、遠山家の事情に通じていた紅龍は、その仮説に容易に辿り着く事ができた。
そして今の状況は・・・敵である『魔剣』以外の、誰にとっても好都合だった。白雪救出に成功し、キンジがパワーアップした今なら・・・『魔剣』とも互角以上に戦える。

「さぁ・・・急いでアリアを追おうか」

「でもコウさん、相手は氷を操る魔法使いだよ。私も一緒に戦うっ！」

「勇敢な子達だ」

キンジがキザっぽい笑みを浮かべる。
これでこっちのカードは出揃った。地上で交戦状態にある、刻桃と灰燕の状況は知る由もないが・・・『魔剣』に限った話、この戦

力なら互角に戦える。
そんな事を考えながら、キンジが上階に通じる隔壁を開くと・・・・・

ずぅぅぅん！

「「「！？」」」

また地下倉庫全体に鈍い衝撃が響いた。

同時に、水の勢いが急激に増す。

水位は見る見るうちに天井に達し・・・・

「うわっ！？」

「きゃあっ！？」

「コウッ・・・・白雪ぃ！！」

キンジ、白雪、紅龍の3人を押し流すようにして、上階の床へと噴き出した。

第３６話（後書き）

連続投稿もこれで打ち止め。

今回初披露となった『真庭忍法・意識同期』。その名の通り、意識をリンクさせることで心と心の会話を可能にする忍法。記憶辿りの応用編です。
便利な半面、術者と対象者が何らかの形で深くリンクしすぎると、いらんことまで伝わってしまうというデメリットが存在。

今回流れ込んでしまったのは、紅龍にとっても辛い記憶となったあの事件。

刻桃が大切な人を殺す事を余儀なくされたあの事件については、また追々語っていきたいと思います。

次回は刻桃ＶＳ灰燕。お楽しみに！

第37話

「白雪・・・・大丈夫かい？」

「コウさん・・・・うん、大丈夫。あれ、キンちゃんは？」

「わからない。さっきの噴出で、別の場所に流されてしまったようだ」

地下倉庫の隔壁から、水と一緒に噴出された紅龍と白雪。2人は辺りを見回しながら状況を確認する。
ついさっきまで一緒に居たハズのキンジの姿はなく、自分達が出てきた隔壁が見当たらないことからも・・・・あの場所からかなり遠くに流されてしまったようである。

「キンジはもちろんだけど、アリアも心配だ。白雪、急ごう」

「う、うん！」

2人は頷き合い、キンジとアリア・・・もしくは『魔剣』を探して先へと進む。
ここは地下倉庫のような火薬庫ではなく、サーバーなどの精密機械が立ち並ぶスーパーコンピュータールーム。なので、ここからは拳銃が解禁となる。

紅龍は『炎刀・銃』を取り出して先頭を歩き、白雪は『色金殺女』

を携え、いつでも抜刀できる体勢でその後に続く。

そんな時・・・

「あの・・・・コウさん」

白雪が話しかける。

「・・・・なんだい？」

「その・・・・あの・・・・ごめんなさいっ！」

「・・・・え？」

突然謝られた紅龍は、素っ頓狂な声を上げてしまう。

「な、なんだい？突然」

訳わからず聞き返すと・・・・

「その・・・・さっき水の中でコウさんの声が心の中に響いてきた時、見ちゃったの。昔の・・・・コウさんの記憶を」

「・・・・・!?」

白雪は俯きながらも、包み隠さず全て暴露する。
水中で絶体絶命だったあの時。幼い頃の紅龍の記憶が流れ込み、その当時の感情まで共有してしまった事。そして・・・何処かの国で、刻桃が血塗れの誰かを抱いて、血の涙を流していた事までを全て。

聞き終えた紅龍は足を止め、バツが悪そうに額を押さえる。

「・・・やってしまったようだね。だがら僕は、あの忍法は滅多に使わないんだ」

そして、苦々しげに呟いた。
真庭忍法・記憶同期。『記憶辿り』の応用型の忍法で、他人の考えを読み取る『記憶辿り』の逆・・・つまり、自分の考えを他人に伝える事で、心と心のみでの会話を可能とする忍法。

だが、この忍法にはある欠点が存在した。

術者が何らかの理由で必死になったり・・・激情に駆られたり。
または術を掛けた者と、掛けられた対象者同士が、何らかの理由で深く同期してしまったり。
確たる理由は定かではないが、稀に術者の中にある最も深い記憶が、対象者へと伝わってしまう事があったのである。

「とはいっても、伝わってしまうのは昔の思い出程度で、『あの国』での出来事が伝わってしまったのは多分初めてだ。それだけキミと僕は良く似てて・・・故に深く同期してしまったのだろう」

少しだけ嬉しそうに言ったかと思えば、紅龍はすぐに俯いてしまう。本当なら、あの記憶は他人に知られてはならない物。不可抗力とはいえ、それを他人に伝えてしまった事を追い目に感じずにはいられなかった。

「キミが見た事は、是非とも他言無用で頼みたい。間違っても、モモちゃん本人の前で話題に出さないでくれたまえ。時が来たら必ず話すと約束する。だから・・・・・」

真剣な紅龍を前に、白雪は・・・

「うん、約束する。コウさんは私の命の恩人だから・・・・・絶対に言わない！」

胸の前で両手を握りしめる。
それを見た紅龍は、フッ・・・と白雪に微笑む。

「ありがとう、白雪。それじゃ・・・・先を急ごうか」

「うんっ！！」

力強く頷いた白雪と共に、紅龍は先に進む。
そして、今頃地上で戦っているであろう刻桃の事が頭を過ぎる。

無事だろうか。

錆灰燕を倒せただろうか。

倒せたなら、こちらに向かっているのか。

それとも・・・・・

（いや、ダメだ。今こんな事を考えるべきじゃない。モモちゃんが僕とキンジを信じてくれたように、僕も・・・・モモちゃんの事を信じるだけだ）

浮かびかけた嫌な予感を全力で振り払う。

そして、今・・・自分達が戦うべき相手、『魔剣』に意識を集中す

る。

刻桃が、後から追って来てくれる事を信じて。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・

場所が移り変わり、こちらは地上1階。

床には何かでズタズタに斬り裂かれたような大穴が空き、そこからは灰燕が斬り裂いたエレベーターが見える。
それだけではない。壁という壁、天井という天井にも無数の切れ込みが入っている。

「秘剣・・・・零閃（ゼロセン）！」

しゃりん！

錆灰燕が、対戦者たる鑢刻桃に居合抜きを放った時・・・・そんな音が響いた。

「・・・・・・っ！？」

刻桃は大きく距離を取ってこれを避けるも、灰燕は『杜若』上回る変幻自在の足運び・・・・『爆縮地』で接近。

「零閃編隊・・・・5機！」

しゃりんしゃりんしゃりんしゃりんしゃりん！

連続で・・・・鍔鳴り音が響く。

灰燕が、5連続で零閃を放ったのだっだ。
これまた刻桃は大きく飛び上がって避けるも、ついさっきまで自分が居た場所には・・・・・5発分の斬撃痕が刻まれている。
それも、豆腐のような柔らかい物でも斬り裂いたかのように、あっさり・・・・バックリと。

本来、居合抜きとは・・・・敵が間合いに入ってきた時にカウンター狙いで斬り裂く『静』の技。

だが灰燕は、変幻自在の移動方法たる『爆縮地』を使って自ら敵の間合いへと入り、その上で居合抜きを繰り出してくる。

それだけだったら、刻桃も『杜若』である程度は対処できたのだが・・・それも完全じゃなかった。

身体の・・・防弾制服のあちこちには、避けきれなかった斬撃がかすめた跡が残る。

（このままじゃ・・・追い詰められるのも時間の問題か。斬撃が全く見えないんじゃ・・・・白刃取りも使えやしない）

刻桃は汗を拭いながら、見えない斬撃への対抗策を考える。

これは比喩ではない。言葉の通りだ。灰燕は、刻桃の動体視力では捉えられない速度の斬撃を放ってくるのだ。

灰燕が柄を持った瞬間に響く『しゃりん！』という音は、鍔鳴りの音。柄に手を伸ばしたのと同時に鍔鳴り音が発生するほどの・・・・想像を絶した速度の斬撃。

おまけに、抜刀する頃には、既に納刀を終えているときてる。

しかもそれを、灰燕自らが攻めつつ放ってくる。

刀身が見えなければ、白刃取りどころか・・・・『菊』などの武器破壊技も使えない。

さらに右脇腹からは・・・・決して少なくない量の血が溢れる。
避けきらなかった零閃によって、斬り付けられた傷から溢れ出ているのだ。

（これも・・・・『斬刀・鈍』を甘く見て、あんま対策を立てなかった罰か。キンジの事・・・・偉そうには言えなくなっちまったな）

刻桃は脇腹を強く押さえ、止血しながら自嘲気味に笑う。
外に出て仲間の武偵の力を借りるという選択肢もあったが・・・・・・
そんな事をすれば死人が出かねない。
どう出るべきか考えていると。

ブブブブブブブブ・・・・

マナーモードにしていた電話が震える。
刻桃は迫りくる灰燕から距離を取りつつ・・・・電話に出る。

「もしもし・・・・」

《刻桃さん。レキです。状況は・・・・どうなっていますか?》

電話をかけてきたのは・・・・今も狙撃科棟に居ると思われるレキだった。

「あまりいいとは言えないな。『魔剣』の仲間と交戦中で・・・・かなり手こずってる。・・・・地下に向かったキンジ達からは何か連絡あったか?」

《いえ。こちらからも現在連絡がつかない状況です》

「そっか・・・・・!?」

ここで、刻桃にはある考えが浮かぶ。

「レキ、今お前が居る場所から・・・・・第9排水溝と、その周辺に人通りはあるか?」

《いえ。ここから確認する限りでは、生徒も報道陣も見当たりません》

(・・・・って事は、外に出ても誰かが巻き添えになる心配はないか)

レキから聞いた外の情報。
このままここで戦っていても勝算は薄い。一度外に出て仕切り直すという考えも浮かぶが・・・・それは、灰燕に逃げられてしまうという可能性も孕んでいる。

《刻桃さん・・・・・『魔剣』の仲間の特徴を教えてください。援護します》

「援護って・・・・・・・・どうする気だ？」

《私とあなたで・・・・・『魔剣』の仲間を倒します。ですから、刻桃さんには、ターゲットを外に誘き出してもらいたいのですが》

「おい・・・・狙撃科棟からここまでの距離は、ざっと２ｋｍはあるんだぞ」

《問題ありません。先程も見せたように、私の『絶対半径（キリングレンジ）』は・・・・２０５１ｍです》

さらっと、とんでもない事を言い出すレキ。
個人によって呼び名はいろいろあれど、レキにとっての『絶対半径』とは、狙撃手が狙撃可能な範囲を示している。
絶対半径２０５１ｍ。それはつまり・・・・この人工浮島のどこからでも撃ち抜けるという事。
だが、空き地島ならともかく、武偵高の人工浮島は大なり小なり建物がひしめき合っている。

そんな中での精密狙撃は制約がついて回るかもしれないが・・・・・
他にこれと言って策はない。

《ですので、私が指示する場所にターゲットを誘導してください。
場所は・・・・・》

レキの指示。
それと合わせて刻桃も敵の・・・・錆灰燕の特徴を伝える。

言葉少なく情報交換と策の打ち合わせを終えた時・・・・

「・・・・わかった。今は猫の手も借りたい事だし、お前の策に乗るのも面白そうだ」

刻桃は軽く頷き、『魔剣』の仲間・・・・錆灰燕の戦術も端的に話す。
そして、携帯電話を通話状態にしたまま・・・・・ズボンのポケットに仕舞った。

「内緒話は・・・・・終わったでござるか?」

灰燕が・・・・・柄に手を掛けながらゆっくりと歩み寄り続ける。
刻桃は同じくゆっくり後ずさるが、その背は壁にぶつかる。まだ間

合いに入られたわけではなかったが、もう・・・・逃げ場はない。

「ああ、終わった。これからお前を・・・・・生け捕らせてもらう」

「これだけの実力差を見せつけられておきながら、まだそのような口が叩けるでござるか」

「ござるござる、うるせぇよ。大体・・・・なんでアンタ、『居合抜き』と『爆縮地』しか使ってこねぇんだ?アンタの兄貴は、もっと多彩な技で俺の母上殺そうとしてたぜ?」

刻桃の指摘。
これまでの戦い。灰燕が使用した技らしい技は居合抜きと、移動法である『爆縮地』を含めても2つだけ。

彼の兄である錆灰燼が、風花と戦った時は・・・・『速遅剣』や『逆転夢斬』など。汎用性の高い多種多様な技を使用していた。

その弟である灰燕ならば、同様の剣術を習得していると考えていただけに、意外としか言えなかった。

ただ出し惜しんでるだけか。

それとも・・・・俺が、それらの技を使うに値しない存在だからか。

そんな事を考えていると・・・・

「拙者は・・・・兄者のような、天武の才は持ち合わせてはござらんかった」

灰燕は・・・淡々と語る。

「だが、そんな拙者でも、『爆縮地』とこの『居合い』の速度だけは兄者以上の物と自負しているでござる」

そして、『斬刀・鈍』の柄を愛おしそうに撫でる。

「この『斬刀・鈍』がある今、拙者の居合いは音速を越え・・・・光速に達する。この力で拙者は超える。兄者は元より・・・・兄者を捕縛した鑢風花も。そなたには・・・・そのための礎となってもらうでござる!!」

兄を超えたいという欲望と、鑢風花への復讐心。
それらが灰燕を突き動かしているのだろう。

それと同時に・・・・刻桃の中ではある考えが確信に変わる。

灰燕は己の力を信じている。それこそ、『刀の毒』も相まって『過信』と言えるほどに。

だからこそ・・・変に確信してしまう。こいつは外に出ても絶対逃げるようなマネはしない。

（俺を捕縛・・・・もしくは斬り殺すまでは絶対に）

刻桃は・・・ゆっくりと構える。

手刀は頭部の左右に配置し、両肘を対照的にそれぞれ突き出す形を取った。そして両脚は爪先立ち。非常に自由度の高い構え。

「虚刀流六の構え・・・・鬼灯！」

七の構え『杜若』が前後移動に特化した構えなら、『鬼灯』は左右の移動に対応した構え。

いくら灰燕の居合抜きが『動』を兼ね備えているとはいえ、基本的には『静』の技。先に動いたのは・・・・刻桃だった。

刻桃はいったん左側に跳び、折り返すように右に跳ぶ。

残像が生じるほどの素早い反復横跳び。

その加速に乗って・・・・大きく一気に左側へと跳躍。灰燕との距

離を取った。
そして、すぐさま『杜若』に切り替え、出入り口に一直線。

「虚刀流・・・・・薔薇！」

そのまま力いっぱい出入り口を蹴破り、外へと飛び出した。

「来い！灰燕！」

刻桃は地を蹴り、配管を伝い、倉庫の屋上へと移動。

「逃がさぬでござる！」

灰燕も居合抜きの構えをそのままに後を追う。
外に出た2人は・・・・配管などの僅かな足場を利用して跳躍。
４階建ての古いビルの屋上に・・・・・電話でレキに指定された場所に到達。

広さは、ざっと１５ｍ四方。

そして・・・仕切り直しとでも言うかのように、お互い構えを取った。

灰燕は当然居合抜きの構え。

刻桃は、正面にる灰燕に対して背中を見せるほどに身体をねじり、右拳を大きく引く。そして左手は、右拳を包み込むようにしている。

「虚刀流四の構え・・・・朝顔！」

四の構え『朝顔』の体勢を取りながら、狙撃科棟の方向をチラリと見る。

しかし、他のビルに遮られているせいで、直接見る事は出来なかった。

普通に考えれば、これでは必要以上に狙撃による援護の期待は出来ない。

だが、刻桃はすぐに頭を切り替える。

（・・・・いや、俺はレキを信じて策に乗った。なら、最後までアイツを信じるだけだ）

目の前の灰燕の、一挙一動に集中する。

対する灰燕は・・・・

「いかに策があろうと・・・・拙者の居合いの前には無力」

そう言いつつ、コートの内ポケットから何かを取り出す。

銀色の抗菌パックのようだ。

それを宙に投げ捨てると、再び『斬刀・鈍』の柄に触れる。

「どのような企みがあろうと、この戦い・・・・これ以上長引かせるつもりはないでござる」

しゃりん！

見えない斬撃が抗菌パックに繰り出され、そこから真っ赤な何かが溢れ・・・・『斬刀・鈍』の鍔部分にベットリと零れ落ちた。

「・・・・・・血？」

「そう・・・・これは今朝方用意したばかりの、拙者の新鮮な血液でござる」

風に乗って届く鉄のにおいと、あの色。目の前のそれは、血液以外の何物でもない。

「新鮮な人血で鞘内を濡らし、血を溜め、じっくりと湿らせる事に

よって・・・・・鞘走りの速度を上げる。刃と鞘の摩擦係数を格段に落として・・・・零閃は光速へと達する」

ポタリポタリと・・・・抗菌パックから溢れた血が、滴り落ちる。

「これこそが『斬刀・鈍』限定奥義・・・・『斬刀狩り』！」

本来は敵の血でやる事なのだが・・・・そなたからは、そこまでの血を得られなかったでござるからな。と、灰燕は最後にそう付け加えた。

「この裏技こそ、戦国時代における『宇練金閣』の一万人斬りの秘密。まさに、斬れば斬るほど速くなる・・・・というわけでござるよ」

普通に考えれば、これは失策とも取れる行動だった。
膠着状態にでも持ち込めば、血が乾いて刀と鞘の摩擦係数が上がってしまうからだ。

だが・・・灰燕には、本来『静』の技である居合いを『動』の技へと変貌させる『爆縮地』がある。

膠着状態に陥る事はまずないし、いざとなればその辺の武偵や報道陣を斬り殺すことで血を補給するかもしれない。さらに言ってしま

えば・・・灰燕自身の身体を傷つけて己の血を使う可能性も否定できない。

刻桃も、その可能性が浮かんだが故に・・・・もうこれ以上戦いを長引かせるのは危険と判断。

レキの援護があろうとなかろうと・・・逃げるつもりも、応援を待つつもりもなかった。

目の前の灰燕は完成形変体刀を所有している上、自分を捕縛・・・もしくは殺そうとしている。
ここで死ねば・・・・紅龍達に危険が及び、目的も達成できなくなる。

「斬れば斬るほど・・・・・か」

「いまさら逃げ腰になっても遅いでござるよ」

「・・・・逃げるわけねぇだろ。ずっと探してた刀が目の前にあって・・・・ありがたい事に、その所有者は母上よりも俺を狙ってくれた。知ってるか?こういうのを日本じゃ『カモがネギしょってやってきた』とか言うんだぜ」

「・・・・・・・」

灰燕は無言だった。だが、こめかみをヒクつかせる。
そして・・・柄を握る手に力がこもる。いつでも抜刀できるように。

刻桃は『朝顔』の構えをそのままに・・・・堂々と口火を切る。

「虚刀流剣士・・・・・鑢刻桃。推して参る！」

そのまま・・・・ねじっていた身体を一気に戻し、右拳を解き放つ。
ただし真正面にではない。身体を引き戻す際に膝を落として大きく屈み、右拳は・・・・その足元に解放された。

「虚刀流四の奥義・・・・・柳緑花紅・爆！！」

殴ったと同時に、足元のコンクリートは余波によって・・・・ペキペキと音を立てて割れる。
だが、それだけでは終わらない。余波は勢いを増し・・・・派手に音を立てて前方に居る灰燕に向かって突き進む。

地割れの如きショックウェーブ。

これこそが、四の奥義・柳緑花紅の応用編にして、虚刀流における数少ない遠距離戦用の技。

柳緑花紅・爆。

本来は振動伝達を利用した『鎧通し』の拳なのだが、『柳緑花紅・爆』は、その振動伝達を遠隔攻撃に転用し、間合いの外からでも敵への攻撃が可能な応用奥義。

寸での所でそれを察した灰燕は、振動が届く前に爆縮地で刻桃へと接近。後ろに回り込んだ。

刻桃は斬撃を避けるべく前に跳んだが・・・もう間に合わない。

「終わりで・・・ござる！」

そして鞘から、光速の速さを謳う斬撃が繰り出された。

しゃりん！

あの鍔鳴り音が青天の空の元・・・・・高らかに響いた。

しかし・・・・

「こ、これは・・・・」

真っ二つになったのは、十字型の鉄筋だった。

それはご丁寧にも、武偵高のブレザーが着せられていた即席の変わ

り身。

「真庭忍法・・・・変わり身の術！」

いつの間にか灰燕の背後にまわっていた刻桃が、自慢げに術の名を口にする。

変わり身の術。

あらゆる忍軍で広く使われている、有名かつありきたりな忍法なのだが、コツさえつかめば誰でも使う事ができる教科書忍法の１つ。

刻桃の場合はこの術を使用する前に、左右の移動に特化した『鬼灯』を使用。

その時に出来た残像を利用して、変わり身と入れ替わったのである。

灰燕が斬るまでそれに気づかなかったのは、居合い斬りを途中で止められなかった事と・・・・『斬刀・鈍』の斬れ味が鋭すぎた事にある。

斬れ味が鋭いせいで、何を斬るにしてもとにかく手応えという物が薄い。というより、全くないと言ってしまっても過言ではない。故に、人を斬ろうと鉄筋を斬ろうと、手応えがないせいで同じように感じてしまい、判断が遅れてしまったのである。

「虚刀流・・・・蒲公英！」

その隙をつき、刻桃は灰燕の背中を目掛けて貫手を放つ。
しかし灰燕は前方に跳び、寸での所で間合いから逃げる事に成功。
そして体勢を立て直し、再び居合い抜きを放とうとするが・・・・
しゃりん！という鍔鳴り音が響く事はなかった。

それよりも先に響いたのは・・・・

ガン！ガァン！

という破裂音だった。

「うぐっ・・・・・・・！？」

同時に、灰燕が呻き声を漏らした。
背中に・・・・・防弾コート越しに、銃弾2発分の鈍い衝撃が響いたのである。

（これは・・・・・狙撃！？敵の仲間に狙撃手がいる事は『あの女』から耳にしてはいたが・・・・奴がいる狙撃科棟とか言う場所からでは、この場所は狙えないハズ）

なのに何故だ。

灰燕が考えあぐねていると・・・・

ガン！ガン！ガァン！

さらに3発の音が響いた。
まるで、高速で飛ぶ金属が、同じく金属にでも反射したような音。

・・・・・・・・・

狙撃科棟。

そこではレキが狙撃銃・ドラグノフを構え、第9排水溝周辺で交戦中である刻桃の援護を行っていた。
ただし、この狙撃科棟からは直接狙う事ができない。遮蔽物が多いせいで、目視も困難だからだ。レキの6．0を誇る超人的な視力と、スコープを使ってもそれは変わらない。

「・・・・・私は、一発の銃弾」

それでも・・・レキは狙う。

「銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない」

この東京武偵高の地理は、隅々まで把握している。跳弾させれば、弾丸を目標に到達させることも十分可能。
さらに窓ガラスなどの鏡面に準ずる物も存在するため、全く目視ができないないわけじゃない。

「・・・・ただ、目標に向かって飛ぶだけ」

レキはまじないのように呟き・・・ターゲットたる錆灰燕を狙い撃つ。

・・・・・・・・・

（なるほど・・・これは、跳弾でござるか！）

その正体を察した灰燕は、振り向きざまに・・・・

しゃりんしゃりんしゃりん！

光速の居合抜き・・・『斬刀狩り』を放ち、迫りくる弾丸を全て斬り裂いた。

灰燕は、兄である灰燼ほどではなくとも、言うまでもなく天才剣士。種さえ分かれば、後はどうにでもなった。

今の所ではあるが、跳弾させてくる箇所は限られている。

鑢刻桃を斬り殺した後で、その狙撃手も斬り殺せば済む事。

「よそ見してていいのか？」

「！？」

ハッとなる灰燕。

気がついた時には・・・・目の前に、２つの球のような物が接近していた。

灰燕は考えるよりも先に身体を動かし・・・・

「斬刀狩り！！」

しゃりんしゃりん！！

光速の斬撃で、球を真っ二つに斬り裂いた。

瞬間・・・・ボフッ！と、球から音を立てて煙が噴き出す。

「これは・・・・・！？」

視界が煙に覆われるが・・・・・灰燕は焦らず騒がず、どっしりと地を踏みしめて居合いの構えを取る。
刻桃がどこから襲ってこようと、狙撃手の跳弾がどこから飛んでこようと迎撃は可能。光速に達した零閃・・・・・『斬刀狩り』はいつでも発動可能。

しかし、どこからも銃弾は飛んでは来ず・・・・・刻桃も姿を現さない。

やがて煙が晴れ、辺りの様子が顕わになるが・・・・・

「・・・・何処に行ったでござるか！？」

刻桃の姿が消えていた。
しかし、次の瞬間にはおおよその予測がついた。

刻桃が『柳緑花紅・爆』を放った時に殴った足元のコンクリート。
その一部が大きく陥没し・・・・それこそ人間1人はギリギリ出入りできるぐらいの大きさの穴が空いている。

「遅ぇよ！！」

声がした。

それは・・・・灰燕の足元から。

瞬間、足元のコンクリートに大きくヒビが入り・・・・同時に直下型地震のような衝撃が響く。

「虚刀流四の奥義・柳緑花紅！」

煙に紛れ、穴を利用して屋根裏の隙間に移動した刻桃が・・・・灰燕の真下から放った鎧通しの拳。

それが周りのヒビ入りコンクリートを巻き込み、衝撃が派手に貫いてきたのである。

（居合い斬りの死角の１つである『真下』を狙われたが・・・・予測が間に合ったでござるか）

灰燕は、大きく飛び上がる事でどうにか直撃を避ける。

そして『斬刀・鈍』の柄に手をかけ、足元に向けて『斬刀狩り』を放とうとするが・・・・

ガン！ガン！ガン！ガァン！

再び銃声・・・・いや、跳弾音が響く。

空中では自由に動けない今の灰燕は・・・・狙撃手たるレキにとって格好の的。この隙を見逃さず、一気に制しにかかる。

「甘い！」

灰燕は『斬刀・鈍』を抜刀。
光速で振り抜かれる居合いを前に、レキの跳弾は全て斬り裂かれたかに見えたが・・・・

ドス！

「・・・・・っ！？」

一撃だけ。たった一撃だけだったが、灰燕の右腕に鈍い衝撃が響い

た。

（跳弾!?だが・・・・あの場所からどうやって肩を狙っ・・・・・!?）

狙撃手がいる位置から考えれば、弾丸を跳弾させてくる場所はおのずと限られてくる。だからこそ、さっきの弾丸は全て斬り払う事ができた。

にもかかわらず、最後の弾丸はあり得ないハズの方向から跳弾してきた。本来なら飛んでくるハズのない弾丸だが・・・・灰燕はある事に気づく。

目の前を舞う一際大きなコンクリートに、銃痕とヒビが入っていたのである。

（まさか・・・・・奴等はこれを狙って!?）

跳弾箇所が限られているのなら、たとえそれが一時凌ぎであっても、いっそのこと新しく作ってしまえばいい。

灰燕は空中で居合いの構えを取りながら・・・・刻桃と狙撃手の策を推測する。

しかし、もう遅かった。

「柳緑花紅！」

刻桃の声と共に・・・・再び屋上のコンクリートが派手に吹き飛ぶ。
コンクリートの破片が舞い散る中、再びダン！ダン！ダン！と、跳弾音が響く。

灰燕はそれらを全て斬り裂こうとするが・・・・散乱するコンクリートのせいで弾丸の動きを予測できない。

急所はどうにか避けるも、弾丸は身体のあちこちを掠める。『斬刀・鈍』を握る手元も若干狂う。

そして、その隙を見逃す刻桃ではなかった。
刻桃は穴から・・・・灰燕目掛けて一気に飛び出す。

「虚刀流最終奥義・・・・・」

この最終局面。選ぶ技は・・・・自身が会得した中でも最高の物。
１つの失敗が致命傷へと繋がる『完成形変体刀』との戦いにおいて、手加減や出し惜しみという考えは皆無。
理子の時のように、人質を取られてないのだから・・・・尚更だった。

「七花八裂！！」

灰燕の手元が狂った一瞬の隙を狙って繰り出されるは・・・・七つの奥義を連続で叩き込む、虚刀流最強の混成接続技。

一の奥義、高速で打ち込む掌底・・・・・・・・・・・・・『鏡花水月』。

二の奥義、敵を突き刺す貫手・・・・・・・・・・・・・・『花鳥風月』。

三の奥義、下から打ち上げる膝蹴り・・・・・・・・・・・『百花繚乱』。

四の奥義、防御を無効化する鎧通しの拳・・・・・・・・・『柳緑花紅』。

五の奥義、表面に衝撃を伝える鎧崩しの張り手・・・・・・『飛花落葉』。

六の奥義、上方から繰り出す両手による手刀・・・・・『錦上添花』。

七の奥義、斧の如き前方三回転踵落し・・・・・・・・『落花狼藉』。

それらの技は灰燕の身体を容赦なく貫き・・・・

「が・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・っ！？」

派手に吐血。そして戦いの余波でボロボロになった屋上のコンクリートへと叩きつけられた。

ピクリ、ピクリと痙攣している所を見ると・・・・一応は生きているようだ。

「はぁ・・・・はぁ・・・・」

着地した刻桃は肩で息をしながら・・・・倒れた灰燕へと歩み寄る。

そして腰にある『斬刀・鈍』を奪い取り、鞘から抜いてみる。
灰燕の居合いがあまりにも速すぎたため、戦闘中は直接目に出来なかった刀身をじっくりと吟味。

しかし・・・・

「・・・・・なんか普通」

どんな物でも斬り裂く刀身。
いかに自分を苦しめた刀でも・・・・いざ目にしてしまえば、それだけしか言いようがなかった。

刻桃は武器を全く扱えない。戦う上での最低限の知識はあれど、刃文の種類なんかの詳しい知識までは持ち合わせていなかった。
鞘に収納した『斬刀・鈍』を腰のベルトに差した後、気絶した灰燕の身体を拘束。レキに見張りと応援を要請してから・・・・地下倉庫にいるハズの紅龍に電話をかける。

「・・・・繋がらない」

向こうは大丈夫だろうか。

灰燕を倒したとは言っても、白雪を助けだして『魔剣』を捕まえてない以上、事件はまだ終わっていない。

「さて・・・・行くか！」

絶対に追いつく。エレベーター前での別れ際の約束は、既に果たした。

背中に『絶刀・鉋』、左腰に『斬刀・鈍』を携えた刻桃は・・・・屋上から飛び降り、改めて地下倉庫へと向かった。

第３７話（後書き）

真庭忍法・変わり身の術。
本来はメジャーかつポピュラーな教科書忍法の１つですが、刻桃は『鬼灯』や『杜若』によって発生する残像を併用して使うので、並の忍者よりも使い所が上手かったりします。

柳緑花紅・爆
四の奥義・柳緑花紅の応用編。技の基礎である振動伝達を利用して、ピンポイントで敵の足元を起爆させる奥義。

またまた治療が一段階終了。毎度この瞬間がきつい。
でもしばらくは安定期に入るので、ほそぼそと執筆は出来そうです。

入院してキツイのは、美味い物が美味いと感じなくなったり、カレーやトマトソースなどのピリッと辛い刺激物が恋しくなったり、寿司などの生海鮮食品が食えない事。
寿司は穴子や納豆巻き、鰻や玉子など、生じゃないのもあるからまだいいとして・・・・ＣＯＣＯ壱番のトッピング自由なカレーが懐かしい。辛いカレー・・・・スパイス・・・・薬味・・・・いいかげん禁断症状起こしそうです。

そんな中でも最近あった嬉しい事と言えば、外出許可が出た時に久々に外食で来た事と、遊戯王カードの遊馬編を４パック購入できたことです。

結果、ＮＯ．３９希望王ホープ、ガガガバック、ガガガマジシャンが出ました。新規のナンバーズは後ほどじっくりと入手するつもりです。

なんか最後は愚痴なブログっぽくなってしまいましたけど、次回でもう一方の戦いも決着。魔剣編もようやくゴールが見えてきました。

ではまた次回！

第３８話

コンピュータールーム。

大量のサーバーが立ち並ぶ中、１人の少女に対し・・・・・２人の少女が対峙していた。

１人は・・・地下倉庫では黒いローブを纏っていた『魔剣』その人。だが、今の彼女はローブを脱ぎ捨てて真の姿を露わにしていた。

部分的に身体を覆う、露出の多い西洋甲冑。

年の頃は十代後半。サファイア色の瞳に、氷のような銀髪を二本の三つ編みにして旋毛の所で結い上げ、両刃の両手剣を携えた見目麗しい白人少女。

彼女の周囲に舞い散る水滴と、床の水の一部が氷の結晶・・・・ダイヤモンドダストとなり、その冷酷な美しさを演出するのに良くも悪くも一役買っている。

氷。

それこそが彼女の超能力者としての能力。

彼女の一族の始祖が火炙りにされかけたのを機に・・・・その後代々探求され、受け継がれてきた力。

「真庭紅龍。星伽白雪。お前達の身柄・・・・このジャンヌ・ダルク３０世が貰い受ける」

今回の事件の首謀者たる『魔剣』・・・否、氷の魔女『ジャンヌ・ダルク３０世』は、自らの通り名の由来とも言える両手剣・・・・『聖剣デュランダル』を構える。

その名の通り、彼女は・・・・１５世紀の『１００年戦争』を勝利へと導いたフランスの聖女『ジャンヌ・ダルク』の３０代目の子孫。

ジャンヌ・ダルクは表向きは十代で焼き殺されたとされているが・・・・それは影武者。本物はその正体を歴史の闇に隠しながら、誇り、名、知略を子々孫々に伝えてきたのである。

「そうはいかないよ、ジャンヌ。大人しく捕まりたまえ」

「私達は・・・・あなたを逃がす事は出来なくなった。覚悟して！」

ジャンヌと相対する２人の少女・・・・紅龍と白雪は、本来護衛される立場であるにも関わらず、堂々と立ち並ぶ。

いくら聖女の子孫と言えど、現代のジャンヌ・ダルクは『イ・ウー』に所属し、超偵ばかりを狙う誘拐犯。彼女を捕縛すべく、紅龍はホルスターから手裏剣を取り出し、白雪も『色金殺女』を両手で構える。

そして、そんな２人の後ろには・・・・両手に軽度の凍傷を負ったアリアと、そんな彼女の身体を支えるキンジ。

「うっ・・・・くっ・・・・・」

「アリア、大丈夫か？」

「ええ。白雪に治してもらったから、少しだけ楽になったわ。けど・・・・」

アリアは、床に落っこちたままのガバメント二丁を見る。
正確に言えば、ただ落っこちているわけではなかった。ジャンヌの足元から伝う冷気がスプリンクラーの水を氷結させ、二丁のガバメントを氷漬けにしていたのである。
寒冷地仕様ではないため、完全分解して整備しない限りは使い物にならない。

母の敵を目の前にして、戦えないどころか・・・・護衛対象に守られている。その事実が、アリアの表情を歪ませる。

「安心したまえ、アリア」

「！？」

そんなアリアに・・・・紅龍が声をかける。

「僕は忍だ。超偵との戦闘経験はそれなりにあるし、今は白雪という強い味方もいる。モモちゃんだって、そのうち追いついてきてく

れる。キミは来るべき時に備えて力を温存しておきたまえ」

「コウ・・・・・」

ありがとう。誰に聞こえるでもなく、アリアはしっかり呟く。
そして・・・・

「キンちゃん・・・・ここからは私を見ないで」

白雪が悲しそうに言う。

「これから・・・・私、星伽に禁じられている技を使う。でも、それを見たらきっとキンちゃんは私の事・・・・怖くなる。ありえない、って思う。嫌いに・・・・なっちゃう」

言いながら、頭にかけていた白く長いリボンに手をかける。
何の変哲もないリボンに見えるが、これこそが白雪の切り札。彼女の『超偵』としての本来の力を押さえつけている『封じ布』。これを外す事で白雪の超偵としての力は１００％解放され、真の力を引き出す事ができるのである。
だが、それは彼女の実家である星伽神社から重々禁じられている事。破ればタダでは済まない。なにより、本当の力を見せてしまう事で、キンジに嫌われてしまうかもしれないという恐怖。それが彼女の手を震わせる。

「白雪、安心しろ。あり得ない事は、１つだけしかない」

キンジは、アリアを守りつつ半歩だけ退きながら言う。

「俺がお前の事を嫌いになる？それだけはあり得ない」

その言葉を受け、白雪はリボンを解いた。

「・・・ありがとう、キンちゃん。すぐ、戻ってくるからね」

「準備はいいかい？白雪」

「うん。待たせてごめんね、コウさん。もう大丈夫。キンちゃんに・・・たくさん勇気貰えたから」

「そうかい。けど、安心したまえ。そもそも・・・キミは元々恐ろしいまでのヤンデレ巫女じゃないか。今更１つぐらいドン引き要素が増えても、キンジがキミを嫌うなんてそれこそあり得ないさ」

なんかいろいろ台無しにしかねない紅龍の発言。

白雪は苦笑しつつ、刀の腹を見せるように横倒しにし、頭上で構える。紅龍も気を取り直し、両手に手裏剣を携え、両腕をクロスさせる。

2人の超偵が並び立ち、目の前の・・・・自分達の大切な友を、愛する人を傷つけたジャンヌを鋭く睨む。

「行くよ・・・・・ジャンヌ！」

白雪が叫ぶ。

瞬間・・・・星伽巫女が２０００年もの間受け継いできた禁制鬼道を発動させる。

色金殺女の刀身に、秘色の光が灯り、見る見るうちに刀全体に広がる。

それはまさしく・・・・・緋色の炎。

「私の・・・・『白雪』って言う名前は、真の名を隠すための伏せ名。私の真名は・・・・・『緋巫女（ヒミコ）』！！」

言い終えるのと同時に、白雪は地を蹴る。

紅龍も後に続き、壁伝いに走り、ジャンヌに迫る。

「はあっ！！」

紅龍が手裏剣を放って牽制を入れ・・・・

「やあっ！！」

接近した白雪が炎を纏った斬撃を繰り出す。
それをジャンヌは、冷気を纏ったデュランダルで受け止め、いなす。
しかしそれも完全ではなかった。その余波によって、ジャンヌがよろけた隙に・・・・

「隙あり！！」

紅龍が・・・・今度は苦無をありったけ投擲。
だが、それを当てるには些か距離があり過ぎた。ジャンヌはデュランダルを振り、鉄製であるはずの苦無を難なく全て斬り裂いた。

「この程度の苦無・・・・私には何の意味もなさない。我が聖剣デュランダルに、斬れぬ物はない！」

「ほぅ・・・・その剣がキミの持つ、『何でも斬り裂く剣』か。『斬刀・鈍』比べると、どっちの斬れ味が鋭いのかな？」

「試した事はないが・・・・・いくら天才とはいえ、灰燕はただの剣士。その剣士が私の能力を凌駕するなど・・・・それこそありえ

ない！」

ジャンヌは、自信満々にデュランダルを構える。

「大丈夫だよ、コウさん」

白雪が、再び紅龍の隣に立つ。

「私の色金殺女にも、斬れない物はないもの！！」

「・・・なるほど。となれば、あとは所有者の技量次第というわけか」

紅龍は考える。

これまでの斬り結びを経て、その余波で壁やコンピューターサーバー、苦無と手裏剣がバッサリ斬り裂かれてはいたが、例外的にデュランダルと色金殺女だけは傷一つついていない。

そして、その均衡が崩れる時は・・・そう遠くない。

紅龍自身も超偵だからわかる事なのだが、超能力者は使う力が大きければ大きいほど、精神力をたくさん消費する。

以前、ハイジャック事件時に戦闘機の重量の大部分を消した時も力の大半を使ってしまい、ハンググライダーで地上に着地した時は、

一晩の休息を余儀なくされた。

単純に考えてこっちは2人。ジャンヌは1人。

攻めて攻めて攻めまくって、ジャンヌを一気にガス欠へと追い込み、その上で止めを刺す。

一見有効な手だが、不安要素も残る。

（問題は、僕達の精神力がジャンヌを凌駕できるか・・・・だ）

もしもジャンヌの精神力の総量の方が多ければ、この作戦は破綻。精神力を大幅に失った超偵は、同時に体力も大幅に失う。

まぁ、これはあくまで仮説。これ以上は考えても無意味。

「白雪、僕が先陣を切ってジャンヌを牽制する。だからキミは、隙が出来次第、聖剣デュランダルを斬り裂いてくれたまえ」

「えっ!?でも・・・・」

武偵は人を殺せない。だから聖剣デュランダルを狙う事には異論はない。

だがそれはジャンヌを殺すよりも困難な策でもある。デュランダルに対する防御手段を持たない紅龍には、白雪以上に危険が付き纏っ

ている。

「悔しいけど、僕にはキミ程の攻撃力はない。だが、陽動は・・・・得意中の得意さ！！」

フッ・・・と笑うと、紅龍は一気に駆け出し、ホルスターからある物を取り出した。

手裏剣でも、ましてや苦無でもない。

「木の葉・・・・だと？」

手元のそれを見たジャンヌは、あっけに取られたような声を出す。

「そう・・・ただの木の葉さ。だが！！」

紅龍は枚数にして数十枚の木の葉を、所狭しとバラ撒いた。

「宙を舞う木の葉も、鳥すらも止まれない小枝も、僕にとっては立派な足場となる！！」

真庭忍法・足軽。
術者自身の重量、及び、術者や触れた物の重量を自在に操作する忍法によって、紅龍は舞い散る木の葉を足場にし、その変則的な動きでジャンヌを撹乱。

「真庭忍法・・・・・鎖縛!!」

隙をついて両足に巻き付けて鎖を解き・・・ジャンヌの捕縛を企む。

だが・・・・

「甘い・・・お前達はまるで、氷砂糖のように甘い女達だ」

ジャンヌはデュランダルの一振りで鎖を切断。今度はその切っ先を紅龍へと向ける。

「この期に及んでまだ私を捕縛する気だとは・・・・私は、お前達を殺しても構わないというのに」

デュランダルによる斬撃が紅龍に迫る。

「甘いつもりは・・・・ないさっ！！」

紅龍は『足軽』で自らの重量を思いっきり軽く操作する。その軽量を活かして剣の風圧に乗って体勢を整え、ギリギリの所で斬撃を回避。

さらに宙に浮きながら空中で回転。勢いをそのままに、今度は『炎刀・銃』を発砲。

「この程度っ！！」

ジャンヌはスプリンクラーの水を利用し、氷の盾を発生させる。完成形変体刀の一角を担っているとはいえ、『炎刀・銃』の性能は今やその辺の拳銃と大差ない。弾丸はいとも簡単に氷の盾に阻まれてしまう。

ジャンヌはほくそ笑み、目の前の盾ごと紅龍を斬り裂くべく、大振りの斬撃を繰り出す。

しかし・・・それは出来なかった。

何故なら・・・・

「はあああああっ！！」

白雪が炎を纏った色金殺女で氷の盾を斬り裂き、ジャンヌの懐に飛び込んできたからだ。
ジャンヌは後退しつつも、白雪を迎え撃つ。白雪も聖剣デュランダルを破壊すべく真っ向から攻め、紅龍もまた『足軽』を使用した変則的な動きで、ジャンヌに手裏剣や苦無を投擲する。

傍から見て、両陣営の力は完全に拮抗しているように見える。

だが、やがて・・・・・

「はぁ・・・・はぁ・・・・はぁ・・・・」

激しい攻防が数分続いた頃。白雪の息が上がり、それと反比例するかのように刀を包む炎も弱くなる。
紅龍もまた、苦無と手裏剣を握りつつ・・・・汗を拭う。白雪ほどではないにしても、だいぶ体力を削られてしまったようだ。

「ふふふふふ・・・・・」

ジャンヌは不敵な笑みと共に、自らの周囲に微細な氷の粒を発生さ

せる。
そのまま霞に隠れるようにして白雪と紅龍に接近。２人は慌ててカウンターを放つ事でギリギリ決定打を避けるが、明らかに体力を消耗している。

白雪は肩膝をつき、紅龍も肩で大きく息をする。

対するジャンヌも消耗はしていたが・・・２人に比べればまだまだ余裕にも見える。

殺せる者と、殺せない者。

能力的には紅龍と白雪が有利でも、そこで精神力の消費量に大きな差が出てしまったのである。

「「・・・・・・・・・・！！」」

しかし、２人の目はまだ死んでいない。最後の力を振り絞り、虎視眈々と最後の一撃を叩きこむ瞬間を模索する。
ジャンヌもそれを察し、２人の一挙一動から目を離さない。何をしてこようと確実に対処する。本来の計画を考えれば生け捕りが理想的なのだが、この際殺す事をためらうつもりもなかった。

「オルレアンの花束・・・銀氷となって、散れ！！」

ジャンヌのデュランダルが、見る間に青白い光を蓄えていく。

その時・・・・

「キンジ、あたしの3秒後に続いて！」

叫んだアリアが、背中から日本刀を抜きつつ飛び出した。
ジャンヌはもちろんの事、紅龍と白雪もハッとなって振り返る。
隙を突く機会を窺っていたのは・・・・なにも紅龍と白雪だけではなかった。
アリアとキンジもまた、超能力者が精神力を消費し尽くすギリギリの瞬間を狙っていたのである。

「ただの武偵ごときが！」

怒りに身を任せるかのように、ジャンヌは剣を振る。
それよりも早く・・・・アリアはジャンヌが脱ぎ捨てたローブを刀で払い上げる。
そして・・・・ジャンヌの視界をほんの一瞬だけ塞いだ。

「・・・・・・っ！？」

冷気を纏った青白い斬撃はローブを押しのけ、青い砲弾となって天

井に届く。
直撃を喰らった天井は氷結し、氷の花が咲いたように広がる。

「今よ、キンジ！ジャンヌはもう・・・超能力を使えない！」

アリアの合図。
キンジは突撃し、ベレッタを発砲。ジャンヌを集中砲火するが、デュランダルであっけなく防がれてしまう。

「ただの武偵の分際で！」

ジャンヌは銃撃なんかお構いなしと言わんばかりにキンジへと突っ込む。
アリアが二刀で払おうとするが・・・それを予測済みであったジャンヌは跳躍してかわす。
そして勢いをそのままに・・・キンジの脳天を目掛けてデュランダルを振り下ろした。

（この状況で対処できる技は・・・アレだけか！）

この僅かな一瞬。

あの技は本来両手で行うもの。だが、ジャンヌを追い詰める上で、右手の拳銃を手放す事は出来ない。

だからこそ・・・と言うべきなのか、キンジは驚くべき選択をする。
ヒステリアモードのおかげで斬撃がスローモーションに見えている
キンジは・・・・左手を頭上に掲げた。

そしてタイミングを合わせ、迫りくる聖剣デュランダルの刀身を・・
・・・左手の人差し指と中指を使う事で挟み取ったのである。

「・・・・・・なっ！？」

ジャンヌがそんな声を漏らしたのは・・・・キンジによる『真剣白
刃取り・片手編』が決まった後だった。
技を使った本人であるキンジにとっても、出来るかどうか怪しかっ
た技。アリアとの特訓も・・・・無駄ではなかったと実感した瞬間
でもあった。

「これにて一件落着だよ。ジャンヌ、もういい子にしておいた方が
いい」

デュランダルを挟み取りつつ、もう片手で銃を向けるキンジに対し、
ジャンヌはまだ強気な態度を崩さない。

「ふざけるな！武偵法9条がある以上、武偵は人を殺せない！私は
まだ・・・・詰んでなどいない！」

「ははっ。どこまでも賢いお嬢さんだ。だが・・・・キミはもう詰んだ。勝負はついているんだよ。何故なら・・・・」

キンジの自信満々な笑み。
同時に、パシャパシャパシャと、スプリンクラーによって出来た水面の上を走る紅龍と。

「はあぁぁぁぁぁ！！」

彼女の肩に乗った白雪が・・・・居合い抜きの構えで待機した状態で迫ってくる。

普通ならわざわざ水面から攻めるような行為は、水に足を取られやすいためマイナスにしかならない。

だが、紅龍には自身と自身が触れたものの重量を操作する忍法・・・・『足軽』がある。
空中を舞う木の葉さえも足場に出来る彼女にとって、白雪を乗せたまま水面を駆けることなど造作もないことだった。

紅龍は白雪を乗せたまま飛び上がり、白雪は紅龍を踏み台にしてさらに跳躍。

「星伽候天流・・・緋緋星伽神！！」

鞘に納めていた刀を・・・・・居合い抜きの如く解放する。
緋色の閃光を纏った『色金殺女』は・・・・デュランダルをアッサリ通過。そのまま触れてもいない天井にまで、眩き炎の渦を到達させる。

凍りついた天井や床の氷ごと・・・・爆破したかのように粉々に砕く。

「・・・・そんなまさか・・・・・こんなことは」

瓦礫や氷片が降り注ぐ中・・・・・ジャンヌは自らの呼び名でもあったデュランダルが切断されてしまった事実に呆然とするしかなかった。

策士策に溺れる。

ただの武偵、欠陥品とバカにしてたキンジとアリアによって、戦況は大きく覆される結果となった。

あまりに想定外の出来事に、ジャンヌは瞳を見開いて立ち尽くす。

ガチャン！

「逮捕よ！」

「・・・・・・・・・！？」

アリアが、ジャンヌの両手首に手錠を掛ける金属音が響く。
それは対超能力者用に造られた銀の手錠。これが嵌められている間、
超能力者はその能力を完全に封じられる。

「だから言ったろう？いい子にしておいた方がいい・・・・って」

キンジは鍔辺りで斬られたデュランダルの刀身を、軽く手で弄ぶ。
アリアによって今度は足にまで手錠を掛けられているジャンヌは、
表情を悔しさと羞恥で歪めながらも『ふ・・・・ふふふふ』と不
敵に笑い声を洩らす。

「なによ・・・・なにがおかしいのよ！」

その態度に不快感を覚えたアリアが、ジャンヌに突っかかる。

「私を捕縛したくらいでいい気になるな。外にはまだ・・・・・・錆
灰燕がいるのだぞ？」

「だ・・・・だからなによ」

「奴は・・・・剣技だけなら私を上回っている上、今は四季崎の刀・・・『斬刀・鈍』も所有している。消耗しきった超偵2人と、ただの武偵2人でどうにかなる相手ではない。地上に居る虚刀流も・・・・戦闘不能に追い込まれたか、斬り殺されている頃だろう。こうなってしまった以上、私もただでは済まないだろうが・・・・お前達にも勝ち目はない」

自信に満ちたジャンヌの声。

ここにいるメンバーは・・・・実際に灰燕と相対したキンジと紅龍は戦っていない上、アリアと白雪は灰燕の顔と刀すらも見ていない。実力云々については予想の域を出なかったが、ここまで消耗した状態でもう一戦やるのは限界だった。『何でも斬り裂く剣』の所有者となんて、そう何度も戦える物ではない。

誰もが、『いかに灰燕との接触を避けつつ安全な場所に避難するか』を考えていると・・・・

カツン・・・・カツン・・・・カツン・・・・

どこからか足音が響いた。

徐々に近づいてくる。

ジャンヌは不敵な笑みを浮かべ続けていたが・・・・次の瞬間には、
驚愕に染まらざるを得なかった。

「・・・・・・・なんだ。もう終わったのか」

足音の正体・・・・鑢刻桃は、辺りを見回しながら言った。

「「刻桃!!」」

「モモちゃん!」

「刻桃君!」

アリア、キンジ、紅龍、白雪がそれぞれの呼び方で彼の名を呼ぶ。
刻桃は全員の無事を確認すると、今この場で初めて見る顔・・・・
捕縛されたジャンヌに歩み寄る。

「お前が・・・・魔剣？」

「・・・・っ！？貴様・・・・・灰燕はどうした！！」

捕縛されていると言うのに、ジャンヌは強気な態度で刻桃を睨む。
すると刻桃は、左腰に差した一本の日本刀を、鞘ごとジャンヌの目の前に差し出した。

「これが答えだ。レキとの共同戦線だったからあんま勝った気はしなかったけど、灰燕はギリギリでとっ捕まえたし、『斬刀・鈍』も蒐集できた。今はレキが奴の事を見張ってるよ」

「そんな・・・・バカな・・・・」

「どんなに受け入れ難くても、これがお前達の現実だ。これからキツーい尋問と取り調べが待ってるから・・・・覚悟しとけよ」

刻桃がジャンヌの顎に触れ、不敵に・・・・挑発的に笑いかける。
ジャンヌは心は悔しさと羞恥によって溢れるが、捕縛されたこの状態ではせいぜい目を逸らす事でしか対抗できなかった。

まだ残っていると思われていた敵が既に捕縛されていた。
その事実はキンジ達の精神にも安堵を与え、一気に緊張から解放される。

紅龍は力の使い過ぎでへたり込み、アリアはそんな彼女の身体を支

えてやる。

同じように、白雪もへたり込んだまま肩で息をしていたため、キンジは手を貸して立たせる。

「あ、ありがとう、キンちゃん」

「白雪、よく頑張ったな。お前のおかげで・・・・『魔剣』を逮捕できた」

「こ・・・・怖くなかった?さっきの私・・・・あ、あんな・・・・」

「怖いもんか。とても綺麗で・・・・強い火だったよ」

優しい笑顔のキンジを見て、白雪の涙腺は一気に決壊。

「キンちゃん・・・・う・・・・うぁ・・・・」

うええーん・・・・と、泣きながらキンジに抱きつく。

キンジは特に抵抗するでもなくそれを優しく受け入れる。

そんな様子を見た紅龍は・・・・嬉しそうに微笑む。

「籠の鳥は、大切な人を守るために紅蓮の双翼を広げ、自らの意思で鳥籠を破壊して大空へと飛び立った・・・・か。物語のシメとしては上々だね」

「まぁ、否定はしないでおいてやるよ。それより・・・・この惨状、なにがどうなったらこうなるんだ？」

刻桃は、辺りに広がる・・・・氷漬けになったり黒焦げになったサーバーを見回す。
いくら彼がそれなりの推理力を持っていたとしても、いかんせん情報が少ない。状況証拠だけで何があったか察するのには無理があった。

「えっと、それは・・・・・」

ここで、紅龍の身体を支えていたアリアが、この場で何があったかを端的に説明。
聞き終えた上で、刻桃は・・・・・・

「なんとまぁ・・・・炎と氷の激戦か。もう少し早く来てれば見られたかもなのにな」

残念そうな声を漏らす。

「もしかしたら、見なかった方が正解だったかもしれないよ?あの時の白雪はかなり凛々しかったから・・・流石のモモちゃんでも怖くなったかもしれないよ?」

紅龍の悪戯めいた一言。

だが・・・・

「それは確実に否定できる」

「・・・・なんで?」

アリアが興味本位で聞き返すと・・・・

「だって、あいつはもともと超怖いヤンデレ巫女だろ?恐怖要素が一つ増えた所で、驚いたり怖がる方が今更だろ」

「「・・・・・・・」」

なんとも色々台無しな一言が返ってきた。

それにはアリアはもちろんの事、同じ事を考えていた紅龍も苦笑するしかなかった。

第３９話

アドシアード最終日。

ジャンヌ・ダルク３０世と錆灰燕の来襲によって継続を危ぶむ声も出たが、事件が早期解決された事でどうにかこうにか無事に継続された。

そんなわけで・・・期間中、多種多様の物騒な競技が開催されたアドシアードも今日が最終日。

メイングラウンドの中央ステージでは、左右の手にポンポンを持ったチアガール姿の女子生徒が笑顔でチアダンスを行っていた。

その中には・・・・

「あの・・・私・・・・やっぱりこんな格好・・・・恥ずかしいです」

「いいかげん観念したまえ。せっかくいいモノを持っているんだし、存分に見せつけてやりたまえ♪」

「ええっ！？」

チア衣装を纏った白雪と紅龍の姿もあった。

露出の多い衣装に、起伏に満ちた白雪のプロポーションは、紅龍でなくとも賛辞の言葉を送りたくなるだろう。

「せっかく2人分の欠員が出たんだし、存分に楽しもうではないか。キンジも・・・・キミの勇姿を見たら、惚れ直してしまうかもしれないよ？」

「・・・・・・・・！！」

紅龍の甘い誘惑に、白雪の目の色が変わる。

さらに・・・・

「あーーー、もう！ここまで来てなに言ってんの！ほら、とっとと出る！！」

同じくチア姿のアリアに背中を押され・・・・と言うより、蹴りだされるような形で、白雪はステージの中央に出てくる。

覚悟を決めた白雪はポンポンを掲げて踊り出し、その両隣でアリアと紅龍が華を添える。

あの戦い。星伽神社に対して様々な制約違反を重ねてしまった白雪だったが、『この際3度も4度も同じ』ということで、殆んど破れかぶれ状態でチアへの参加を承諾。

共に戦ったアリアと、改めて友達となった紅龍が、一緒に参加して

くれる事も大きな励みとなったのだろう。

白雪はもう・・・・籠の鳥じゃない。

まだ籠を拠点とし、おっかなびっくり近所を飛んでいるだけだが、そう遠くない未来、彼女が真の意味で籠から飛び出すであろう事は・・・・あの事件に関わった者達の誰もが予想しうるところだった。

そして、今回の事件の首謀者。ジャンヌ・ダルク３０世と、錆灰燕はと言うと。

まずは尋問科教師、綴梅子の取り調べを受ける事になった。

刻桃達が、黙秘を決め込む２人を引き渡した時の、綴の反応と言ったら・・・・

ーーーーイジメ甲斐がありそうだなぁ・・・・ーーーー

と不敵に笑って舌舐めずるものだから、これはもうドン引きするしかなかった。

綴梅子の尋問技術は日本で５指に入ると言われ、取り調べを受けた犯罪者はどんな秘密も洗いざらい喋ってしまうのだと言う。

酷い時はそれだけでは終わらず、その後おかしくなって綴の事を『女王様』とか呼ぶようになる連中もいるとかいないとか。

それはともかく、閉会式後には紅龍も自分の忍法を活かして取り調べに加わる事になっているため、どのみち首謀者たる2人に明るい未来はないだろう。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・

そんなわけで・・・・夜。

「事件解決と、アドシアード終了に・・・・・」

「そして、『斬刀・鈍』蒐集成功に・・・・・」

「「乾杯！！」」

紅龍と刻桃は、缶コーラで軽く乾杯する。
アドシアードも終わり、その日全ての予定を消化した刻桃と紅龍はと言うと・・・・学園島の端で、ライトアップされたレインボーブリッジを眺めながらささやかな打ち上げを行っていた。
隅っこにピザ数枚と少量の飲み物を置いただけの・・・・本当にささやかな打ち上げだったが、お互い今回の事件の健闘を讃え合った。

一応キンジから、アリア、白雪も一緒に行われる打ち上げにも誘われていたのだが、２人はそれを断った上でここでこうしている。

取り調べの報告と、秘密の話も兼ねていたからだ。
だが、その前に・・・・

「そう言えば白雪、自首する事にしたらしいよ」

何の脈絡もなく、紅龍がこんな事を言いだした。

「自首？アイツ・・・・まだなんかやらかしてたのか？」

刻桃はピザを食べながら聞き返す。

「そうじゃないよ。前にアリアが『特濃葛根湯』をキンジに買ってあげただろう？どうも直接渡さず、何も言わずに置いてきたらしくて・・・・それをいい事に、白雪がその手柄を横取りしてたらしいんだ」

「しょうがねぇ女だな。だからアリアの奴、あの時機嫌悪かったのか。けど、なんでまた自首する気に？」

「嫌な女のままではいたくないんだそうだ。それが白雪なりのケジメのつけかたなんだろう」

刻桃は、『そっか』とだけ言って短く返す。そして、いよいよ本題

に入る。

「・・・・で、灰燕とジャンヌはどうだった？しっかり『記憶辿り』してきたんだろ？」

期待を込めて聞く。

２人の口がどんなに堅かろうと、紅龍の『忍法・記憶辿り』の前では無力。有力な情報の１つや２つ、手に入れてくれていると考えたのだが・・・・

「モモちゃん・・・・すまない」

紅龍の第一声が謝罪の言葉。

「記憶辿りはしっかり機能した。だが・・・・得られた情報は、既に僕達が知っている事ばかりだったし、キーワードも限られていたから真新しい情報は殆んどゼロなんだ」

「殆んど・・・・ってことは、少しぐらいは得られたんだろ？」

「まぁね。錆灰燕を記憶辿りした時なんだけと・・・・妙に気になるものが見えたんだ。でも、それも確かじゃない」

申し訳なさそうにしつつも・・・・紅龍は言葉を続ける。

「彼は心の中で言っていた。『完了前の虚刀流剣士に負けた拙者も・・・兄者や錆白兵と同様、所詮は四季崎記紀の失敗作。一族揃って四季崎の遺品に敗れるのもまた一興でござるか』・・・・とね」

「・・・・『完了』の意味はともかくとして、四季崎記紀の『失敗作』ってどういう意味だ？」

「期待してくれてるところ悪いんだが・・・・ここから先がわからない。だから、確かな情報であるかどうかも怪しいんだ。その２つの単語をキーワードに深層意識も探ってみたけど、どういうわけか上手く行かなかった。恐らく・・・・灰燕自身が閉心術を使ったか、誰かがプロテクトを掛けたんだろう」

紅龍が舌打ちする。

いくら『記憶辿り』を使えるとは言え、それで対象の全てがわかるかどうかは・・・・必ずしもイコールであるとは言えなかった。

この世界には超能力者に限らず、心を無にしたり、心に鍵を掛ける事によって、心を守る術を身に着けている者もいる。雑念を捨て、無心となる。武術の修行でもよく言われている事である。

また、意図的に脳細胞を直接殺せば、理論上は記憶を完全に削除することも出来る。

そうなっては、流石の紅龍でも『記憶辿り』で読み調べる事は不可能。

「・・・なら、仕方ないか。それに、何もわからなかったよりはマシだしな」

刻桃もそれを知っている故、これ以上深くは突っ込まなかった。
コーラを飲み干し、ビザも全部食べた後・・・刻桃と紅龍は１０m程度の距離を取り、向かい合わせに対峙する。

「さーて、いよいよ試してみるか」

刻桃の手には『絶刀・鉋』。

「この実験の結果は実に興味深いが・・・本当にいいのかい？」

紅龍は居合い抜きの構えで『斬刀・鈍』を装備。

「構わない。一本だけでもあれば・・・理子との取引は成立するだろ。それに、灰燕倒した時に折れなかったのは、あくまでたまたま。無傷で蒐集するつもりはサラサラなかったからな」

「・・・そうかい。じゃあ、行くよ！！」

紅龍は『斬刀・鈍』をいつでも抜けるように構え・・・刻桃へと

突っ込む。

「ああ・・・・来い！！」

覚束ない構えでも・・・・刻桃はしっかり『鉋』を握り、地をしっかりと踏ん張って紅龍を待ち構える。
あっと言う間に2人の距離は詰まり・・・・

「・・・・『斬刀・鈍』限定奥義、斬刀狩り！！」

紅龍は『絶刀・鉋』を目掛けて、『斬刀・鈍』を抜刀する。
どんな物でも斬り裂く刀と、絶対の強度を誇る刀。かつての完成形変体刀は『斬刀・鈍』の方が完成度が高かったようだが、現代でこの戦いを制したのは・・・・

パキィィィィィン！！

刻桃が持つ、『絶刀・鉋』だった。
対する『斬刀・鈍』の刀身は粉々に砕け散り、その破片はキラキラと宙を舞って海へと落ちる。
折れず曲がらず錆びつかず。『頑丈さ』に主眼を置いて造られた刀は、『斬れ味』を主眼に置いて造られた刀に打ち勝ったのである。

「ま、事後承諾って事になるけど・・・・これで今と昔の完成形変体刀とでは、造られた順番が違う事がわかったな。全くの無駄じゃ無かったってわけだ」

刻桃は『鉋』を鞘へと仕舞い・・・・

「腕の問題もあるとは思うけど、キミの武器を扱う才能が皆無という事を考えれば、誰がやってもこの結果は変わらなかっただろうね」

紅龍は残った柄と鞘を海に投げ捨てた。

『斬刀・鈍』・・・・・破壊。

現存する完成形変体刀は、全部で１０本。

蒐集すべき完成形変体刀は、あと７．５本。

「まだまだ・・・・先は長いね」

紅龍が言う。

「そうでもないだろ。もしも残りの刀が善人の手に渡ってたのなら、無理に奪う必要は無くなる。それに・・・・俺としては、ヨロイを倒して『賊刀・鎧』さえ破壊できればそれでいい」

「今も昔もこれからも。キミにとって重要なのは・・・・やはり奴の存在か」

「ああ。奴は俺が必ず倒す。殺す事になったとしてもだ。奴が『イ・ウー』に居るのなら・・・・『イ・ウー』ごと破壊してやる」

口調こそ穏やかだったが・・・・刻桃の目には怒りと憎しみから込み上げてくる、殺気が宿る。

（・・・・モモちゃん）

紅龍は・・・・それを黙って見て、聞くしかなかった。
刻桃の怒り、憎しみ、悲しみ。『あの事件』と『あの人』の死を経て、失ってしまった大切な物。

出来れば、復讐させる事以外でなんとかしてやりたい。だけど、それを止める事も出来ない。いくら刻桃のためを想っていても、それはエゴでしかない。
ヨロイは・・・・それだけの苦しみを『あの人』に与え、刻桃にも辛い選択をさせてしまったのだから。

「僕と・・・・僕の一族は、それまでの間、キミ達一族に手を貸すよ。だから、何かあっても1人で突っ走るのだけはやめたまえよ？」

これが今言えるギリギリ。

「大丈夫だ。これでも、独断で突っ走った結果どうなるかは・・・・まぁ、心得てるからな。それに真庭忍軍の力は、俺も母上も全面的に当てにしてる」

刻桃は殺気を引っ込め、紅龍に笑いかける。

「ふむ。存分に当てにしてくれたまえ。なんたって僕は・・・・将来のキミの奥方だからね♪」

「それだけは全否定」

ツーンとそっぽを向く刻桃。

「相変わらず釣れないねぇ」

だが、彼がいつもの姿に戻ってくれた事に・・・・紅龍は微笑しながら安堵。

静かな夜。あらかた話し終えた2人は、潮風を浴びながら無言でライトアップされたレインボーブリッジを眺める。

その時・・・・

「「!?」」

寮の方から銃声が聴こえたような気がした。

刻桃と紅龍はなんとなく・・・・男子寮、キンジの部屋の方を見てみる。

すると、さらに銃声が響き、窓ガラスが割れたような音まで聞こえる始末。

挙句の果てに・・・・

「あああああああああああ!?」

「「!?」」

部屋のベランダから、誰かが悲鳴を上げながら飛び降りる。

声から察するに・・・・恐らく男。

声の主は、そのまま真っ逆さまに東京湾へとダイブした。

男が飛び降りた後も・・・・部屋からは銃声と、今の時間帯が夜中である故、跳弾や炸薬によって発生した光が見える。

おまけに、ベランダの手すりにも大きく切れ込みが入り、窓ガラスが真っ二つになる様子もギリギリ見て取れた。

「これはもしかして・・・・」

「もしかしなくても・・・・アレしかねぇだろ」

キンジの部屋でアリアと白雪がドンパチを起こし、巻き添えを喰らいかけたキンジは東京湾に逃亡。
なにが原因かまでは知らないが、２人の中ではそんな図式が驚くほど簡単に組み上がった。

「・・・・どうするんだい？」

紅龍が聞くと・・・・

「打ち上げはここまで。仕事の話も終わったし、これ以上部屋をボロボロにさせるわけにもいかねぇだろ」

「じゃあ・・・・僕はキンジを助けに行くから、モモちゃんは２人を何とかして止めたまえ」

「極めて了解。けど、出来るだけ早く追いついてこいよ。あの２人を無傷で止めるとなると、たぶん１人じゃ無理だ」

「委細承知。それじゃ・・・・・行ってくるよ！」

こうして・・・・紅龍は『足軽』を使って水面に立ち、キンジが沈んだ辺りを目指す。
刻桃はそれを見送ると、人の部屋で暴挙に走るアホ２人を止めるべく、部屋へと向かった。

それから1週間後。

東京武偵高・自習室。

時間にして午後7時頃。

そこではキンジと刻桃が向かい合わせに座ってカードゲームに興じていた。暇人代表の武藤と、付き合いのいい不知火も、興味津々に戦いの様子を眺める。

「俺はガガガマジシャンを召喚！そして、フィールドのゴゴゴゴーレムとオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚。現れろ、Ｎｏ．３９希望王ホープ！」

キンジは、エクストラデッキからＮｏ．３９希望王ホープをエクシーズ召喚する。

「場にカードを伏せてターンエンドだ」

「んじゃ、俺のターン。ドロー！」

ドローしたカードを見た瞬間、刻桃がニヤリと笑う。

「まずは永続魔法、紫炎の道場を発動。そして、真六武衆キザンを召喚！」

六武衆デッキを扱う刻桃は、ガラ空きのフィールドにキザンを召喚。

「カウンターが乗っかった紫炎の道場を墓地に送り、デッキからチューナーモンスター・・・紫炎の足軽を特殊召喚。レベル４、真六武衆キザンに、レベル１、紫炎の足軽をチューニング。シンクロ召喚！！」

エクストラデッキから召喚されるは・・・刻桃のデッキのエースモンスター。

「来い！真六武衆シエン！」

刻桃のエクストラデッキから、真六武衆シエンが召喚される。
シエンとホープ。能力は違えど攻撃力は互角。熱い戦いは・・・・
まだまだ続く。

ルームメイトなのだから、カードゲームなんか部屋でやればいい。

そう思う方も多いだろう。だが、それにはやんごとなき事情があった。

アドシアードが終わったあの日から・・・キンジは、登校拒否ならぬ下校拒否、さらに言ってしまえば、帰宅拒否状態に陥っていた。

あの日、アリアは白雪の事を『奴隷3号』に認定。その証として、キンジの部屋のカードキー（偽造）を白雪に渡してしまったのである。

その白雪はと言うと、キンジの部屋の鍵を貰えた事が相当嬉しかったらしく、奴隷云々には突っ込まずに、以後は堂々と上がり込んではテキパキと家事をするようになった。

ヒステリアモード化を恐れるキンジにとって・・・女くさくなってしまったあの部屋は、もう安らぎの場とは言えなくなってしまったのである。

因みに刻桃は、白雪が家事を手伝ってくれるようになったので、それほど苦にはなっていなかった。少なくとも、何の役にも立たないアリアよりは好意的に受け入れていたりする。美味い食事を無償で用意してくれるとなれば、文句を言う方が罪という物だ。

引き続き、シエンとホープが魔法・罠カードの援護を受けつつ机上で戦いを繰り広げていた時・・・

《タカ！トラ！バッタ！タトバ！タトバ・タ・ト・バ！》

刻桃の携帯電話から、妙に耳に残る歌が鳴り響いた。

知らない番号からの着信だ。

手札を持ちつつ、もう片方の手で電話に出る。

《やぁ、モモちゃん。済まないが、今すぐ女子寮まで来てくれないかな？１０１１号だ》

「紅龍？いつもの携帯じゃ・・・・ないみたいだな」

《充電忘れて携帯が沈黙したから、仕方なく友達から借りた電話でかけてるんだよ。仕事の話だから、詳しい事はそこで話したい。じゃあ、待ってるよ。ブツッ・・・・ツー・・・・ツー・・・・ツー・・・》

「・・・・あのヤロー。言いたいこと言いっぱなしで電話切りやがった」

「どうした、刻桃。誰からだったんだ？」

キンジが聞く。

「紅龍からだ。急用らしいから女子寮まで来いとさ。悪いけど・・・・この勝負は預ける」

刻桃はデッキを片付けると・・・・いそいそと自習室を出ていった。

互角の戦いの中で勝負をすっぽかすのは後ろ髪引かれる想いを感じ

たが、仕事を引き合いに出されては無下に出来ない。渋々半分、納得半分で女子寮の１０１１室に向かった。

そして女子寮に辿り着いた時、ある事を思い出す。

（けど、アイツの部屋はここじゃなかったよな。まぁ・・・・会って聞けば済む話か）

不審に思いつつも、それ以上は特に疑わず、刻桃は鍵の開いた１０１１室に入った。

第３９話（後書き）

魔剣編完結。やっとここさ二度目の節目。これまでお付き合いいただきありがとうございます。

刀語原作では、憶測の域を出なかった『鉋』と『鈍』の矛盾戦。奇策士とがめは『後に造られた方が完成度が高い』という事実から、『鈍』の勝利を予測。

ですが現代では造られた順番がかつての完成形変体刀とは違う事が明らかに。微々たる違いかもですが、この違いが行かされる日は来るのでしょうか。本当に微々たる違いだから、計画倒れになる可能性もあるんですけど。

刻桃とキンジが、遊戯王カードでバトル。とりあえず、刻桃は六武衆デッキ。キンジは遊馬デッキでやってみました。

六武衆は色々制限かかったせいでやりにくくなりましたけど、それでもまだまだ強いし回転もいいです。

最近は体調いいので、お見舞いに貰ったカードや、外出時に購入したカードで即席のデッキを組んでたり。

遊馬編を中心に、プレミアムパックやゴールドパックのカードも含まれてるので、割と強いデッキになってます。幸いな事に、Ｎｏ．３９希望王ホープがあるのも大きいです。

次回はついに新章突入。因縁溢れるあの女が再登場。再び『何やらせてるんだ！？』って事になります。お楽しみに！

第４０話

「待たせたな、紅龍」

有無を言わさず呼び出された刻桃は、女子寮の指定された部屋・・・・１０１１室に入った。
こんな誘い真っ向から否定してもよかったのだが、仕事となれば話は別。靴を脱いで部屋へと上がる。

「紅龍、何処・・・・！？」

居間には誰にもおらず、適当にベッドルームのドアを開けた時・・・・その光景に目を奪われる。
ピンク色の電灯で照らされた室内は・・・・多種多様な服で散らかっていたからだ。おまけに、それらが全くと言っていいほど普通じゃない。
どっかの他校の制服に、巫女服メイド服ウエイトレス服、下着とヒモ水着。ネコミミやネコしっぽ等の装飾品も転がっていた。ついでと言わんばかりに、描写するのも危険な大人のオモチャも存在している。

「あのヤロー・・・・ついにアッチ方面に目覚めたか？」

本職とはいえ、普段から忍者の偽物みたいな恰好をしている上、１８禁ＰＣゲームをこよなく愛する紅龍の事だ。
部屋を見て一瞬ドン引きした事は否定しないが・・・・よくよく考えれば、この程度の事は想定内。趣味の悪さを感じながらも、すぐに落ち着きを取り戻す。

その時・・・・

「待ってたよ、モ・モ・ちゃん♪」

背後から・・・・イキナリ声がした。
自身のパートナーたる少女の声。

しかし、刻桃は必要以上に驚いたそぶりは見せない。
彼女は忍者。職業上気配を消す技術は、自分をも上回っている事はもうわかりきっていた。

「・・・・ったく、イキナリ呼び出して、何の用・・・・だ？」

今度こそ、本当に驚くしかなかった。
何故なら、振り返った先には誰もいなかったからである。

「どこ見てるのかなー？こっちだよ♪」

刻桃は、恐る恐る声がした方向である・・・・下を向いた。

これは間違いなく紅龍の声。

だったら身長差はせいぜい１０ｃｍ。

なのに、何でさらに低い位置から声が聴こえる？

だが、声の主の姿を確認する前に・・・・

ドン！

と、突き飛ばされる。

いつもなら軽く耐えられる一撃だった。だが、刻桃は足元に散らかっていた服に足を取られ、背後にあったベッドの上に押し倒される。

「テメッ・・・・どういうつもりだ、紅りゅ・・・・むぐっ！？」

すぐさま起き上がろうとした刻桃。だが、声の主がそのまま飛び掛かってきた事で、その視界を一気に塞がれる。

しかも、ただ塞がれたのではない。刻桃の顔面に・・・・布越しに伝わるマシュマロのような感触が広がり、下半身辺りには腰に跨る太腿の感触。極めつけは・・・・ウエーブが掛かった長い髪の感触。

そして、それらの感触には覚えがあった。身体の大きさと重さから考えても間違いない。

これは、かつての戦いで因縁が生まれたあの少女と同じ物。

「お前・・・・・理子か？」

半信半疑で刻桃が聞くと、目の前の少女は刻桃の顔から胸を離し、上半身を起こした。

刻桃は・・・・その姿をしっかり目視し、目を見開く。

「びんごーーー！せーかい！りっこりっこりっこりんでぇーす！くふふっ、たっだいまー、モモくーん♪」

見覚えのある改造制服を纏った少女・・・・峰理子は、機嫌良さそうに笑い、刻桃との再会を心底喜んでいるかのように再び抱きつこうとする。

だが刻桃は、ググググ・・・・と、接近してくる理子の顔を阻む。

「・・・・ったく、何がただいまだ。俺の『鉋』を取り返しにでも来たのか？」

「ぶーーーー、第一声がまた変体刀？こんな美味しい状況なのに、モモ君・・・・相変わらず釣れないなー。でも、そういう所も結構魅力的で、徹夜での攻略欲をそそられちゃうんだよね♪」

手を払い、理子は愛らしい童顔を再び刻桃へと近づけ・・・・

「ん～～～♪」

「・・・・・・・・！？」

今度は理子が、刻桃の唇を奪った。
以前とは真逆の展開に、流石の刻桃も身体が熱くなるのを感じてしまう。

「お前・・・・・」

「あははっ♪モモ君が驚く顔・・・・また見れちゃった。でも、これは挨拶代り。理子がここに帰ってきたのはね、大事なお願いがあるからなの。ねぇ、モモ君・・・・・」

満足気に唇を離すと・・・・理子は、刻桃のうなじ束ねられた、かつて自分が使っていたリボンを解きながら・・・・さらにとんでもない事を言い出した。

「理子の・・・・・『刀』になっちゃわない？」

・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・・

「刀・・・・・・？」

「そっ。カ・タ・ナ♪」

聞き返す刻桃の身体に擦り寄り・・・・取り返したリボンを弄びながら理子は言う。

「くふふっ。理子ね、こないだ殺し合った時から、モモ君の事忘れられなくなっちゃったんだ。本当の恋・・・・したみたい。『イ・ウー』も退学になっちゃったから、もうここしか戻ってくる場所もないの」

だからね・・・・

「モモ君は・・・今は何も考えないで、理子の『好き』を受け入れて『刀』になって欲しいの。ヨロイから聞いたよ?虚刀流にとって、誰かの『刀』になるっていうのは、つまり・・・・」

妖艶に笑いかける理子。

だが、ここで刻桃の目の色が変わった。

自らの宿敵たる存在、『ヨロイ』。その名を聞いた途端、刻桃は・・・

「・・・・・・!!」

「きゃうん!?」

理子の身体を押しのけ、今度は仰向けに押し倒した。

解かれた長い銀髪が、理子の身体にかかる。

ついさっきとは真逆の体勢。

理子は戸惑いながらも満足気な笑顔を浮かべるが・・・・刻桃は違った。

瞳からは生気が薄れ、片手を理子の首へと持って行く。おかしな行動に出られたら・・・いつでも締め殺せるように。

「・・・ったく。前に忠告してやったってのに、全然懲りてなかったみたいだな。寝言は寝てから言ったらどうだ?俺には・・・お前を痛めつけてから、ゆっくりじっくり情報を引き出すって選択肢もあるんだぜ?」

僅かとはいえ殺気が溢れる刻桃の一言。

「モモ君ひっどーい。理子の気持ちは嘘じゃないもん。その証拠に・・・モモ君が望む事、何でもしてあげるよ?」

「じゃあ・・・俺の『炎刀・銃』を返せ。ついでに、ヨロイの情報も洗いざらい暴露してもらおうか?」

「それはダメな仕様なのです」

だが、理子は笑みを全く崩さない。
それどころか、仰向けにされているにもかかわらず手を伸ばし、刻桃が羽織るブレザーとワイシャツに触れて脱がしにかかる。

「ごめんね、モモ君。理子は悪い子なの。欲しい物は、誰かの物でも盗んじゃう子なの。だってドロボーだもん。例えモモ君がアリアの奴隷候補でも・・・忍者の婚約者でも、盗んじゃう」

口振りから察するに・・・紅龍の存在と、関係についても調べはついているのだろう。『元』婚約者と言わない辺り、情報は古いよ

うだが。

「そっか。けどよ・・・・・」

「なーに？」

「お前は俺から『銃』を盗んだだけじゃない。『武偵殺し』として、キンジからは兄貴を・・・・アリアからは母親を盗んだ。ヨロイの事を抜きにしても・・・・いくら『イ・ウー』を退学になってるとはいえ、俺が大人しくお前の刀になると思うか？」

「もしかして・・・・理子のせいで、キー君のお兄さんが失踪したとか死んだとか思ってる？」

「・・・・違うのか？」

失踪と死。どっちに転んでも、理子のせいでそうなったんだと思い込んでいた。

「理子は誰も殺してないもーん。だから、『武偵殺し』なんていうのは間違ったアダ名。正確には、『武偵攫い』かなぁー？」

かつて何人も優秀な武偵を消してきた理子。

キンジの兄・・・・遠山金一はその中の1人に含まれてしまい、その罪は神崎かなえに着せられている。

「それにぃ、理子がキー君のお兄さんを殺してないっていうのは・・・・モモ君もよくわかってるでしょ？」

言われるまでもない。

刻桃にとっての遠山金一は、母である鑢風花同様、武偵として憧れの存在。

そんな彼が理子に殺されるなんて事は・・・・実力的に考えればあり得ない。

「ここで選択肢でぇーっす」

理子は、刻桃に首を取られているのも関わらず、両手の人差し指で自分の両頬を突いた。

「モモ君が理子の『刀』になってくれたら・・・・美味しいイベントシーンの後で、モモ君が欲しい情報は全部あげちゃう。今すぐは無理だけど『炎刀・銃』も返しちゃう。もちろん、キー君のお兄さんの事も全部教えてあげるし、アリアのお母さんを助けるために裁判で証言もしてあげる」

「破格の条件だな。美味しすぎて・・・・かえって怪しさ爆発だろ」

「くふふっ。美味しいならそれでいいじゃん。ねぇねぇ。このまま理子の『刀』になっちゃいなよ。そうすれば、いつでもどこでも理

子を自由にし放題。モモ君の性癖に合わせていろんな格好してあげられるし、どんな欲望も受け止めてあげる。お外でもいいよ?理子に・・・・何してもいいんだよ?」

「・・・・・・・」

もしもこの条件が本当なら・・・・この取引は決して悪い物じゃない。自分の欲しい物だけでなく、協力関係にある2人が求める物まで手に入る。

遠山金一が生きているならキンジにとっては朗報他ならないし、神崎かなえの裁判で理子が証言してくれるなら・・・・上手くすれば、最高裁から高裁への差戻審が勝ちとれるかもしれない。

そして、ヨロイと完成形変体刀の情報。『炎刀・銃』の返却。

(俺が理子の『刀』になりさえすれば・・・・全てが上手く行くかもしれない。こいつは、それがわかった上でこの条件を突きつけている)

最悪、ヨロイの情報と遠山金一の行方は、理子を捕縛後、紅龍に頼んで『記憶辿り』で引き摺り出してもらえばいい。

だが、神崎かなえの件については話が別だ。いくら理子が証言を約束してくれても、彼女は基本的にホームズ家を敵視している。捕縛してまかり間違って機嫌を損ねてしまえば、真実を証言させる事は出来なくなってしまう。

『炎刀・銃』もそうだ。理子は『今すぐは無理』と言った。その言葉を信じるなら、今は手元にない可能性が高い。どこか変な所にで

も隠されていた場合、それこそ探すのに骨が折れる。

人身御供。

一瞬・・・・そんな四字熟語が頭を過ぎる。

（武偵は身ぎれいな連中の方が少数派。俺と紅龍はもちろんの事、アリアは言うまでもないし、キンジでさえ違法改造のベレッタ使ってるしなぁ・・・・）

どこかしらで『必要悪』と割り切り、武偵が違法行為に手を染めているのは決して珍しい話じゃない。

その違法行為の延長。捜査のための、女との割り切ったお付き合い。

俺は男だけど・・・・僅かな金銭と引き換えに女郎に売られる女というのは、こんな気持ちなんだろうか。と、いらぬ事まで考えてしまう。

「・・・・・・わかった」

刻桃は・・・・・理子の首から手を離し、覆い被さっていた半身を起こす。そして、観念したかのように、脱がされかけていたブレザ

ーとワイシャツを放り投げ、上半身は黒のタンクトップ1枚だけになる。
理子は『やったぁ♪』と満面の笑みを浮かべて身体を起こした。そして改造制服の上をめくって脱ぎ出す。

ーーーー愛してもいない女を抱くほど、俺は暇でも悪趣味でもねぇよーーーー

かつて理子を押し倒して唇奪った時、彼女に対して言い放った言葉を思い出す。

（結局俺は・・・・・相当悪趣味だったって事か）

軽く自己嫌悪に陥りながらも、刻桃は目の前で脱ぎ出す理子を止めようとはしなかった。『こいつなら・・・・悪くはないか』という半ば投げやりな考えを抱きながら彼女の姿を見据える。

「ありがと、モモ君。優しく・・・・・してね♪」

「・・・そうか。だったら、思いっきり痛くしてやる。自称『穢れ無き乙女』には、かなりキツいかもな」

ジトっとした目で言い返す。完全に言いなりにはならない。それがせめてもの意趣返し。

「ぶーー・・・・モモ君の外道」

「情報と『銃』をエサに、その外道を誘惑したのが運の尽きだ。日頃の行いを呪え」

「でも、いいよいいよ、それでもオッケー。だけど理子・・・・痛いのは別にいいんだけど、ハーレムルートって嫌いなんだよね」

「ハーレムルート・・・・ギャルゲー用語だったな。確かに、俺も誰かに見られながら『そういう事』をする趣味はねぇな」

さっきまでとは打って変わって不機嫌そうに口を尖らせる理子と、どこか安心したような顔で窓へと視線を移す刻桃。

夜でもギリギリわかる。窓から見える、2人分の人影。

それらは徐々に接近し・・・・

「あたしの奴隷2号を・・・・」

「僕の幼馴染兼元婚約者兼パートナーを・・・・」

ガシャアアアアアアン！！！

「「勝手に盗むなぁぁぁぁ！！」」

ガラス窓を蹴破って外から突入してきたのは・・・・

「この・・・・穢らわしいドロボー一族！」

2丁拳銃を構える神崎・H・アリアと。

「彼は僕の『刀』にする予定なんだ。ポッと出の脇役キャラはとっとと退場したまえ！」

右手に『炎刀・銃（オートマチック）』。左手に苦無三本を指で挟むように持った、真庭紅龍。

さらに・・・・

「動くな！」

ベッドルームのドアが蹴破られ、ベレッタを構えたキンジが突入。

だが・・・・

「「・・・・・・・／／／／／／／！？」」

紅龍を除く2人は、目の前の状況を見て一気に赤面してしまう。少なくとも・・・キンジはともかく、アリアの場合は最初っから真っ赤だった。

ベッドの上で半身を起こす刻桃と理子。

身に纏う服もいくらか着崩れている。

初心な2人は、あのハイジャック事件の犯人たる理子を前にしても、目の前の光景が刺激的で・・・なかなか言葉を絞り出せなかった。

「一応・・・礼を言っておくべきか？」

刻桃が聞くと・・・・

「心配したのに。僕という者を差し置いて・・・・こんなところであんな趣味の悪そうな女とイチャイチャと。もう少し遅く・・・・濡れ場になってから来るべきだったかな?」

言葉に棘を含ませ、紅龍は不機嫌そうに返す。

「・・・・少しでもお前に感謝した謙虚な俺自身を否定する。それより、よくここがわかったな」

「僕を舐めないでくれたまえ。これでもキミのパートナーだよ?」

「答えになってねぇだろ」

「深く突っ込むのはやめたまえ。まぁ、キミの危機がわかったのは、殆んどキンジのおかげなんだけどね」

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・

時間を少しだけ遡り・・・・武偵高校舎。

アリアと紅龍は横に並び、廊下を歩いていた。

「アンタも・・・・なりなさいよ」

「嫌だね。他を当たりたまえ」

「こ、刻桃だって、嬉し泣きしながら『2号になる』って言ってくれた・・・・わよ?」

「そんな事・・・・あのモモちゃんが、口が裂けても言うわけないじゃないか。嘘ならもっとマシな嘘をつきたまえ」

「ううう・・・・で、でも、白雪は快く3号になってくれたわよ。これは本当。本当の本当!」

「それだって、キンジという美味しいエサがあってこそだろう?間違ってもキミの人徳や手腕の賜物ではない」

紅龍に痛い所を突かれ、アリアは表情を歪めつつ『ううっ・・・・』と呻き声を漏らす。

事の発端は、アリアと紅龍が偶然バッタリ鉢合わせになったことにあった。

もう生徒も殆んど残っていない時間帯だったが、これを好機と判断したアリアは・・・・『魔剣事件』以降から自分のパーティーに加えたいと考えていた紅龍を、言葉巧みにスカウトしようと企んでいた。

自身の目的を達成するための優秀な手駒・・・・奴隷4号として。

「まぁ、『４号』という数字は『未確認生命体第４号』みたいで光栄だけど・・・やはり嫌としか言えないよ」

「みかくにんせいめいたい？なによ・・・それ」

理解できないアリアは、首を傾げる。

「そこは気にしないでくれたまえ。だが、キミがそんな態度である以上、モモちゃんのパートナーとしてならある程度の『協力』は約束出来ても、個人的に『組む』事は出来ないね」

「でも、あたしには時間が・・・」

「キミの事情は情報としてなら知っている。気の毒にも思う。だが、個人的には知った事じゃない。『魔剣』の時は、僕と白雪が依頼したからこそ組んだのであって、依頼なしでそれ以降も組めるかどうかは別問題だ。僕は・・・モモちゃん以外の人間と、必要以上に組む気は毛頭ない」

他を当たりたまえ。また同じことを言い、ツーンとそっぽを向く紅龍。

アリアは悔しさに拳を握り、いつでも銃や刀を抜けるように身構えるが・・・すぐに行動を起こす事は出来なかった。

（刻桃をあたしやキンジと一緒にフロントに置いて、コウを白雪と

一緒に中・遠距離に配置すれば、死角はより薄くなる。けど・・・・・）

アリア目的である『神崎かなえの救出』と、刻桃の目的たる『完成形変体刀の蒐集』と『ヨロイの捕縛』。
共通の敵である『イ・ウー』に関する情報の共有など・・・ある程度の協力関係を結んだとは言っても、実際はお互いの利害が一致した時にしか動かないのが現状。お互いの性格上、いつ破綻してもおかしくない諸刃な関係。

もしも・・・もしも2人を本当の意味で引き込む事が出来れば、間違いなく目的を達成するための近道になる。

目的を果たすため、チームを盤石とするためにも、2人の力は必要不可欠。そう考え、まずは外堀を埋めるべく紅龍のスカウトを始めてみたのだが・・・まったく上手く行かなかった。

キンジの時のようにしつこく粘って根負けさせようにも、あの2人はキンジと違って実力のムラッ気がない。1対1ならまだどうにかなっても、2人掛かりで攻撃されれば・・・勝ち目はないだろう。悔しいが、そこだけは渋々認める。

だからこそ、諦めるという選択肢もなかった。これだけの力をみすみす放っておく手はない。

何か言葉を絞り出そうとするが・・・なかなか出てこない。

そんな時、校門を出た所で・・・

「アリア。それに・・・・・コウ!?」

ようやく帰る気になったキンジと出くわした。キンジは2人の少女・・・・特に紅龍の姿を見て、ある種の驚きの反応を見せる。

それに気づいた紅龍が聞こうとする前に・・・・キンジが先に口を開く。

「コウ、お前・・・・刻桃はどうしたんだ?一緒じゃないのか?」

「モモちゃん?いや、知らないね。今日は午後に情報科の授業に向かってから全く会っていないよ?アリア・・・・キミは?」

「あたしも知らないわよ」

「だが・・・・その刻桃は、ついさっきコウに呼び出されて女子寮に向かったぞ?」

「「!?」」

食い違う証言。だが、これだけは察しがついた。

刻桃は、紅龍の名を語る何者かに騙され呼び出された。これだけは確かだ。

「キンジ！その時の状況をもっと詳しく話したまえ！！アリア、場合によってはキミにも協力してもらうよ。いいかい？」

「ま、まぁ、仕方ないわねっ。奴隷を助けるのは主人の務めだもの」

「おい、一体何がどうなってるんだ。俺にもわかるように話せ！」

「詳しい事は走りながら話す。だから・・・・とりあえず情報科に向かおう」

「直接女子寮に行った方が早いんじゃないか？」

キンジの提案。

「女子寮に限定されてるとは言っても、部屋数は半端じゃない。なら、情報科である程度当たりをつける方が手間がかからなくていい」

「急がば回れ・・・・か。わかった。俺も協力する。行くぞ、２人とも！」

「ああ！」

「なんでアンタ達が仕切るのよ！奴隷の分際で！リーダーはあたし・・・・って、待ちなさい！！」

いろんな意味で友の危機かもしれないこの事態。

紅龍とキンジはいち早く走り出し、それを追う形でアリアも一緒に

情報科へと向かった。

そして・・・女子寮の監視カメラに映っていた刻桃の姿を追跡調査。彼が誘いこまれた部屋を割り出したのである。

そして次回の物語は・・・・・回想前に戻る。

第４０話（後書き）

第三弾突入。そして、何やらせてんだシリーズ第二弾。と言ったところでしょうか。

理子は本気か否か、いまいちよくわかりませんけど、刻桃は目的のためには手段を選ばない所があるので、そういう事をするのにあんま抵抗なかったりします。乱入者によって未然に防がれましたけど。

仮面のヴァイオリン弾きシリーズでは、そういうのは割と健全な方向でやっているので、こちらでは際どい方向に冒険したくなったりというのも理由の一つだったりします。

まぁ、エロ方面は進んでもＴｏ　Ｌｏｖｅる程度で自重するつもりです。けど、めだかボックスで指摘されてるように、あのマンガ、いつの間にかスクエアに移籍して以来やりたい放題なので微妙なんですけど。

それは置いといて、第三弾では、刻桃の闇や歪んだ部分も、ほんの少しは書けたらと思います。

理子との関わりが刻桃に何をもたらし、理子は何を想うのか。そして、彼と最も付き合いが長く親しい女性であるはずの紅龍はどう出る？

第４１話

女子寮・非常階段。

「それでモモちゃん・・・・さっきの話は全部本当なのかい？」

「本当だ。美味しい部分も、不愉快な部分も、全部！」

「だが・・・そんなの当てになんかならないだろ。アイツは、あのハイジャック事件で俺達を殺そうとしたんだぞ！」

「キンジの言う通りよ。ここで会ったが百年目、絶対風穴あけてやる！」

紅龍、刻桃、キンジ、アリアの４人は、非常階段の昇りながら屋上へと一直線に向かう。

あの後・・・追い詰められた理子は、閃光手榴弾を使って目を晦まして逃亡。割れた窓から飛び出し、動力付きのワイヤーで女子寮の屋上へと上昇した。

それをギリギリの所で見取った刻桃は、救援に現れた３人に、あの部屋での事を端的に・・・包み隠さず説明しながら、屋上を目指して駆ける。今度こそ・・・理子を捕縛するために。

バァン！！

アリアの蹴りと、刻桃の掌底が同時に決まり、屋上の出入り口が破られる。

扉の向こうでは・・・・

「あぁ・・・・今夜はいい夜。男もいて、硝煙のにおいもする。理子、どっちも大好き」

理子が余裕な態度で待ちかまえていた。

ニイィィ・・・・と笑うその目は、ハイジャック事件の時のような、獣のように貪欲な瞳となっている。

「峰・理子・リュパン４世、今度こそ逮捕よ！ママの冤罪・・・・償わせてやる！！」

アリアはガバメントを抜き、理子へと特攻。

「オルメス・・・・やれるものならやってみな！！」

理子も拳銃・・・・ワルサ―Ｐ９９を２丁抜く。途端、女子寮の屋上は、２人の双銃使いによってすぐさま戦場へと変わった。

武偵同士の戦い。防弾服の着用を前提とし、銃弾を打撃武器として使う格闘術・・・・アル・カタ戦。

計４丁分の銃弾が交差し、弾が切れればすぐさま弾倉を交換。加えて、新体操のような鮮やかな動作からなる格闘術。身長１５０ｃｍに満たない小柄な身体にもかかわらず、２人はハイレベルな戦いを繰り広げる。

やがて全段撃ちつくすと、アリアは二刀を抜刀。理子も大振りのナイフを二本抜き、戦いは格闘戦へと切り替わる。

「・・・さて、そろそろ止めるか」

傍観を貫いていた刻桃が、一歩前に出る。

このままじゃ、どちらかが怪我するまで戦いは終わらない。２人とも弾丸も撃ち尽くしたようだから・・・この辺りが割り込み時だと判断する。

「なら、ここは俺に任せてくれないか？」

キンジは右手で拳銃を抜き、左手にはバタフライナイフを構える。

その瞳は僅かにつり上がり、声も・・・いつもより若干低く、自信に満ちた物へと変化している。

「愛らしい仔猫同士の喧嘩を鑑賞するのは・・・・俺の趣味じゃない」

おまけにキザな台詞。これはもう、間違いない。

（ヒステリアモードか。けど・・・・なんでだ?）

なんで?いつの間に?いつそんな要素があった?と、刻桃は疑問に思ったが、その理由はすぐにわかった。

目の前で戦う2人の少女は・・・・スパッツ無しの状態で激しい戦いを繰り広げている。

つまり、パンチラを通り越してパンモロの連続。

おまけに、セーラー服の下からもブラがチラチラ見え隠れしている。

普段なら特別に意識しなければ気にも留めない事。

だが、キンジはそういう事を恐れるあまり、意識しないようにしているつもりが、逆に意識してしまう結果となっていたのである。

ついでに最近のキンジは、どうもアリアでヒスりやすくなっているように見える。

・・・・あんな女のどこがいいのだろうか。

あまりに初心なキンジを哀れに思いつつ、刻桃は拳をバキボキ鳴らす。

「だったら・・・俺が理子をなんとかするから、お前はアリアを止めろ。いいな？」

「わかった」

「紅龍は常に鎖を用意しとけ。止めてもまだ暴れ出すそぶりを見せたら・・・容赦なく拘束頼む」

「委細承知。キミに言われずとも・・・最初からそのつもりさ！」

紅龍が足首から鎖を解いたのを合図に・・・刻桃とキンジは、交戦中の２人の少女の間に割り込んだ。

まず、アリアの二刀は・・・・

「アリア、ここまでだ」

「キ・・・キンジ！？」

キンジのバタフライナイフとベレッタによって、いとも簡単に弾かる。

もう一方、理子のナイフはというと・・・・

「・・・・・・！？」

「こいつも虚刀流としては名前のない技だ。けど、それでも難易度は結構高いんだよな」

刻桃が使った技は、いわゆる真剣白刃取り・左右片手編。
理子が握る左右のナイフを、刻桃は左右それぞれの人差し指と中指を使い、挟むことで押さえこんでいだ。それも、二本同時にである。

「刻桃・・・お前！？邪魔するんじゃねぇ！！オルメスは・・・・」

「お前の獲物・・・なんだろ？けど、ここまでにしとけ。本気じゃない戦いは時間の無駄だし、無理に続けても虚しいだけだ」

裏の喋り方で激昂する理子を・・・・・刻桃は言葉少なく諭す。
キンジはもちろんの事、戦っていたアリアもまた、理子が本気じゃない事はわかっていた。

今の彼女は『真の双剣双銃』を使っていない。どんな理由があるにせよ、本気でないことは確かだった。

理子は腕の力を抜き、ナイフを仕舞う。

アリアはそれを好機と判断。理子に斬りかかろうとするが・・・・・

「待て、アリア。理子と戦っちゃダメだ」

キンジが阻む。

「キンジ!?なんでよ。どうして止めるのよ」

「アリアを犯罪者にしたくないからだよ。考えても見ろ。アレだけの事件を起こした理子が・・・・なんで武偵の巣窟である武偵高に姿を現す気になったか。少なくとも、犯罪者のままじゃ愚の骨頂だ。そんなバカなら、俺達はあんなに手こずらなかった」

「きっと初めてなのよ。バカやったのは!」

短絡的なアリアは・・・多少冷静になったとはいえ、まだ理子へと刀の切っ先を向ける。

しかし、今度は刻桃が理子の前に立ち、アリアに対しての壁となる。

そして理子へと振り向き、一気に核心を突く。

「・・・司法取引。そうだな?」

「モモ君せーかい♪」

「つーか、アリア以外はみんなわかってたみたいだけどな」

「でもでも、花マルあげちゃう。モモ君の言うとーり、理子はもう、あの事件についてはとっくに司法取引を済ませているんですよ。きゃはは♪」

つまり、今の理子を逮捕すれば、不当逮捕はもちろんのこと・・・・暴行罪、不当強襲罪など、いくつ罪が重なるかわかったものではない。

「で、でも、ドロボーの言う事信じるなんて・・・・・口から出まかせかもしれないじゃない」

「それはないよ」

納得いかないアリアの言葉を・・・・・紅龍が否定する。
紅龍はいつの間にか鎖を構えるのをやめ、膝の上にノートパソコンを置いて座り込んでいた。そして、手慣れた手付きでキーボードを叩き、最後には溜息を漏らしながら電源を落とした。

「たった今、裏を取った。彼女の言う事は・・・・全て事実だ」

アリアは悔しそうに顔を歪めながら、日本刀を収納。
拳を硬く握りしめ、せめてもの抵抗と言わんばかりに理子を指差す。

「でも、ママに『武偵殺し』の濡れ衣を着せた罪は別件よ！理子！

その罪は最高裁で証言しなさい！！」

「いーよ」

「嫌というなら力ずくでも・・・・・・って、え？」

「だからいーよ。証言してあげる。モモ君から聞いてない？ちゃんと言ったハズだよ？アリアとキー君の欲しい情報は全部教えてあげるし、裁判で証言だってしてあげる・・・・って」

「・・・・・・そういえば」

さっきまで冷静さを失っていた事もあり、アリアはすっかり忘れていたらしい。というより、頭から『嘘』だと決めつけていたという方が正しいだろう。

「でも、ホントにホント・・・・なの？」

一応はまだ疑っているようだが、理子の言葉を聞いたアリアは、嬉しさを隠し切れていない。

「うん。アリアはママが大好きだもんね。理子も、お母様が大好きだから。だからわかるよ。ごめんね、アリア。理子は・・・・理子は・・・・」

理子は顔を俯かせ・・・・

「お母様・・・・ふぇ・・・・・えぅ・・・・・」

「ちょっ・・・・・理子!?」

嗚咽と共に、大粒の涙を落とし始めた。
イキナリ泣き出し、手の甲で涙を拭う理子に、アリアはオロオロ。
困り果ててしまう。

あまりのバツの悪さに、アリアは慌ててハンカチを取り出して理子の涙を拭ってやる。

「な・・・・なに泣いてんのよ。ほら、涙拭いて、ちゃんと話しなさい」

「えぅ・・・・ぐすん・・・・うん」

宥めるアリアと・・・・嗚咽を漏らしつつも落ち着きを取り戻す理子。
だが、傍から見ていた刻桃、紅龍、キンジの3人は・・・・しっかりと見ていた。見逃さなかった。

「・・・・・・・ニヤリ」

「「「・・・・・・・・・」」」

理子の口の端が、しっかりツリ上がったのを。

それを知らないアリアは、必死で理子を宥める。

なんとも単純で騙されやすい女。そう思いながらも、不毛な争いをさせないために、３人はあえて突っ込む事をしなかった。

やがて、理子はアリアに宥められつつ・・・泣いたフリをしながら語り出した。

「理子・・・理子・・・アンタ達のせいで、『イ・ウー』を退学になっちゃったの。しかも負けたからって・・・『ブラド』に理子の宝物の十字架を・・・『炎刀・銃』ごと取り上げられちゃったんだよぉー」

「「「・・・・・・・!?」」」

ブラド。

その名が出た途端、周囲の空気が張り詰める。

アリア、刻桃の目はツリ上がり、紅龍も真面目な顔つきで顎に手を当てる。

「おい・・・どうした?ブラドって・・・なんなんだよ」

この場で唯一、緊迫した空気から置いてけぼりを喰らったキンジが聞く。
それを察した刻桃とアリアは、数秒ほど間隔を開けると・・・ポツポツ話し始める。

「ブラド。通称・・・『無限罪のブラド』。ヨロイ追ってたハズが・・・とんでもないのに行き当たったな」

「どういうふうに・・・とんでもない奴なんだよ」

「ブラドは・・・『イ・ウー』のナンバー2なのよ」

「!?」

事の重大さを理解し、キンジは目を見開く。

「ヨロイを差し置いて、このタイミングでラスボス級が絡んでくるとは。本当なのかい?」

確認の意味も込めて、紅龍が聞き返す。

「そーだよ。理子はブラドから宝物を取り返したいの。だからモモ君・・・みんな・・・理子を助けて!」

理子は、涙に濡れる瞳を向けて懇願する。

「助けて・・・・か。具体的にはどう助ければいいんだ?」

「・・・・うん。モモ君・・・・キー君・・・・アリア・・・・コウちゃん」

刻桃が聞くと、理子はゴシゴシトと目元の涙を拭う。
そして満月を背に、満面の笑顔を刻桃達へと向け・・・・・とんでもない事を言い出した。

「みんなで一緒に・・・・ドロボーやろうよ♪」

・・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・

翌日。

東京武偵高２年Ａ組。

「たっだいまー！りこりんが月の都から帰って来たよー♪」

いつもの改造制服で、理子は約一カ月ぶりに教室に現れた。
教壇でご機嫌そうに笑顔を振りまく理子に・・・・男女問わず、クラスメイト達が群がるように集まっていく。

どこからか『りこりん！りこりん！りこりん！』と、謎のりこりんコールまで聴こえる始末。

因みに、これまでの理子の長期欠席の理由は・・・・書類上は『長期の極秘捜査でアメリカに行ってて、昨日帰ってきた』という事になっていた。
理子本人、あるいは司法取引に関わった役人が、そういう辻褄合わせの設定を用意したのだろう。

いくら理子が『武偵殺し事件』の犯人とはいえ、少年武偵法のせいでそれを知る者は関係者以外にはいない。
おまけに、最も性質が悪い事に・・・・理子は元々クラスの人気者。ここでなんらかの警告したとしても、クラスメイト達はあの偽りの笑顔に騙されて理子の味方に付くだろう。

それがわかっているからこそ・・・・キンジは露骨に顔をしかめ、アリアも不機嫌オーラを隠さず、怒りに震えながら手に持った鉛筆を圧し折る。

紅龍はそんな2人を流し見つつ、理子の一挙一動から目を離さずにいる。もしも変な行動に出れば、問答無用で取り押さえる気も満々だった。

そして・・・・刻桃はというと。

「くかーーーー・・・・・・」

理子の立ち振る舞いに突っ込まずにいるどころか・・・・・机に突っ伏して眠っている所だった。
そして、そのうなじには、見なれたピンク色のリボン。

「「「・・・・・・・・・・・・」」」

あまりにのんきな態度。キンジは溜息をつき、アリアと紅龍は露骨に不機嫌オーラを放つ。

・・・・・・・・・

そして・・・・時間はあっと言う間に進み、今は放課後。

「終わったー！モモ君、早く帰って続きしようよ」

「了解。とは言っても、俺は・・・・誰でも出来る事しか手伝えないけどな」

探偵科での授業が終わり、理子と刻桃は並んで校舎を出る。

「くふふっ。それでもいいの♪理子達、恋人同士じゃーん！」

「否定する。確かに・・・・仮契約っつーことで、俺はお前の『刀』になった。けど、そっちは思いっきり否定してやる」

「酷いよモモ君。理子にあんなことしといて・・・・やり逃げだ！」

「何かしようとしたのはお前の方だろ。そういう調子の良さも・・・・俺は否定する。大体、あんな物見せられた上、『銃』はブラドの手の中。ほら、とっとと行くぞ」

刻桃は、理子のツーサイドに結われたテールを引っ張る。

「ぎゃん!?」

理子は涙目になりつつも、何処か嬉しそうに大人しく従う。そんな2人の姿を・・・・物陰から窺う3人の人影があった。

「モモちゃん・・・・一体どういうつもりなんだろうか。いくら『銃』のためとはいえ、なんであんな痛々しいぶりっ子の『刀』なんかに・・・・」

「刻桃の奴、あたしの奴隷のクセに理子なんかと・・・・」

恨み節を吐く紅龍とアリア。

「だが、俺達のためにもああしている以上、むやみに口出しも出来ないだろ。それに・・・・この結果に落ち着いた原因は、お前達にもあると思うぞ。もしも刻桃が理子を庇わなかったら、今頃交渉は決裂していた可能性がある」

「「・・・・・・・・うううっ」」

キンジの言葉を受けて、紅龍とアリアは黙ってしまう。
そして、あの夜行われた・・・・その後のやり取りを思い出す。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・

前日の夜。

「みんなで一緒に・・・・ドロボーやろうよ♪」

理子が笑顔でとんでもない事を言い出した後・・・・

「だからモモ君、理子を護って。『刀』になって。お・ね・が・い♪」

頬に人差し指を当て、さらにとんでもない事を付け加えた。
これに反発するのは・・・・・

「ふざけるんじゃないわよ。なにがドロボーよ。それに・・・・刻桃は、あたしの奴隷2号なのよ！」

「それ以前に僕のパートナー兼『元』婚約者だ。そういう話は僕を通してからにしたまえ！！」

名指しされた刻桃ではなく、何故かアリアと紅龍だった。
2人はそれぞれ武器を取り出し、いつでも理子を始末できるように構える。

「お前達には聞いてねぇよ。オルメス！くノ一！あたしは・・・・刻桃に聞いてんだよ！！」

理子は『裏』の顔を見せ、乱暴な口調と怨念でもこもったかのような視線で、2人の少女を睨んだ。
それなりに修羅場をくぐり抜けてきた2人すらも、あまりの変貌ぶりに一瞬だけとはいえ怯まされてしまう。

理子は満足気にそれを見届けると、くるりと刻桃に振り向いた。
その顔はさっきまでとは打って変わって穏やかで・・・・・

「で、もう一度聞くけど・・・・モモ君はどうするの？理子の『刀』になってくれる？」

口調も『表』の物に戻る。そして刻桃の目の前に、契約の証しとでも言うように・・・・ピンク色のリボンを差し出した。
傍から見ていたアリアと紅龍、キンジもまた、刻桃を見据えた。

何処か安堵したような表情だ。

アリアの奴隷になることも、紅龍との婚約も否定した刻桃が、大人しく誰かに従うハズがないと考えたからだ。

しかし・・・・

「・・・・・・・・ああ、いいぜ」

刻桃の口から出たのは、誰にとっても予想を大きく飛び越えた一言。

理子からリボンを受け取り、何食わぬ顔で自らの銀髪をうなじの所で束ね直した。

これで元通り。

ただ1人、理子は『やった♪やった♪』とご機嫌な笑顔で飛び跳ねるが、他の3人はもう気が気じゃない。『刀になる』という言葉の意味を漠然としか察していないキンジとアリアは、イマイチ状況を把握出来ていなかったが・・・・

「モモちゃん・・・本気、なのかい？」

言葉の意味を知る紅龍が代表となり、恐る恐る聞く。

「本気だ。こんな事は・・・本気じゃなきゃ言えない。それはお前だって知ってるだろ？」

「知っているからこそ、忠告するんだ。キミが・・・虚刀流の剣士が誰かの刀になると言う事は、つまり・・・」

「ああ。だからこれは、あくまで『仮契約』って扱いにするつもりだ。そもそも・・・『銃』がブラドの手に落ちている以上、手段を選んじゃいられない」

「なに勝手なこと言ってんのよ！」

流れにはあまりついて行けてなかったが・・・せっかくの奴隷が宿敵に奪われかけてるのを防ぐべく、アリアが割り込んでくる。

「いくらアンタがあたしの奴隷2号・・・・ってことを否定しても、協力関係までは否定させないわよ。こいつは、『イ・ウー』の構成員で、おまけにリュパンの曾孫なのよ！」

「だったら、理子はもう『イ・ウー』じゃないし、俺はリュパンに恨みなんかない。だから武偵としてこいつからどんな依頼を受理しようと、お前にとやかく言われる筋合いはねぇよ。それに・・・・」

「・・・・なによ」

「俺達がそれぞれ欲しい物は、全部こいつが握っている。紅龍に『記憶辿り』させればある程度はどうにかなっても、俺とお前の欲しい物は、全部は手に入らない」

情報だけならともかくだが、『炎刀・銃』と『証言』だけはどうにもならない。

「つーわけで、俺は理子の『刀』になる。誰であろうと俺の決断にケチはつけさせない」

「い、いや・・・・考え直したまえ。今ならまだ間に合う！キミにだって選ぶ権利はあるだろう。こんな取引で自分を捨てるなんて、馬鹿げている！！」

いつも尊大な紅龍が、珍しく声を震わせて動揺する。

「だいたい・・・なんで彼女なんだ。彼女はキミを利用するだけ利用すれば、間違いなく折れた刀のように切り捨てる」

「コウちゃんひっどーい！人の事をそんなに悪く言うなんて・・・・ぷんぷんがおーだぞ！」

両手で頭の上にツノを作る理子。
そんな態度が・・・紅龍をさらに苛立たせる。

「黙りたまえ！だったら・・・今ここで、力ずくで読み調べさせてもらう！！」

そして両手の革手袋を外し、理子に突撃する。
近距離からの、忍者の手加減なしの脚力を前に、理子は一瞬反応が遅れたが・・・・

「やめろ・・・・バカ紅龍！」

「・・・・・・・！？」

刻桃が割って入り、紅龍の手を握る形で受け止めた。

「モモちゃん・・・・なんでこんな・・・・」

「俺はただ、依頼人を護っただけだ。けど、もしもこのまま強硬手段に出るなら・・・俺はお前を倒さなきゃならなくなる」

「・・・・・・っ!?」

「刻桃、何考えてんのよ。コウは・・・アンタのパートナーでしょ?裏切る気!!」

アリアは怒り心頭な様子で噛みついてくるが・・・

「この依頼は俺が個人で受けた物だ。依頼人が変われば、例えパートナー同士であろうと武偵の敵味方の関係も変わる。それは特に珍しい話じゃねぇだろ」

刻桃はアリアの目を見ないで冷たく言い放つ。
武偵として幾多の依頼を経験してきたアリアと紅龍は、その正論を前に何も言い返せなくなる。

「・・・2人とも、落ち着いたか?」

2人が落ち着いたのを見計らい、キンジがアリアと紅龍の肩に手を置いた。

「かなえさんの無実を証言させるためにも、それから兄さ・・・・いや、俺が欲しい情報を手に入れるためにも、この場は一先ず堪えるんだ」

「しかし・・・・」

「刻桃はあたし達を裏切って理子に・・・・」

「そもそも、刻桃は俺達を裏切ってはいない。さっきも言っていただろう。理子はもう『イ・ウー』じゃないし、刻桃は依頼を受理した武偵として当たり前の行動に出ただけだ。『刀』云々の意味は・・・・俺もよく知らないが、今この場での仲間割れは避けるべきだ」

キンジの理詰めの説得。
多少頭に血が昇っていたとはいえ、紅龍とアリアも、それがわからないほどバカじゃない。

誰も何も言えない・・・・もしくは言わなくなり、事態はどうにかこうにか沈静化。

嵐の発生源である理子はというと、満足気に笑って屋上の出入り口に立った。

「うんうん♪みんな、理子のためにありがとー！」

「「・・・・・・・・・!!」」

アリアと紅龍が不機嫌そうに顔を歪めるが、理子は全く気にも留めない。

「まずはー、理子とモモ君が独自に下調べするから、1週間くらい待機しててーよ」

「・・・俺も手伝うのか?」

「当然じゃん。モモ君はもう・・・理子の物なんだし」

そう言って、刻桃に腕にしがみつこうとするが・・・・

スカッ。

刻桃が避けたことで、理子は腕を掴み損ねてバランスを崩す。

「くふっ。モモ君の照れ屋さん」

「否定する。俺とお前は、あくまでまだ仮契約で繋がってるだけだ。それより・・・具体的にはなにすればいいんだ?」

「それはこれからじっくり教えてア・ゲ・ル。今夜は寝かさないぞ♪」

バチコーン！とウインクする理子。

「まぁ、睡眠は授業中にでも取ればいいし・・・それぐらいでいいなら付き合ってやる」

何処か観念したかのように、刻桃は言った。
武偵らしく『依頼』と割り切ってしまえば、かつて敵対した相手でも多少は従順になってしまうようである。

「キンジ、アリア、そういうわけだから・・・今日は帰らない。明日また、教室でな」

「くふふっ。じゃーねー！」

こうして・・・刻桃と理子は屋上を去った。
あとには悔しさに顔を歪める紅龍と・・・・

「あたしがドロボー・・・よりにもよってリュパンと組んで・・・・」

ホームズ家の名誉と良心の呵責に苛まれ、虚ろな目で呟くアリア。

「・・・・この後始末はどうすればいいんだ」

結果的に面倒事を押し付けられたキンジが残された。

第４１話（後書き）

晴れて理子の『刀』となった刻桃。改めてリボンも貰い、とりあえず元通り。

一方紅龍とアリアは、刻桃を自分の物にすべく（意味はそれぞれ違うが）動いていたため、心中穏やかではない様子。まさにトンビに油揚げカッ攫われた。白雪曰く『泥棒猫』展開。

理子は当然利用するだけ利用して使い捨てる気満々ですけど、刻桃も様々な思惑、企み、そして想いの元、理子の『刀』となる事を選びました。

次回はどうでもいいかもしれない刀語リンクも交えながら、物語を進行させていきます。では！

第４２話

夕方・キンジの部屋。

そこではアリアと紅龍が、この場にいない理子と刻桃に対して恨み節を吐いていた。
その会話の内容は、主に２人に対する悪口の連続。紅龍の『モモちゃんのバカ。浮気者』から始まり、アリアは『よくもあたしの奴隷２号を。理子にはいずれ、お仕置きが必要ね』と、軽く銃の手入れをしながら言い、キンジはそんな２人の悪口に『おーおー、やっちまえやっちまえ！』といった感じで適当に相槌を打つ。
キンジもキンジで、刻桃が理子の味方に付いたのには、友として面白くない物があったのだろう。

しかし、３人の腹はもう決まっていた。

理子は、刻桃だけでなく、キンジとアリアにもドロボーの片棒を担がせるために、それぞれが欲しい物をエサに誘って来た。
当初、キンジは異を唱えたが、アリアと紅龍はそれを『必要悪』として割り切る事にしたのである。キンジもまた、唯一の情報源を失わないためにも最終的に渋々納得する。

理由はもう１つある。

ドロボーは普通なら窃盗罪として前科がつくのだが、今回は犯罪になりえない。
何故なら、ブラドは『イ・ウー』のナンバー２。相手が『イ・ウー』なら法律の外。仮に窃盗罪で逮捕されても、起訴される事はまずな

いからだ。

「・・・・っていうかなぁ。いいかげんその『イ・ウー』について教えてくれないか？」

「「・・・・・・・・・」」

アリアと紅龍はそっぽを向き、口を閉ざす。

「無視するな！なんでこの話になると黙るんだ。今度の敵がそこのナンバー2である以上、今日こそ話してもらうぞ！」

珍しく強気で強引なキンジ。

「ダメ。教えられないわ」

「パートナーの俺にも教えられないのかよ」

「パートナーだからこそ・・・・なんだよ。そうだね？アリア」

「コウの言う通りよ。全部知ったら、もう後戻りは出来ない。最悪アンタ・・・・消されるわよ」

「・・・・！？」

だが、アリアと紅龍は、キンジを半ば脅す形で黙らせる事にした。

消される。普通に考えれば、『殺される』という意味だろう。だが、ヘタすればそれだけでは済まないという意味だ。

命はもちろんの事、戸籍、住民登録、銀行口座から、レンタルショップの会員情報といった痕跡まで全て消される。その人間は、記録上存在しなかった事にされる。

大抵の先進国において、『イ・ウー』は国家レベルの極秘情報扱い。日本でも、ヘタに知ってしまえば『公安０課』や『武装検事』といった、『殺しのライセンス』を持った国内最強の仕事人に狙われる可能性も出てくる。

ヒステリアモードのキンジでも、相手が悪すぎる存在。

それを聞かされたキンジは、あまりに衝撃的な事実に・・・口を噤むしかなかった。

「それより、問題は刻桃よ。あのニセ剣士・・・よくもよくもよくも！！」

ついさっきまでの『イ・ウー』の話題を打ち切り、アリアの怒りの矛先は、今度は刻桃へと向いた。

彼は裏切ったわけじゃない。そんな事はわかっている。だが、あっさり宿敵である理子の味方についた事は話が別だった。

「アイツの事だから、どうせいい子ぶりっ子の理子に泣きつかれて・・・騙されてるんだわ。変な事もされて、虜にされたに決まってる！」

「おい、アリア。いくらなんでも話が飛躍しすぎだ。刻桃は・・・・今も仲間なんだぞ」

「キンジ、黙りなさい。それでもあの時、あの2人はベッドの上にいて・・・・ふふふ・・・・服も少し脱げ・・・・着崩れ・・・・現行犯！アンタ達もしっかり見たハズよ！！」

「それは・・・・」

キンジもあの状況を見てしまっただけに、これ以上は反論できなくなる。
紅龍も、難しい顔をして考え込んでしまう。

（確かにモモちゃんは、目的のためなら手段を選ばない所がある。有益な何かと引き換えに『そういう事』を強要されれば、それを拒むことはしないだろう）

なんだかんだで、性格はともかくとして、理子の見てくれは同性の目から見ても間違いなくいい。刻桃も所詮は男。無下にする理由の方が少ないだろう。

（だが、理子はどういうつもりなんだ？一度は敵対した彼を『刀』として雇うなんて。もしかしたら、彼女は知っているのだろうか）

四季崎記紀が、事実上最後に造ったと言われている最後の刀。『完成形変体刀』を上回る最高傑作。その名も、『完了形変体刀』の存在を。

（ただ単に、それを知らずに護衛として雇った可能性も捨てきれない。せめて数秒でも触れられれば、僕の忍法で企みを見抜けるんだが・・・・）

それをやろうとすれば、刻桃は黙っていない。全力を持って排除しにかかるだろう。

ふと、昨日の夜の事を思い出す。革手袋を脱ぎ、理子に対して『記憶辿り』を強行しようとした時・・・・それを阻んだ刻桃に触れる結果となった。

そしてその時・・・

――悪い、紅龍。どんなに恨んでもいい。母上に言いつけたきゃ好きにしろ。パートナーを契約を破棄してくれても構わない。だから・・・こいつの事は、俺に任せてくれ――

（・・・あの一瞬じゃ、ここまでが限界だった）

僅かに読み調べてしまった刻桃の胸の内。
どういう思惑があるかまでは読めなかったが、刻桃は覚悟の上で理子の『刀』になる事を選んでいだ。

最も付き合いが長い自分じゃなく、ポッと出のゴスロリぶりっ子女を『仮契約』とはいえ『所有者』に選んだのは非常に腹立たしい。だが、少なくとも女の身体で虜にされて身も心も動かされたわけでないのだから、刻桃に限った話なら信じてもいいかもしれないと考えていた。

出来る事なら、同じような悩みを抱える白雪に相談してもよかったのだが、今の彼女は、S研の合宿で島根県の出雲にある『三途神社』に行っている。
そこはかつて『尼寺』や『駆け込み寺』と呼ばれ、外界との関係に距離を置くかのごとく、千段もの階段の上に存在していた。現代でもその時の名残なのか、特殊な環境下で生きてきた女性達が巫女となり、御神体を護っているらしい。

最も興味深いのは、三途神社は尾張時代半ば頃、長い歴史の中で１０年にも満たない僅かな期間だけ『武装神社』であったと記録に残っている事だ。
現代では武装神社で無くなってはいるが・・・・護りの手段を全く持っていなかったわけじゃなかった。『凍空（イテゾラ）一族』という怪力一族がその護衛役として、数百年に渡り代々神社と巫女達の護衛役を務めている事も、その筋では有名な話だった。

（まぁ、それは置いといて・・・・）

彼がこの部屋に帰ってきた時は３人がかりで捕縛して、拷問でも尋問でも何でもして、改めて真相を問いただすつもりだった。

しかし、刻桃はこの日、部屋には帰って来なかった。

この日だけでない。以降何日も理子の部屋に泊まり込み、毎晩２人っきりで何やら怪しい事をやっているようだった。

その証拠に・・・・２人は昼間、休み時間の殆んどを睡眠時間に当て、酷い時は授業中まで居眠りする始末。

一体毎日なにをやっているのか。気になった紅龍とキンジが軽く探りを入れてみると・・・・

「・・・・理子の奴、夜は寝かせてくれねぇんだ。あれだけやっ

といて・・・・・ったく、今ぐらいは寝かせろ・・・・・」

（（や・・・・やるって何を!?））

寝惚けた刻桃からは、耳を疑いたくなるような答えが返ってきた。
キンジは露骨に顔を引き攣らせ、紅龍も『モモちゃんのバカ。信じてたのに・・・・』と、呪詛の念を漏らす始末。記憶辿りを使って確かめようにも、やったら2人の濡れ場が見えてしまいそう・・・・という恐怖から、使う気も起きなかった。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・

そんなこんなで、紅龍達と刻桃の関係は、ギクシャクしながらも１週間の時が流れた。

東京武偵高は、中間テスト期間に突入。
生徒達は一般科目のテストと体力テストを終えた後、各専門学科でそれぞれ必要な単位を得るために分かれた。

「ふあぁー・・・・・」

刻桃は眠い目を擦りながら、探偵科及び救護科自由参加の生物学テストを受けるために、大視聴覚室にいた。
貰える単位は０．１単位だけだが、試験内容はＤＶＤを見て答えるだけの比較的楽勝な物。時間的に余裕もあったため、受ける事にしたのである。

そんな時、刻桃の隣に・・・・・

「・・・・刻桃？」

「・・・・・・ん？」

キンジが姿を現した。

「キンジ・・・お前もこの試験受けに来たのか？」

「ああ。単位あまり足りてないから、こういう救済措置みたいなテストは確実に受けとかないと。それより・・・相変わらず眠そうだな」

「・・・ここのとこ徹夜続きで、あんま寝てねぇんだ」

「アリアとコウ・・・怒ってたぞ。いいかげん、何やってるのか教えてくれないか？このままじゃ俺も庇いきれないぞ」

「心配すんな。焦らなくても、多分明日には全部話してやれる。だから・・・今日も徹夜だ」

刻桃は机に突っ伏す。

常人以上の体力を持つにもかかわらず、連日の徹夜が相当こたえているようだ。

「そうか・・・・！？」

キンジは刻桃に同情するが、次の瞬間には顔を引き攣らせ・・・・

「じゃ、じゃあ・・・・お互い頑張ろうな！」

そそくさと違う席へと移っていった。
そして入れ違いにやってきたのは・・・・

「はろー、モモ君。元気ぃー？」

理子だった。

「元気・・・・じゃねぇよ。何日も徹夜させやがって。俺より働いているクセに、元気なお前の方こそ否定したくなる。今夜の分が終わったら、明日の昼までは絶対寝かせてもらう。いいな？」

「でもでも、なんだかんだで最後まで付き合ってくれたじゃーん。理子1人だけじゃ・・・・もっと時間掛かってた。ありがとね♪」

頬杖をつきながら恨み節を吐く刻桃に、理子は満足気に微笑む。

「礼なら全部終わってからにしろ。あ・・・・先生来た」

戸が開き、今回の試験の担当非常勤講師・・・小夜鳴徹（サヨナキ・トオル）が入ってきた。同時に、女子生徒からの黄色い声が沸き上がる。
小夜鳴は誰に対しても敬語で話す礼儀正しい性格で、ブランドのスーツとネクタイを着込み、スラッとした細身で長髪の美青年であることだけでなく、優秀な遺伝学者でもあり、海外の大学を飛び級で合格したという完璧超人。
言うまでもなく女からのモテ要素が揃っており、それを証明するかのように、この教室は女子生徒の割合が大きい。

そうこうしているうちに明かりが落ち、ＤＶＤが上映開始される。
タイトルは『遺伝。親の特徴が子に伝えられる遺伝。その法則について学ぼう』。

映像と音声が流れる中、刻桃と理子はシャープペンを走らせていく。
前情報の通り、聞いてさえいれば誰でも回答できるような内容だったため、この調子なら単位はいただきだろう。

「ねぇ、モモ君・・・・」

「なんだよ」

「モモ君は・・・・才能の遺伝とかって信じてる？」

唐突に、理子がそんな事を聞いてくる。

「どっちかと言えば・・・信じてる方だな。現に俺は、先祖の傍迷惑な体質を代々受け継いでるわけだから」

「あははー、そうだねー。だからこそ、『炎刀・銃』をあんなに簡単に盗めたんだもんね」

「・・・そういうお前も、才能・・・優性遺伝の法則とかは信じてる口なんだろ?なんたって、あのリュパンの曾孫なんだし」

若干卑屈を込め、刻桃は言った。

紅龍を出し抜き、『絶刀・鉋』を盗み出した事と言い・・・過去数度に渡って出し抜かれた事と言い・・・こいつは自分とは違って、先祖の有能な部分を受け継いでいる。

一応は、それらを踏まえた上での、賛辞の言葉のつもりだった。

だが・・・・

「・・・・・・・・・うるせぇよ」

隣から、小声とはいえ低い声が漏れる。

さらに・・・・

「なにがリュパンだ・・・・なにが曾孫だ・・・・あたしは・・・・・あたしだ！」

「おい・・・・理子？」

「・・・・黙れよ。気安く呼ぶな。お前も、やっぱりそういう目であたしを見ていたのかよ。あたしは・・・・遺伝子なんかじゃねぇ！」

悪意溢れる『裏』モードの口調。理子は、己の闇をここぞとばかりにさらけ出す。
そして、鋭い猛禽類のような視線で刻桃を睨み、筆記用具と答案用紙を持って立ち上がった。

「モモ君。あとは1人で出来るから、今日は・・・・もう来なくていいよ。ずっと手伝わせてごめんね。ありがと」

最後は『表』の口調に戻り、理子は席を移動。キンジの所へと向かった。

「・・・・ったく。自分で話を振ったんだろーが」

溜息をつきつつも、刻桃は自身の失言をほんの少しだけ後悔する。

売り言葉に買い言葉。だが、言っていい事と悪い事も確かにある。

彼女が抱える何らかの『闇』を知っておいて・・・・浅はかな事この上ないと、ガラにもなく反省してしまった。

「テスト終わったら・・・・謝っとくか」

気を取り直し、再び映像に集中。答案用紙に回答を記入していく。

そして試験終了時間。大視聴覚室の明かりが点灯した。

あまり気が進まなくとも、すぐに理子の所に行って謝ろうとしたが・・・・

「じゃ！そーゆーことで、ばいばいきーん！」

理子は何かから逃げるように教室から出ていった。

そして、理子がいたであろう席の隣では・・・・

「と、遠山君。ＴＰＯって言葉・・・・知ってますか？」

「・・・・は、ははは い」

小夜鳴がこめかみに血管を浮かべ、キンジを睨んでいた。
普段温厚であるにも関わらず、いかにも怒り心頭といった様子でメガネまで光らせている。

理子に何らかの形でハメられたらしいキンジは、結局弁解虚しく小夜鳴にお説教され、後日行われる追試を喰らう羽目になったとか。

（・・・・理子に八つ当たりでもされたか？悪いな、キンジ。今度何か奢る）

刻桃は・・・・心の中でキンジに合掌しつつ、いそいそと教室を出て理子の後を追った。

第４２話（後書き）

原作での白雪は出雲方面に合宿に行ったとあったので、せっかくだから三途神社と凍空一族にも若干触れる事に。本格登場が未定なわけですから、名前だけでも出せる時に出さないと。
白雪が合宿から帰ってきたら、また少しだけ触れておきます。・・・・これなら恐山の時も、死霊山を名前だけ出せばよかったかも。

キンジがお説教と追試喰らった・・・ご存知の通り。ここでは八つ当たりという事に。

戦いを前に早くも仲違い。紅龍が喜びそうな展開に。次回もお楽しみに！

オーダー・オブ・カオス発売から一週間。
外出時に約６０００円分（箱買いではなくランダム）購入したので、戦果を報告。

ＣＮｏ．３９希望王ホープレイ

Ｎｏ．１２機甲忍者クリムゾン・シャドー

甲虫装機エクサビートル

エヴォルカイザー・ソルデ

発条空母ゼンマイティ

甲虫装機ギガマンティス

忍び寄る闇

・・・ガガガガールが欲しいのに出ない。

退院したら、何処かのショップに買いに行くつもりです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9423s/

緋弾の虚刀語

2011年11月27日06時43分発行